

蒼都になったけどバンビちゃんが死ぬほど面倒臭い（※死ぬ）

黒兎可

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一部界限で大人気？（ネタ的な意味で）な滅却師である蒼都に憑依してしまった男が、幼少期からバンビちゃんに殺されかけながらも最終決戦以降も生き延びようとする話。なおバンビちゃんは頭バンビちゃんなので、生存保証もない模様。

※本作は詳細不明な情報をすべてダイスで振って作成しております。色々謎な描写が出てくる場合がございますが、あらかじめご了承ください。

※→表紙機能のお試しに描いたやつです、せっかくなので掲載

目次

	#001.	容姿A級性格Z級ヒロインとの遭遇	1
	#002.	ブルー・ビジネスシティ	12
	#003.	愛情ゼロの愛情ではない何か(ゼロ)	23
34	#004.	番外編：NOT KILL THE MONSTER	
	#005.	怪物の片鱗を見る癩癩	43
	#006.	ラヴは多分ハワイ旅行中につき当分帰郷する目途は立たず	55
	#007.	剃刀系女子に寄り添える距離感	67
	#008.	番外編：THE FLAT	79
	#009.	約二十年前	90
	#010.	怪物の目覚め	102
	#011.	癩癩の行方	117
131	#012.	番外編：WALKING WITH WARNING	
	#013.	地獄式荒波の魚釣り	143
	#014.	独裁と癩癩と嵐の前	153
	#015.	番外編：ここまでの一部ダイス結果公開	167
	#016.	癩癩嵐と夢大嵐(前)	177
	#017.	癩癩嵐と夢大嵐(後)	190
	#018.	背信の剣	202
	#019.	白い森で	213
226	#020.	番外編：THE FULLY RESISTANT	

	# 0 2 1.	果たされ得る約束	237
	# 0 2 2.	恐怖と癩癩と地獄と地雷	250
	# 0 2 3.	見つめる「目」	261
	# 0 2 4.	番外編：PRISON FROM SNOWPELLET	T
	S		274
	# 0 2 5.	おかえりなさい	285
	# 0 2 6.	役者は果たして誰なのか	296
	# 0 2 7.	最期まで自覚すらなかった	310
320	# 0 2 8.	番外編：THE BROKEN SNOW STAR	

#001. 容姿A級性格B級ヒロインとの遭遇

暗闇の底で僕は声を聞いた。深い、その声の主は、その影は、まだ腕も脚も短い僕にはとても大きくて。ただ、全身焼け焦げているのか、僕はその相手が何であるのかを知り得なかった。

———そうか、間に合わなかったか。

———ならば己むをえまい。返してもらおう、我が血を。

そういって、その影は僕に手を向けた。その手が僕から「何か」を奪い去ろうとしているのは、よくわかった。だけど———その時、どうやったかは判らなかつたけど、僕は僕の「何か」を奪われることに、全力で抗った。抗えた、らしい。良く判らない。

影の主は、戸惑ったように僕を見降ろしていた。

『……………ほう？ 何故生きているのか。純血エヒトであれ「私が」そうしようと思ひ実行したにもかかわらず。到底、耐えられる訳も無いだろうに』

彼の言葉に、僕はかろうじて息をして、そして吐き出しながら。

「———^死し、にたく、ない」

ただその一言に、影は少し押し黙って、そして大声で笑い始めた。それは心底楽しそうで、大人が子供を見て可愛がるような、そんなちよつとだけ温かなものだった。

『——ハッハッハッハ。成程、それもそうか。道理だな。それ「だけで」生き延びた訳でもないだろうが、「視えなかつた」のも事実か。

良いだろう、お前に———を与えよう』

しゃがんだ影の主に、何かを飲まされた。味は、わからない。喉も、舌も、何もかもが焼け落ちて感覚がロクに残っていない。しゃべれたのだから、どうしてかわからないくらいだったのに———。

でも、それから少しして。どういう訳か僕は「戻った」。徐々に、徐々に身体が「戻っていく」、使えるようになる感覚――。

「名は何と言う」

身を起こして、まだ目が「戻り切ってない」僕に、影の主は名前を尋ねる。

「……つあん^蒼………、………つあん^蒼とう^都………」

「そうか。ならば、蒼よ、共に来い。お前をこれからも生かしてやろう。生と、死と、その果てのない世界で――」

――運命を乗り越えし、我が息子よ。

ようやく「戻った」両目で彼を見て。彼の顔を見て、その言葉を聞き、ようやく僕はこの世界の真実を知った――「思い出せた」。

※ ※ ※

バンビエツタ・バスターバインにとって、その蒼都はあまりに想定外の存在だった。

長い時を経て自らを取り戻しつつある王・ユーハバッハ。彼の率いる滅却師^{クインシー}の国「見えざる帝国」^{ヴァンデンライヒ}の拠点「銀架城」^{シルバーン}。多くのここで暮らす滅却師の内、バンビエツタを中心とした五人組は「スーパースーパーエリート」であると彼女は自負していた。なにせ全員が年端^{テイレン}も行かない子供^{エイジャ}である。経年数と言う意味ではなく外見ではあるが。物的存在^器を持たない者であるならそれは「霊格的な成長度」を指し示す。故に例えば、小学生くらいに見えるリルトット・ランパードやそれよりも幼いミニーニャ・マカロンなど、現時点で陛下から「認められた証」を受けている彼女たちは、その将来性がかなり担保されている。

そんな彼女たちに慕われている（と本人は思い込んでいる）バンビエツタにとって、既に中学生から高校生くらいに育っている彼女こそが、一番その五人組チームの中でもトップオブトップ、エリートオブ

エリートであると、そう考えていた。

陛下が「後継」として考えているだろうユーグラム・ハツシユヴァルトなどは置いておくにしても、自らに与えられた序列階位が五本の指に入っていることも、それをより強く意識させている。

だから廊下ですれ違った丸サングラスの男、変な風に切りそろえられた髪型のキルゲ・オピーから聞いた話が、なんだかとても嫌なものだった。嫌というより、ムシヤクシヤした。

「は？ 聖文字の序列って強さの階位じゃない？ 本当？ 正気で言ってるワケ、アンタ？ あたしより5つも6つも下だからって嘘ついてるんじゃないわよねえ。声が良いからって調子こいてんじゃないわよねえ。はア？」

「何度も詰め寄らずとも、そのようなことをする必要がありませんかね……？ 私にはありません。

現に、私たちの能力には相性というものがあるでしょう。個々人の人格に対し、陛下が力を与えるからこそ、ということになりますから。それに、騎士団長グランドマスターが陛下を除いた最上位というその位置は、何がどうあっても変わりませんからねえ、ハイ……」

「だからって基礎ばっか鍛えろとか言われても、あたし全然やる気ないわよ。あんた、私相手に手も脚も出ないじゃない。完聖体すら使う必要もないわ、文句があるならあたしを倒してから言いなさい！」

「む、年頃の子供を相手にするのは中々骨が折れますねえ。特にまだ経験値が浅いからこそ、『最低限の』基礎と言う訳でもなく、より強靱に練らねばならないというのに……」

「……おや？ 噂をすれば、いらっしやられますね」
「っー」

黒い外套を纏った美しい金の髪を持つ男が一人、こちらに向かってくる。背も自分よりはるかに高く、そして身にまとう風格が目の前でキラゲなど比較にならない程に威圧的で、冷たい男。ユーグラム・ハツシユヴァルト。規則的に、ゆったりと響くブーツの音。その一歩一歩に、バンビエツタは何故か、「なんとなく」怖い感情を抱き、頭を垂れる。

そんな自分とは異なり、キルゲは揚々と当たり前前のように胸に手を当て、彼を迎えた。

ハツシユヴァルトはキルゲの前で歩みを止め、彼に向き直る。

「ハアイ、ご無沙汰しております騎士団長^{グランドマスター}」

「ここに居たか。……陛下より直々の推薦だ」

「推薦でございますか？」

「ああ。先に紹介しよう。陛下が外より見出した在野の滅却師、その末だ。もともとは死体だけでもあれば回収するようにといいつけてあつた——」

ハツシユヴァルトの話に、バンビエツタは興味がない。だからこそ、少年の姿を見て驚かされた。年頃はミニーニヤか、それよりも幼い。5歳くらいだろうか。黒い髪が長く目が隠れており、表情が見えない。唇の嘴にはうっすら切り傷のようなものが残り、よく見ればその「適当に見繕った」ような半端なデザインの半袖半ズボンから見える身体にも傷痕が多く見える。

(なんでこんな小さすぎるガキ、連れて来てるのよ……)

そんな男の子……、幼児かちよつと少しその域を出たくらいの男の子は、バンビエツタの顔を見て、少し視線を下に落とした。照れてるのだろうか、まああたし可愛いからねー、と。そんなことを思っている彼女だったが、男の子の視線が自分の胸をじつと見ているのに気付いて肩を竦めた。「外」から来てこの幼さだ、おそらくミニーニヤと違い見た目通りの年齢だろう。性欲を抱くほどには情緒が育ってはいないだろうと思う。

(ママでも恋しいんでちゆか？ なあんて……)

それに揶揄おうと少し思ったり思わなかったりはしたが、泣かれても面倒だとバンビエツタはあえて額を小突く程度で済ませた。

……それこそもう少し自分も「育つて」いたら、色々と発散のために「見てくれの良い」男を使って捨てる予定のバンビエツタだが。今はまだ未経験なこと、流石に年端もいかなない子供にふる話題でもないかと。そう考える程度には、いかにバンビエツタといえど常識とお友達でいた。

ただ、丁度そんなタイミングで、ハツシユヴァルトの口から聞き捨てならない言葉が出て来る。

「――既に聖文字シュリフトを与えることが決定している。だがそもそも、滅却師として正しくまだ成長していない。そういう意味で、陛下が最もその基礎力に期待をかけるお前を推薦なさった」

「これはこれは……、大変恐縮！ 謹んでお受けいたしますとも」
「……ッ!？」

その一言は、バンビエツタの外見年齢や性格相応に低い沸点のプライドを刺激した。

自分たちですら「最低限の基礎」を覚えた後に陛下に見いだされたのだ。いかに自分たちが星十字騎士団シュテルンリッターの中でも最も若い位置づけにあるとはいえ、自分たちなりに努力はした（つもりではある）。にもかかわらず、その辺で拾ってきたような子供を相手に何故そんな話になっているのか――。

意地の悪い「遊び」が思い浮かび、バンビエツタは悪い笑顔を浮かべそうになる。キルゲはハツシユヴァルトとの話し合いに集中しており、こちらを見ていない。ハツシユヴァルトもハツシユヴァルトで自分など眼中にも入っておらず。

そんな状況で、彼女は男の子の、マントを掴んでいる方と反対側の手をとった。

小声で囁く。

「(おいで?)」

「……?」

何もわかってない顔のまま、男の子はハツシユヴァルトの外套から手を放しバンビエツタの手を握る。温かい、というより熱い。子供らしい体温は器子が存在している滅却師である証だろうか……。

と、その視線がやはり自分を見て、しかしすぐに下を向く。

(照れてるのかしらねー。ま、ちよっとだけ可愛いんじゃない……?)
ちらり、と長い前髪の隙間から見えた顔立ちは悪くない。若干目元が半眼だったが、それを差し引いて小さい子供としてもかなり可愛ら

しい部類に入る。

ただそれはそうと、男の子を見て思いついた「自分が思いついた最高に頭良い遊び」の実行を躊躇わないのが、バンビエツタがバンビエツタである所以である。同じ年代くらいのジジ（ジゼル・ジュエル）など「そんなだから、バンビちゃんも頭バンビちゃんなんだよ……」と時々呆れたような顔をすることがあるが、そんな程度でくじける精神性をしていたらバンビエツタは頭バンビエツタなどと呼ばれてはいなかった。

二人が不思議に思わない程度に歩法飛廉脚を使って男の子ごと移動し、いつもの四人が戯れてる練習場へ。練習場といっても彼女が向かったその一角は、通称「バンビーズ」の五人が適当に集まってるスペースと化しているので、特に彼女の奇行について四人はとやかくは言わない。

またぞろ変な遊びでも始めるのか？ と、そういう扱いを受けているが、特に気付くわけでもなくむしろ「皆、あたしの言うことに文句言わないわね！ やっぱりあたし、皆のリーダー！」と思っているのだから、彼女と周囲の溝は深かった。

さて、そんなバンビエツタは銃を抜き、構える。男の子はそれを不思議そうに見て、頭を傾げていた。

「か、可愛い……………！ っていうより、バンビちゃん流石にそのくらい幼い子相手に何やるのさ……………」

「大人げなすぎるだろ、何かイライラしてんの？」

「別にいい？ ただ、ちよつと実力が気になったから、このあたしが直々にオテアワセしてあげるっただけよ」

自分だけ把握してる情報を適当に言うだけ言って片手剣を構えるバンビエツタに、男の子はやはり一切の戦闘態勢をとっていない。男の子は状況が呑み込めていないらしく、逃げる素振りもない。その状態のまま数秒見つめ合い、最初に折れたのはバンビエツタだった。

「……………あなた、今からあたしと戦うの！ あたしも『聖文字』は使わないであげるから、どれくらい今のあなたが出来るか確認してあげるっって言ってるのよ」

「……………」

「何かしゃべりなさいよ！ ちびっ子！」

男の子はやはり困っている様子である。彼の視線が四人にふられるが「実力みるとか言っても」「説得力ないですよねえ〜」「俺でさえ大人げないって思うわ」「流石バンビちゃん、いつも通り頭バンビちゃん」と、次々に感想を言うだけ。特に助けてくれる訳でもないかわかり、男の子は両手を構える。……「ある種の」知識がある人間が見ると、気功波でも放つような、そんなポーズだ。それと同時に、手元に霊子兵装が形成される。なんとなくオオカミの頭というか顎と云うか、そんなものを連想させる形だ。

とはいえまだまだ未熟。構成が乱暴なことは、その見た目の形成状況がちぐはぐ、所々不必要な穴など開いていることで十分察しが付く。

ニヤニヤ笑いながら、バンビエツタはそんな男の子を煽ろうとする。大人げないし性格が悪い。

「へえ〜？ 陛下直々に将来、推薦されるってくらいだから、どんなもんかと思っただけ……。大した事なさそうじゃない」

「……………」

「……………いや、何か言いなさいよ」

「……………おねえちゃん」

「何？」

だが彼もさるもの引っ搔くものか、はたまた天然か。

「さつき、すかーとのなか、まるみえだった。」

みえちやつてた、けど、いえなかった。ごめん」

瞬間、噴き出すジジとキャンデイス。リルトットは舐めていた飴を思わずかみ砕き、ミニーニヤは一見上品な風に微笑んでバンビエツタを見ていた。

バンビエツタはバンビエツタで、怒りなのか羞恥なのか顔が真っ赤である。……言葉には別に「そのテの」感情は無かったと思うが、馬

鹿にされたというより普通に忠告されたという風な言いぶりで、自らのミニスカート装束に文句がつけられた。しかも年端も行かない子供に。

上等じゃない、と。他のバンビーズの前で恥をかかされたバンビエツタは、割と自業自得でありながらその怒りを攻撃に転嫁することにした――。

だが、当初の思惑と違って事は思ったように進まない。

「ちよっ、ガキ！ アンタなんでそんな硬いのよッ！」

「……………」

無意識か、あるいは生存本能か。男の子の静フルート・ウエーネ血装、自らの身を護る霊子による血の被膜により、全くと言って良い程ダメージが通らない。遠距離からの神聖滅矢ハイリツピ・ブファイはあの腕のオオカミの頭みたいなのにで弾かれ、剣戟は静血装で通らず、何回かに一回はそれこそ「はーッ！」という男の子の両手を合わせて放たれるかめは神聖滅矢○波をくろう始末。バンビエツタも静血装があるのでそこまで大きなダメージにはならないが、持久戦となると問題が変わってくる。

自分はこれだけ散々動き回ってるのに、男の子は先ほどからその場でほぼ動いていない。これではいずれ、先に集中力や体力が切れるのは自分が先のはず。……………そもそも自分勝手にケンカをふっかけたのはバンビエツタの方だし、散々動き回ってるのも攻撃してるのも彼女自身なので自業自得以外の何物でもないのだが、そこを顧みる神経があったらバンビエツタはバンビエツタではなかった。

いいわ褒めてあげる、と。バンビエツタは肩で息をしながら、体勢を整える。

「このあたしをここまで疲弊させたちびっ子はアンタが初めてよ。褒めてあげる」

そもそもちびっ子相手に勝手に自爆しただけじゃ、とジジのツッコミは完全に聞かなかったことにし、ここからは少し本気で行くわと。霊子を周囲に収束させ始め、「本気で殺そうと」聖文字を使う準備を始めた。

なおこの場のバンビーズ、男の子が陛下直々の推薦で云々の話は

さっぱり知らないため、どれだけバンビエッタが綱渡りをしているかについては察しがついていない。よって止める間もなく、バンビエッタの剣に収束した霊子の塊を、彼女は雑に男の子へ向けて放出した。それを受けた男の子は、何か行動を起こす前にバンビエッタの「爆撃」に巻き込まれ――。

「ジ・エクスプロード『E』爆撃――!」

「――ハイ！ 彼女いきなり何をやってるんですかねえ!!?」

と、いつの間にやら駆けつけていたキルゲの絶叫に仰天する他バンビーズ。とはいえ止めに行くわけでもなく、その後ろからハツシュヴァルトが現れて更にぎよつとしてしまう彼女たち。

「落ち着け。あの子供もそう簡単には倒されまい。武装はともかく、静血装については陛下も驚いておられた。その上で――」

――そして、煙が晴れた時。男の子の全身は、まるで「銀のような」色に変質していた。

流石に予想外だったのか、あんぐりと女の子がしてはいけないような間の抜けた顔をする。ジジたちもツツコミを入れる暇もなく、その姿に声が出なかった。

「――と。その銀が引いていくのを見ながら、ハツシュヴァルトは解説を続ける。

「陛下がお与えになった仮の『聖文字』――Σ――『デ鋼鉄』」。あの子供は、自らの骨を中心に身体を『特殊な銀』に変化させることができる」

それに静血装を併せれば、簡単には殺されまいと。

幼子のその、やはりちよつと困ったような顔に、キルゲはどういったものかと困惑した様子となり。

一方のバンビエッタはといえば、ハツシュヴァルトの姿が視界に入っていないせいか。テンションをいきなり上げて、男の子へと駆け

より抱き上げ、くるくるその場で楽しそうに回り始めた。

「ちよつと待って、ちよつと待って、スゴイじゃないあなた！ まだ五歳？ 六歳？ よね。それでそんな硬さとか、嫉妬しなくはないけど超すごいじゃない！」

——あなたなら、あたしが何発能力ぶつけようが死なないわよね？ 超、爽快じゃないのそれって！ こんなサンドバッグ欲しかったわっ！」

「（※絶句）」

あんまりにもバンビエツタの頭バンビエツタすぎる発言に、キルゲは言葉を失った。こころなしか全身が真っ白に燃え尽きている。ハツシユヴアルトもハツシユヴアルトで色々と面倒になったのか「後は任せた」とキルゲの肩を叩き、その場から立ち去る。

バンビーズはバンビーズで「オイオイ……」「死にはしないから良い、のか……？」と視線を向けながら。中でもジジが「君、苦勞するねえ……、ちよつと助けてあげないと可哀想だなあ……」などと決意を新たにしているところで。

（やっぱバンビちゃんってトップクラスにクズだなあ……。性的な遊びをまだ覚えてないかもしれないけど、それ差し引いてもクズだよ、この娘。バンビちゃんのバスター（意味深）がバインバイン（意味深）してなかったら、許されないぞこの美少女の皮被った生存本能の塊ドグサレビツチサイコが。……いや言いすぎだね、ごめんよ、頭バンビちゃんだから仕方ないよね）

肝心の本人は。抱きしめられ、ついでに首を絞められ始めた男の子、蒼都つあんどうに憑依したその魂は。自らの首を「静止の銀」に変化させて気道を確認しながら、隠れた前髪の下でしらつとした目をしながら、自らに押し付けられる彼女の胸の感触を、わずかに堪能していた。

案外、ちやつかり者であった。

#002. ブルー・ビジネスシティ

霊子で構成された蒼都^{つあんどう}という滅却師。その人格は異世界のダレかのものであるが、それは特に変わった出自があるという訳ではない。ごくごく普通に暮らし、ごくごく普通に勤労し、ごくごく普通に賃金の安い労働で汗水流していた、そんな人格だ。彼の今いる「BLEACH」世界の記憶がいくらかあると言えど、そんなに何か特筆するべきものがあるわけでもない。

ある日、気が付いたら暗闇の中で焼け焦げたまま死にかけていた。そこで何やら知らない誰かと会話を交わした後、気が付けば今の姿となっていた。「肉体側」(?)で覚えていたのは名前くらいで、年齢も定かではない。見た目からしてどう考えても幼児に違いはないが、そのことについてはこの場所、その周囲の誰しもが特別視することもない。ただ一つだけ。

ただ一言、お前は陛下にその将来を期待されたのだ、と――。滅却師の王、ユーハバツハは彼らの祖にして主、父にして神である。その彼に思い出されたと言われてはいるが、蒼都自身、そこまで特殊な教育を施されているというわけではない。基礎技術の面においてキルゲ・オピー、情緒面や基礎教育についてはロバート・アキュトロクがそれぞれ担当している点では、多少は幼児だからと気を遣われてはいる。しかし蒼を「問題児」バンビエッタ・バスターバインの生贄^{せいぜい}に捧^{たも}げている時点で、それらのプラスは帳消しだ。

蒼にとってバンビエッタという少女は、意外と知っていることが少ない。というのも、彼のいる世界の原作だろう「BLEACH」において出て来たのは最終章であり、そこにおいて個々別々にスポットがあたった日常回など存在しないのが大きい。

とはいえそれ以外の描写をもとに考えれば、間違いなく「クズ」の一言だ。黙っていれば一見して天真爛漫明朗快活な美少女であるが、

その本性は癩癩持ちかつ自己中心的で攻撃的な高慢ちぎ。言動こそ勝気で可愛らしい風ではあるが、要は子供っぽいだけ、実質は自分の気に入った相手を徹底的に捌って殺すような癖へきもある。

現時点においてはまだ未通の部類に入るが、原作本編では気に入らないことがあるば、顔の良い下級兵士を部屋に連れ込み「楽しんだ」後「愉しんで」殺しているような、それこそ神話やらに書き連ねられる酷いお姫様じみた言動もしている。

そんな彼女の仲良し五人組（だと思っている）な仲間内での評判も、その戦闘力以外は最低値である。実質4人組でグループは回っており、バンビエツタはおかぎりの主であった。

もつとも、現時点においてははまだ原作よりも前の時代であることは察せられる。全員がそれなりに身体的にも（一名除いて）成長した姿であった原作から比べて、全員が幼い容姿をしている。ミニーニヤ、一番グラマラスに成長していた彼女でさえ、いまだ幼稚園児か小学校に入るくらいの外見だ。もつとも言動はそれに伴っていないので、その部分には注意が必要であるが。

要するに、まだ微妙に原作ほど仲が悪くない、しかし軽んじられている微妙な段階。

この状況において、中学生から高校生くらいに見えるバンビエツタのコンディションはある意味最高潮——一説に、女子高生とは無敵の最強生物なのである。

そんな彼女が、ひよんなことから蒼を「サンドバッグ」として気に入り、自らの下の一般兵士として取り立てたのがおよそ一年前。そこから時間は徐々に経過はしているが、いまだ蒼の身体的成長は起こっておらず。バンビエツタとの「ストレス発散」もとい訓練において、絵面はちびっ子を爆撃しているような最悪なものであった。

「あー、もう！ ムシヤクシヤするッ！ なんで私の下に誰も就這樣としないのよ一般兵士の男共ッ！ キャンデイスの方ばっか行くし！」

「そんなこと言いわれても、こまる困」

空中から複数、霊子で構成された矢を降り注がせ爆撃するバンビ

エツタ。それに対して、自らの身体を「特殊な銀」へと変化させてその難を逃れている蒼。爆撃は、オオカミの頭を思わせる形に形成された手甲で炎を払い、散る霊圧を防いでいた。

(いや、そりゃこんな幼児をボッコボコに毎回してたら、いくら外見良くても怖がって近寄らないでしょ。やっぱりバンビちゃんはバンビちゃんだなあ……………)

なお、そんな状況において蒼の視線は、バンビエツタの中学生にしてはちゃんと大きく揺れている胸やら、そこそこ肉付きが良くなり始めているスカートから伸びる脚やらヒラヒラしているその下やらに釘付けである。

基本的に彼女は彼を「そういう対象」として見ていないので、彼からすれば行きがけの駄賃というか、見れるなら見ておこうくらいの軽い感覚であった。

というより、ほぼ全てである。

毎度毎度、能力ゆえ防御していれば死なないとは言え。痛い思いを無理やりさせられている(しかもこの状況自体から脱する方法自体は誰も提供してくれない)とくれば、それくらいの報酬はあって良いと思っていた。

機嫌が良い時には抱き上げてハグしてくれることもあるので、役得、というよりはそれ以外にバンビエツタの評価をしていないともいええた。

ちなみに似たような理由で、バンビーズのキャンデイスもそこそこ評価が高かったりするが、それはさておき。

例によつて爆撃で髪がボサボサ、服がすすけている蒼に、少しだけ申し訳なさそうな表情を送る少女。ウェーブがかつた強いピンク色の髪をロールに巻いている、今の蒼と同じ年くらいの小さい子供、ミニニヤ・マカロン。基本的にマイペースで物腰は丁寧だが、バンビーズとつるんでいるだけあって彼女もそこそこに性格が壊滅しているが、その中でもまだバンビエツタよりはマシと蒼は評価を下していた。

そんなミニニヤに、バンビエツタは上空から怒鳴る。

「あなたもさつさとやりなさいよ！　せつかく正式に聖文字シュリフトもらってから、まだ慣らし運転してる途中でしょ！　あたしのストレス発散もあるけど、あなたもちゃんと使い慣れないと駄目よ、栄あるバンビーズの足を引つ張るんじゃないわ！」

「は、はいい……、よろしくお願いしますう〜」

「うん……、うん」

ペこりと頭を下げた彼女に、蒼は苦笑いを浮かべる。

聖文字——ユーハバツハより与えられる、滅却師の力を発展し覚醒させる異能。それぞれが基本的にアルファベットにあてはめて与えられることが多いが、時に例外が存在する。それは、例えば蒼都であり、シヤズ・ドミノであり、そしてミニーニヤ・マカロンであった。

なんらかの事情で聖文字を当てはめることに適していない者……、将来的に聖文字を与える前提の場合や、あるいは何らかの戯れか。ラテンアルファベット以外の文字を当てられたそれらは、仮の聖文字と揶揄される。

蒼都の場合なら Σ —— シテロ 鋼鉄。

ミニーニヤの場合は E —— イクシア 権力。

そして数カ月前、ついに正式な聖文字が与えられた彼女のそれは——

「—— P —— ザ・パワー ——！」

少しだけ自らの腕に力を籠めると、駆け出した彼女は「金属と化した腕の」蒼を殴りつける——！　わずかに腕に痛みを覚え、そして若干「表面が歪んでいる」ことに、彼は表情が引きつった。

ミニーニヤの聖文字は、純粹に力を底上げするもの。彼女の腕力でも有り、それを司るための全身の筋肉が相対的にという意味でもある。現時点においては「服の腕部がはち切れる」ほどではないが、その時点で既に金属バットくらいなら簡単に捻じ曲げられそうな力をもっているのを、蒼は「身をもって」感じていた。

バンビエツタは、空中で腕を組んでそんな二人の様子を見ている。一応はリーダーを自称していることもあるせいかな、多少はミニーニヤ

に気を遣う神経があるらしい。

もつともそれはミニーニヤを慮つてのものではなく「とりあえず大変そうだからイライラ発散させてあげるためにサンドバッグ貸して私、偉いっ！」くらいの適当極まりないものだった。伊達にバンビエツタは頭バンビエツタと呼ばれてはいない。

「ひい……、ふう……、ハッ！」

「いたっ！」

「あらあ、すみません……、準備は大丈夫ですかあ？」

「ちよつとまつて……、うん、いいよ」

「なら、もうちよつとペース上げていきますうう」

そう言いながらも、ミニーニヤの動きはいまいちキレがない。というより、明らかに「自らのパワーに振り回され」、制御が効いていないことが伺えた。

もともとミニーニヤが持っていた「Eー権力^{イクシヤ}」であるが、これは周囲の能力を底上げするタイプのものであった。霊力であったり霊圧であったり、収束力であったりと様々な形に分散されていたものである。それが、聖文字の付与と同時に全く異なるタイプのものへと変わってしまったのだ。

だからこそ、こうして少しずつ蒼を相手に調整している。

普段からそのための訓練はしているが、いまいち上手く行っていない彼女だった。それを見たバンビエツタは、一言。『とりあえず全力でそのゴリラみたいなパワー振り回せれば、調整なんてテキストに出来るようになるんじゃないの？ あなた』。その発言の流れで、せっかくだから私の「サンドバッグ」を相手に好き勝手すればいいじゃない、私リーダーなんだし！ と、そんな軽い口調で言われて、流石にミニーニヤも彼に同情した。

普段なら彼の面倒をよく見ているジジであったが本日限り「城」内部にはおらず、悪いタイミングが重なったともいえる。

……まあ肝心の本人は、バンビエツタのバスター（意味深）がバインバイン（意味深）なのを見たりして、現在進行形で刻まれている心の傷を癒しているのだが。その視線の流れには横から見ている

ので気付いたミニーニヤだったが、あまりにも普段の扱いのひどさを知っているのでそのことをバンビエツタに指摘などはしない。

基本、この時点でもバンビーズはそう仲は良くないのだ。

ただ、何事にも想定外というものは起こりうるわけで――。

「せいっ！ はあ！ とう――おんどりやッ！」

「わーっ！」

「……………あ、あらあ……………？」

力の出力を徐々に上げていき、ついにマックスがタイミングとして時折出るようになった。そんな瞬間に、彼女のアツパーカットが少年の顎を捉え――。

そして、その顎の硬化などによる「質量的な問題」やら「能力的な問題」やらを全て無効化する勢いで、彼女のその腕力は相性差というものを全て置き去りにした！ 本来なら多少軽減されるだろうその衝撃が、ダイレクトに彼の身体を捉える。やはりパワー！ パワーは全てを解決する……………！

遙か彼方へと飛ばされ、壁に激突して気絶する少年。

彼のそんな姿を見て、バンビエツタは喜色満面で下降してくる。

「やるじゃない、ミニーあなた！ あたしのサンドバッグをああも簡単にノすとか、私でもまだ出来てないわよ！ ちょっと嫉妬しちゃうわ！」

「え？ あのとすっですっねえ……………、生きてますう？ 死んでないですよねえ」

「へ？」

と、ふとキルゲの言葉が脳裏を過るバンビエツタ。いかに新兵、今はただの子供であるといえど、陛下が文字を与えるのを決めるくらいには将来の戦力として正しく見込んでいる相手であること。そして、ある面でバンビエツタと共にあるのは「修行として」最適な環境でもあるかもしれないから見逃すが、流石に命を奪うほどの虐待は止すのだということ。

つまり、もしこの場で蒼が死んでしまった場合、バンビエツタ自身も色々危ない訳で……………。

「ひ、ヒエ……………!? わ、私悪くないわよね！ 殺ったのはミニニヤだし！」

「は、はあ!? バンビが好きにして良いって言ったんじゃないですかああああ!? 私だって悪くないですよ~~~~~!」

どちらも身の危険を感じてか、責任のなすりつけ合いが始まっている。

改めて明記しておくが、比較対象がバンビエッタだからマシという判定を蒼はしているだけで、バンビーズは基本的にクズの集まりであつた。

※ ※ ※

「このままではしんでしまいます、はあい……………」
「そう言われても困ってしまいねえ……………」

蒼が駆け込んだ先は、滅却師としての基礎訓練の師匠なキルゲ・オピーであつた。銘柄は不明だが紅茶を優雅に飲んでいる彼の私室に、例によって服が汚れに汚れまくった蒼が駆け込んだきたのだ。

もともとバンビーズに彼を預けることを良しとしたのは、キルゲである。陛下直々の推薦による教育係としては本来彼なのだが、そもそも彼自身は教え子に甘い面があると思っている。甘いというよりは、頭でっかちと言うべきか。滅却師に限らず、戦士とは実戦において磨かれるべきである、というのは良くある話。その点、授業や養育という面を自分ひとりだけで手掛けてしまえば、箱入りで偏った人物になつてしまうのではということだ。ワンオペできちんと人間を育てられるとうぬぼれる程、キルゲは自身の能力を高く見ていない。努力に裏打ちされた実力があるからこそその、それは客観的な判断だった。

その点、バンビーズの周りには「良くもないが」「悪くもない」。(今の所)性的な方面でもそこまで奔放とは言わず、そっちの情緒面ではまだ悪影響はないと見込んでいる。何かあれば戦闘訓練にかこつけて八つ当たりしてくるだろうが、彼の能力を思えば必然的に技の練度を磨くことにもつながる。

あとは性格的にグレないよう、星十字騎士団一の人格者と考えているロバート老に頭を下げ通し、紳士的で任務に直向きになり、しかし同時にパンクしない程度にはゆるい部分もある大人を目指して絶賛養育中なのだ。

なので、身の危険を感じただろう蒼が駆け込んでくるのも想定の内。
囿内。

キルゲはキルゲで力になってやりたいところではあるが、しかし彼の言葉を聞く限り、どうにも自分では力になれそうにない。だからといってロバート老に頼つても「ジエネレーションギャップというのだからか」と苦笑いで返される映像が脳裏に浮かんだ。

果たして、そんな彼が推薦した相手は――。

「良いか？ 蒼。――女の子はオシヤレであるべきだから、オシヤレは女の子の全てを解決するぜ。なあに、チワワに睨まれたと思つて、大船に乗ったつもりでないか？」

（あつ、駄目だこれ人選ミスしてるよキルゲ先生……………）

騎士団序列4位、アスキン・ナツクルヴァールであった。コーヒー牛乳を片手にした、どこかダンディズムのようなものを感じる「余裕のある」雰囲気のある男。彼は蒼にも同じ瓶をわたして、呑ませながら色々と講釈を垂れた。

講釈とはいっても、女の子の機嫌のとりかたである。だが蒼の年齢相応にかみ砕いたその物言いは、彼の色々独特な言い回しもあつて色々という意味不明に拍車をかけていた。

悪い人ではない……のだが、ちよつとズレているという意味で、今回においては蒼の彼への好感度は微妙なところである。

だが、それでも辛うじて解説した話をもとに、色々と勘案し。回復後、バンビエツタに「いちめ」られながらも時間を作つて、数日後。

訓練に参加せず、どこか自分のパワーを持って余しているミニーニャを、「くんれん^{訓練}しない？」と誘つた蒼。びっくりした表情の彼女に、蒼は持っていた紙袋から、選んだ一品を取り出した。

「これは……………、まくらですう？」

「あんみん安眠でできるやつ、だって。…………あんまり、くわ詳しくないけど」

可愛いものでなくてゴメンと、謝意を含めて伝えた蒼に。ミニ

ニヤはびつくりした顔で彼の顔を何度も見た。

「ちから力、つかえなくてれん練しゅう習、がんばり張すぎて、ね寝れてなさそうだったから」

「……………あ、りがとう、ごさいます、ねえ……………」

確かに蒼の指摘した通り、ミニニヤはここ数週間、上手く寝れていない。

ひとえに自らの「Pザ・—パワー力」の制御が上手く行っていないせいだ—

—力の出力により肉体的な疲労が無い訳ではないが、その肉体の疲労度に反して彼女自身の魂魄としての認識が一致しておらず、それがさらに彼女自身を不調に追い込んでいた。それこそ蒼と訓練(?)したときも、そうだったのだが。しかし、とはいえ睡眠はちゃんととっていたので、表面上は問題なかったはずなのに——。

それを見抜かれたのかと、驚いたミニニヤに。蒼は肩をすくめて笑った。

「ちゃんとしてくれたら、しゅぎ修ょう、なるから。……………バンビお

ね姉えちゃんより、ましマシ」

「嗚呼、それは、そうですねえ……………」

その一言で納得する程度には、バンビエッタの扱いは頭バンビエッタだった。

なお揶揄された本人は、いまいち何がその二人の苦笑いに繋がっているのか理解していない表情である。きよとんと、不思議そうにしているあたり、やはり良い性格をしている。

「わかりました、これでもつとぐつすり寝れたら、もつと頑張ってみますねええ……………」

改めてお礼を言って、枕を抱きしめるミニニヤ。外見年齢が釣り合った幼児同士のそんなやりとりに、バンビエッタは「なんか良く判らないけどヨシ！」と言わんばかりに得意げな笑みを浮かべていたが。しかし数秒して、ふと気づく。

「……………あれ？　ねえあなた、私にもプレゼントとか無いワケエツ
!?!」
(なんで自分にあると思ってるんだ頭バンビちゃんかこのバンビちゃん
は)

ガーン！　と、ショックを叫ぶバンビエツタ。内心の徹底的な卑下デイスリ
を悟らせないきよとんとした表情で見つめ返す蒼と、マジで本気で
言ってるのこの子!?!　と衝撃を受けたようなミニーニヤ。どうい
種類の感情かはともかく(おそらく想像の斜め上に行く酷いものだろ
うが)、彼女にも彼女なりに独占欲めいたものがあるらしい。

とはいえ、普段からの行いはともかく、ショックを受けた様子のバ
ンビエツタは面倒くさい。可哀想と思わない扱いであることはとも
かく、元気を出させようと色々言葉を選ぶミニーニヤだった。

なお外見的には、小学校上がりたてくらいの女の子に女子高生が慰
められている構図である。

「ジジも言ってますけどおっく、あまり鞭ばかりじゃ駄目ですよ？
飴だつてあげないとお」

蒼の普段の視線がバンビエツタの女性らしさ全般へ向けられてい
ることが彼へのご褒美になつてないと思う程度には、それくらい酷い
傷めつけられ方をしている蒼に対する普段からの同情があるミニー
ニヤ。多少はまともと言って良いのか、バンビエツタを比較対象にす
るのが間違つているというべきか。

バンビエツタ、しばらく「うゝゝゝん……」と思い悩んだ末に、
出た結論。

「じゃあ名前！　名前、考えてあげる！　つあん、なんて言い辛いし
ダツサイじゃない？　もうその頃の記憶なんて全然ないんでしょ？
あなた。だったら騎士団の一員として相応しい名前をあたしが考
えてあげようじゃない！」

(何を言ってるのかなこの頭バンビエツタ……………)

二人からすればいまいち異次元の思考をしているバンビエツタであつた。

なおそれによつて命名された(?) 彼の名前、「ブルー・ビジネステイ」(蒼・都の意)であるが、その話を「改名なさい!」と迫られた話を後日聞いたアスキンは「致命傷だぜ、致命的に……」と一言漏らしたという。

#003. 愛情ゼロの愛情ではない何か（ゼロ）

「——んんっ！ 良いですかねえバンビエッタ・バスターバイン、並びにキャンデイス・キャットニップ。本日、あなた達は訓練場を破壊、現時点において使用不能とさせました。この罪を裁くため、事情聴取と、ペナルティを決めるための会議を行います。」

担当は私、グラントマスター騎士団長から直々に丸投げされましたキルゲ・オピーが努めましょう。

なお本日、スペシャル審問官としてベレニケ君トリジェ・バロ様に来ていただいておりますねえ、ハイ……………」

「——『君たちの嘘すべてに異議がある』！」
「……………」

サングラスの位置を調整しながら頭を悩ませた風のキルゲ・オピー。両者に向かって指を向けてニヤリと何やら能力を使った、銀なんだか金なんだか紫なんだか微妙な髪をした青年、ベレニケ・ガブリエリ。腕を組んだまま無言で圧をかける褐色の男リジェ・バロ。

そんな三人に見下ろされながら、強制的に正座をさせられているバンビエッタとキャンデイスである。バンビエッタはいい加減しびれて来たのか涙目であり、キャンデイスは意外と余裕があるのか、膝の先でバンビエッタの膝を小突いて震え上がらせていた。

「まず、罪状について異議はありませんねえ……。弁明だけでも、どうぞ？」

「うつせーな。あたし、悪く無え！」

「な、何よキャンデイ！ あたしだって悪くないわよ絶対！」

「いえいえ、実行犯はバンビエッタ・バスターバイン、教唆はキャンデイス・キャットニップとジゼル・ジュエルより聴取は済んでおりますので？」

「アイツ裏切ったッ!」

二人そろって立ち上がるうとし、しかし上手く直立できず転ぶバンビエッタとキャンデイス。両者ともに、既にベレニケの聖文字「ザ・クエスチョン Q―異議―」の「何かしら異議を唱え存在を否定／制限する」能力により、直立歩行を出来なくされていたのだ。その上で正座までさせられているので、完全に体罰である。もつともそんなことだけで反省するならばバンビエッタは頭バンビエッタなどと呼ばれていないし、キャンデイスもキャンデイスで頭バンビーズ（※他称）などと呼ばれていない。倒れながらも特に後悔する様子もなく二人の目がその内心を語っていた。

なおベレニケにより「本心を話したいんじゃないのかい？」などと発言を能力で無理やり強制されたりする。

「バレたことについては後悔してる。次はもつとバレないように上手くやる」

「ハアイ！ 全く反省の色がありませんねえええッ!？」

あんまりにもあんまりな返答。彼女たちにガミガミと当たり前に叱責をするキルゲのそれを適当に流しつつ、バンビエッタは「焦土と化した」背後の光景を見た。

（いやー、我ながら派手にぶっ壊したわねえ……………。まあブルーが居たところだけは、なんか全然大丈夫そうなんだけど）

焦土と化した訓練場—— 霊子で編まれた城の広場が、見渡す限りにおいてその地面が焼け焦げ、ボロボロと崩れ去りかけていた。霊子の隷属を待つまでもなく既に構成がギリギリであり、つまりは大体バンビエッタのせいである。

ことのきっかけは今より数時間前。いつものようにバンビーズの五人で、ブルー・ビジネスシティ（蒼都だがバンビはこう呼ぶ）を使ってストレス解消……、もとい訓練をつけていた時の事。

いつも私刑^{リンチ}じゃ面白くないからとくじ引きを適当にし、チーム分け。なおその際、ジジは「今日はなんか疲れてるからボク、パス。審判やるよ」と適当に観戦に回った。

バンビエッタ、リルトットとキャンデイスのAチーム。

ミニーニヤと蒼^{つあん}のBチーム。

それぞれ別れた上での戦闘は、意外と拮抗していた。

「あららあ？ 私の『Pー力ー』^{ザ・パワー}を受け止めますかバンビちゃん」

「当ったり前じゃない！ あたし、毎日そのサンドバッグで訓練してるんだから、つい最近『大きくなった』あなたにだって簡単に負けたりはしないわ！」

「訓練っつーより、あれは只のいじめじゃねーかなって思うんだけど、俺……」

ガリガリとキャンディを齧っているリルトット。真面目に戦闘するつもりはないのか、テンションが色々高まりすぎてるバンビエツタを抑えるために温存しているのか、自らの聖文字は使用せず適当に矢だけで狙撃してフオローしている。

そんなバンビエツタ、何故テンションが非常に高くなっているかというところ……。

「——っつかしアレよねー。二年くらいしか経ってないのにもうキャンディみたいに大きくなっちゃったんだもの！」

でも可愛いあなたも良かったけど、美人なあなたも大歓迎だわ！

ねえ、ミニー！」

「あゝ、ありがとうございますう、はは………」

「ミニー、嬉しくなかったら素直に言っつていいと思うよ、あたし」

両腕を広げ空中で、大変楽しそうなバンビエツタに、「女子高生くらいに」成長したミニーニヤは困ったように微笑んだ。ため息をつくキャンディスの言葉にも、どう答えたものかという「淑やかな」表情。そのスタイルは既に現時点のバンビエツタに迫る勢い、つい数年前まで女の子というべき姿だった面影はほぼ残っていない。

この二年——彼女が聖文字を与えられてから、それこそ蒼都も含めて一緒に訓練に励んだ結果。今ではその能力が馴染んだせいか、その「霊格が上がり」、身体的にも大きく成長したのだった。

なお、その点で言えば未だに小学生くらいの姿をしているにもかかわらず、メンバーの中で一番年上なりルトットは「ケツ」と面白くなさそうに唇の端を「大きく変形させていた」。

なおそんな状況にあつて、既に蒼都は考えることを止めている。

——蒼都は——やはりバンビエツタは頭バンビエツタだと強く確信した。静止の銀を身体表面に変化・現出させただけでは諸々の頑丈度合いが足りないほどに爆撃されるため、既にその身の霊子はほぼ静止の銀と別な鉱物の合金へと変化させている。彼の仮聖文字「Σ—鋼鉄—」は、最初に発現した能力は「銀への変化」であつたが、鍛錬を続けている内に他の金属への変化を可能としていた。

ただし痛覚は据え置きのまま。ミニーニヤの「P—力—」に全力で殴られた時など、慣れはしてきたが最悪気絶する。バンビエツタの場合でもそれは同様で、そしてどれほど痛覚にさらされようと死ぬに死ぬことは出来ないの——。

——そのうち蒼都は、考えるのをやめた。

バンビエツタとミニーニヤのおっぱいをガン見しながら。

(揺れ……………、たわ……………、わ……………)

「…………ツ!? ちよつと、何処見てるんですかああ『ブルー』君はっ! めっ、ですよ!」

と、目ざとく彼の視線が成長した自らのだいぶ大きな胸元に集中しているのを察したミニーニヤは、バンビエツタの爆撃爆風を柏手一つで蹴散らし(?!)、足早に駆けてチョップ一発。その一撃で蒼都の足は、膝から下が訓練場の地面に埋まった。

元の外見年代を考えればそこまで不可思議な距離感ではないじやれ合い方だが、現在の外見から言えば幼児虐待も甚だしい。そこに気が回っていないのか、それとも気にしていないのか。なんだかんだ言つて、ミニーニヤもまたバンビーズの一員らしい感性をしているらしかつた。

なお、その結果が現在のバンビたちの状況に繋がる。

『———^{ヤルダハトケフ}神の癩癩!』

『えっ? ———^{ヤシヨリニアン}ツ、神の独裁!』

「ヤバ!? いやお前等何考えてんだよ！ 俺、庇わないからな！」
「いいぞー、やっちまえバンビーー！」

「(これ後で絶対怒られる奴だ、逃げよつと……………)」

テンションが上がり切ったバンビエッタが、訓練なのに周囲の被害含めて後先一切考えず滅却師完聖クインシー・フォルシュテンデイツヒ体を発動。つられてミニーニヤも悲壮な顔で発動し、両者ともに背中に光の羽根と冠をまとう。燃え散りなさい！ とけらけら笑い、羽根から大量の弾丸というベキかを雨あられのごとく振り散らすバンビエッタ。一方のミニーニヤは、敵側にいるリルトットにアイコンタクトすると、すぐさま自らの羽根からハートの鏃の矢を放ち、彼女に「食べさせる」。

直後、大慌てで蒼都の背後に回り込み、彼の背中にもう一つ矢を刺しそのまま抱き寄せた。

蒼都に痛みは走らず、不思議そうに彼女を見る。……………間近にあるミニーニヤの顔に、少しだけ照れているようだ。

(顔近……………ってというか良い匂いがするな、この子。お胸も大きいし。性格は割と破綻してる側なのに……………って、そんな場合じゃないや!?)

「(ぜ、全力で防御お願いしますうう……………!)」

「わ、わかつた……………!」

と、硬化させた全身の金属を「さらに延長させ」、まるで小さい金属のシエルターのように成型。そこにバンビエッタの爆撃が降り注ぐ前に、リルトットが生成した矢を蒼都の作ったシエルターに向けて狙撃した――。

果たして、本来なら蒼都といえど一週間は行動不能になるその大瀑布がごとき炎の泉は。かろうじて蒼都が作り上げた「耐火金属」のシエルターにより阻まれ。

そして、それ以外のエリア全域が全てボロボロの有様となった。

かくして城の修復のための資材集め(霊子を使用するため器子ではない強力な霊体集め)を一週間命じられたバンビエッタとキャンディスであるが、当然のように二人そろって真面目にやる気は無かった。

「どうか、解散早々に愚痴を零し合おうと思ったバンビエツタは、目を大きく見開くことになる。」

「き、キャンディ、あなたそれ誰よ!? 誰なのよ!!?」

「ははーん、悪いわねバンビ。あたし、もうおぼこじやないんだ」

性格の良い感じに嗤うキャンディス。この時ばかりは普段バンビエツタに対してマウントをとってご満悦といったところだ。一方のバンビエツタは、呆然とした様子でふらふらと壁に寄りかかり、頭を押えている。

何がそんなに衝撃的だったのかと言えば——キャンディスに「男が出来た」のだ。

なお、名前は別に興味ないらしい。

「あたしの配下とか補佐に回った男共の中で、ちよつと『興味ある』感じのがいたから、ちよちよいと味見を………、ね?」

「な、何でなのよ!? あたし、あなたとは別ジャンルで可愛いじゃない! おっぱいだって大きいし! 脚だってむちむちしてるし! なんだあなたばっかり、ずーるーいー!」

なんであたしの所にはイケメン来ないのよおおおおお——
——ッ!」

(そりや来るわけ無えだろ、そつちの評判最悪だぞこの頭バンビエツタ)

本気かよという目で嘆くバンビエツタに返すキャンディスと、明らかに反応に困った彼女と腕を組んでいるイケメン滅却師。既に幸か不幸か、彼女の見てくれの良さはともかくその本性にある残酷性が広まっていた。主に幼児^{着都}をサンドバッグにして遊んでいる光景が日常的に見られてしまっていたため、仮に付き合ってもその時々で最悪殺されるんじゃない……、と悪評が先行しているのである。つまりは自業自得だが、そのあたりに何ら自覚も罪悪感もないバンビエツタであり、そんな彼女にまたイケメンが引いていくという悪魔の永久機関が出来上がっていた。

さらに、実際に「そういう」状況になったらバンビエツタの行動なら、まさに真実そのものである。バンビーズの面々からも当然肯定さ

れているので、原作と異なり彼女はイケメンと縁がなかった。やったね！ まだキャンデイスの方が扱われ方がマシだよ多分！

あからさまに落ち込むバンビエツタに同情したわけではないキャンデイス。これ後で凄え面倒臭えやつだなあ、とか嫌々思いながら、慰めの言葉を発する。

「そんなに男に飢えてるなら、ブルー育ってから妥協すればいいんじゃないの？ 初めてはどうでも良い相手とするって相場は決まってるし（あたしは違うけど）。

まあ、ブルーだったらあたしも顔がタイプじゃないから、大きくなっても手は出さないし」

「……？ 何言ってるのよキャンディ。ヒトはサンドバッグと恋愛とかしないのよ？」

三度、コイツ正気か!? と現実を疑うような表情となったキャンデイスは、立ち眩みを起こしてイケメン滅却師に抱えられ、おそらく私室へと運ばれていった。

「はあ~~~~、あたしもイケメンと出会いがあるといいなー。どっかに転がってないものかしらね、適当に『散らしても』後腐れなく殺せるイケメン。あたしの『奪って』『見て』『好きにする』とか万死だし」

既に発言が最初から最後まで頭バンビエツタすぎるバンビエツタである。廊下を歩きながらそんな物騒なことを言うから、通路の向こう側で歩いていたら一般滅却師たちが「びくり！」と震わせて道を引き返すのだ。

こうなったらブルー首都で暇つぶしでもするかしらね、と。そう思って彼を探そうとして、見つけた。

「で、最近どうだあ？ 前言ってた安眠グッズは、それこそ羊さんがおねんねするよりも早くなくなるとかあったみたいだし」

「うん。みにい、おつき太くなった」

（げげえ、アスキン・ナックルヴァール……………!?!）

自分よりも序列が上の滅却師の男性。どこか包容力のありそうな

余裕ある雰囲気だが、言動が独特すぎてバンビエツタ的には歯牙にもかけない相手だ。ただ以前に試合をしたときに基礎能力でコテンパンに倒されてしまったことがあり、以来苦手意識がある。もつとも完聖体を使えばまた事情は変わってくるが、そこは割愛。

基本的にバンビエツタ、自分の命が何よりも大事な女だ。仲間意識こそゼロでない程度にはあるが、それはそれとして別問題である。

そんなアスキンが、お気に入りの蒼都サンドバツクと何やら話している。何か変なこと言わないでしょうねえ、とバンビエツタはコソコソ隠れながら話を聞いていた。

「ただ、おかあさん母とか、知らないから、なんか、さみしい寂」

「致命傷だなあ……。ブルーって呼び方の時もそうだったけど、アイツらがお前を構ってるのはラブじゃないってーのは、十分判ってるみてえだな」

（余計なお世話よっ！ ……って、やつぱりママに甘えたいんでちゅね〜ブルーちゃんは〜）

完全に嗜虐的な笑みと怒りを浮かべるバンビエツタだったが、そんな彼らにリルトットが声をかけて会話に混ざった。どうやらお菓子を倉庫へ取りにいった道中であつたらしい。たまたまではあるが、ブルー蒼都とアスキンという組み合わせに興味が湧いたようだ。

「ミニーニャに枕あげたの、お前だったのか。アイツ、あれだけはスゲー大事にしてっからな？ バンビに取り上げられそうになっても、しっかり抵抗してるし。……。あなたのはあたしのもの！ とか言わないで、フツーに借りりや貸すだろうにアイツだつて……。いやどうせパクるから駄目か」

「致命的じゃねーか。……。でもミニーニャは、オシヤレさんじゃねーの」

（ちよつとあのDのやつ、何言ってるか意味がわからないわ）

「ま、元気そうで何よりだよ。俺たち結構、お前のこと雑に扱ってるけど、頑丈だからかバンビも中々手放さないしなあ……。苦労はかけてる」

「オシヤレだねえ、R・R」

「L・Lな？ イニシャル。Rだと違う奴と被るだろ。

……ま、俺も止めると後面倒臭いから、別に何もやってやらないけど」

「致命傷だねえ……」

言いながら頭を撫でるリルトットに、見上げながら蒼都は「リルおねえちゃん、ちよつとまとも！」と楽し気に笑った。自分にはほとんど見せたことのないような、楽しそうな笑みである。

（なんであーゆー可愛い表情は見せないのかしらねえ、あたしには……。その表情以外できないようにしてあげるのに）

そういう所が頭バンビエッタなんだぞ頭バンビエッタ。

その後、騎士団に馴染んだかと言う話題でベレニケを「へんなあたま」呼ばわりして爆笑されたり。アスキンは流石に「本人のオシヤレなんだから、言うんじやないぞそーゆーことは」と笑いながら諭していた。なおバンビーズ2名は即落ちで嘔き出している。

「みにいちちゃんも、へんないろしてる」

「そーゆーこと言うなよ？ 流石にあのゴリラ力に殴られたくないだろお前も……」

って、そういえばだけどお前さー。俺たちの中で誰が好きなんだ？

いまいちバンビが振り回してる印象しかねえから、ちよつと気になってる」

「致命的じゃねえか……？」（※振り回してるのはバンビーズ全員のため）

リルトットのその質問に、バンビエッタも多少は興味を惹かれる。そわそわと半眼で蒼都の長い前髪を見つめている。別にそのテの感情ではないが、彼女なりにお気に入りのお気入りのサンドバッグの動向は把握しておきたいらしい。

「みにいちちゃん、おつきくなってきた、好き」

「あく、まあ妥当って言えば妥当なのか？」

「おっばい」

「スケベじゃねえの」

「オイッ」

満面の笑みでペシリと頭に軽くチョップを入れるリルトット。言外にお前は対象外だと言われたような流れである。もつともその夕イプのいじりは慣れているのか、子供の戯言だからか、彼女もまた軽く流した。

なおバンビエツタ、「おっぱい大きければ何でもいいのアイツ……？」と謎の危機感をあおられる。

「じじさんは、やさしいけど、ずれてるからちがう」

「ズレてるって『判ってる』のかお前？　っていうか感想が結構容赦ねーな、ハハ。

胸って言えばキャンデイスとかバンビもだけど、そっちだったらどっちだ？」

「……………、ばんびおねえちゃん？」

「何で疑問形なんだ」

(何で疑問形なのよ……………?)

そんなバンビーズ二名の疑問はともかく、色々と話聞いていたせいもあってかアスキンはいち早く、その理由に気付いた。

蒼都が髪をいじりながら、照れたように言う。

「おねえちゃん、ひどいけど……………、かみ、いっしょだから。ほんとの、おねえちゃんとか、おかあさんって、いたらあんなきれいなひとだったら、いいなって」

想像以上に重い理由だった。なお蒼都の人格的にはその場で即興でそれっぽい理由をでっち上げただけである。彼にとってバンビエツタはほぼ容姿スタイルだけが全てだった。ただそれは当然外には伝わらない。そっか、と少しだけ寂し気に笑いながら頭を撫でてやるリルトットと、致命傷だぜ……………、と目元を手で覆い、天井を見上げるアスキン。

そしてそんな彼らを見ながら、バンビエツタは視線を下に下げる。両手で自分の、最近また久々に育ってきた胸を持ち上げながら。

(……………ふうん、こんなモノそんなに良いのかしらねえ……………。まあ？　ママがそんなに恋しいっていうんなら……………)

※ ※ ※

そして後日。

「バンビお前……………、そーゆー趣味だったのか。俺、ちよっとお前のこと誤解してた」

「わわわくくくく！　そ、そういうのブルーにはまだ早いと思いますう！　まだ本当に幼児じゃないですかああ!？」

「バンビちゃん、流石に『迎えてない』子供相手にそれは……………（ドン引き）」

「……………」（※対抗意識煽ったあたしが悪いのかな？　　的罪悪感の表情）

「ち、違う違う違う！　これは、そう！　日ごろサンドバッグとしてしか使ってなかったから、ちゃんと機能が爆裂とかしないで『生きて』るか確認してみようかかって———」

「……だから早すぎるわ！……」

バンビエッタの私室にて。全裸のバンビエッタが泣きじやくる蒼都を胸であやしつつ、その視線と手が「ナニか」に伸びようとしている瞬間を目撃され、しばらくいじられることになった。

なおバンビエッタから蒼都に対する好感度の種類は、切れ味が良くて持ちやすいお気に入りのお均で買ったマイはさみ程度のものである。

#004・番外編：NOT KILL THE MORTAL

「……………この霊圧、まーたバンビちゃんは後先考えないで……………情報だと、狛村隊長かな？ はあ……………」

白いフードに身を纏った滅却師の青年は、そう呟いて深くため息をついた。力なく、まるでいつものことだと言わんばかりの具合である。

滅却師の国「見えざる帝国」による尸魂界の襲撃。瀟霊廷への星十字騎士団による進撃と、護廷十三隊による防衛戦。奇襲をかける形だったのは滅却師側であり、戦況は明らかに彼等に追い風が吹いている。

そんな光景が各所で繰り広げられていても、青年はやれやれと言わんばかりに肩を落とした。

「———おい、お前」

「?」

そんな彼に背後から声がかかる。甲高い少年の、しかし苦虫を噛み潰したような低い声。青年は立ち上がり、その下方を見た。

「お前か？ ここに来るまでの連中を軒並み『再起不能に』してたのは」

「嗚呼。……………それには、是と答える」

殺した、とその白髪の少年が、死覇装に羽織をまとった「小さき隊長」、天才少年と呼ばれたこともある日番谷冬獅郎は口にしなかった。事実その通り、フードの青年は戦った死神たちの鎖結と魄睡を、共に自らの技で使用不能としていた。

かつて現世の死神代行、黒崎一護がされたことのあるようなものと同様である。ただし、損壊の仕方が著しく、命こそあれど戦士としてはほぼ再起不能だろう。

「そうかよ。少し、驚いた。——わざわざウチの隊士を中途半端に殺して挑発してきた奴が、こんな所でマヌケにも油売ってるなんてなあ」

「……………」

少年の挑発に、彼は応えない。ただ風を切り腕を振ると、その右の腕に、オオカミの上顎を思わせる、蒼と白の手甲が形成された。そこからミシミシと「何かが這い出る」ような音を鳴らし、その顎から三つの長い爪のような刃が生えた。

少年も、自らの斬魄刀を抜刀し——。

「——霜天に坐せ、『氷輪丸』！」

刀剣解放——。柄尻から鎖に繋がれた三日月の月輪刀が伸び、冷気が放たれる。

それに向けて、青年は刃を向けて構え——刃の先から光弾のような霊圧の矢を放つ。

振りかぶり、薙ぎ払う冬獅郎。冷気を帯びた斬撃がその軌跡に沿い、氷の竜を表出させる。

矢と竜が激突——同時に、青年の構えた手甲爪から、延々と矢が狙撃される。上あごの右、構えたその三つの爪それぞれ一つ一つに霊子が収束し、時間格を置いて絶え間なく、高速で狙撃——。

碎ける氷の竜と、周囲に散る蒸気のごとき白息。

それを起点に斬魄刀を振るい、冬獅郎は空中で氷の壁を作り出す——。

飛廉脚。フードの青年は霊子で足場を形成し、そのまま高速で突撃。

爪に収束した矢で狙撃をし、氷にわずかに亀裂を入れる。直後、その亀裂が再生するよりも前に爪を差し入れ、速度と硬度をもって破壊

した。

砕ける壁を前に、飛廉脚。青年は冬獅郎に迫り、彼も表情を変えず斬り合う。身長差の関係もあり、小柄な彼はやすやすと懐へ。そのまま袈裟斬り、フードの首筋へと斬りつける冬獅郎。

だが、斬れない。

明らかに皮膚へと接触した斬り応えがあるのに、何かが振動でもしてるように「妙な膜」のようなものが、彼の刃の貫通を拒んでいた。

「何、だと……う？」

チャンファリング
面取！

「な——ッ！」

一瞬の驚愕の間を見逃すほど、青年は甘くはない。冬獅郎の腹へすかさず蹴りを一撃——あまりにも体感したことのない「硬さ」の蹴りだった。まるで金属の塊で雑に殴られたような、そんな想像以上に重い一発に、後退させられる。

「隊長！」

「……わめくなッ」

だが、それでも。距離を離される隙を塗って、一撃、彼の籠手を斬る程度できず何が護廷十三隊の隊長格か。副隊長、松本乱菊の声に、雑に応じる。

斬魄刀・氷輪丸。歴代の氷雪系斬魄刀の中で随一の性能を持つその一撃は、容易く青年の右手から肩までを一瞬で凍結させる。

「——これで、テメエの腕は封じた………ッ。ヘンに手心、加えてるのかは知らねえが……ッ、この襲撃で、多くの仲間が殺されてるんだッ。こっちは……、加減する気は無えぞッ」

「………ハア」

やはり、ため息。そしてそのまま左腕を構え直すと、そこから改めて「オオカミの下顎」じみた手甲と爪が、右腕と同様に形成される。

瞬間、間合いを詰める青年。冬獅郎は右側を庇う青年のそれを、正面から刀で受ける。使い物にならなくなった腕を、そのまま盾代わりにしているのかと。考えもしたが、そんな幻想は激突した時の感触で打ち砕かれる。

まただ、明らかにその硬度がおかしい。先ほどの蹴りも同様、今まで感じたこともないような強靱な強い「金属の塊」のような――。

とつぎの判断、瞬間的に冬獅郎は背後へ飛び退いた。突進の勢いを相殺する目的よりも、彼の構えた左腕の爪が振るわれることを恐れた。瞬歩を後方に向け、その場で地面に霊圧を溜めて蹴った――。

先ほどのダメージが胴体に蓄積している――空中で無理に方向転換し、冬獅郎は足で後方の壁を蹴った。と同時に、相殺しきれなかった威力で罅が入り、また彼の足の内も同様に――。

「――うおおおおおおおッ！」

だが、そんなものが何だと言うのだ。自らの足表面に氷輪丸の力を使い凍結、折れた骨の状態を固定し、即席のギプスとする。

そのまま斬りかかる冬獅郎だったが、青年は凍結した右腕を「適当に払う」。それだけで、氷の下にあった「銀の右腕」が露わになり――。

「――唸れ、『灰猫』！」

「ッ！」

両手の爪による狙撃を、乱菊が自らの斬魄刀でそらした。直撃する高速射撃された霊圧を、空中を漂う灰の塊のような状態となった自らの刀で、クツションのようにして防いだ。

当然、ダメージは通る。いかに直撃でなかろうと、その密度と速度が彼我の攻防の差を物語っていた。

「ちよつと、隊長!? 本当に駄目じゃないですかそれ、昔、志波隊長が『ダイジョブ、ダイジョブ』って言ってた時より大丈夫じゃないでしょ――！」

「何も言つてねえ、松本……………、コイツ…………ツ」

改めて倒れる冬獅郎に、乱菊が駆け寄る。起き上がる彼を抱き起そうとするのを払い、前方を睨む冬獅郎。それにつられて視線を向ける乱菊に、青年はやはり深くため息をついた。

積極的に攻めて来る気配はない。だからといって、このまま見逃し

て良いような相手ではない——冬獅郎の決断は、早かった。

それこそ眼前の青年に言わせれば、早すぎるほどに。

「……やるぞ松本、卍解無しで殺せる相手じゃねえ」

「ちよ、隊長……！　でも、敵は卍解を封じるからって、涅隊長の分析結果が出るまで待つようにと——」

「——だから言ってるだろ！　そう簡単に殺せる相手じゃねえ！　それに……ッ」

乱菊も気付いた。明らかに冬獅郎の消耗が激しすぎることに。まるで戦うごとに、自らの霊力を相手に吸われてでもいるような……。なればこそ、戦線を維持するためにも。自らの霊圧を底上げするために、卍解の使用は必須。

例えそれを封じる術を相手が持っているにしても、もはやこのままでは何もしないでは、座して死を待つのみとなるのだ。

後を頼むと言い放ち立ち上がる冬獅郎。——肌で感じる、周辺の隊長格もそろって卍解を発動したことを。彼等もまた、それぞれにそれぞれの必要性をかられての事なのだろう。

そんな一連の流れに、青年はやはりため息をつく。

「どうして皆、正体不明の相手に安全策をとらないのかな。あるいは、他に手段を用意していなかったってところなのか……」

「……………ハッ！　テメエで言ったら世話無え、だろ……ッ！」

内容はまるで、こちらを馬鹿にするような。しかし声音は不思議と労わるような、全く以て「妙な」感覚を抱く冬獅郎。つい軽口が出たのも、彼のそんな雰囲気にも吞まれてのことか。フードでその表情が見えないまでも、口元が僅かに微笑んだ。

斬魄刀を構え、霊圧を高め始める冬獅郎の耳に聞こえる、青年の独り言。

「僕は殺すのも、殺されるのも嫌いだ。痛いのも、我慢にだって限界はある」

「……………」

「だから陛下の作る世界がどうなるかも、本当を言えば興味はないけど——」

わずかに顔を上げたその目は——まるで自分よりも年下の少年のように、妙に澄んだものだった。

「——それでもまあ、バンビちゃんが『殺されない』程度には、適度に、ね？」

意味が解らないが、おそらく仲間の誰かなのだろう。それに対する声音は優し気で、しかしどこかあきらめ気味のようなもので。自分が雛^{幼馴染}森へ向ける声音のようなものを感じた冬獅郎は、しかし鈍ることなく刀剣解放を続けた——。

「——卍……解………ツ、『大紅蓮氷輪丸』ツ！」

顔をしかめる。卍解したが、やはり妙な感覚がある冬獅郎。自らに纏う氷の竜も、それに伴い先ほどまでと比べようもない程の冷気も、普段より何故か霞んでいるような感覚があった。

卍解を封じるような挙動を、男は見せない。それに対し、自らの卍解を彼は封じられないのだと冬獅郎は驕らず。しかし警鐘を鳴らす自らの戦闘勘に従い、一気に決着を——。

「氷竜旋尾——！」

ダブルシューティング
重 継 ツ

冷気による猛烈な斬撃——軌跡に沿って冷気が刃となり、すぐさま凍結するこの一撃を。青年は突きだした左腕の手甲を構え。その爪先が、ゴリゴリと猛烈に「嫌な音を立てながら」、うねうねと変形した。渦を巻くような巨大な盾。それが冬獅郎の一撃を当たり前のように防ぐ。

と同時に、気付いた——防いだ傍から、冬獅郎の霊圧がその壁に「喰われている」ことに。自らの竜でさえ、その霊子が徐々に徐々に霧散し、男の周囲で滞留してはいないかっ！

「——何、だ？」

感じたことのない怖気——かつて涅マユリが挙げた滅却師の

報告にあつたその現象を体感する冬獅郎。と同時に、その渦が「突撃槍ランスのように」変形し。空中の冬獅郎、振り下ろした刀を構え直す前の彼に目掛けて、放たれ——。

灰猫の動員すら間に合わず、彼の腹には大きな風穴が開けられた。碎ける卍解の氷。空中から落下し倒れ伏す冬獅郎を前に、乱菊は間に合わなかった灰猫を構え直し。

しかし、青年は右手の爪を左手同様に「嫌な音を立てて」変形させた。形状はまるで手錠のようなそれで——彼女が身動きするよりも先に、その腕をとり、殴りつけ、叩きつけ、巨大な手錠のようなそれで全身を縛り上げた。

「——アッ!? こん、な……」
「ハア……」

一撃の重さに、やはり体感したことのない「超重量の金属で殴りつけられたような」痛みに、言葉を奪われる乱菊。

その手から斬魄刀の柄を無理に放させ、やはりため息をついた青年。フードが落ち、その顔が見える——長い前髪から覗く目元は、案外とすつきりして子供のようである。そんな青年は、とても悲しそうな表情をして、掌大の円盤を構えた。

瞬間、冬獅郎の卍解を形成する霊子が「吸い上げられ」——同時に、大前田希千代の鬼道によって全隊へ通達される。敵は、卍解を封じるのではなく奪い取るのだと。

「……………ッ!? 何とか、言えよ……、氷輪丸……!」
「隊長……っ」

突然、自らの斬魄刀に起こった異常に顔をしかめる冬獅郎だったが、状況はそれで終わりではない。まるで当たり前の作業をするように、再び爪の形となった右の手甲を構え。青年はその腕を、冬獅郎の背中に振り下ろす——。

激痛とうめき声——同時に、自らの内から吸い上げられる、「有り得てはならない」その感覚——。

「テメエまさか……っ、俺の魄睡を……!」

「……………」『共に生きたものとは共に死すべし』。君の斬魄刀から『その映した魂』は裂かれたんだ。君も、この場でその刀と共に、その『力』に別れを告げてくれ」

「が、ああああああああ——ッ!」

「隊長——ッ!」

気絶した少年から爪を抜くと、青年は腕を払い血を散らす。その視線は乱菊らをもう見ていない。どこか遠くへと向けられた視線は、まるでこの世の終わりでも見ているようなもので。

「……………」逃げれば、僕は追いはしない。しばらくしたら、その錠も消えるから。………これから此処はきつと、今まで見たことのないような『地獄になる』。陛下はそれほどに、護廷十三隊へと強い感情をお持ちだ」

「…………ツ! ふざけんじゃないわよ、アンタたち、勝手にこっちに攻めて来ておいて、何居直って——なんでそんなに、アンタ、やりたか放題ツ」

「——だって、僕は不死身のバケモノだから。怪物って言うのは加減を知らず、好き勝手やるものでしょう?」

星十字騎士団

〃I—不滅〃
ジ・イモータル

ブルー・ビジネスシティ
著 都

青年は彼女に苦笑いを浮かべ、その場から立ち去る。空中へと飛び出し、他の戦場の状況を観察。

彼に倒された死神は、命は奪われずとも戦士としては再起不能。意図的に、それは徹底的に行われている。それはある意味で、単純な死よりも生存者の誇りへ泥を塗る行いであり——。

「……………」とはいえ全員『回復の目途が無くならない程度には』残しているから、完全引退まではいかないんだよねえ、たぶん。

後この調子だと、日番谷隊長も霊王宮行きになるかな? 流石に回復速度も追い付かないだろうし。……………ハア、『読者ヘイトを』『買

わない程度に』倒すのは面倒だあ。回り回って僕が自分で処理しないといけなくなるし。

後たぶん、帰ったらバンビちゃんが奪った黒縄天譴明王で『あーそぼ♡ 死ぬ♡』してくるんだろうなあ、ハア………………。爆裂より打撃の方が嫌なんだよなあ……。あのバスターバインバイン（意味深）め、最近は『昼も夜も』手ごたえ感じなくなってきたとか言ってたし……………」

しかし一人でいる本人は、とても自由気ままとは縁のない。どちらかといえば、死ぬほど面倒くさそうな表情でため息をついていた。

#005. 怪物の片鱗を見る痼癩

星十字騎士団所属滅却師、「ザ・クエスチョン」 Q―異議―「ベレニケ・ガブリエリ」。本日は気分で髪色をシルバーに紫メツシユとしていた彼は、訓練場を後にし廊下で「ふう」と一息ついた。壁に背を預けながら、片手で自分を仰いでいる。

「やれやれ……、いまだ完「フォルシユテンディツヒ」 聖 体までは至らずか。バンビエツタなどはすんなりと取得していたというのに、一体何が僕に足りないというのだろう。霊子の操作力を上げるため、常に無手であるという『制約』をかけ、能力の錬磨に努めているというのに……………」。

それはそうと、腹が減ったな」
聖文字の使用により、霊力発動とそれに伴う霊子の消耗までは、流石の滅却師でも自力で補いきれない。それこそ彼らの陛下であるユーハバツハや騎士団長ハツシユヴァルトでもあれば話は別だろうが、基本的に霊子の収束と霊子の吸収は、前者の方が多大に霊力を消費する。

つまり、一人で永久機関のように霊子の吸収と発散を行うことはできないのだ。その場にとどまっているだけでもないのならば、必然、食事なども戦闘魂魄には必要となってくる。ヒトは霞を食って生きるにあらざる。つまり霞食って生きている奴はヒトではないのだと言っても良いかもしれない。

「……………おや？ 珍しい光景だ」
「ほら、あくん……。美味いか？ 俺の菓子食ってるんだから、ちゃんと育てよっ」

「んく、ん……………、い、是」「いえず」

「ハハ、最近少しずつ舌つ足らずとれてきたな。大人になってるって訳だ」

「大人……………？ ………………」

「お、オイ何で震えはじめた？ ブルー何だ何かあったか？ ……
やっぱあの時バンビに何かされたか？ あ？ 大丈夫かオーイ……、
ま、とりあえず食つとけや」
「う、うん……」

一般兵あるいは騎士団のうちで料理上手な滅却師が調理場に立つ食堂にて、バンビーズの一人と、それにこき使われてボロ雑巾のようになった姿を日々目撃されている男の子である。彼女の名前は………、とつさに出てこないベレニケ。一般兵士時代から基本、バンビーズを見たまともな滅却師は見敵退散サーチアンドエスケイブが必須技能である。むしろその見てくれやらの可愛らしさ美しさセクシーさやらに釣られる男も少なくはないが、賢い（と自分で思ってる）滅却師は好き好んで寄り付かない。

とはいえ正式に騎士団へと召されれば、そういう訳にもいかない。なので最低限、まともな会話が成立する相手を選ぶには選んでいた。

ジゼル・ジュエルは「性別的に」会話に違和感が少ないが、ダブルスタンダードをよくやらかす。

ミニーニャ・マカロンは蒼がサンドバッグになるまでよく無茶ぶりされて遊ばれていたせいか、発言にあまり責任を持たず徹底して逃げ回る。

キャンデイス・キャットニップは、鋭いタイプのイケメンで物静かな男ならずぐに惚れるし飽きっぽいがそう無体なことはせず、しかし興味のない相手には徹底して短気。

その点から言えば、リルトット・ランパードは比較的マシンといえた。基本的に無関心で面倒くさがりであるが、状況を判断する程度にはまともな感性が有りキャンデイスと並んでまだ話しやすい。

へ？ バンビエツタ・バスターバイン？ 仕事は真面目にするが、それはそれとして幼子をああも手ひどく扱う相手に何を期待しろと？

声をかけたベレニケに「やらねえぞ？」と薄切揚芋なスナック菓子を庇いながらも、最近ブルー・ビジネスシテイと「改名を強要されている」男の子の口に運んでいるリルトット。やはりまだまともか、と

判断し、本来は蒼都つあんどうと言うらしい彼に視線を向けた。

と、突然男の子が指をさし。

「また変わかってる、ヘンへんな頭あたま！」

「ブボウツ……………！ お前、だからそれ本人に言うのは…………」

「フツそうかバレてしまったか。そうとも！ 僕が噂の、髪の色ヘンなお兄さんさ！」

マジで!? と何故か驚くりルトット。彼女の感性だったらそんな風な罵倒を言われようものなら瞬間湯沸かし器的沸騰不可避なのが、ベレニケは存外ヒトが出来ていた。おおく！ と謎の拍手をするブルー蒼に、フフンと笑いながらポーズを決めたり、新しい謎々を出してあげようとか話しかける。

リルトットのにはアスキンなどで、ブルーが案外色々な滅却師と交流を作りつつあることを知ってはいるが、邪険にする気配のないベレニケは案外子供に好かれるらしかった。

(異議の人……………、異議の人……………、印象薄いけどまあ頭バンビちゃんじゃないからヨシ！)

なお蒼都の内の精神にあたる存在は、原作本編での彼の扱いのせいで記憶がほぼなかったりするのだが、誰も知らず、また言わぬが花であろう。

はてさて、ベレニケの出すぞなぞに、ついだとばかりにリルトットも一緒になって答えを考える、ちびっ子とお兄さんお姉さんの(表面上は)微笑ましいやりとりをしたりしながら、会話の流れで何故食べさせていたのかという話になる。

「確かキャンデイス・キャットニップが、君は自分の御菓子を絶対他人に手渡さないことで有名だと触れ回っていたのを、勝手な噂流してんじやねえぜと言って本人の御菓子まで奪い取って食べていたのを見た覚えがあるのだが、流石に幼子相手には違う扱いなのか？」

「何だテメエ、文句あるなら喰うぞ？」

「口の端を変形して脅しをかけるのを止めてくれ!? 君、確か僕の

ザ・クエスチョン
Q—異議—”通じなかつたろう!!?”

「…………リルお姉ちゃん、くいし—————」

「あ？？」

「——、えっと、育ち盛り？」

「そうそう、そーゆー気遣いは大事だぜ？ バンビにや通用しないだろうけど」

言いながら頭を撫でるリルトット。小学生くらいの彼女が幼児の男の子を撫でている絵面は中々微笑ましいものがあるが、口にしたら何が起こるかかわからないのでベレニケは苦笑いに留めておいた。

基本バンビエツタと比較されるからマシなのであって、バンビーズもまた頭バンビーズと影で呼ばれているくらいにはアレなのだ。

「で？ まー別に子供だからあげてるとか、そんな訳ねえよ。」

ちよつとバンビが思うように能力伸びなくなつて来て、ブルーに八つ当たりかましてな。『共通部屋』でやったもんだから、辺り一面血まみれになつちまつてミニーニヤがぶち切れて大喧嘩になつてな。で、その中でバンビが盾代わりに使つて、一緒にボロボロになつちまつたもんだから、えーよーほきゅー」

「栄養補給といつてもそれをしたところで……（それ以前にブルー呼びは確定でいいのか？）。

いや、それ以前に傷の修復などはしなくて良いのかこの子は!？」

驚愕するベレニケだが、ノースリーブな外套含めて全身特に傷の様なものも見えない蒼都。流石に着替えさせたか？ と思つたベレニケだったが、違う違うとリルトットは言う。

「コイツの仮文字の『Σ—鋼鉄—』の効果、どーも身体って概念に服装まで含まれてるらしくつてな？ 一度金属化して靈子を消耗すると、それと一緒に『再構築』されるつてキルゲのオッサン言つてた」
「なるほど……、嗚呼だから、靈子の補給をする必要があると」
「まあな。普段より大量に靈子消耗して傷を治した分、補填しないでまたバンビが頭バンビなことしたら絶対死ぬだろ？ そしたら連帯責任じゃん。どー考えてもロクなことにならねーって」

彼女も彼女なりに、自己保身の意味もあつてブルーに構っているらしいが。それはそうとして小さな子供に対する微笑ましい感情も無い訳ではないようなので、やはり彼女は頭バンビエツタ程ではないの

だろうとベレニケは納得した。

直後、彼の意識は刈り取られる――。

「――かあああああ、つれえつれえ、つれえわ！　どいつもこいつも、おれ様の訓練相手としちゃ物足りなくてつれえわ！」

「あ、この間バンビに服装全部爆破されて全裸にされて入り口に晒されたオーバーキルじゃねーか、ケケケツ」

「傷口に塩を塗りつけるの止めろお前！　おれが傷つくだろうが！」

背後からベレニケを一撃で退した大男、ドリスコール・ベルチ。自らの髭を撫でながら、筋肉質な自らの身体を魅せつけるように胸を張り、椅子に座るリルトットとブルーを見下ろした。いや、表情的には見下したの方が正確かもしれない。

もっともリルトットは興味無と言わんばかりにブルーにスナック菓子を与えながら自分もつまんでいる。ブルーはブルーで、その前髪に隠れた未だ純粹そうな目で、大男を見上げた。

「……………マッチョマッチョ、しん」

「ぶはははははは！　つれえわ、お子様にも俺様の格好良さが伝わっちゃまうなんてつれえぜ！　はははははははは！」

（今の格好良いつて感想なのか？　つていうか相変わらずコイツ容赦ねえな形容の仕方…………）

忍び笑いするリルトットだったが、ご機嫌な様子そのままドリスコールは、がしりと蒼の頭を掴む。そのまま撫でる動きにならないことは、腕からわずかに漏れている霊圧の具合で察することができたリルトットである。「あ、？」と睨み上げる彼女に、やはり見下したような嫌な笑みで嗤う男。

「つらすぎて暇なもんでなあ、今度こそバンビエッタの奴をボッコボコにして服脱がして晒し返してやろうかと思っただが、気が変わった。坊主、おれの鍛錬相手になれよ」

「……………？」

「言つとくが拒否権はねえからな！　がはははははは――！」

とはいえ無理やり連れてこられた以上、彼に選択肢はない。既にかなり疲弊しており、聖文字を追加で使用するといよいよもって気絶してしまうのではと言う不安もある。流石に気絶した状態でバンビエツタに発見されなどした場合、一体何が起こる……。そういった恐怖心から、蒼は「なんとなく」習得していた静血装を全身にまとった。「じゃあ行くぜ、おおおおお、らァ！」

手元に形成した神聖滅矢を掴み、槍のように持ちかえ襲い掛かるドリスコール。蒼は両腕に形成した狼の顎風な籠手型の神聖弓を盾に防御する——視ようによつては、その籠手にすら「血装が乗っている」のだが、その少し変な事実気付かず、ドリスコールは連撃を繰り返していた。

「オラー！ どうしたどうした、そんなんじゃバンビエツタだつて組み伏せられねーぞ？」

「……………？」

「お？ 意味わからねーか？ あのビッチ共に囲まれてそういう話題も出てこないってことは……、よっぽど可愛がられてるんだなお前！ ガハハ、ますますもつてつれえぜつれえぜ、ムカムカしてきてなァ！」

「——っ！」

ほぼ至近距離での、槍の投擲——籠手を回すのが間に合わず、さらに言えば再生成された矢をその場でマウントポジションから追撃され。蒼はその一瞬で「普通ならば」瀕死となった。本来ならば血装の対応速度が追い付くはずなのだが、どうやら未だ霊子が足りていないと見える。

左腕は肩から先が欠損し、両脚は折れ、右腕も突然の圧迫でペしヤんこになり赤黒い。

つれえわつれえわ！ と大声で笑い飛ばすドリスコール。と、その身からわずかに霊圧が立ち上る。

「つれえ、つれえぜ……！ 前途有望な騎士団新入りの坊主を、このおれが最強になるための礎として有効活用しちまってあー、つれえわ！」

(あつ、やつぱりリルトットの話を全然聞いていなかったなこの男)
「おれの聖文字『O—大量虐殺』^{ジ・オーヴァーキル}は、殺した相手の霊圧の分どころん強くなっていく！ わかるかあ？ おれの霊力が上がったってことは！ お前はもう死んでるってことだ！ 普通にやって助からねえって訳だぜ、あーつれえつれえッ！」
痛みに表情こそゆがめているが、特に絶叫などは上げない蒼。そんな彼の様子も気にせず、ゲラゲラとご機嫌に大笑いするドリスコールであるが。

(……………これでもまだ「バンビちゃんの方が酷い」からなあ)

当の本人の内心は、意外と余裕だった。

完全に油断している隙について、一気に霊圧を解き放つ——
放った霊子を血装に浴わせて、身体の内側に「新しい身体を」造り出すようなイメージで。自らの骨を軸に、自らの意志だけで動くシステムを構築し、折れた足を「強引に」立て直した。

「——がはははは、は……、何、だ？」

完全に殺しきったと思っていた男の子が立ち上がる——乱装天蓋。ある一定以上の技量をもつ滅却師が、自らの身体の損壊を無視して行動する際などに使用される高等技術の一つ。

もともと彼が、騎士団の中でも群を抜いて基礎技術を鍛錬しているキルゲの下で修業していることを思えば、使えることに納得できなくもないが。いくら何でも、騎士団に来てから数年でその域に至っていると言うのは、いくら何でも早すぎる——。

実際、蒼は少しだけズルをしている。それは——。

「——『^Σ—鋼鉄—』！」

「おおッ!？」

自らの「血液を」金属と化し、そこから霊力を強引に全身に廻しているのだ。理屈から言えば乱装天蓋だが、キルゲ本人が見れば「全く見るに堪えませんねえ……」と呆れることは必定。子供に優しい方のキルゲではあるが、授業はしっかり手を抜かない彼である。

だが、そんな技であつても、今のタイミングでは使うことが重要であり――。

『――良いですか？ 蒼都。いかに滅却師といえど、生き残るためには時に虚の力すら使わなければなりません。むろん最後は滅却するのは必然ですが！ だとしても、我々にとつての敗北は、陛下の手による死以外であつてはなりません。』

何より、生き残るのです。そのためなら多少の邪道邪法はなんのその――』

「お、オイオイ本気か!? つれえ、つれえわ……! 普段どんだけバンビエツタ達から虐められてるんだ……」

蒼は、自らの「ねじ斬られた左腕」を拾い上げ。そのまだ「霊的には」生きている腕を能力で鋼鉄化し、さらには「骨を変形させ」、刃のように成型した。絵面があまりにもひどく、そうなつた原因でもあるドリスコールですら声が引いている。

明らかに、それを実行できてしまうブルー^著の精神面が、色々と大丈夫なのかという意味で。

斬りかかる蒼。自らの霊的な損亡を度外視して全身を鋼鉄化し、さらにはその上に静血装を重ね掛けしたまま、全力で向かつてくる彼に、ドリスコールは困惑しかない。直接的な攻撃力はともかく、そんな状態でも「当たり前のように」戦おうとする、その幼児の精神が全くもって酷いことこの上ない。密かに「バンビーズってあれ？ ひよつとしてビッチじゃなくてクズ集団……？」などと思ひ始めながらも、しかしドリスコールはしっかり蒼の攻撃をさばっていた。

そして、全く持つて想定外なことに――ドリスコールの霊圧は「上がり続けていた」。

「オイお前よお……、それ普通に考えて死んでるぞ？ どーしてそのままやってんだよ……?」

「――ッ」

鬼の目にも涙ではないが、ドリスコールとて多少は良心こそある。自分がクズである自覚はあるが、それだつて頭バンビエツタまではい

かない。

なのでここまでくると、もはやどうして彼が生き残っているのかすら不思議な有様で——体の良いサンドバッグではあるが、いつそ哀れに思えた。

だからこそ彼の腹を蹴り飛ばし、距離を取らせ。

「……仕方ねえ。そんなに酷え人生なんざ、ここでオサラバしちまいな！　せめて一思いに、楽に送ってやるぜ！」

言いながら腕を空に突き上げると同時に、全身の霊圧が収束して柱のように伸びる——光の、柱。釘打つように内側から幾重も十字が伸び、砕け。

『刮目しな、このおれの滅却師完聖体！　その名も——』

『ヤルダハトケフ神の癩癩』

ドリスコールが自らのその姿を魅せつけようとした、その瞬間。蒼の視界一帯が、すべて「猛烈な爆撃に」さらされた。

煙が晴れる頃には、完聖体を強制解除されて気絶しているドリスコールの姿が。

それを見ている真っ黒にすすけた蒼であったが、いつの間にかその全身の傷は「戻っている」。取れてしまった左腕も、いつの間にか肩にとりつけて「再生していた」。

そして煙が晴れると、上空からミニスカートであることを忘れたように慌てて飛び降りて来るのは。

「馬つ鹿じゃないの!?　ヘンな頭のやつに聞いたけど、何をあたしとか、あたしがレンタルした相手以外にぶっ殺されかけてんのよ、あなた！　あなたは、あたし専用のサンドバッグなんだから！　他の奴が使いたいって言っても、あたしに断りなくなんてぜーったい使わせないのよ！　いい?」

明らかに心配する部分が異常極まりないその発言を前に、蒼都の人格は「ああやっぱり今日も頭バンビちゃんなんだなあ……」と色々諦める。純真なくくりくりとした目に似つかわしくない、死んだ魚の様

な生気のなさだ。

そんなこと気にせず彼を持ち上げて、ボロボロに倒れたドリスコールに「いーだっ！」と舌を出し、あまつさえ顎髭を爆破してすつきりさせて「うん、これで良し！」などとご満悦。

そして「ボロボロじゃないあなた……、仕方ないわねえ、洗ってあげるからついてらっしゃい！」とか言いながら、彼の首をヘッドロック。胸が頭の後ろにあたっていている恰好であり、扉の影に隠れていたベレニケは羨ましそうな表情になる。

が、ブルーのその真つ青な表情と目を見て、「強く生きろ……！」と一言だけ言葉を送り、後は何も見なかったことにした。

「ってブルー、別に目を閉じてなくてもいいわよ？ 流石にサンドバッグ相手に『オトコ』だとか思わないから。ちゃんとした男だったら、私の裸見て勝手に気持ち良くなるのとか万死だから『真つ二つ』だけど」

(ひっ……………!?)

「何、逃げてるのよ？ ほらほら、えいつ、かーわーいーいーじゃないのよー」

「うう……………、く、くすぐりたい……………」

「……………やっぱりまだ『為らない』わね。皆も言ってたけど、後どれくらい経てば『使える』ようになるのかしら、あなた。ちびっ子な割には……………、って思うけど……………」

あたし爆破しすぎて、あなたの機能壊してないわよね？ 大丈夫よね？ バレてキルゲから騎士団長とか陛下に連絡がいつて肅清とかされないわよね？ あたし……………」

なおこの数日後、ブルーの話し方から舌足らずさがさらに取れ始め。改めてバンビがまたナニか手を出したんじゃないかという話題でバンビーズは持ちきりになるが、それは別の話である。

なおその件についてバンビエツタ的には、へえ〜こうなってるんだ〜的な興味本位以上の感情がないため、蒼都のメンタルには大ダメージ

ジであつた。

#006・ラブは多分ハワイ旅行中につき当分帰郷する目途は立たず

「ミニーニヤ、それ俺のだから」

「えっ!? いえあの、私のプリンだって容器に名前書いてあって、たつた今開けた奴ですよねええ? ……って言ってるそばからなくなってますう!? ちよつと、聖文字使うの止めてくれませんか、大人げ有りませんよりルお姉さんっ」

「おー、お前がそう呼ぶのも久々だなー。聖文字貰って身長が私追い越してからは言わなくなってたっけ……。考えたらバンビの奴は一度もそう言ったことないな。小学生くらいの姿してた頃から、あーだったし」

「……………前から気になっていたんですけどお、バンビーズってどういう経緯で結成を?」

「結成イ? も何もねーよ。元々、俺とキャンデイスがつるんでたところにバンビの奴が『だったら、あたしがリーダーやってやろうじゃないッ!』って。」

どーゆー会話してたのか全然覚えてねーけど、アレかな……。? 戦闘時にどっちがリーダーやるかみたいな話で。で、勝手に乱入してきて、そんなバンビに釣られてジジのヤローが入って来て、で最後にお前が入って、ブルーが拉致されてきたと」

「拉致ですかああ……。:(ジジのヤロー?)」

いつかのように、あるいはいつものように食堂にて。昼食時間と言う訳でもなくお菓子をつまんでいたリルトットに、「お邪魔しまあす」と対面に座ったミニーニヤである。彼女はスイーツを持ってきてたべていたが、時折リルトットから「よこせ」と言われて一瞬で奪われ続けていた。

なおリルトットは自分の御菓子ミニーニヤに渡す気配はない。ブルー著にしていたのは特別中の特別であり、同情なのか親心めいた愛着なのか、といったところだろう。

まあ、それはそうと頭バンビエツタから離す真似をしない程度には、二人そろって頭バンビーズではあるのだが。

そんなリラックスタイムに、よれよれと全身から煙を上げる巨体の一つ………。ミニーニヤは「あらまあ」と嫌そうな顔、リルトットは「うげツ」と苦虫を噛みつぶしたような顔。どちらも揃って生理的な嫌悪を示した。

「ラヴが………。あの子にはラヴがないヨネエ………。………」

「デブの裸体晒してんじゃねーぞ変態ペペ、喰い散らかすぞ？」

「ラヴが！ ミーにもラヴがないよお……！」

「いや食うのもキモいわ、そんなだらしねえ肉……、噛み千切ってそこから辺に吐き散らかすわ」

「あら？ でしたら私も腕力で千切っては投げ千切っては投げ——」

「ミーの肉体ボデイは幾重もの愛ラヴで出来てるけど、人に分け与えられるような構造じゃないからね……！」

本気で悲鳴を上げて涙目になっている男、ザ・「L—愛—」ペペ・ワキャブラーダ。完聖体「神の情愛」を発動したこともあって、その恰好は放漫極まりない、リルトットいわく「だらしねえ」肉体をしている。それを下半身におむつなのかパンツなのか一丁という恰好（しかもナニがデカイ）。この格好で少女らの前に現れた時点で、十分に犯罪めいた絵面であった。

なお現時点においてリルトットは相変わらず小学生程のスタイル、ミニーニヤは高校生でいえばそろそろ卒業間近か？ というくらいの育ち具合である。

閑話休題。杖をついてきたペペに対して、しかし少しクレームを入れたという彼の言に、リルトットは最低限の同席を許した。……同席と言っても、普段彼が座っている独特の椅子とも円盤とも言えないものに座らせられ、距離にして2メートルほど遠ざけられているのだ

が。なお服は破れたのか、そのままの露出狂スタイルにサングラスをかけている。

「……………やっぱりボクの扱いにラブが欠片もないジャン？」

「うっせ、話すことないならとつと消えろ。で？　何か言いたいことあんのか」

「うう……………、ちよつと思うことがあたのよう、あのキューティなブルーに」

「(は？　ウチのブルーを可愛いとか言って狙ってますかこの変態？

やっぱり肉、抉りましようかねえ…………?)」

「(落ち着け、やるだけの価値もない)」

ペペの扱いについてはともかく、閑話休題。

「あの子の情操教育どーなってるの!?　初対面でこの技使ったらいきなり『デブの裸!』とか言って指さしてくるし…………、あのオトシゴロの純粋な目でキラキラされてそんなこと言われたら、ミーが^{無限大}の愛をもつといえど、ちよつとシヨック受けちゃったヨネ♡」

「語尾可愛らしくするな、デブの裸」

「全くですよねええ、デブの裸」

「君たち、そのうち覚えておきな…………?」

全くもって扱いに愛がないペペではあるが、その一言にリルトットは肩をすくめる。当然である、なにせバンビーズはブルーの教育についてはノータッチだ。そういった振る舞いについてはロバート老が何とかしてくれているだろうと雑に丸投げしているので、バンビーズは特に手を出すことは無い。

なおペペがいつてるのは根本的な情操教育というかマナーとか躰とかの部分だが、生憎とそれが通じるようならバンビーズはバンビエツタとなんだかんだ付き合えてはいなかった。なお実質、陰口を大量に叩いているものとする。

あといい加減リルトットの嫌悪感が限界に近い。先ほどから咀嚼しているスナック菓子の袋が倍速である。それでも一応、バンビエツタによって頭バンビエツタの刑に晒されているブルー^蒼のことについての話なせい、気にかけて居座るくらいには彼女も心を許している

らしかった。……親心というか、同情と言うか。

「ゲツゲツゲ……、何っていうか、もっと愛してあげれば良いのに。ラヴ、ラヴ！ ラヴ・セイヴ・ザ・ワールド！ ラヴ・イズ・ビューティフル！ そうすれば『あんな』武器使おうとか思わないツシヨ……」

「あ、ああああああ愛してあげればってそれええええツ!？」

「お?」「むうん?」

突如、胸の中央を両手で重ねて押さえるようにして顔を真っ赤にするミニーニヤ。小さい頃にかかっていた時でも中々拝めないその変化に、唸りリルトットは「ははくん」とニヤニヤする。が、変態の前で公開処刑する必要も無いだろうと、軽く手を叩いて話を続けさせた。

「で、何の話だ?」

「武器、武器。さつきミーも騎士団長に散々しごかれて今の状況なんだけど、それじゃなくなつてアレアレ、キュートなブルーのお手々から『生えて来る』鉤爪。

アレって人骨でツシヨ?」

「嗚呼……」「まーなー」

話ながら、リルトットはこの 11 年間「このことを思い出す。それはかつて、リルトットの聖文字や完聖体との訓練……、本当に真面目な話、頭バンビエッタではない意味での訓練であるが。その訓練において「食えなかった」彼の腕の霊子、というよりその「骨」にブルーが着目したことだ。

それ以来、ブルーは^著少しずつ戦闘時、主にバンビエッタによって爆散させられる自らの四肢やら腕やら胴体やらのパーツから、再生に使用する霊子を少しだけ残し、自らの「骨片」を集め始めた。最初は何をやつてるのかとリルトットはドン引きしたし、ミニーニヤは心が壊れてしまったのかと手料理を振舞い、あまり仲が良くないはずのキャンデイスですら自分オススメの恋愛本を持ってきたりするくらいには、外見上病んでいた。バンビエッタ? 「そのままコンソメかテールスープみたいなのでも作るの?」と明らかに正気ではない。

なお、事情を知っていたのはジジである。ある程度集まった骨片――「霊的には」まだ生きているそれらを、滅却師の霊子操作能力で死滅させず残していたそれらをつなぎ合わせ、再形成し、左右それぞれ3つ指な鉤爪を二振り作り上げたのだ。そしてそれが出来上がった後、早々にジジに対して「埋め込んで!」と、これまた嬉々として持って行った始末。

いくら事情を知っていたからとはいえ、ジジもこれにはドン引きするかと思われたが……………、意外な事にすんなり受諾した。

『ボク、バンビちゃんのこと大好きだけど君が毎回ボロボロにされるのは、心痛めてたからね……………。せめて剣とまともに戦える武器を作りたいっていうのは、大賛成! いいよ、身体に内蔵されてないと「霊的に」死んじやうんだよね』

『……………なあジジよ、だったら最初からお前あの頭バンビエツタ止めりゃいいって俺思うんだけど』

『バンビちゃんって最近はブルー爆撃してる時の方が最高に輝いてるからね! ジェラルドとかと違って、ちゃんと「痛い」って少し苦しうにするのが楽しいらしいし』

『そ、そうか……………』

ジジのダブルスタンダードっぷりに引きつった笑みを浮かべるリルトットと、特に違和感もないらしいブルーであった。

なおアメモミ知識があるアスキンやベレニケ、某マスク男からは「ウルヴァリ〇!?!」「X〇M E N」と驚かれたりもしたが、閑話休題。「あの爪にねえ…………、この間、ボクの『愛』があっさり斬られるし、ミーの心も全然『伝わらない』し、ちよつと散々な目に遭ったから…………」「そりや朗報だなあ、俺たちからすりゃ」

「そんな寂しいこと言わないでつヨ!!」ただ、ミーの『愛』が伝わらないってことは、そもそも愛がわかっていないか、愛そのものに『変な考え方』が染みついているかだと思おうのお……………。シユテルンリッター星十字騎士団1の愛の伝道師たるミー的に、由々しき事態! つてこと!

で、肝心の彼はどこに……………?」

「あー、それならなあ——現世」

ワッツ？ と。困惑するペペに、話は終わりだとばかりにミニニヤの食べ終えたパフエの容器を投げつけ、帽子の代わりにした。なお滴る白い液体なんだか半固形なんだかな物体やらジャムやらチョコレートやらが、ペペの絵面をさらに酷いものになっている。

そんなにミィ、嫌われることやつたかな……？ と。以前にバンビエツタを洗脳してそれはそれは酷いこと（爆撃）をした自覚のないペペは、寂しそうにその場で首をかしげていた。

※ ※ ※

レンガ造りだったり、あるいは新興の商業ビルが立ち並び始めている時代のニューヨーク。治安的な問題はともかくとして、そんなこと関係なしに蒼都つあんどうは、おつかいをしていた。

今生における「はじめてのおつかい」である。

別名、頭バンビエツタによる身の安全とか全く考慮されていないパシリ。

その両手には「M」の文字が刻印された世界一有名と言っても過言ではないファーストフード店の袋が大量に。おおよそ 9、10才くらいの子供が持つにはかなりアメリカンサイズな量であり、やや足取りもフラフラしていて色々と危なっかし。それでもしつかり歩いている「ように見せかけながら」、蒼は飛廉脚で微妙に浮遊して安定をとっていた。

そして、居た。背中や胸元、おへそのあたりなどやや露出が見られる、裾の拾いジーンズ姿の美少女。美少女から美女へと羽化しかかっている、成長期の肉体的ラインを持っているのが一目でわかる、バンビエツタである。

彼女の周囲にはダンシングでオールナイトしてそうな時代を思わせる（※当時としてはナウなヤングの恰好）服装の若者たちが、モヒカン頭の男に引っ張られてバンビエツタから引き離されていた。

そんなバンビと、ザ・ヒート“H—灼熱—”バズビーの二人へと歩み寄るブ

ルーだが。彼が持っていた袋を二つ手に取ると、当たり前のようにバンビエツタはブルーの側頭部を蹴り飛ばした。

倒れるブルー、そんな彼の腹を、靴を脱いだ生足でぐりつと置き、ぐりぐりとストンピングするバンビエツタである。蒼都本人は腹部を金属に変えているのでそこまでダメージはないが、どう考えても普通は一発で通報案件である。バンビエツタの嗜虐的な笑みが完全に大問題だった。

この光景を見て、既にバズビーに引つ張られたナンパ男たちはドン引きしていた。

「おっそいじやないのブルー、あなた。どこで道草食ってたってワケえ？ ……あっ、ハンバーガー美味しい。食べる？」

「え？ えつと……、ぬぐ」

「はい、あくん？ 間接キツスとか『まだ』気にしない年頃よね？ 大丈夫大丈夫、まだまだサンドバッグ卒業は先よ先」

(ヒエ……)

「ほーら吐いたら駄目よー♡ はい、1♡ 2♡ 3♡ 4♡」

(何だこの人間の屑みてえなカワイ子ちゃん……!!?)

それはもうドン引きである。当たり前である。愉し気にストンピングでねじる回数をカウントしながら体重を圧迫し続け、その上で少年に無理やりハンバーガーを食べさせてる絵面はいくらなんでも酷すぎた。マ○クへの壮大なネガティブキャンペーンである。

バズビーすら彼の仮聖文字があるから死にはしないと判ってはいても、どうしてこれを素直に受け入れるようになる前にか出来なかったのかユーゴの奴……、とハツシユヴァルトへ苦々しい思いを浮かべる。

自分の方を見て来るナンパ男たちに「わかったか？ 次からは相手見てから誘えよ、な？」と同情しながら激励し、コクコクと激しく何度も頷いて逃げ出す二人に「頑張れよー！」とエールを送った。

と、ナンパ男たちが尊い犠牲(?)にならず退散した後に気付いたバンビエツタは、不機嫌そうに何度もブルー^蒼の腹を踏みつけた。

「あ、あ、も、う！ なんでせつかくのイケメンを逃がすのよ、あなた

！ せっかくキャンディに馬鹿にされないくらいには『経験』積めると思っただのにッ！」

「お前ちよつと自分の発言と普段の行動を顧みてから少しは物言えよ頭バンビエツタ……？」

「おー、大丈夫か？ ブルー」

「んく………、ん！」

「無駄にせずにちゃんと食べたか！ 偉い、偉いぞ！」

踏みつけるのも飽きたバンビエツタが退いた後、ブルーを起こしながらその頭を撫でるバズビーである。もともと星十字騎士団、ないしはその王であるユーハバツハへと復讐を誓った彼であり、同格とはリルトットなど「話の分かる」連中——ユーハバツハへの忠誠が絶対ではない連中を除いて敵やゴミ認定なのだが。それでも、いくらなんでも幼子からこのレベルの所業を常日頃から受け続けていた蒼に対しては、思う所があるのだろう。

なお、そうやって褒められてるブルーに向けて、バンビエツタはきよとんとした表情。

「………ねえブルー、ハンバーガーあげた私に何かお礼の言葉とかないわけ!？」

(いきなり何言い出してんだこのバンビちゃんは相変わらず………)

「………あー、なんか悪かったな。俺の方とかで引き取ってやれなくて、当時」

本格的な同情っぷりである。現時点において蒼都の扱いはユーハバツハないしハツシユヴァルトを経由している関係もあり、まともな考えをもったバズビーも意見出来ない状態にあった。

……なお一度ハツシユヴァルトと口論にはなつたが、その際「………こつちだつて陛下に何度も言ってるんだバズー」と、つい本音らしきものが零されたのが色々衝撃的だったりしたようだが、それはさておき。

ブルーは少し考えた後、バンビエツタへと確認した。

「えつと………、間接キスの？」

「正解！ ありがた〜〜〜く、思いなさいよね！ 〃見えざる帝国
〃の一般滅却師共だったら垂涎すいぜんもので土下座確定なんだから！」

「マジで!? お前、そんな年頃の女の子みてえな意識する神経あんの
か!!?」

「でも、たぶんその、土下座してるところ真つ二つ？ バンビお姉ちゃ
ん」

「えっ？ そりゃ、当たり前じゃない……？ 気持ち悪いしそんなの
土下座してまで求めてくる男とか………」

「あー、わかったわかった。何でもかんでもその顔してりや誰も何も
言わねえ訳じゃねーからな……?」

「へえ……? あなたの〃Hザ—灼熱ヒート—〃とあたしの〃Eジ・エクスプロード—爆撃—〃、
どっちの方が優れてるかい加減決着をつけない?」

「帰ったらな！ つていうか、仕事だからなお前………」

いい加減疲れて来たバズビーに向けて、コーラを音を立ててズゴゴ
ゴと飲みながらバンビエツタは周囲を見回す。

「そんなこと言ったつて——さっきのイケメン二人くらいしか来
ないじゃない！」

本当にいるの？ こんな場所に、『滅却師の生き残り』が」

本日、現世での彼女たちに与えられた任務は。いまだ現世にて生き
残りをはかり、残っている「かもしれない」滅却師の血筋の搜索であ
る。

基本的に「半霊体」、「器子」と「霊子」が重なった中間状態にある
滅却師は、霊能力が高い人間にしかその姿を確認することが出来な
い。……意図的にその濃度を調整することである程度は変化できる
が、道に立っていたバンビエツタやバズビーはほぼ霊体状態だったの
だ。

その上で声をかけて来たあの二人は、潜在的な霊能力は高いのだろ
う。だが、血筋ではない——そもそも滅却師の純血であれば、バ
ズビーによる背後からの軽い殺気当てに対して血装が走るだろう。
その片鱗もないということは、本当に只の一般通過霊力高いサタデー
ナイトフィーバーだったのだ。是非そのままオールナイトして良い

チャンネルを捕まえて欲しいものである。

密かに、というか堂々と頭バンビエツタによる頭バンビエツタの被害者を救ったバズビーであったが、しかしそれはそうとブルーから手渡されたファーストフードを食べながら「味濃いな……」などと愚痴を言っている。現世任務など基本的に「目立つな」「滅却師と悟られるな」「死神や魔女に捕捉されるな」が基本であり、あまり派手に動けない。そうなるも必然、楽しみは食事やらくらいになってくるのだが、その点ブルーが選んできたチョイスは中々絶妙だった。

ビッグマ○クのポリウムにはバズビーもっこりである。

だが、そんな程度で満足しない女が一人。決まっている。バンビエツタだ。

「飽きたわ。……あつそうだ！　ねえねえブルー、あなたも飽きたわよね？」

じゃあ映画見に行きましょう！　映画！　最近の映画は凄いのよ？　箱の中じゃなくて壁に投影されるんだから！

ちようどジジの聖文字と同じ名前の映画も上映開始！　つて言つてたし、行くわよ！」

「あ？　オイちよつと待てお前、何目の前で堂々と仕事サボってんだ——」

「いやいやない別にツ！」

それに全員こんな場所にいたって、捕まるものも捕まらないわよ。どうせ人間なんて散り散りに好き勝手動いてるんだから。

あ、ブルーはゴミ、片づけてから来なさいよねー！　券だけはとつといてあげるから♡」

ご機嫌である。その勝気な笑顔とルンルンな振る舞いばかり見て居ればたいそう可愛らしい美少女であるが、言いながら自分が食べた後のゴミをまとめて足元に落として何度も叩きつぶしてからスキップしていく光景はあまりにもあんまりなものであった。

オイオイと同情が激しいバズビーであったが、律義に片づけ始めるブルーの姿に涙を禁じ得ない……。頭を撫でてやりながら、一緒にゴミの片づけを始めた。

「お前、蒼都……………、大変ならタイヘンって言えよ？俺だけじゃなく、ユーゴだつて気にかけてくれてっからな？ ……あ、違う、ハツシユな」

「……………？ あ、僕の名前か」

「オイオイ、ブルーって呼ばれすぎて自分の名前わからなくなりつつあるんじゃないかお前……………」

言いながら、少しだけ耳に小声で。

「……………あの現世の男たち、バンビエツタに寄つてつたところで何も乱暴すらどーせ出来ねえんだから、その『ちよつとはみ出た爪』は隠しとけ」

「(あつ、バレてた)」

悪びれる様子も無く、手の甲に這うように出現していた左右それぞれ三本の「小さい銀色の鉤爪」を、ブルーは「肉体の内へと」仕舞つた。

ため息をつくバズビーは、思わず聞く。

「まったく、何でお前そんなバンビにボロボロにされてんのに懐いてんだ…………？ リルトツトから、家族が居たらあんな感じの髪とかしてたのかなーみてえな話は聞いているけど、もう十年以上経つてるだろ？俺達の所に来てから」

「……………バンビちゃん、確かに頭バンビちゃんだし、クスだけど——」

「——性格は悪くないから」

「はア!? いや、お前、それ……………」

果たしてあの幼子だった少年がどんな精神的な変遷を経てこんな心境にたどり着いたのやら。胸を痛め、バズビーは今度こそユーゴと真面目に話し合えないかと決意を新たにした。

なおそんな蒼都にとっての「性格が悪い」判定を受ける相手が誰かと言えば、バンビーズでよく蒼都のお世話をしているジジこと

Z^ザ―死者^{ゾンビ}―”ジゼル・ジュエルであつたりする。

#007. 剃刀系女子に寄り添える距離感

「——はあ、帰った帰った。ハイ、ジジおみやげ〜」

「何なのバンビちゃんこれ……？ 映画のパンフレット？」

「そ！ 丁度『公開直後』だったから、あなたの能力と一緒にの名前のやつ」

「ええ………、ボクの『Zー^{ザ・}ゾンビ

』の方がもつともつと綺麗なんだけど——」

「あとネイルだったかしら？ はい。
ミニーは、この可愛い服！ フツーに可愛いを選んできたから期待していいわよ！

キャンディは一緒にいったし要らないと思ったけど、一応こつちでも見つけたからダブらなきそーなの買ってきたわ。ファッション誌と恋愛指南書とトレンドだったわよね？ これで大丈夫かしら。

リルは………、とりあえず御菓子いっぱい買って来たわ！

「ありがとうございます……、つてサイズこれ昔のじゃないですかああ!？ こんな今の私に来たら娼婦コルガールか情婦ブライベートガールですうう!？」

「オツケイ！ ダブリナシ。こーゆーのは外さないよなあバンビは」
「おうサンキュー。色がドギツイけど」

「さーとと、じゃあブルーをボツコボコにしていますか♪」
「二「何で?」」

現世からの帰還後、口頭報告後にバンビーズの面々へ顔を出して早々これである。バンビーズがたむろしてる共同スペースにおいて(訓練場から場所を移した)、現世のお土産をそれぞれ適当に投げわたし(ー)、その後にスキップルンルンにブルー著への襲撃予告を語る頭バンビエツタへ向けて、四人は思わず成大にツツコミを入れた。

なお当人はきよとんとしている模様。解せぬ……。

「何でって……、ここ一週間は全然、あたしの『Eー爆撃』ジ・エクスプロード」してな

「かつたから？」

「いや、それを日課に考えるの、ちよつと止めてやれよつて……。俺でさえちよつと同情するぞ」

「ジジも何か言つてあげてくださいいい！ 私も、ちよつとお疲れのところブルー著が可哀想つて思いますうっ！」

「プリプリ怒つててミニーもだいたい可愛くなつてきたねえ。まあボクは、ほら、バンビちゃん全肯定マシーンだし」

「どうでもいいけど、情報文書データまとめてるの誰だつて話なんじゃね？バンビお前さ、たぶんブルーに放り投げてきたろ」

キャンデイスの一言に「あつたり前じゃない！」と胸を張つてドヤツ！ と得意げなバンビエツタ。なお誇つてる内容を言い表すと「現世での調査任務の結果報告を年端もいかない普段から爆撃（誇張無）しまくっている子供に書かせ」「あまつさえ書き終わっていないだろう今の段階でさらに爆撃するためだけに連れて行くこうとしている」になる。バンビエツタの頭バンビエツタすぎる冒流的（教育的な意味で）所業を前に、4人はS正気と良心を咎めたAN値チエツク。バンビエツタと比較すれば、4人には確かにそれなりの良識があるのだ。あるだけで活用される機会は限られてはいるが。

そして肝心のバンビエツタは「そんなのその気になればテキストにすぐ書けるじゃない？ 見聞きしたのを適切にまとめるだけでしょ？」と心底不思議そうである。書類仕事を軽く見ているかのような発言であるが、全くそうではない。嫌味でも何でもなく、例えばブルー著の身体的な耐久度の上昇率やら何やらについては、彼女が意外と筆まめにまとも考察すら添えて、その資料をキルゲに提出しているのだ。流石のキルゲですら出された書類の細かさと考えの具合の深さに「本当にバンビエツタ・バスター・バインが書いたのでしょうか？」と疑うレベルだった。なお走り書きに「次からはもつと内臓をメインに爆撃すること！ タノシー！」といったようなものがあつたりするため、その疑いに意味はないが。

そうつまり、実際このバンビエツタは「仕事として与えられた作業」に関して、意外な程かなり真面目に取り組み完成させる気質であ

る。ある種のプロ意識なのか、集中力が飛びぬけているということか。また仕事時のみにおいてだが、異様なほど面倒見が良く、怒らず共感し、何も知らない一般滅却師のハートを射抜いていたりすることも多いのだが、それはまた別な話。

「ちゃんと書き方は教えたし、上手くまとまっていなかったら後でチエツクするし、駄目な書き方してたら次からどうやったらうまく書けるか一緒に考えて上げるわけだから、多少『爆発四散させても』問題ないんじゃない？ あたし」

「何でそういう所はきつちり面倒見が良いのかってお前は……」

「バンビちゃんだからねえ……、つてミニーニヤ？ ……あつ駄目だバンビちゃんが凄い所見て、意外すぎて硬直しちゃってる。でもほら、ミニーニヤも仕事教えてもらってる時、バンビちゃん全然怒らなかつたじゃん？ そーゆーこと、そーゆーこと」

「そーゆーのを普段からやってたら、バンビだつてすぐイケメンも寄ってくるだろうにさあ」

「いやだつて、仕事は……、ちゃんとやらないと。あと別に、普段だつてヘンなことしてないじゃない、あたし」

（（それは本気で言ってるのかこの頭バンビエツタ・バスターバイン））

果たしてそんな四人がバンビエツタの頭バンビエツタな言動を止めることが出来たか否かと言えば……。数時間後、訓練場が火の海に晒されている状況が全てを物語っていた。炸裂する音と共に、飛び散る人体。霊圧の漂い方や周囲の温度上昇の仕方の違いから、
H―灼熱―”ではなく、ジ・エクスプロード E―爆撃―”が発動していることは間違いない、近くを通りかかったベレニケは両手で顔を覆い「強く生きろ……！」と蒼 悲しい目をした標的 都へとエールを送って遁走した。

「ブルー、凄いいじゃないの！ あなた、段々あたしの ヤルダハトケフ 神の癩癩”でも内臓が飛び出ないようになって来て！ これならミニーの ザ・パワー P―力―”お腹に喰らっても分解しないで済みそうね！」

「（※爆発音で掻き消されてる）」

「えっ何？ 何言ってるか聞こえないんだけどー！ ちゃんと大声で

言いなさいよ、ブルー！」

無茶を言いおる。

自らの滅却師完聖体を使用し、空中から羽根より落ちる霊子の塊を用いて雑な爆撃を繰り返すバンビエツタ。最近は訓練場の補修側もいい加減慣れて来てしまったのか、初めからバンビエツタの爆撃に「ある程度耐えられる強度」で作成するようになっていた。彼女の頑張りが無駄に滅却師の王国へと影響（迷惑）を与えているのだが、当の本人は「えっ当然でしょ？」という振る舞いである。

なお蒼都に言わせれば「限度がある」「最低限、話を通して許可をとってからお願いするべきじゃ」となるのだが、実際は裏側で陛下から許可が下りていたりする。当然彼は知らないので、色々とまあ強く生きる他ないのだった。

そして、爆撃が一通り終了した後。つまりバンビエツタが「飽きて」完聖体を解いた後であるが。爆撃後の霊子の煙の中から現れたシルエツトに、「は？」と眉間に皺を寄せた。露骨に嫌そうな顔である。

『——バンビエツタ・バスターバインのこの爆撃力、通常の耐久試験としては過酷なものだな。蒼都はよく耐えている』

そこに居たのは、全身白装束に「鉄甲冑」^{プレートメイル}のようなものを装着した何者か。その相手を見て「何で乱入すんよ、ロボ野郎」と舌打ちするバンビエツタ。

こしゅー、こしゅー、と当時からすれば一昨年ほどかに公開された^{スペースオペラ}宇宙戦記映画の敵将軍的な独特な呼吸音を散らすその存在に、蒼都少年は目をきらきらさせた。

「べー、げー！」

『B G 9だ。正式名称での呼称を期待する』

彼こそは蒼都やらバンビやらバズビーやらが現世で見つけて来た「新たな仲間」、つい先ほどユーハバツハより仮聖文字を与えられた滅却師……、滅却師？ ^{ベージェノイン} B G 9であった。

なお初対面の時点でそのまんまダ○スベイダ○のコスプレめいた格好をしていたところを発見されており、こちらに来る際に『同系統の装備がないだろうか、確認させてもらう』と衣装を変えていた。な

ので「景観に合う」騎士風の恰好になっているのは完全に彼の趣味がセンスで、その素顔すら定かではない。その前後の受け答えに人間味がなさすぎたせいで、バンビエッタからはロボ野郎呼ばわりされているが、それはさておき。

爆撃を中断したバンビエッタはそのまま足早に駆けて来て蒼都を抱き上げヘッドロックするように抱きしめ（というより本当にヘッドロックである）、その体勢のままBG9へと詰め寄る。

「あなた、ロボ野郎ねえ。何あたしがブルーと訓練してるのに割って入って来てるのよ！ 大体あなた一般兵じゃない、何騎士団専用訓練エリアまで入って来てるわけ？

巻き込まれたら死ぬのはあなたかもしれないけど、肅清されるかもしれないのは、あたしとブルーなのよ！」

（心配するところが心配するところだし、さり気なく僕まで巻き込んで……。バンビちゃんはいつも通りバンビちゃんだなあー。

おっぱいは大きくなってきて、頭の裏の感触は悪くないけど）

もはや蒼都の心は凧である。例によって首を“Σ―鋼鉄―”で頑丈な金属に変換して気道を確保しているブルーだが、しかしBG9を見る目は不思議そうなものだった。

『ブルー？ 個体の名称は蒼都つあんどう、ないしは蒼つあんであるべきと考えられるが』

「だって、恰好悪いじゃない！」

『それは一体何を基準としたものなのだろうか、バンビエッタ・バスターバイン。基準となる概念を提示してもらえなければ、こちらも判断を下すことが出来ない』

「そんなの、えっと………、英文字スペルで綴ると余計なアルファベット入るのが嫌だし、あたしとしてはキレイに見えないから」

『それはあくまでバンビエッタ・バスターバインの考え方だろう推測する。感想の強要は良い事ではないと――』

「あーもう煩いわよ、そんな話ミニーが小さかった頃に凄く怒られたから、だからニックネームなんじゃない」

（今でも時々改名を勧めて来てるんだよなあ……。ブルー・ビジネスシ

テイへ)

「何か文句でもある？ ブルー」

「！ な、何も言っていないよ、バンビお姉ちゃん」

『そういう強要は一般には虐待と米国社会で学習した』

「な、なんですってッ!?!」

(それはそうとBG9……、こっちの方だとシャウロンっぽくないし、別人扱いなのかな？ いや、まだ何か今後の動きを見ないとわからないけど。文字も僕みたいに仮らしいし)

ブルーがそんな風に一人、内心で原作BLEACHとの違いについて考えていると。

「つれえなー、当然のことを指摘されちまってつれえつれえつれえ、つれえぜバンビエッター！」

「は?。」

「うぐッ」

揶揄う様なテンションで、実は意外と真面目な話をしようとしてきたドリスコール・ベルチの顔面を八つ当たり気味に爆破一発。クリーンヒットして気絶させた彼を特に退けることも無く、存在すら無視し始めたらしい。あれから十年以上経っているのだが、いまだに根に持っているのだろうか。

そしてその怒りの矛先はBG9にも向き——しかし、その足元に形成した霊子の球体を雑に蹴り飛ばした一撃は、BG9の「片手剣」によって切り裂かれた。

『バンビエッター・バスターバイン。星十字騎士団内の情報群通りであると納得した』

「は?。何それ。あなたの霊子兵装?。」

『肯定する。我が仮の聖文字 “I—^イ—^ホ騎士” による、不屈の騎士の象徴だ』

気が付けば右手に片手剣、左手には円形の盾。シエラルド・ヴァルキリーが剣闘士であるとするならば、こちらは外見通り完全な騎士スタイルの完成だ。むしろオーソドックスすぎて味がないくらいである。のちの武装群(キャノンやら触手やら)からすれば乖離が甚だし

い事極まりないが、文字が「まだ」違うなら仕方ないかと蒼都は一人勝手に納得していた。

『これにより、私の肉体は例え損壊しても「代用品」で代替えできる。騎士の意志は残り続ける、という解釈が成り立つようである』

「へえ？　じゃあ、あなた———こんなにあたしを怒らせたんだから、バラバラにされても文句ないわよねえ？」

「……………　ベーゲー、逃げて！　僕が受け持つ！」

『肯定不能。この組織の良識を疑う』

（まあ元々アレな集団だしこの滅却師の軍団つて。そういう貴方も最後は命惜しすぎて色々アレになっちゃうんだけどね……………、悲しいなあ……………）

バンビの腕から頑張つて逃れてBG9の前に立ち、両手を広げて庇う姿勢のブルー。まだまだ小学校低学年程度の年齢なので一見すれば愛らしいのだが、対するバンビエツタの顔が恐ろしい事この上ない。BG9もまだ騎士団の色々と腐ってる（？）空気に慣れていないせいか、まだ良識がある発言である。

そしてそんな状況でバンビエツタの剣が「炎を纏い」振り下ろされそうになった瞬間、それ目掛けて「ギザギザした口のような形状」の鍔な神聖滅矢（ハイリッヒ・ブファイル）が放たれた。がぶり、と刀身に噛みついたそれは、一瞬にして「炎を喰らいつくした」。

カン、と蒼の銀色の額に、バンビエツタの曲刀が激突する。

ちらりと横を見るバンビエツタ。そこにはいつの間にかやって来ていた、リルトットが自らの弓を構えて苦笑いを浮かべていた。

「何よ、なんで邪魔したのよりル」

「いや流石にお前、自分で勧誘してきた奴を自分の手でざんばらりんは拙いだろつて。それこそ俺でなくても止めるよ。粛清されないにしても、ペナルティ喰らうだろうつて」

「……………ッ！」

その一言に瞠目し一瞬身震いをしたバンビエツタは、そのまま剣を仕舞い、ブルー着の手を引く。動揺するブルーの素振りなど確認せず、急ぎ足のように訓練場から立ち去る彼女に、やれやれとリルトットは

ため息をついた。

「お前も悪かったな、新入り。アレでバンビはともかく、ブルーは悪い奴じゃないから、まあ程々に見てやってくれ」

『程々というのは不明だが、なるほど……。ここは低い人間性の集団の巣窟ということは理解した』

「は？ 食い散らかすぞ？」

すつと「変形した」口元を見せたリルトツトに、BG9は思わず後ずさった。

※ ※ ※

「失礼いたします陛下……。お眠りですか？ ハアイ」

「……………嗚呼、キルゲか。良い、その場で。今、夢を視ていたところだ。だが、呼び出したのはこちらだ、そう怖がる必要はない」

「恐縮です。……………それはそうと、少々ご相談したいことが」

「嗚呼、わかつている。ブルーについてだな」

「はて…………？」

「……………む？ そうか『まだ』か。ならば蒼都のこと、バンビエツタとのことか」

「お察しの通りです。グランドマスター騎士団長並びにバザード・ブラックより嘆願が行っているかと思いますが、今一度私めもそれに賛同いたします」

「そう焦るな、と言っても納得はしないか」

「陛下のお考えのこと、余程深い事情があつての『あの』待遇なのだと、このキルゲも考えてはおりますが、その部分につきましていますまいち……………。ロバート・アキュトロンとの教育方針についての打ち合わせなども、どこまでこちらでフォローするのが正しくあるかというのも含めまして、ハイ……………」

「気を遣わせてしまっているな。だが……………、あれはそう『歪ましい』からな。複雑に考えなくても良い。ただ在るが俣を見て、在るが俣に考えていれば」

「在るが俣、ですか」

「……………あの蒼都の故郷。滅却師としての能力など関わらず、現世、かの国での革命で多くの命が堕ちた。蒼都もまた、本来ならその一人であった。」

私の元に運ばれたあの魂は、既に器子との有りようが乖離していた。すぐにでも我が帝国に受け入れるか、それとも『回収し』眠りにつかせるか。あの年代で、あの傷、あの大やけど、あの『拷問具合』……………私も山本元柳斎重國あらゆる悪性を詰め込んだ鬼ではない。一思いに、眠りにつけてやるのが正しいと、そう考えた」

「……………」

「だが、違った。事はそう簡単に進まなかった———あの子供は今際の時、我が聖アウスヴェーレン 別を前に、自らの身体より『奪われた』滅却師の力を、それにより発生する『静止の銀』による死を、『自らを静止の銀』とすることで回避した」

「……………はて？？」

「フフフフ、お前もそういう顔をするか。私とて、さほど違いはあるまい。」

そう、あの子供は……………、おそらく完現術霊王に由来した方なのだろうが、自らの手で自らの命をつなぎ留めた。流れ込んでくる辛く、痛い『だけ』の記憶をもものともせず。

私は問うた。到底耐えられるものではない。記憶だけでもそのおぞましさを理解した、その上で滅却師としての『霊的な生存力』すら奪われてなお、みずからのその生に執着するのは何故かと」

「それは、一体……………」

「死にたくない、だ」

「……………ハアイ？」

「死にたくない、と。それだけを、食いしぼるようにして言ったのだ、あの子は———本来なら『逃げおおせ』、後に成長した姿で我が帝国に入る可能性もあったあの子供は、しかし巻き込まれて死にかけながらも、それでもなお自らの死への恐怖から逃れんと、無駄に足掻いたのだ！」

これを笑わずにいられようか、キルゲ。これを笑わずにいられよう

か、キルゲ！ 嗚呼そうとも。『恐怖無き世界』において、最も必要なものはこれだ。この感情だ。これが無ければ誰しも自らが何であるかを忘れてしまうだろう。

故に私は祝福することにした——その魂の根幹に見えた、わずかな『視えなかつた』不滅への道を信じて」

「それは、いささか……、陛下らしくないと言いますか。いえ、私ごときが陛下の御心を計れるとは思えませぬが」

「私もその自覚はあるがな。だが命を捨てさせるにせよ、その意志だけは忘れてはいかぬと思ひ直したのだ。我らは、仲間なのだから——」

なおそうは言っても必要があれば躊躇いなく当然のように聖別を実行するのが、このユーハバツハである。

※ ※ ※

どちらがブルー^著を洗うかという話で勝負をしかけたミニーと、珍しくキヤットファイトで済むレベルの戦闘をしたバンビエツタ。結論から言えば年の功なのかバンビエツタの勝利であったが、そんな彼女は洗い終わったブルーを抱きつづすようにベッドで俯せに。

なお仰向けで若干息苦しそうにしているブルーであったが、バンビエツタの身体的な柔らかさを全力で味わうため鋼鉄化してないあたりは、中々良い根性している。

もつともそんなブルーだったが、突然ぶつぶつ言い始めたバンビエツタには目を見開いて驚いた顔をする。普段ではついぞ見ないような、恐怖で塗りつぶされたような。それこそちょうど現世でパニック映画を見て来たせいもあってか、その劇中に登場する「食い殺される」人物のような動揺っぷりである。無理に強く抱きしめられるブルーは、彼女の反応を伺った。

「大丈夫よね、あのロボ野郎、全然死んでないし……、ブルーだって死んでないし、キルゲのオッサンから任せられた仕事はちゃんとこなしてるし、ブルーのお仕事だってちゃんと観てるし、アドバイスだって

してるし……、殺されないわよね、うん。殺されない、殺されない、大丈夫、粛清されない——」

「バンビ、お姉ちゃん……?」

「——ッ！」

瞬間的にとつさに蒼の顔を爆撃するバンビエツタ。もつとも彼も彼で慣れているのか、既にその顔面はメタリック極まりない状態でダメージを回避していた。そんなブルーに力なく笑って、バンビエツタは横になる。

「……………そうよね、あなたは『死なない』のよね、簡単には。」

こんなクソみたいに弱い姿とか、誰にも見せられないし、見た奴がいたらフツ―はぶっ殺してるけど……………、あなたは、逃げないし、言わないし」

「?」

「……………本当は判ってるのよ、あたしだって。皆、あたしの陰口言ってるのだって。ミニーもあなたをあたしから引き離そうと最近は露骨だし、リルとキャンディだって『あたしの方から』無理に、寂しくて乱入してグループになった感じだったし。」

ジジはなんか、よくわからないけど」

(その警戒心の無さは色々危ないというか、流石後のゾンビエツタちゃん……………)

割と失礼なことを考えている蒼だが、外見上は混乱している表情のままなのでその内心は伝わらない。珍しく気の抜けた顔で苦笑いし、バンビエツタは目を閉じて。

「……………でも、怖いもん。あたし、だからこんなクソみたいな生き方しかできない。そんなの、しょーがないじゃないのよっ」

そんなバンビエツタの手を、蒼は自分の小さな手で握り返した。

その感触に驚いたように、バンビエツタは目を大きく開く。

対面の蒼は、相変わらず前髪で隠れ気味の、まだくりくりとしている目で見つめ返していた。

「大丈夫」

「……………何が?」

「なんか、良く判らないけれど、大丈夫」

「……………」

一瞬、また爆撃モーションに入りかけたバンビエツタだった、続く蒼の言葉に、その気はなくなった。

「バンビちゃんがどんなでも、僕は、傍にいてあげるから」

「……………」

その一言に、最初はその頬が嬉し気に歪み。しかしヒクヒクとした後、大声で笑いだした。アツハツハと笑いながら、彼女は手を放し、横向きになった蒼の肩をもつて、自分の額をくつつけて。

「本気で言ってるのよね？ 本当よね？ じゃなかったら全部ぶっ飛ばすわよ？ あなたにあたし以外なんて誰も目に入らないようにしてやるんだから、リルなんかに『こんな』サンドバッグなんて渡してやらないんだから。絶対、絶対、私の傍を離れちゃ駄目だから、離れるんなら最後には帰ってこないといけないんだから、サンドバッグに断る権利なんてないのよ？ 当たり前じゃない、いい？ ブルー。そもそもそれが出来ないならそんな無責任なこと言わないわよね？ 粛清されそうになったら庇って一緒にいてくれるでしょ？ 性的なそれじゃないってのはわかかってるし、そうだったらぶっ壊すし、でもそう考えると本当に死なないんだったらあたしのそういう突発的な……………」

（ゾンビエツタじゃなくても怖いよこのバンビちゃん……………」

その後、朝まで延々と病んだ発言を繰り返し続けるバンビエツタに、蒼都はその手で頑張つて抱きしめ返すしか返答の方法はなかった。

なおそれでも役得だとか思っているの、蒼都の人格は案外たくましいのかもしれない。ただ、殺され続けて限界値がぶっ壊れた可能性も高いのが玉に瑕である。

#008. 番外編：THE FLAT

多くの声が飛び交う瀟霊廷において、ある者は恐怖の悲鳴を死神にあげさせ、ある者は音もなく黙々と片づけ、ある者は堂々と張り上げた声と拳とで死神たちに接敵している中――。

「――ふっ、やあああアツ！ はっ！ よ！ やあっ！」

ひときわ元気な声を上げる少女の滅却師が一人。尸魂界への滅却師の王国による進行の、これはほんの一つ。主に男性の死神で構成されているその隊……彼女にとっては何一つ興味が無いのだが、その死神の部隊を次々と通りすがりに切り裂いていった。基本的な斬術やら格闘術やらが追い付いている訳ではない。純然たる才能と、霊圧の差であった。

ぐああ！ といったような声が次々と彼女の周囲に飛び交い、特に気にした様子もなくただゲームでもするように楽し気に死神を切り裂く少女。ある者は首、腕、脚、胴体。確実に一撃で再起不能どころか生存不能になるよう、徹底したその殺しぶりは何かしらのプロ意識が働いたものか。

「いち、に、さん、よん、ごー、遅い遅い！ 遅いわアンタたち、それでよく護廷十三隊なんて大層な名前とか、名乗ってらいられるね！^{データ}情報通りだけど、全然足りないわよ！」

「この小娘、舐めとるんじゃないでえ！」

「射場さん!？」

独特な釘打ちでもするように部分が飛び出た斬魄刀が彼女の背後から振り下ろされるが。

「？ 何で自分の位置知らせる訳？」

当たり前のようにその一言と共に、軽く振られた腕の軌跡が「爆裂

して、「それが彼の鳩尾に直撃した。炎と、ゼロ距離での猛烈な衝撃——。射場鉄左衛門は少女の軽々とした動きに翻弄され、そのまま後方へと弾き飛ばされた。

だが、それでも「死んでいない」。それは、少女の動きに委縮しはじめていた周囲の隊の人間よりも、彼女の好奇心を刺激したらしい。

「へえ？ 少しはやるみたいじゃない、オジサン。けれど残念だったね——そんな程度でこのあたし、バンビエッタ・バスターバインちゃんを倒そうなんて百年早いよッ！」

星十字騎士団

“E—ジ・エクस्पロード爆撃—”

バンビエッタ・バスターバイン

自分の胸に手を当てて、堂々と宣言する少女である。もつとも彼女に「育てられた」青年がこの場にいれば「バンビちゃん、靈基準だと百年なんてあつという間なんじゃ……」などとツツコミが入る事必須であつたが。

まあこの場においては、彼女は敵である。気に障つたらそれこそ何を仕出かすかわからず、またそれを指摘する程野暮な相手もいなかった。

そして当然のようにまた惨殺ないし処^レ理作業に嬉々として戻ろうとする彼女だったが、その腕が掴まれた。力強く、しかしどこか妙な握られ方をしたと認識したバンビエッタは、ふと視線を上にあげる。

自らの頭上より見下ろす、恵体巨軀の犬顔がそこにあつた。

「こんな少女までもが、賊軍の戦士なのか……っ」

「本当にワンちゃんじゃない、こんなワンちゃんも駆り出さないといけないなんて、随分人手不足なんだね！ 尸魂界ってッ。

ねえ『狛村左陣』隊長さん？」

「ッ！」

知られている。たかが自らの名前、と軽く考えることはできない。この少女の発言には、突如襲われた尸魂界の側として、看過できない情報が多く含まれていた。

だがその思考を整理する暇もなく、少女は愉し気に剣を連撃してく

る。

「は、ふ——やッ！」

「小癩ッ！」

少女の斬撃の軌跡がそのまま霊的な刃——滅却師であるからには矢なのだろうが、それに複数分解され、狛村を襲う。数本刺さったそれを無視する狛村。致命傷のみを斬り払い、大振りにした自らの斬魄刀を振り下ろした。

その一撃を、少女はひらりと躲すと。ごくごく当たり前のよう自らの目の前に形成していた球状の矢を彼へ目掛け軽々と蹴り飛ばす。

「——あはっ」

切断された球はまるで「最初からそうであつたように」、内部から霊子の煙、ないし霧を放出。砕けた霊子自体が変化したそれを、狛村はおろか背後の死神たちも浴びざるを得なかった。

途端、狛村の眼前が爆発——。

「隊長——！」

「——狼狽えるなッ！ かア！」

煙を振り払うように飛び出た狛村であるが。

「やあッ！」

当たり前のように空中で回転し、振り下ろされた少女の刃と正面から撃ち合う。

まだしも、その刃の峰側から「炎が噴出し」、拮抗していた状況を彼女の側へと好転させた。

「轟け、『天譴』——！」

「あらっ？」

だが狛村とて只でやられるわけではない。自らの斬魄刀を解放し、その準物理的な一撃を「巨大な明王の一撃」とする——。結果、少女のブーストされた刃すら押し返し、彼女の腕を切り落とした。

——落した、はずであつた。

「何………、だど!？」

「ふうん、流石に隊長となると伊達や酔狂じゃないのねー。『ブルー——』言つてた通りというか、ちゃんと情報読んどいて正解だつたよ」

斬られた服の袖には切り傷があるが、それだけである。体表面に青白い線のようなものが浮かび上がり、それが少女の体表面の霊圧密度を変化させ、狛村の一撃が通るのを強く防いでいた。

仮にも隊長格、卍解せずとも相応に鍛え上げられた霊圧を、しかし少女は当然のように受けた「だけ」であった。

「……………あら？ ミニーあの子、全然仕事してないな。駄目じゃない、粛清されたら私でも庇いきれないのに。私、別に重要な役職ついてるわけじゃないし、ちゃんとここが終わったら言いに行かないと」

ぶつくさとあらぬ方向を見て、文句を言っているバンビエツタ。明らかに彼女にとつて、自分たちは眼中にない——下手をすれば「敵として」すら考えてすらいない。少女が癩癩で八つ当たりするよいうな、そんな軽い気持ちで仲間を屠られているかもしれないという事実は、狛村をはじめ七番隊の面々に強い怒りを抱かせた。

「已むを得ん……………、卍解を使うぞ」

「な！ 隊長それは——」

「わかっておる！ だがこの少女は、その身目麗しい微笑みで持つて我らが同胞を！ 仲間を！ 共に護廷の人を負った頼るべき戦士を嘲笑し亡き者にした賊！ 断じてこのまま返す訳には行かぬ」

「そして、卍解を使わず勝てる相手ではない——ならばこの狛村左陣、賊軍への急先鋒、一番槍を務めてくれようぞ！」

戦意、良し。同時にこの判断は、他の隊長もするとは思っていない狛村ではあった。自らの様な直接攻撃系故に、使用するにもデメリットが大きい卍解だからこそという意図もあり、そして彼は霊圧を高め開放する——。

「卍解・『黒繩天譴明王』——」

「————ふふッ♪」

エンブレム状のそれを手元で展開すると、まるでそうなるのが当た

り前のように、狛村の斬魄刀が「何かが抜け落ちた」。

背後の巨体から何かが抜けていく。ばらばらと砕かれた霊子の塊は、その内側にある霊体「そのものに」干渉し、黒くすすけた色へと無理やり染め直されて、吸い上げられた。

「天譴……！ どうした天譴！ 貴公の声が、聞こえぬ……！」

「ホント、馬っ鹿みたい。目の前で何があつたかなんて、察するくらい出来るでしょう？」

困惑する狛村を、バンビエツタはそれこそ愉し気に笑う。

「卍解を、奪われた——！」

「これでワンちゃん隊長さんの卍解は、あたしのもの。

まー、あんまり馬鹿にすると『ブルーが』煩いし、文句は言わない
で置いてあげる」

直後、鬼道伝いで走る伝令により知らされる、敵のその力の正体。卍解を奪い取るというものは、あまりにも他の隊士の士気に影響した。

「をのれ賊軍めが……！ 尸魂界へ侵攻しただけでは飽き足らず、我らと斬魄刀との絆すら奪おうと言うのか！」

『『屈服』させておいてそれはないんじゃない、かな？ 詳しくは全然知らないけど。

それじゃっ！ 続きといこうかワンちゃん隊長さん！」

斬りかかる少女はやはりどこまでも楽し気で。それ故に、狛村も覚悟を決める。

大声をあげて隊士を散らした後、自らの斬魄刀に込める霊圧を上げ
「明王鎧」その腕を召喚。

斬魄刀との繋がりが完全に切れているわけではない。わけではな
いが——。

自らと同調したその刀の深奥より、その刀の「本来の在り方」を引きずり出すのが卍解である以上。それと同時に引き上げられる使用者の霊圧が不足している事実には、変わりはない。

「この少女……、元柳齋殿のような力だと？　しかも妙に「器用な」真似をする……」

狛村の推察通りならば。少女は刀を振るう際、小刻みに刃を爆裂させ、その周囲に「気流の渦」を薄く、しかし高速で造り出している。それが徐々に徐々に、物理的に狛村の斬魄刀を削り始めていた。

あたかも刀に纏わせた炎で、時に斬魄刀すらへし折る山本元柳齋重國を思わせる、それを、不意に幻視する狛村。

「く、かああああッ！」

「あら？　よっと」

だが、その程度で引けを取る相手ではない。当然だが山本元柳齋に比べ、少女のそれは何もかもが拙い。尸魂界史上「最強」と呼ばれる死神であるかの恩人のそれに遥か遠い。だからこそ隙もあり——しかし少女は、それすらまるで「普段から」戦い慣れているように、自らの体表面を再び「硬化した」。

物理的に殴る形になり遠方に弾き飛ばされた彼女は、しかしその場で不意に遠い目をする。

「あら？」

……そう、頭が変なニケの奴、死んだんだ。ゴリラはともかくアイツまでねえ。最近はリルとも戦えるようになってきたっていうのに。

ブルーは……、相変わらずね。うん、大丈夫、大丈夫」

でもニケどんなバケモノ相手にしたんだか、と。少しだけ言いながら、少女の声は震えていた。

「……まあ良いわ。なら、せつかくだし『肩慣らし』をしてもいいし？」

「……？　何をする気だ、少女よ」

ふふん、と得意げなバンビエツタは、そのまま先ほど狛村の卍解を吸った円盤——メダリオン星章片を構えると。そこから迸る黒い影の霊圧に、まさかと狛村たちが息を呑む。

「——じゃじゃーん、ってね？」

「明王……！」

眼前に現れたその巨体を前に、自らの相棒たるその斬魄刀の姿であるはずのそれが、敵の側に回っている状況に。

飄々と振り下ろされる拳、薙ぎ払われる隊士、潰される隊士。喜ぶべきはそれが彼女の能力だろう火炎、もしくは爆撃に関係しない、純物理的な攻撃にとどまっていることか。

試しにとばかりに、現れた巨大な明王の指先から爆炎を放とうとして――。

「熱ッ!? やっぱ駄目? えー、そうなんだ『そういう能力』なの。それこそアタシよりゴリラとか殺しまくり(笑)にでも渡した方が良かったじゃない。

まあワンちゃん隊長さんには合ってると思うけれど――

明王の指先を巻き込んだ爆裂により、その余波「ではない」、シンクロした故にその身に負ったダメージで指先を撫でてるバンビエッタだったが。

突如として吹き上がった炎の柱に、言葉を失う。

狛村達だけではない。明らかに、瀨靈廷に先ほどの頬のが迸った結果、その全体の空気が変わった。否――。

「うおおおおおおあああああッ!」

「ひッ!? って、な、何よワンちゃん隊長さん……?」

炎を始めとして周囲を圧迫するような、ある一か所から放たれ続ける熱気を帯びたような霊圧に、それに呼応するかのように叫んだ狛村に、バンビエッタは一步引いた。

構うまい、狛村は叫ぶ。自らの仲間、自らの隊士を鼓舞する。

「立てー! 皆、立つのだ! 元柳斎殿が立っておられるうちに、早々に横たわること! 護廷隊として在りうべからざる恥と心得よ!」

『――ッ!』

「我らは護廷十三隊！ この瀨靈廷を鎮守し、賊を打ち払うのだ！」
『押、押、押押押押押オ——ッ！』

湧き上がる声、闘志。ここよりは、狛村の意志に準じる死兵——
」。

いわゆるゾンビの様なそれとも違う、刺し違えてでも「お前を殺す」という、護廷隊設立の理念のそれが、正しく山本重國の霊圧に触発される形で、この場に満ちた。

それに困惑するのはバンビエッタである——基本的に彼女の行動原理は、大半が「死への恐怖」に裏打ちされたものであるのだから。故に、眼前の彼等の有りようには、困惑とわずかな恐れが垣間見えた。

「……何、何？ ちょっと、さっきまで全滅寸前で目が死んでるときのブルーみたいだったのに、どうしったってのよちょっと——」

「——士気が回復したってことでしょ、バンビちゃん」

「何奴ッ！」

頭上よりした声に狛村が吠える。そこには白いローブを被った滅却師が一人。途端、明王の右腕が「凍り付いた」。まるで紫ではあるが、氷の竜がその箇所だけを覆い纏う鎧となったように——。

馬鹿など。その龍には見覚えがある狛村であるが。だとするのなら現在の自分たちの状況に加え、そんなものを持っている滅却師が来ているとするならば。

一方の少女は、バンビエッタは彼の出現に表情を明るくした。「ぱああ」とでも擬音で表現できそうな喜色満面である。

「あっ！ ブルー♡ ブルー♡ ブルーじゃないのッ♡」

まるで恋人に向けるような満面の笑みであったが、そんな彼女の様子を見て青年の口元は引きつる。そしてまるで恋人を抱きしめに行くような軽い足取りで接近した彼女は。

「——えいっ♡」

「やると思ったッ!？」

柏手を打つような軽い動きをして、その結果放たれる明王の腕による猛烈な万力をもって、青年を左右から叩きつぶした。

金属に罅が入るような音と言えば良いか、いわく「名状しがたい」音が響く。

さしもの粕村を始めとした七番隊も、状況が状況過ぎて思わず言葉を失った。面食らったのも無理はない、少女の可憐な笑顔から想像もできないような謎の行動であるし、青年の発言からして仲間割れではなく日常茶飯事のやりとりのようにすら聞こえる。

「……………いや、ここ戰場だから、そういうのは後でね…………？」

「うーん、やっぱりブルーはこうじゃないとねえ。むってき♪ むってき♪ えいつ♡」

「行きがけの駄賃感覚でもう一回播り潰すの止めないッ!？」

そして言いながら、明王の腕を「こじ開けつつ」、青年は彼女に引きつった笑みを浮かべていた。ローブが今の一撃でボロボロ、服も擦り切れている。明らかに「一度すりつぶした」モーションをした明王に揉まれたせいだろう、先ほどまで小綺麗だった恰好はもはや原形もない。

だが、そんな服も一瞬「鈍い銀色へと」変化すると、何事も無かったかのように元に戻っていく。よく見ればベルトのバックルがスパード型で、バンビエッタのハート型と対になっているが、それはともかく。

「全く何を考えてるんだバンビちゃんは、せつかく火傷してたっぽいから冷やしてあげたのに」

「あっ！ それは正直本当ありがとうね。いい子いい子♡」

あとわざわざ私に『ティウンティウン』されに来たのも、いい子いい子♪ あれあれ、メガマ○みたいに」

「それには断じて否と答えるよッ!？」

って、ああ……………、この霊圧は陛下と、山本総隊長かな？ ってことは、早めに卍解引つ込めるよバンビちゃん」

「えー？ なーんーでー？」

「幼児化しないで、僕よりお姉ちゃんでしょうがバンビちゃんってば……………」

言いながら姿を消す氷輪丸、否、大紅蓮氷輪丸。バンビエツタもよくわからないまでも、言われるままに狛村の卍解の姿を消す。

なお、このやり取りの間。狛村たちは彼女たちに斬りかかることが出来なかった。

明らかに何かが異常であった。バンビエツタ・バスターバインが頭バンビエツタなシーンを見せてつけられてSAN値^{我を失って}チエツク^{いた}というわけではない。青年が登場した瞬間、どうしても彼の不意を打つようなことをすることが出来ないでいた。

それは、彼等は知らないことだが直前に青年の戦った少年隊長も同じ——否応にでも、その選択をとることが「何故か」悪手であると、身体に、本能に刷り込まれるその在り方。

(つまるところ、これもまた奴らの能力か…………ツ)

状況を分析する狛村だったが、瞬間、尸魂界の「音が消えた」。否、空気からその振動する分の「何か」が、猛烈な速度で干上がり始めた。

「……………何？ これ。お肌、カサカサになってきたんだけど」

「能力系統からして、山本総隊長の卍解ってどこだと思う。…………鼻水すら乾くんだ、唇よりそっち切れそう。いやマジでヤバイな…………(リアル残火の太刀ヤベエ)」

「何か言った？」

「いや、何でも。後はRの[、]仕事[、]だろうから、僕らが関与する話じゃないよ」

「それもそうね。」

——じゃあ、お待たせして悪かったね！ ワンちゃん隊長さんたち」

再びバンビエツタと、現れた青年が彼等に向き直ったことで、ようやく感じていた緊張感が解ける。剣を構える彼女と、右手に狼のよう

な手甲鉤を出現させる青年とに、今度こそ7番隊の生き残りは走る――。

その一撃を、バンビエッタを庇うように粕村左陣より受けて。その真つすぐな剣筋と、視線に乗った困惑、疑問の感情に、青年は寂し気に微笑み。

「……………本心はともかく、これは戦争ですから。僕は、そっちがメインではありませんが」

「……………ッ！」

青年の、ブルー・ビジネスシテイ蒼都のその一言に、粕村は表情を痛々しく歪めた。

#009. 約二十年前

「お前には——お前が本来受けるはずだった『I』の聖文字シュリフトを与えよう」

かくしてその日、一人の青年が星十字騎士団、その聖章騎士へ正式に加わった。

外見は中学生から高校生、ティーンエイジャーの若い方。いまだ靈力の成長率に幅は有るが前髪が長く目元が隠れている。そんな青年は盃にくべられた血を口に含み、呑み、そして「うげえ」という感情を口元で表した。

その様を見て、王は、ユーハバツハと呼ばれるこの王国の陛下たる彼は。その黒いシルエットを揺らして、案外楽しそうに笑った。

「かつはつは。……不味いか？」

「不敬かもしれませんが、血って別に美味しいものじゃないので、済みません」

「いや、良い。主に鉄のごとき味を美味と言われても、感想に困るからな。ソウルソサエティ尸魂界が作った疑似魂魄種族にそういった吸血鬼めいたものがあつたか。

まあ我らの方が、より伝承のそれに近いかもしれんがな。……死してなお死することを許されぬその命運。孤独を恐れるならば、手を尽くすと良い。戦争の如何に関わらず、可能性はどこにでも転がっているものだ。

精々励め——ツァントウ蒼都

「……………」

「ぬ?」

ユーハバツハの言葉を前に、頭を下げたまま特に反応を示さない彼。そんな青年を見て少し目を閉じると、嗚呼、と思い出したように、ユーハバツハは目を細めた。こころなし、少し衰れんでいるようにも

見える。

「ブルー・ビジネスシティは通し名だろうに、蒼都よ」ツァントウ

「……………はっ!? あ、は、はいッ!」

「いかに死の危険がないと視えたといえど、あの娘の元で養育させたのは失敗だったか…………?」

珍しく遠い目をして困惑した様子の子のユーハバツハだったが、頭を振り「まあ良い」と下がるように命じ。部屋に一人になった時点で、ユーハバツハは呟いた。

「とはいえ、それが『裏切らぬ保険』である以上、私とその手の趣味に口出しする話でもないか」

さらつと蒼都と呼ばれた彼の、女の趣味をけなしていた。

その環境に放り込んで特に興味を持たず放置した張本人の台詞ではないが、後日似たようなことを陛下から聞いた騎士団長が内心でちよつとキレたかどうかは定かではない。

※ ※ ※

滅却師の王国見えざる帝国、その城内。どこか虚圏の虚夜宮を思わせる形に拡張されたこの訓練場の一角で、2人の滅却師が霊子を散らしつづけあっていた。

『……………状況確認、完了。ベレニケ・ガブリエリ、其方のザ・クエスチオン Q―異議―』と私のザ・キラーマシン の相性と対応については、学習がほぼ完了した。現時点においては、これ以上の進展は見込めないと考える』

片方は騎士鎧風の恰好でありながら、手元からは大砲のようなものを構え霊子を収束し放っていた男、BG9。ベージェライン

「意外と吸収が早かったかな? うん。ならこちらで対応しよう——
——『神の問答』」インクリジア

もう片方は独特な髪の色をした、にこやかな青年の滅却師、ベレニケ・ガブリエリ。

彼は両腕を広げて言葉をつぶやき、次の瞬間に光の柱に包まれた。

それが崩れ解け散る頃に、現れたのは6つの翼を背に生やしたベレニケ。頭上ではなく胴体にフラフープあるいは土星の環のように光のリングが現れ、髪色は銀と金、毛先の紫も含めてほぼ左右均一になるよう調整されている。彼の滅却師^{クインシー・フォルシュテンデイツヒ}完聖体だ。

「能力の性質はあまり変わらないが、より『範囲が広くなっている』。せいぜい行動を拘束されながら、新たな活路を見出すと良い！」

『協力には感謝する。人間性が最低の環境でも、探せばマシな部類の相手もいると学習した』

「それには中々同意するけれどもね！」

言いながら指をさし、弾丸の弾速計算のような数式や数字を口走るベレニケ。それと同時にBG9の銃口から放たれた弾丸が、あらゆる方向にねじ曲がり、紆余曲折を得て彼の背部に回り込み直撃した。

すかさず破損した胴体から「下半身を切り離し」、遠方で再生させはじめるBG9。そんな彼にベレニケは、槌のような大きな神聖滅弓^{ハイリッヒ・ボーゲン}を手元に生成し打ち込んだ。

二人が何をやっているかと言えば、BG9の完聖体修得のための訓練であった。

星十字騎士団に正式加入したのは、彼をロボと慕っていた少年よりも早かったが。それはそうとして覚醒した能力が特殊すぎたせいとか、中々次の段階に至ることが出来ないでいた。

BG9の聖文字「^{ザ・キラマシオン}K―殺戮機械―」は、元の仮聖文字「^{イボテス}I―騎士―」から派生したにしては物騒極まりないものである。が本質的な部分は、実は変わっていない。

つまるところ、霊子の肉体以上にその魂、根幹にある人格さえ残すことが出来るのなら、その肉体が何であるかに拘らず「乗っ取ることが出来る」と、そう言う形に派生した。結果として現在の肉体は、霊子の胴体に現世で見繕った器子の重火器となっている。場合によってはそれこそ虚の肉体でも乗っ取ることが可能だろうが、それはさておき。

そんな能力となってしまうたせいで、純粹に自らの滅却師的な修練が上手く行かないというのが、彼の状態であった。

それ故に、能力の派生を封じることが出来る。『Q―異議―』“ベレニケに協力してもらえるのは、BG9からすれば感謝しかなかった。

しばらく後、訓練を終えた二人。移動中も生真面目機械的に戦闘の際の攻防の流れなど相談や質問をしてくるBG9に、「ブルーも言っていたが、やはりロボなのでは……？」などどちよつとアレなことを考えながら、肩をすくめて応じるベレニケであった。

余談だが、最近バズビーやハツシユヴァルトあたりから「ひよつとして星十字騎士団の良心……？」と思われつつあるベレニケの周りには、比較的まともな面々が集まりやすかったりした。

無論、頭バンビエツタなバンビエツタが問答無用で突如爆撃してくる災害リスクなどは回避できないが。

『神の問答、と対訳を充てるのはそういった理由からか。なるほど、制御にまで干渉できると』

「範囲攻撃をしようとする、他にも考えないといけないことが増えるのだけれどもね。……これですら『概念ごと』喰らってくる、リルトットの『神の乾き』ユベシユエルは正直言つて意味がわからないけれど」

『上には上がいる、ということか。勉強になる。詳細な説明に感謝をする』

「何、同じ騎士団の仲間だからね。競うことはあつても追い落とすような関係にはならないさ……（やっぱり受け答えがロボっぽいね彼……）」

そんな風楽しく？ おしゃべりしながら訓練場を歩いていた二人だったが、聞きなれない掛け声に顔を見合わせる。BG9の方はモノアイランプ点滅のように「ブオン」と電子音めいた鈍い音を鳴らしながらヘルムの下の片目を赤く光らせ「やっぱりロボなんじゃ……」とベレニケの疑惑を深めながら、二人は少し隠れながら、声のする方へ飛廉脚（BG9はどう見ても足の裏からジェットを吹かしてる様な絵面）。

たどり着いた先は、十数人の青年滅却師たちが、初級で生成された不定形の霊子兵装を、各々剣や弓などに成形して素振りしている所だ。弓については矢を生成せず、しかし引き絞り、狙いをつけるよう

に。剣や槌など近接武器も同様にだが、中には矢を放つための構えをする面々もいた。

その中心に、件のB G 9をロボ！ と慕っていた、少し前までは少年だった青年が、つまり蒼都がいる。

伸びた髪で目は隠れているが、案外すくすく真つすぐ育った？

おかげか目つきはさほど鋭くなく、口元の傷が与えるやや強い印象を和らげている。

そんな彼は青年滅却師たちの前に立ち、彼等の動きを観察している。状況から見て、コーチングをしているようだった。

「……………うーん、ローシユブリア君は近接武器は向かないかもね」

「そ、そうでありますか！ マスター・ブルー！ 光栄でありますー！」

「いや、師匠^{マスター}も止めてって……、僕よりみんなの方が年上なのに『兄貴！』って呼ばれるのは嫌だったから別なのにしてって言ったけどさ。

えっと、真面目な話に戻すけれど。ローシユブリア君の剣、弓の構えでプルプル震えてるから、単純にまだ腕力が足りないんだと思う。

決戦まで何年あるかわからないけど、今は弓を用意しておいた方がいいと思うよ」

「かしこまりました！ マスター・ブルー！」

「マスター・ブルー！ 俺には何かないでしょうか！」

「俺にもご教授を！ マスター・ブルー！」

「マスター！」

「マスター・ブルー！」

「皆一斉にしゃべらないで……。とりあえず一人一人話すから——」

何と言うか、ものすごく緩い感じのコーチングだった。フワツフワである。

さもありなん、保護者として名乗り出たバンビエッタ・バスターバインの暴虐にさらされ続け成長した少年は、しかし青年になっても奇跡的に元の純真さを失わなかったのである。反面教師にしたという説もあるが、結果的に彼は、騎士団の中でも1、2を争うくらいに物腰が柔らかかった。

そのせいもあってなのか、彼の様な年代の若い滅却師たちから嫉妬されるより、慕われている傾向にある。……基本的に「見えざる帝国」は、ほぼ閉鎖環境である。結果、腕っぷしに自信がある層に関して、熟成される人間性がやや蟲毒めいているため、アスキン・ナツクルヴアールを始めとした一部の良識派の滅却師は、年代問わず慕われやすかった。

もつとも、蒼都が彼等から慕われる理由はまた別な事情があるのだが。

「補佐官や部下の滅却師……、ではないね」

『ブルーではなく、キャンデイス・キャットニップの配下だったと記憶している』

「うん。皆、イケメンだ」

ブルーこと蒼都の指導をうけている青年滅却師の面々は、その全てが種類こそ違えど、容姿の面でイケメンと呼んで差支えがない面々だった。ワイルド系、純朴系、俺様系、マッチョ系、色々種類はあるものの、総じて現世の都心を歩けばモテモテだろうことが伺える、そんな滅却師たち。

彼らはB G 9が言った通り、バンビーズのキャンデイスが部下の面々であった。

そんな彼らが何故、騎士団への加入前までバンビエッタ・バスターバイン「唯一の」補佐官のようなものであった蒼都のことを慕っているかと言えば……。彼らのうちの七割近くが、青年が少年であった時代から、つまりバンビエッタの虐待と呼ぶのが妥当な扱いを受けていた姿を見続けていたからだ。

バンビエッタがバンビーズと自称する滅却師の女性（を主とした）グループは、その全員がバンビエッタの気に入るくらいには美少女や美人と呼んで差支えがない面々である。その中でも特に色恋、というより男性関係でマウント合戦をしていたのが、バンビエッタ本人とキャンデイスであった。

当然二人とも容姿、スタイルともに優れており、霊圧の成長に従い身体も年頃に成長し性長。順当に、順々に、自分の好みと必要性と欲

に従って、異性に手を出すのは必然である。そのあたりの倫理教育ができる女性滅却師が騎士団にいなかった、というよりも「殺された」のが原因だが、それはさておき。

この状況に置いて、両者の明暗をわけたのが、補佐官としての滅却師の扱いだった。

キャンデイスにとって補佐官は恋人であり、肉体関係を持ち情を通わせ、飽きて別れても部下に据えたまま放流せず、結果として人が増え。

バンビエツタにとって補佐官に限らず大体はサンドバッグ以下であり、肉体関係を交わす交わさずにかかわらず、自らの弱みを見たりイラつと来たらすぐさま処分する。

後者に関してはそこまで酷いとは知られていまいが、日常的に何かあれば蒼都少年をズタボロに殺しかけ、むしろ死んでいた方が彼の為と思われる程にしていたのが、結果として一般イケメン滅却師たちを、バンビエツタの色香から正気に戻していた。

つまるところ、人身御供の類である。

そして何度か蒼都に飽きて他の男性滅却師を誘惑(?)しようとしたバンビエツタを止めて逃がしたりと、そういった行動が人望を集めていた。

その結果、年齢に関わらずの兄貴呼びでありマスター師匠呼びなのは、流石に本人やベレニケたちも回想するまでもなく理解してる。理解していないのは未だにイケメンが部下に立候補したりしないことに嘆いているバンビエツタ本人くらいなものであった。

「それはそうと、一体何をやっているのだろう?」

『訓練には違いないだろう。………全員、飛廉脚でマラソンを開始した』

「本格的に基礎トレーニングのようだ。これは………」
「あたしが面倒見るの、ちよつと無理だし。頼んだらやってくれるって言うから頼んだだけだよ」

噂をすれば何とやら。ベレニケとBG9が振り返れば、こちらに欠伸を噛み殺しながら歩いてくるキャンデイス・キャットニップの姿。

どういふ事情か、今日はややダボついた現世現代風な服装である。被った帽子の位置を整え、彼女は「珍しー組み合わせじゃんか」とベレニケとBG9を見比べた。

「まあ訓練の適性の問題でね。」

それはそうと、彼に頼んだと……。あまり仕事を割り振るのは止めて上げた方が良いのではないかな？　ただでさえ本日、昇進したてだというのに」

「そんなのお前に関係ないじゃんかつ。……いや、まあ、今後絡む機会減るかもしれないしってことで、気を利かせてくれたかもしんないけど」

バツが悪いのか視線を逸らすキャンデイスだったが、蒼都を慕い一緒に声を出しながら空中でスライドし続ける一団を見て「シユール」と呟いて微笑んだ。こころなし、蒼都を見る目もどこか弟が成長した姿を見守るお姉さんめいている。

その様を見て、BG9は。

『成長して性的な対象にカテゴライズされるようになったから、頼つてみたくなったということか。成程、コミックス・コードはかくも難しい』

などと、とぼけた一言。そうなのか!?　とびつくりするベレニケとBG9に「止めろってッ！　あたしはバンビみたいに変態じゃないってのッ！」と顔を赤くして慌てた。その反応だと少し言い逃れが難しくなりそうだが、ともかく。

「まあ、ガキは流石に対象じゃなかったっつーのもあるけど、最近アイツがバンビが見てないときにバンビに向ける白けた目は結構ゾクゾクするし……って、そんな話じゃなくって！

と、とにかく、騎士団同士でそういうことやったらマズいじゃんかつ！　別れたりしたら顔合わせづらいしっ」

「……君は、自分の配下に何人も元恋人が溢れかえっていると思ってるのだが」

「いや、皆ちやんと仲良くできるの選んで手を出してるし。拗れると任務に支障が出るじゃん？　そう言うトラブルは起こさないっての。」

当然じゃんかー」

『理解の外である』

「そこまで執着する恋愛はしないということなのかな……？ ふむ」

そんなだからジジあたりには尻軽呼ばわりされたりもするのだが、仮にもバンビエツタが性格はともかく頭バンビエツタな暴虐をしても任務には支障が無いよう細心の注意を払っていたりするため、彼女もまた自分の趣味と実益のバランスには気を使っているのだった。気を使ったところで、頭バンビーズな点は変わらないのだが。

「……………おー、やってんなーお前ら」

「リルじゃん。あ、準備終わった？」

と、そんな風に色々話していると、今度はリルトットが階段を下りて来た。黄色いブーツにダボダボなパーカー姿で、既に口にはキャラメルかガムかハイチュウでも入ってるのか、くちやくちやくと小さく音を立てている。

そんな風に現代風な恰好が追加されたことで、ベレニケたちもその服装の理由を確認した。

「こんなカツコーしてる理由？ あー、アレだ。バンビが言い出したんだよ」

『バンビエツタ・バスターバインが？』

「ん。ブルーのやつ、ちゃんと入団したってから、お祝いやるーってなー。そのくせ自分じゃ準備しねーから、アイツ本気でやっぱ頭バンビだわ」

「ちなみに現世でやる予定だっぜー」

「よく許可が下りたなあ……………」

「ミニーがちよつと頑張った。」

で、店はジジが予約しに行ってるから、こっちはこっちでその間、少し仕事の消化とかなー。……………って、いや何で自分の仕事ブルーにやらせてんだよ……。俺でさえ気を遣うぞ、お祝い当日じゃねーか「うっ」

リルトットの半笑いに、やっぱりバツが悪そうなキャンデイス。と、猛烈な赤い人型のシルエットが、高速で上空から飛来。別な出入

り口から入ってきた誰かだろうが、その相手はまっすぐ、連帯を組んで空中をスライドしている青年滅却師の一団に突撃していき――

「いや、ちよつと行動の意味わからないよ、バンビちゃん!」

右手に生成した狼の罾あぎとがごとき籠手で、剣の霊子兵装を構えて突撃してきたバンビエツタ・バスター・バイン(真っ赤なへそ出し現代服)の一撃をそらした。

と、それを見てバンビエツタは嬉しそうに表情を晴らし、そのままの勢いで蒼都に抱き着く。「ぐえっ」と声を出しながら、二人そろって勢いよく地面に突き刺さり、砂煙を立ててしばらく前進した。

流石に空中で停止するイケメン滅却師たちの一団だったが、状況を察したのか一目散にバラバラとなり、キャンデイスの背後に集結して隊列を組んだ。アンタたちさあ……、と呆れたようなキャンデイスだが、誰だつて命を無駄に散らしたくはないから仕方ないね!

『流石に聖文字を与えられ、仮聖文字から能力変更中ゆえにか、自重したと判断する』

「爆撃しないだけを自重と呼ぶのは、いささか苦しい気もするけれどね」

「あんま真面目に考えると、頭おかしくなるぞ。

おいバンビー、来たつてことはジジから連絡来たのかー?」

リルトットの声に、空中で花火のごとく霊子が爆裂して応えた。

一方のバンビエツタだが、ブルーこと蒼都に笑顔で頬ずりしながら抱き着いていた。もはや猫かわいがりの域である。かつての二人の関係を前提に考えれば何かがおかしい二人の距離感だが。

「ブルー? 前に言ったわよね、あたし。あたしの許可なく他の奴にサンドバッグさせたら駄目だつて。忘れたの? ねえ、ブルー? ねえ、ちよつと?」

(笑顔なのに目が笑って無いんだよなあ……)

なお彼も彼で恐怖を抱きながらもバンビエツタの無防備な腰の裏側を撫でて体温を感じて居たり、そこは何も変わらず案外ちゃっかりしていた。

とはいえ、それはそうと。以前よりはバンビエッタに物申せるようになってる蒼都である。

「いや、だってサンドバッグじゃないし。一応、単独任務とか入ったらバンビーズとも別行動増えるかもしれないから、今までお世話になった分は、少しくらいはお返ししないと——」

「あなた、あたしを捨てるつもり!? ずっとずっと一緒に居てくれるって言ったのに!」

「凄い人聞き悪い感じの言い回しになってるよ!!? バンビちゃんそれで良いの!」

「よ、良くないけど、何かこう、映画とかで上京するときの、独り立ちする子供みたいなこと言い出したから……」

（一体なんであるのハートフルストーリーに感動できる感性持つてるくせに、やることなすこと頭バンビエッタなんだろうこの娘……）

天を仰ぎながらも、ブルーはバンビエッタと額を合わせて。

「任務は仕方ないけど、別にどこにもいかないって。バンビ『お姉ちゃん』」

「うん……」

「どこにもいかないから、さあ……、抱き着きながら首の裏側に爪立てるの止めない?」

「だって能力発動できない今とかじゃないと、滅多にこーゆー攻撃できないもん」

「もんって……」

面倒臭えと思いつつも、蒼都はリルトットたちの方へ彼女をお姫様抱っこして向かった。

なおその後の打ち上げ、現世のカラオケボックスでミニーニヤが100点を出してバンビエッタとキャンデイスが我先にと張り合ったり、そのすきにジジがブルーとラブソングをデュエットをしようとしてバンビエッタとミニーニヤとで一騒動勃発したり、焼き肉屋でリルトットが何枚も何枚もカルビ皿を平らげお財布担当のジジとミニーニヤが涙目になったりといった話もあるが、それはまた別な話。

#010. 怪物の目覚め

「ブルーあなた、早い所正式な聖文字シュリフトに馴染まないと駄目よ？ まだ全然使えないのよね。無能は陛下によって肅清されちゃうと思うし、何とかしないと……………」

ちよつと、キャンデイ！ ミニー！ リル！ ジジ！ みんな協力してあげなさい！」

「ええ何でえ!？」「ブルーでしたら、喜んでえ〜!」「まあバンビじゃそーゆーの向かないか、訓練前にバラバラにしちまいそうだし」「ふうん、今日はどうしよつかなく?」

バンビエツタのそんな一言と共に、ブルー・ビジネスシティこと蒼都の強化訓練が決定した。「助っ人呼んで来るわ! 感謝なさい!」とそこは普段のテンションだったが、飛廉脚を使いわざわざ場内を足早に移動するくらいである。何かしら彼女の危機感でもいだいているのだろうか。

それを受けてミニーニヤが「がんばりましょうね〜!」と気合十分。ジジは「面白そう!」と気楽な雰囲気。一方キャンデイスはバンビエツタの去っていった後ろ姿を見て「ひよつとしてアイツ、ガチか…………?」と戦慄した顔をするともに、リルトットは「グレミィ頼れねえな」とボソツと一言呟いた。

閑話休題。

「ヤシヨリニヤン神の独裁」——いきますよう、ブルー!」

「う、うん…………」

「2対1たあ面倒くせえなー、ああ——ユベシユエル神の乾き!」

いつものように訓練場。幾分かつてよりも様変わりしたこの「影の中に作られた影の場所」とでもいふべき拡張空間にて、ミニーニヤとブルーはリルトットと対峙していた。

なお女子二名は完聖体の使用を躊躇しておらず、ブルーの顔が本当

にブルーなのが誰にも見えていないのは内緒である。仮にジジがいても「大丈夫かなあブルー」と心配した素振りをしつつ、バンビエツタに言われて始まったこの戦闘自体は、一切止めるつもりはないだろう。

なお、彼女たちの恰好の変化は対照的だった。ミニーニヤは普段の厚着風なブラウスを脱ぎ捨てタンクトップのような装いに変化し、背中の小さなハートが束になったような羽根から霊圧が延々と放射されている。対してリルトットはノースリーブのようだった腕の部分に白いやや大きめの袖口が出現しており(わざわざ着用した?)、さながらシルエットはナースのようでもある。まあその背中に生えた光輝くも良く見れば「ギザギザ歯だけが」「延々と重なってるような」ギザギザに尖った羽根も含めて、彼女らしいと言えば彼女らしいが。

「手加減はするから『死ぬほど痛い』だけで死ぬわけじゃねーけど、それでも気を付けろよブルー。俺もこれ、あんまりうまく制御は出来ないから」

(あ、あれが……! 髪型へんなベレニケの完聖体すら余裕で打ち破るっていう、リルちゃんの完聖体……!)

ベレニケの聖文字「ザ・クエスチオンQ―異議―」が完聖体「インクリジア神の問答」であるが、その能力は「相手が使用する霊子の従属を奪い取る」というものである。早い話が霊子のクラッキングに近いことをやらかす技であり、理論的には月牙天衝すら途中でその制御を奪い取って真反対へ打ち返す、どころか斬月から射出される直前に暴発させることも可能だろう。

その霊子制御能力すら完全に置き去りにすると、当の本人から自嘲交じりに教えられたブルーである。幼い時分から特に関係性も変わらず、バズビーなど一部滅却師たちを兄貴分として、見た目以上に幼い印象のままに青年は成長していた。

なので一切躊躇わず、ミニーニヤの背後に回るブルー。現状聖文字が使えないのなら、防御は不能なので攻撃のみに絞ろうと言う事だろう。

あまりのその迷いの無さに「オイオイ」と苦笑いのリルトットと、む

しろ頼られて少し誇らしげなミニーニヤ。こちらもちちらで元の外見年齢がブルーと同程度だったこともあってか、見た目の成熟具合よりもやや若い印象である。

「いや、張り切ってるところ悪イけどそうじゃねーだろうって。ブルーお前もよオ、陛下に言われたろ？ 聖文字について、多分」

「あ、う、うん。」

えつと……『疑問は、要らぬ。猜疑も、要らぬ。ただ己が魂に、その身をゆだねエ……、奥底から浮かび上がるそれこそが、お前の聖文字となるだろおう……』って」

「ちよつとブルーウ!? ふふふッ！ くッ！」「お前ッ！ 不意打ち止めろ……ッ！ く、くそ、意外と似てるな陛下の物まね……ッ」

唐突なブルーによるユーハバツハの物まね芸(?)を前に、ミニーニヤとリルトットは噴き出した。腹を抱えて笑っているが、騎士団長にでも見つければ面倒事になるかもしれないので、一応は抑えている。

なおサボりでこの場からいないジジやバンビ一人だと心配だと後を付いていったキャンデイスがこの場にいれば、お互いに一切の躊躇なく大笑いしているくらいには案外模倣出来ているブルーのそれであった。

「く、くくく……、はあ、はあ、ま、まあ、そういうことだ。」

要は、ちゃんと霊力使って戦えってことだろ。全力でやらないと、奥底から何も出てこねえしな」

「リルお姉ちゃんもそうだったの？」

「……………お、おう(その身長とか顔でお姉ちゃん呼ばわりされるとへんな気分になるなあ…………)」

「リルウ？ 何かしらその反応？ リルちゃん、リルウ？」

「……………何だよ、何でもねえよミニー。だから怖い顔すんなって。呼び捨ても止めろバンビじゃねーんだから。」

まあその調子じゃミニーもしかりブルーのこと『強化してくれる』だろうから、とりあえず当たって砕ける、で来い。胸は貸してやる」

「あ、はい」

(まあ胸はないけどね……)

一瞬だけリルトットの、彼が幼児から青年に育つくらいの期間ですら一切変わらなかつた体躯になじんだ胸元の直線へ向けられるが、流石にもう口に出しては言わないブルーであつた。幼児ならば許されたるうが、流石にこの年代の姿になってからは気を遣うべきであるし、その分リルトットもブルーには優しくしてくれていた。……常日頃の有様から同情も圧倒的に大きいだろうが。

ちなみにバンビーズの中でブルーからの信頼やら好感やらが(性的なものを除いて)最初にカンストしたのがリルトットであり、リルトットの側もバンビーズの誰より、それこそバンビよりも早くブルーと打ち解けているのは完全に余談である。

なお、そんな和やか(?)な話し合いをしたところで、戦闘結果が何一つ変わる訳もない。

リルトット背部の空間の穴のような羽根から「幾数十もの顎」のようなもの、生物ではなく「顎だけ」そこに存在するようなもの共が這い出て、ブルーやミニニヤの神聖ハイリツヒ・ブファイル滅矢やら臨時で持つて来た魂ゼーレシユナイダー切矢、果てはミニニヤの超パワーによる打撃の衝撃波すら喰らいつくし、文字通り手も脚も出ず顎たちにかみ砕かれるブルーたちであつた。

リルトットの「死にはしない」の言葉通り、その顎による噛みつきで負傷こそほぼしていないが(甘噛み?)、それはそうとして全身から猛烈に奪い取られる霊圧に、戦慄するブルーである。

「リルお姉ちゃん、これ、何なの……?」

「何なのかって言われても俺だつてわからねえよ」

「毎回思いますけどお、私のフィニッシュブローの直撃に噛みついて威力無くすのお意味わかんないですもんっ」

「あー、それはアレだ。『衝撃波』と『霊圧』と『爆裂する』って概念をまとめて『喰ってる』ってだけだ」

「喰ってる……?」

理解が及んでいないブルーとミニニヤであるが、リルトットのやつて

いることは文字通りそんなこと。つまりは「概念干渉」系の能力である。これによりベレニケに霊子操作すら、大本の霊子操作の概念ごと喰らうことで無効化しているというのが正解だ。

なおバンビエツタ相手だと、実はそう上手くいかない。単純な現在の霊圧差により、爆撃の概念を喰らうよりも先にリルトットの身体が負うダメージが勝ってしまったためだ。なんだかんだと言われてはいるが、実際問題バンビエツタがバンビーズ最強である一幕でもある。

ともあれ珍しく？ 頬から出血しているブルーに治療を施しながら汚れをふいたりとか、かいたいしく世話を焼いているミニー。そんな彼女を見て「ハハくん」とニヤニヤするリルトットだったが、一瞬目を見開いた後すぐさま眉間に皺を寄せた。

「バンビたちが一緒じゃねえから偶々なんだろうけど、どんな組み合わせだ……」

「えっ？ ……えーつと、これは………」

「リルお姉ちゃん？ ミニーちゃん？」

困惑する蒼都だったが、彼も霊絡を探ってその理由に思い至った。

「———そうつまり、あのバンビエツタにもラツヴがあるとミー思いうのよネ。じゃなければ、やっぱりミーのラヴに応える精神が生まれないらしい。ブルーみたいに」

「ブルーの扱いはちよつと致命傷だからな。致命的を通り越して、幼児の扱いにしちゃ致命傷じゃねーのよ。……というか、あー、本人たちの霊圧近づいてるのによくしゃべるなあ。もうちよつとオシャレに優しく触れてやりなつて」

階段を下りてやってきたのは、^{ザ・ラヴ}「Lー愛」ペペ・ワキヤブラーダと、^{ザ・デス・デューリング}「Dー致死量」アスキン・ナツクルヴァールの二人。ハイテンションにアスキンへと話しかけ続けるペペと、若干面倒がつてそうながら律義に応答しているアスキンという組み合わせだ。

なるほど確かに、彼女たちのリアクションも頷ける。バンビーズは以前訓練で、ペペによりバンビエツタが操られた際に全員もれなく彼女の完聖体による大爆撃を受けた経験や、その見た目が色々受け付けないこともあり、ペペ個人に対して全然好意的ではないのだ。

「おはようございます」「ああ」「はい、おはようございますう」

「よおミニーにリルトットに、蒼都^{ツァントウ}。聖章騎士^{ヴェルトリツヒ}の正式招聘おめでと」
「ゲツゲツゲ、……………む？」

と、あいさつもそこそこに。ブルーの世話を健気に焼いているミニーニヤの姿を見たペペは、ゲツゲツゲと笑い声をあげながら少し思案すると、リルトットへと耳打ちしようとする彼女に「酷い！ やっぱりミ背後から数多の顎を差し向けようとする彼女に「酷い！ やっぱりミーへのラヴ足りないッ！」とサングラス越しに涙目である。

「まあミーへのラヴはともかくとして、ねえねえアレ、ラブ？ ねえアレってラヴ？」

「だーから寄るんじゃねえ、肉達磨ア！ 息が臭え！ 歯あ洗え！ 風呂入れ！」

「んもう、これ一応ミーの聖文字に関係するから、あまりそう言われちゃうとその…………、ネ☆」

「致命的じゃねえの…………」

当然のようにアスキン、ドン引きである。騎士団の中でもオシヤレさに並々ならぬこだわりがある彼からすると、ペペのその一挙手一投足は生き方として受け付け難いのだろう。

なおリルトットとて、別に1週間くらいそういうのを適当にしているくらいならツベコベはいわなくらいにはガサツであるが。それはそうとしてペペのそれは月単位というレベルですらないので、嫌悪感も一入で合った。

それはさておき。二人とも特に何かあったというわけではないらしい。道中顔を合わせて、蒼都たちの霊圧を感知して様子を見に来た、ということらしい。

「ブルーにはまっただラツヴを教えられていないし…………」

「珍しくバンビエッタの奴がいなかったから、何やってるのかと思つてねえ。その感じだと聖文字の訓練か」

言いつつ、ガス欠とのものでリルトットの完聖体が解除され、それに合わせてミニーニヤも解除する。お互いの恰好も普段通りに着込み、若干ミニーの胸元（横乳）を見て残念そうなブルーと、その視線

に気づいて顔を赤くして「めっ、ですよう〜！」とデコピン一発のミニーニヤであった。なお威力は「Pー力ー」ザ・パワー準拠なので、軽い一撃でもその場に倒れるくらいの威力である。聖文字がないためそのまま背中から倒れたブルーに、大慌てで抱き起しにいくミニーニヤというコントのような光景であった。

と、そんな状況に、上空から強い霊圧を感じる全員。空（天井）を見上げて一歩後ずさると、猛烈な霊子の収束光と共に爆発音（天井が粉碎される音）を伴い落下してくるシルエツトが一つ。まるでスーパーヒーローがごとき三転着地をしたその相手は――。

「おお、奇跡の男じゃないの」

「ゲツ……！ み、ミーちよつとお暇をもらいたいなあナンテ……」

「ジェラルドか……」

「珍しいですうね？ 全然、私たちと絡みもないのにい」

「奇跡ミラクルの人だ……！」

「――フツハハハハハハハハハ！ そう、よくぞ我が銘めいを呼んだ

！ 蒼都ツアントウ！

だが正しくは！ 我が名は！！ ジェラルド・ヴァルキリーイッツ
!!!」

大声で絶叫するジェラルドの、相も変わらず北欧の雷のヒーローめいたその風貌を前に、ちよつとだけテンションが上がる蒼都であった。BLEACH原作において扱いは何とも言えないところではあったと彼は考えているが、実際問題リアルな人物としてのジェラルドのことは結構嫌いではない。絡みこそ少ないが、案外まともそうだしという理由で。

話を聞けば、どうやらバンビエツタとキャンデイスとが呼んできた助っ人とは彼のことかららしい。曰く「どんなに全力で戦っても傷つかないしノリが良いから、躊躇なく殺すつもりで戦えるだろう」とのこと。なおその二人は二人でジェラルドがこちらに来る際に軽く「しごいて」倒して来たらしい。何故？ という疑問が一同を支配したが、それにジェラルドは特に答えはしなかった。

「我が聖文字 Mザ・ミラクルー奇跡ー」により、与えられし傷はすべて神の尺度サイズ

へと置き換えられる！故に気にせず問題はない！」

「神様のサイズ……？」

「より正確には、民衆の願いを束ねたような力とも言える！ 奇跡とは多くが願うことにより発生するもの、故に！ 我の身が傷つくこととして、本質的には些事ともいえる！ 我が身を使い神の力が権限しているが故に、その尺度サイズの現し方は様々な形として成り立つのだ！」

「み、耳がああ……」「さつきから声デケーえんだよなあ」「ミー、耳が死んだ」「見た目の雰囲気には合ってるんだよなあ」

なおさつきからずつと大声ある。リルトツトたちも各々好き勝手に言っているが、特に気にはしていないのかにこやかに大声でブルーと話し続けるジェラルドであった。

「つまり身体を大きくしたり、傷自体を癒したり、攻撃力とかを上げたりと……。何でもありませんねえ」

「とはいえ意外と自由度は低いがな、ウルヴァリ……、否、蒼都！ 今のままでは聖文字の発露に時間がかかりすぎるのだろうか？ 短期決着だ、死ぬ気でかかってこい！ さつきまで共に完聖体の訓練をしていた、バズビーのようにな！」

「バズお兄ちゃんも訓練してたんだ……」

「やはりあの火力が相手では、どうしても訓練相手は限られるからな！ 我が奇跡の肉体でもなければ、そう簡単には受けきれまい！ そのあたりに気を回す性格をしているのは知っているだろう！ 本来、人が出来ているのだ！ バンビエツタ・バスターバインとは違って！」

バンビエツタ・バスターバインとは違って！

（奇跡の人にすら頭バンビちゃん扱いされててバンビちゃんはもう駄目かもしれない……、最初から駄目だったか）

残念でもなく当然の評価であり、なんならユーハバツハからもそんな扱いであった。

なおペペが端の方で「ブルー、どうしてバズビーをお兄ちゃん呼ばわりしてるのかイ？」と聞いたりして、アスキンから意外とあのあたりは仲が良いということが語られたりしていた。たまにバスケとかやって遊んでるといふその話に、知らなかったのか驚いた様子のミ

ニーニヤもいたりするが、それはさておき。

まずは小手調べということでブルーの矢を延々と受けるジェラルド。とはいえ練度や霊圧こそ上がってはいるが、蒼都の身体における性能はやはり能力頼りな部分が大い。数発ほど盾で受け流し剣で弾き飛ばすと、「今度はこちらから攻めるぞ！」と丁寧に教えながら、猛烈な速度で踏み込んでくるジェラルドだった。どうやらダメージを受けた分の反動や尺度を、霊圧の上昇に使っているらしい。

巨大化してこないことに原作読者の意味で違和感を感じるブルーであつたが、とはいえジェラルドも多少手加減しているのか、生成した籠手そのものは砕かれずに殴り合い斬り合いができていた。

「うう……、ミーこう何て言うか、子供が成長する瞬間見るの好ツキッ！ あの虐待現場からよくぞこう、ちゃんと一人前の戦士として戦えるように……、ゲゲゲ、ゲツ」

「泣くんじゃねえせめてふきんか何か持つてこい、腕で鼻水拭つてんじゃねえよ汚ねえな汚デブ……………」

「でもお、ブルーつて今は Σ —鋼鉄—」の金属化とかつて使つてないですう？ こう、腕から爪は出ていないですけどう、普通あの勢いで切り付けられたら腕が折れちゃつてると思うんだけどお」
「鋼鉄化は上書きされてるんじゃなかつたかねえ。」

……まあミニニヤの E —権力—」イクシヤ「しかり、こつちの F —薬毒—」アルマコ「しかり、仮文字時代の力を部分的に引き継ぐつてのは有りそうだが」

とはいえ、そこまでブルーも余裕があるわけではない。ダメージが与えられないのともかく、与えたその分が相手の霊圧に加算されてブルー本人を傷つけていく現状だ。身体の傷も増えるし、血しぶきも飛ぶ。ミニニヤが両手で口を押えて一歩出そうになるのをリルトットが止めに入ったりもしていた。なおそれでも四肢が千切れたり、胴体がバラバラになつたりといった事故が起こらないのは、ひとえにジェラルドの M —奇跡—」ザ・ミラクル「が持つ権能のたまものといったところか。

と、ジェラルドがここだけ彼にしては小声で、ブルーに話しかける。

「なるほど……！　頑丈さや再生力は聖文字に頼っていたが、そも『許容できる精神性』自体は自前だったというのか！　ある意味で、蒼都がバンビエツタ・バスター・バインに引き取られたのは奇跡だったと言えるかもしれない！」

「えっ？　あ、あの、それってどういう……？」

「無理に話さなくても良い！　我、なんとなく顔を見れば言いたいことは判る故に！」

バンビエツタを『加えた』4人組だけに留まらない、その素直さや純真さは一部の騎士団には甘い毒であつたろう！　だが陛下がそれを呑み下すと決断したのならば！　我が奇跡はその『チョコラテのような甘さ』を最大限尊重し―――」

「ヤルダハトケフ神の癩癩」

そして、ジェラルドが何事かを言い終える前に、訓練場が絨毯爆撃された。

何考えてんだバンビツ！　というリルトットの絶叫が木霊するが、おかまいなく上空から雨あられと降り注ぐ霊子の礫、否、空中クラスター爆撃。

それが止む頃には、晴れた煙の内側からジェラルドが能面のような顔を上空へと向けていた。

「何を考えているか！　バンビエツタ・バスター・バイン、本当に頭がどうかしているぞ！」

「どうかしてるって何よ、別に全然フツーじゃないッ！」

ジェラルドどころか他四名も一様に「オイオイオイ」という顔をしている。ギリギリ聖文字でも発動したのか、黒くすすけはしているが大したダメージが入っていないアスキン。対照的にギャグ漫画のように髭がアフロのごとく爆発し、なんなら服がボロボロでだらしない全身の肉が丸見えなペペ。

そしてそんなペペを盾としたリルトットとミニーニヤは特に傷一つ負つておらず、「キミたち、いつか覚えてなよ……？」と言い残して

ペペは倒れた。実際盾とされて逃げなかったのはペペなりのラヴの示し方の一つではあるが、それはそうとして頭バンビーズな2人に思う所は有るらしい。

そして頭バンビーズ筆頭ことバンビエツタが上空から完聖体を解除して降りてくるのを、隣で一緒に降りて来たキャンデイスが「だからやり過ぎって言ったじゃんかッ！ 前より訓練場頑丈になっただけど、絶対怒られるじゃんッ！」と涙目で頭を押さえている。

「何よ、外でバズビーが生意気にもあたしの完聖体に対抗するために訓練してるのでも何も言われないのに。あっちの方がむしろ危ないでしょ？ 下手したら死神たちに勘付かれちゃう位置だもの。」

それに比べたらあたしの方が億倍マシ！ バンビちゃん頭良いのよ！」

「サイコーに頭悪いこと言ってるぞバンビよお……。」

って、いやお前さすがにアレはブルーも死ぬだろ。今、前みたいに再生できないんだろ？ ほら、ミニーなんてシヨックのあまり呆然自失してるし」

リルトットの呆れた声と、目からハイライトが消えて微笑んだまま硬直してるミニーニヤを前に、しかしバンビエツタは「大丈夫よ」と真顔を向けた。

「だってこのために、あの男にブルーの訓練をさせてたのよ？ あたしは部外者、ブルーの訓練相手は、あの男」

「せめて名前で呼べよ、仮面越しだけどスゲー目でお前のこと見てるぞ……。」

「リル、うつさいッ！」

とにかく、あの男の『奇跡』ってそういう部分っていうか、運命？

みたいなのも操作できるって騎士団長から聞いているのよ。だからあの男がブルーの訓練を付けてる、って名目状態にしておけば、あたしが全力でブルーを『壊しても』、死なないでいられるはずだって」

「だからお前達二人を叩きのめしてからこちらに来たというのに！

グレミイ・トウミュウ、傷を治すにしても少しは前後関係を考えろ！」

聞こえてはいないだろうが文句を絶叫するジェラルド。

そして、こんな話を聞かされたジェラルドがバンビたちを叩きのめしたという話には納得の面々であった。

そして実際、ブルーはといえど……、なんと生きていた。

四肢が欠損していることもなく、しかし全身が爆撃に晒された結果、その胴体がどうなっているかは推して知るべし。ジェラルドもこれには鼻から上の仮面をずらし、目元を手で覆い空を仰ぐ。

「オイオイ、バンビエツタお前なあ……。いつかイケメンを殺すだろうと思っていたけど、ここまで暴虐を働くか？ 男女とかオシヤレ云々以前の問題として、人間としてどうかしてるぞ」

ドン引きのアスキンに、しかしバンビエツタは真顔を返す。

「こころなし、こちらのハイライトもない。その目はどこか闇で濁っており、真つ黒でドロドロした何かが見えるような、見えないような。」

「大丈夫よ、ブルーなら」

「大丈夫ってお前——」

「ブルーはずっと一緒にいてくれるって言ったもの、だったらこのくらいでどうにかこうにか死んじやうわけなんてないわよね？ あたしに何かあつて殺されそうになったら真つ先に盾になって庇つてくれて、それでも死なないし死んでも死なないし戻つて来てまた私にロボロにされるために帰ってくるのがブルーなんだから、そうじゃないブルーなんて存在価値はないし、でもブルーがいないとあたしなんて簡単に殺されてしまう状況もこれから出てくるかもしれないからそれは大事に大事に扱わないといけないって思つてはいるけれど、大事に扱うべきだからこそあたしは全力でブルーの力を上げるために力を貸すしブルーだって——」

「聞いた俺が悪かつたよ。お前と同期のベレニケつて凄いなだなあ……」

方や騎士団でもまつとうな男に、方や騎士団でもどうかしてる女だぜ、と。頭痛を覚えたように眉間を揉むアスキンに、バンビエツタは興味を無くして、ほぼ焼死体ストレスか虫の息の状態の蒼都をじっと見つめる。

特に宗教的なものでも信じてはいないだろうに、わざわざバンビ

エツタは両手を重ねて、祈るように蒼都を見続け――。

そして、奇跡のような光景が起きた。

蒼都の目元から霊圧が吹き荒れ、さながらそのシルエットは翼のよう。しかしその霊圧が蒼都の全身を照らすと、照らされた身体は「銀色」へと変貌。生身の肉体も、衣服も、そろって金属になる様は以前の聖文字そのものであるが、リルトットはその様を見て息をのんだ。

その再生には「霊圧が存在していなかった」からだ。

まるでそれは能力を使用したと言うより、生物が生物としての当たり前の機能でも使ったかのように。彼女個人と仲が良いグレミイですら、その能力の発動には霊圧を伴うにもかかわらず、いつそ不気味なくらいブルーからは何も感じ取れなかった。

やがて銀色の身体が成形され、傷痕も見えなくなり、普段の青年蒼都の像のようになった後、金属化が解けて、目から噴き出していた霊圧も消失する。

「……………もしかして、聖文字、発現しましたかねえ？」

「うわーッ！ み、ミニーお前、急に我に返るなよ……………」

「リル、意外とリアクション良いよな」

「うるせえ。というか――」

「よくぞ！ よくぞ目覚めた！

あれほど絶望的な状況からの復帰…………、まさしく『奇跡』だッ！」
「わっ！」

仮面を戻しはしたが、おんおん泣きながらブルーを抱きしめて頭を撫でるジェラルドのその様はまさに大事故に遭ったが奇跡的に生還した息子へ向ける父親の愛情のごとし。戸惑いはしたが、ブルーは拒否せず抱きしめ返す。「感動的、なのかあ…………？」と何やら自分の正気度が削れる様を目の当たりにしているアスキンはともかく、バンビエツタはそんな蒼都を見て得意げに腕を組んで胸を張った。

ジェラルドはまたバズビーの方の訓練に付き合うとのことで離脱

し、バンビーズ四人に囲まれるブルー。結局何の文字になったのかと問うリルトツトに、蒼都は遠い目をした。

「……………お前はとく、不滅であれ」、って言われた気がした。陛下に」

「ぶほッー!」だ! か! ら! ブルーお前よオ!」——ッー!」
唐突なユーハバツハの物まねに我慢できず大笑いするキャンディス、抑え目なりルトツトに言葉を失うミニーニャ。

ただその中で一人、バンビエツタだけは頬をヒクヒクさせるのみ。似ているが故にウケはとれているようだが、そのジョークで笑えないのは一体どんな感情に由来してるものか。

(……………多分、陛下の心象が悪くなったら粛清されるんじゃない? 大丈夫? とか思ってたビビってるんだろぅなあ)

「あー、気を取りなすぜ。不滅……………、Iならイモータルってところか。まあブルーには一番必要な文字だな、それ」

「言ってる……………、ふぎう! ま、まだあたしは駄目だ……………!」
「キャンディちゃん、どうどう……………」

でも不滅、ですか? それだとあんまり、私が庇うような場面が減りそうですねえ」

「いや、そういうのって僕の役目ってことなんじゃないかな、多分、うん……………。大丈夫、ミニーちゃんも僕が守るよ」
「ふえ?」

ブルーの不用意な発言に顔を真っ赤にするミニーと、それを見ても特に嫉妬的な感情を出す訳でもないバンビエツタ。既に頭痛を覚えてこの場を立ち去ったアスキンはともかく、かろうじて意識を取り戻したが未だ気絶したフリをしているペペは、死んだ魚のような目をバンビエツタに少しだけ向けていた。

そして当のバンビエツタは、満面笑顔で蒼都の頭を撫でた。

「はい、よくできました♪ じゃあ今日はもう訓練なんて止めなさいよ。せっかくだし皆でゲームでもやらないかしら。この間、現世で買って来たやつあるじゃない? 桃○」

「○鉄は友情を破壊するって相場は決まってるから……………」(バンビちゃ

んに対して他四人が友情感じてるかはわからないけどね……、あつ勢い余って抱き着いて来ておっぱい柔らかか……)

なお例によって蒼都の内心におけるバンビエッタの扱いも相変わらずである。

ただ、今回に関しては蒼都としても少し頭に来ていたのか。

「あつバンビお姉ちゃん。今日はリルお姉ちゃんの部屋で寝るから」

「!?」

「あー、まあいいけど……、バンビの顔ちよつと見たくないのか………。(まあ消去法なら幼児体型の俺相手なら間違いも起こらないとか考えてるんだらうなあコイツ)」

アイコンタクトで助けを求めた蒼都に面倒見の良さを発揮するリルトットの気安い返事に、「わわ、私駄目なんですか!？」とびっくりした様子の子ニーニヤ、「そういう趣味に目覚めたのか?」と変な風に訝しむキャンデイス、そして「えっ………?」と、まるでこの世の終わりのような顔をするバンビエッタという、ある種の地獄の様な状況が展開されていた。

余談だが、仮にミニーニヤの所へ行つた場合は本当に「間違い」が起こってしまったかねないくらいには、現在の蒼都は色々精神ダメージが大きかったのだが、それは言わぬが花である。復活の目処なく本当に殺されかけたのは、それなりにトラウマものだった。

#011. 癩癩の行方

とある一室に、三人の滅却師がたむろしていた。

一人は独特な色をした髪を撫で付けながら手元の大判コミックを見開き「うん、悪くない」など楽しみながら他二人の様子を見守っている。すなわち、一人は小型のテレビにビデオデッキを繋いで映画を見ている、幼少の頃から面倒を見ていたブルー・ビジネスシティこと蒼都。そしてもう一人は、ややぽっちゃりとした体躯にスキンヘッドな小柄な男。眼鏡の位置を調整して「むむむ……！」と食い入るようにアメコミに視線が固定されている男、ジェイムズ。

聖章騎士と聖章騎士と副官の聖兵ソルダート（本人はセコンドやら付き人やらを自称しているが）という構成であるが、三人とも非常に適当に寛いで遊んでいる様子だ。なんなら部屋自体も何故か現世から取り寄せたわけでもないだろうに畳だったりして、ナチュラルにゴロゴロとしている。

「……………何やってるの、あなた達？」

そんな平和な空間に、目を見開いて口を歪めて名状しがたい顔をした彼女が現れた。

ベレニケとジェイムズの視線がさつと蒼都へと向き、しかし彼は特に嫌がらずに「にはっ」と微笑んだ。見た目の年代にはそぐうまいが、彼の幼い頃を知る面々には納得の表情である。なお彼本人は「僕って大人になったらこんなお目目くりくりだったかな……………？ もつとヒ○りさんみたいな面白フェイスになるんじゃない？」などと自問自答したりもしているが、それはともかく。

「あつ、バンビちゃん。どうしたの？ 今日僕がバンビちゃん付きじゃなくなるから、新しい部下を集めようってなったんだよね」

「い、いえ、別に…………、新人皆誰も集まらなくて、リルのところから誰か融通してもらおうとしても蜘蛛の子散らしたわけじゃないのよ？」

うん。あたし、別にフツッだし」

(自分で自分に言い聞かせて納得してる時点で自覚あるんだよなあこの頭バンビエツタちゃん)

平常運転だなーと遠い目をして乾いた微笑みの蒼都。

まあそんなこと良いのよと露骨に話題をそらすバンビエツタが近づいてくるのを察知してすつと立ち上がり、彼女の前に立ちはだかった。

「邪魔、何のつもりよ。……………ちよ、ちよつと近いっ」

「えっ?」

「な、何でもないわよ。で、何をやってるのよ、あなた達。図書館の手前に勝手に領域作ったりしたら駄目じゃない。通行の邪魔になるわよ? ただでさえ最近は何の出入りが多いみたいだし……………、バレないわよね死神共にあたし達が『ここ』に居るってこと。大丈夫よねブルーさ……………?」

(あのバンビエツタがまともなことを言っている、だと……………?)

(アババ、スーパースター「Sー英雄」) 呼ばなくて大丈夫ですかね……………!?)

(グランドマスター騎士団長が最近ちよつと不機嫌だから、小さなことでもビビリ散らしてるんだろなあバンビちゃん……………)

三者三様の感想はともかく、ブルーと呼ばれた蒼都は「まあその時でも一緒にいるし」と軽くなんでもない事のように答え、「ん」と少し唸った彼女は、帽子を深くかぶり目を覆い隠した。

「まあ何やってるかって言われても遊んでるだけなだけ……………。ほら、ベレニケさんと、えつと、名前知らないんだけれど……………」

「グレミイだよ、ブルー」

「あ、あの人グレミイさんか。リルお姉ちゃんと仲良しの人。……………それで、二人で現世にデータ情報調査しに行ってたよね。

何か陛下いわく『現世で5つの星が燈る道筋が確定した』とか。で、死神と虚の強大な霊圧がビシバシしてたのを、その残滓というか規模というか、どの程度の脅威の戦いだったのかを調査しに行ったらいいんだけど……………」

「……………どーでも良いけど『頭ヘンなニケ』、あなたブルーに色々話

しすぎじゃないの?」

「君に頭ヘンと呼ばれるといささか異議を唱えたいことが山のようにあるのだがね! いや、まあどうせ情報データはレポートにまとめる類のものだし、秘匿するレベルの情報も集まらなかったとも。

それにブルーは幼少期からの付き合いだ、つい甘やかしてしまう」
「ふうん、せいぜいそうやって足すべらせて死なないようにね」
「!?」

バンビエツタに自らの身の心配をされたようなことを言われて衝撃を受けた顔をしているベレニケと、彼の隣で同じくバンビエツタの正気を疑っている顔をしているジェイムズ。

なおブルーはブルーで「どうせ肉壁が減るからとか思ってるんだろうけどね」と内心を察していたりしており、ますます彼女の前から動くつもりが無くなった。ちよつと機嫌が悪くなったら爆裂必至である。

そんなわけでスつとアイコンタクトする蒼都に、ベレニケとジェイムズは顔を見合わせてから頷いた。そそくさとバンビエツタの手を引くブルーに「な、何よだからさつきから! ちよつと、そんなに積極的になっても爆破しかしいわよ!」と精神異常者がごとき発言。当然のようにスルーしつつ、彼は説明の続きを行う。

「ま、まあまあ……。で、アレはジェイムズ君がベレニケさんに現世のアイテムをコレクションしたやつ。今回最新号買って来たって言って、せっかくだからって僕も御呼ばれして一緒に読んだり見たりしてた」

「あたしも呼びなさいよ、そんな面白そうなの!」

「いやでも……。趣味に合わないとか詰まらないって飽きたら投げ捨てるか燃やすかするでしょ」

「あなた、あたしのこと何だと思ってる訳?」

(そりや頭バンビエツタなバンビエツタ・バスターバインちゃんですともねえ……。あ、柔らかい)

元の場所に戻ろうと手を引く蒼都の腕を抱きしめ、反対側に引っ張ろうとするバンビエツタ。くしくもブルー本人も異性を意識してい

ないはずだからこそその、その躊躇のない抱き着きに、少しだけ下心をもって癒され、そのままつい引つ張られる。

もつとも元の場所、彼女いわくの図書館へと通じる軒先公道の一角……と形容していいか分からないが、ともあれ西洋風建築のその場所の一角は、もはやもぬけの殻であった。

「何ですよ！ 何で逃げるのよ！ いくらあたしが美少女だからってその対応どーかしてるわよね、ブルーちよつとそこに直りなさい！」
「ハイハイ……」

そしてとくに何事かある前に、ブルー本日一回目の爆散であった。適当に距離を取って離れた後、彼目掛けて礫のような霊圧の塊を叩きつけて、そのまま爆破するバンビエッタのそのストレス耐性のなさこそが、蒼都がベレニケたちとつたアイコンタクトによるジエイムズのコレクション回収と撤収に通じるものである。

要するに危険人物への適正な対応というやつだ。

なおその爆散した死体を見て少しすつきりしたのか「ふう」と胸元を少し開けて汗を拭い微笑むバンビエッタ。そういうことを幼少期から彼相手にずっとやってるからイケメンが寄り付かないんだぞ、少しは自重しろ。

もつともその蒼都とて、いつの間にやら倒れ伏した下半身の上部に「銀色の物体」が集まり蛹のごとく固まり、人型となった後は何事もなく復活しているのだが。

「あなたのソレも相変わらず大概ね。まあ『Σ―鋼鉄―』の時と違って『I―不滅―』はちゃんと死んでる感じがするから、前よりちよつと楽しいけどっ」

「……………」

「何？ 何か言いたことでもあるの？ いいじゃないブルーってば、あなたたちよとくらい死んでも死なないんだから、少しくらいならあたしが殺したって」

「狂人の発げ……、何でもないからまた霊子の塊向けてこないで、ほら」

「ふうんだっ。そんなに嫌ならリルの所にも泣きつきにいけばいい

通っていたから相談に乗ったこともあるし、グレミイ、俺の上官がリルトット・ランパードの零す愚痴を聞いて苦笑いしているのを見ていたのもあってねえ」

「愚痴？　なんでリル、愚痴なんて零すのよ。せつかく栄えあるバンビーズの一員で、このあたしとずっと一緒に遊んでるのに、そんなの発生する訳がないわよね？　よね？　……ブルー、あたしの顔見てよ、どうしたのかしら？」

蒼都は顔を逸らし、シヤズ・ドミノはサングラス越しに白けた目を向けた。

なおバンビエツタ本人は「きよとん」とした無垢な顔であり、それがますます二人の感想に拍車をかけていることだろう。

「まあ、あなた達の話はわかったからもうどうだって良いわ。

行くわよ、ブルー」

「あ、うん。じゃあまた——」

「——おお、ここにいたかシヤズ。探したぞ」

「ああ、すまないねえジェロームくん」

(えええッ?!?!)

興味を無くしたバンビエツタが立ち去ろうとしたその時、シヤズ・ドミノの後方から霊子で編まれた大量の紙束を抱えて歩いてくる大男。見た目で言えば蝙蝠顔のゴリラとかそういうった怪獣の類のものであるが、そんな恵まれた筋肉質な体躯を持つ男が、よっちよっちと大事そうに大量に積まれた書類を落さないように運ぶさまは、どこかコミカルにすら見えた。

ただそんなことよりも、蒼都の内心を支配している動揺はそのコミカルさだけが原因ではない。

(デカい的人じゃん、何かすごい理性的な声してる……！)

蒼都の魂の大本に有る誰か、あるいは混じった誰かの前世の記憶とでも言うべきものが、その男、ジェローム・ギズバットのことを教えてくれるため、そのイメージと現在の本人との間のギャップに衝撃を受けていた。

彼は聖文字「R—咆哮—」の力でゴリラですら凌駕する大型怪獣

がごときオオザルへと変貌し、そのまま超高周波超高压の叫び声をもつてして一陣の体内（脳などがメインと思われる）へと直接ダメージを与える存在である。イメージとしては怪獣が前提であり、つまりは脳筋を想像していた。

だが実際の彼はというと……。

「すまないねえ、俺がグレミイから受けた仕事だというのに手伝わせてしまって」

「問題はないさ。一応、『聖文字を頂いた』時期は同期だろう。それにこれは俗人的な作業でもない。馬力が増えればその分作業が終わるのも早くなるはずだ」

「そう言ってもらえると助かるよ。……後で何か差し入れを持って行こうかねえ」

（すごい同期の会社員同士みたいな会話してる……！！　なんか凄いい仕事できそうな雰囲気してる……！）

その見た目に反して、騎士団内での挙措が明らかに理知的で思慮深いタイプの人間のそれであった。バンビエツタもあまり知らなかったのか、似たような仰天の表情でジェロームを見ている。

「ム？　貴女はバンビエツタ・バスターバインと……、そっちはブルー・ビジネスシティか。正式招聘おめでとう」

「あ、ありがとうございます……」

「それで、これはどういう状況なのだろう？」

そうは言ってもあまり語ることはない。適当にたまたま三人で話したということの説明すると、今度はバンビエツタが何の仕事をやっているのかを確認した。

ジェロームが質問を受けたが、答えたのはシャズ・ドミノ。いわく、先日グレミイが現世で大量に蒐集してきた情報データの整理作業とのことだ。何故大量なのかと言えば、ついでに移動中に蒐集した瀨霊廷の情報の抜粋などもあるからとのこと。……基本的には諸事情アリ幽閉されているグレミイであるが、一度外に出ればその一つのきっかけで多岐にわたり何でも出来てしまうのであった。

それはともかく、彼らの仕事を聞いたバンビエツタは、「ブルーあな

た、そういうえば死神たちの情報ダーテンって触れたことなかったよね？ 大変だわ？」と真面目な顔でお姉さんぶる。

「あたし、バンビちゃんは最強だからそういうの特に読まなくても全然大丈夫だと思うけれど、あなたはちゃんと仕事としてやった方がいいわ。せつかくだから手伝ってきなさい」

「いや、情報ダーテンはちゃんと読もうよバンビちゃん……」

アニメにおいて一部セリフの改変はあったが「斬魄刀に人格がある」という根幹設定すら滅却師側の集めた情報網があるくせに知らなかった原作蒼都の低OSR情けなさを思えば、ブルーの発言は当然のそれである。

そしてある意味驚異的なことに、はぐらかすでもなく文句を言うでもなく「ん、そうね」と軽く応じるバンビエツタだった。否定も言い訳もしないので、後日本当にちゃんと情報を読み込むと考えられる。「じゃあ、バズさんとあんまりケンカしないでね、バンビお姉ちゃん。………えつと、よ、よろしくお願いします」

「ああ、よろしく。グエナエル・リーよりは性格が良いと陛下からもお墨付きを頂いている、しっかり手引きしてあげよう」

「その仰々しい言い方では、かえって身構えてしまうのではないか？ シヤズ。レットビイフランク、気楽に構えておくといいぞ？ ブルー」

（やっぱり脳がバグリそうなんだよねジェロームさん………）

そんな流れでケラケラ軽く笑うシヤズ・ドミノと、見た目の恐ろしさから想像もつかないくらい優しい気にブルーの肩にポンと手を置いて微笑むジェロームに、困惑するブルーであった。

そして資料室に入ってからおおよそ3時間後。バズビーを揶揄い終わって散々爆裂事件を引き起こし、いつ以来かキルゲ・オピーから二人そろって説教を受けた後。「流石にそろそろ終わってるわよね」と気楽に図書館こと「情報ダーテンの管理室」まがいなエリアとなっている区画へと足を踏み入れ。大量の書棚が連なるその施設の奥へと足を踏み入れた瞬間、彼女の目のハイライトは死んだ。

「……………何、アレ？」

視線の先では。霊子で編まれた紙を分類してバインダーがごとき器子のバインダーのようなものに挟んでいる蒼都の周りで、女滅却師の集団。十人にも満たないが、聖兵ソルダートの中でもリルトットやキャンデイスの周囲にいる面々だ。流星に表での活動時は仮面を被っているものの、施設内においては別にそこまで縛りがある訳でもない（キャンデイスの所の聖兵など常に顔を出すよう彼女から言われている）。なお、誰も彼もが基本的に外見上はバンビエッタと年代が少し小さいくらい、つまりはティーンエイジャーあたりなので、それに囲まれている蒼都は外から見ればモテモテそのものに見える。

バンビエッタ、内心の何かが癩癩玉のごとく爆裂しそうな感覚に襲われ、実際に霊子を癩癩玉のごとく爆裂させるため編もうとしかけたが、しかしまだ今よりは幼かった彼のいつかの夜の言葉が脳裏を過り、一旦深呼吸。大丈夫、あたしは普通、あたしは普通。

自己催眠のように繰り返してから書棚の陰に隠れ、彼女はブルーと周囲の彼女たちのやり取りを見る。そもそも連中、バンビエッタが自分の部下を欲した際に逃げ出した女性滅却師であるのに、どうして蒼都にああもハイエナのように群がっているのか。

「あー、僕がどうして聖文字をもらったかといわれても……。そもそもそれがなかったらバンビお姉ちゃんに僕に目を付けはしなかったと思うけど、多分、陛下の気まぐれかなっていう……………」

「本当にそうでございますか?」「でもバンビエッタ様の、あの仕打ちに毎度よく耐えていますよね、尊敬します……………」
「アレやってください!」

アレ! ウルヴァリ〇!」

「そこまで直接的に言っちゃって大丈夫かな……………(※メタ)。まあ、いいけど。はい」

『おお〜!』

しれっと請われるまま、腕の仕込み鉄爪なども見せたりして、その気安さじみたものに何故かイライラするバンビエッタ。

「……………そんなところで何をしているんだ、バンビエッタ」

「!?!」

そんなタイミングで、控えめに声をかけてきたのはベレニケであつ

た。ブルーを見てそれはそれは恐ろしい顔をしていた彼女を、せめて少しでも抑えられればという兄貴心めいた何か働いたのかもかもしれない。

とはいえ、ぐりん、と振り返った光の消え失せた目のバンビエツタを前に「選択を誤ったかな……？」と冷汗が垂れる彼だったが、それでもまあ「同期」ではあるせいか、意外と当たられ方は強くなかったと思ひ直し、彼女とコミュニケーションを試みた。

「(で、アレ何なの？ 何であんなことになってるわけ?)」

「(あんなこととは……、ブルーのことか？ いや、そりゃあそうもなるだろう。女性滅却師は数少ないが、ブルーは割とモテる方だぞ?)」
「(えっ?)」

やはりこの世の終わりを目の当たりに絶望したような顔をするバンビエツタに、メツシユを変えた前髪をいじっていたからそんな顔など見ていなかったと内心言い訳をしつつ、ベレニケは説明を続ける。

そもそも幼少期から過酷な生活を送っていた(誰のせいかは言及せず)にもかかわらず特にグレルこともなく、騎士団内の滅却師としては異例なほど誰とでも仲良くなるうと接触する。まだ全員とはいっていないが、特に聖章騎士の間でも彼の評判はそう悪くない。

あの犬猿の仲のように囁かれるバズビーとハツシユヴアルトですら、その姿勢の前には結託して彼の生育環境の改善を相談し合ったりする光景が目撃されたりもしており、その「子育てセラピー」的な何かにより、騎士団内部の空気から若干だが棘が折られているのだ。

その基点となっている彼本人はしかし驕らず、成長してからは一般兵たちの相談も聞いたり、訓練をしたり仕事をこなしたり、あるいはバンビエツタの知らないところで率先して雑務を引き受けることもあったりと、その顔は意外と広い。

そしてブルーのメタ的視点も加えてもつと言えば、おそらく原作の蒼都よりも早くに「ヴァンデンライヒ見えざる帝国」に引き取られたせいか、その前後で今の人格となったせいか、視線が鋭き極まりない狂気のような形になる前の、チヨコラテ漬けの様なくりくりとした目つきそのまま固定された。

つまりは、特徴のないイケメンの完成である。

一般社会的には特徴のないイケメンだが、しかし滅却師の界限においては「性格に難がない」というのが（一部良識的な面々には）恐ろしくプラスに働く。

……なおベレニケ本人もその観点から言えばモテそうなものだが、彼自身はまた別な性格的理由から女性と長続きしないのだが、そのあたりは割愛。

「（同情票も多くはあるだろうけれど、希少価値というのは何事においても重要なものだ。うん、異論はないだろうバンビエツタ。……………バンビエツタ？）」

そして一通り説明が終わる頃には、バンビエツタの目には光が戻っていた。光が戻ってはいたが、しかしその表情は妙に見慣れないものであった。

帽子を目深にかぶり直すと、半眼で、しかし何かを決心した目をし。「……………まあ、あの子に『選ぶ権利』なんて当然ないけど、でも本当はそうじゃないってことくらい、あたしだって分かってるし。だったらあたしも、ちよつとは考えないといけないうってことよね」

「……………バンビエツタ、どうしたんだ今日は本当に？」

「別に、何も無いわよ。あたし普通だから。」

でも参考になつたわ。ありがとう、頭介^{?!?!}なニケ^{?!?!}

「だからその呼び方を……………、ん？　ん？　ん？　ん？　ん？」

突然感謝の言葉が飛んできて脳が理解を拒んだベレニケはさておき。資料整理中のブルーの元へといくと、「後^{!!}これだけだからちよつと待ってて」と言われ、そのまま素直に彼の隣でじつと作業を見つめ続けるバンビエツタ。彼女の登場と共に女性滅却師たちはそそくさと姿を消したが、彼女からすればそれは丁度よかった。

ジェロームたちに挨拶もそこそこに、彼女はブルーの手を引いて空中を舞う。

「バンビちゃん？　……………えっと、どこに行くの？」

「うち」

「うちっ？」

「そ、あたしんち」

「……………」

「……あ、そっか。ブルーってばお城からほとんど出ないから、知らないのよね。一応城下に家があるのよ。まあほとんど誰も使っていない隅っこの家をあたしが勝手に使ってるんだけど」

「バンビちゃん駄目じゃないのそれ……？」

思わずなツツコミを入れるブルーのそれを無視して、バンビエツタは彼の手を引き、本殿を出た後の区画を行ったり来たり。実際彼女が言った通り、人気のないエリアにて「バンビエツタちゃん参上！」とドイツ語で殴り書きされた門のあるごちんまりとした家へ。白い壁によってつくられたシンプルなそこは、中に入るとベッドと簡単な机だけのシンプルな部屋に、ボロボロの衣服……、器子と霊子の境界があいまいなそれだが、おそらく現世から持ち込まれたろうその衣服だけが、適当に散らかっていた。

どれも年代を感じさせるもので、さすがにそれを見たブルーも困惑する。

「……………えっと、生前のお洋服？」

「まだ死んでないわよっ。まあこっつて『境界が曖昧』だし、あんまり意味ないかもしれないけど」

（いや死んじやったらゾンビエツタちゃん不可避だから、流石にそういう訳にもいかないんじゃないだろうか……………）

「それで、一体何で僕を——むっ？」

そしてバンビエツタの方を向こうとしたブルーの唇が、塞がれた。何ら脈絡なく、目を開けたままバンビエツタは、彼の襟首を引き自らに引き寄せ、その唇を奪っていた。

デープではない、意外な程初心な、ただ触れるだけというそれは、今までの蓄積で一切「そのテの経験」を積みなかつた弊害か。

硬直したままの彼に、唇を離れたバンビエツタは言う。

「……………あなたがリルのところで寝た時に、何もなかったけど、ちよっと思つたのよ。ずっと一緒にいてくれるって言ってはくれたけど、あたし、あなたに対してそれを信じられる根拠がないって。」

根拠って言うより、メリットっていうのかしら。あなたがあたしと一緒にいるからって、別に得してるわけじゃないじゃない？ なのにあたしにばかり都合良いこと言われても、それじゃ駄目だよ」

(あつ、まともなこと言い出してるとてことはおビビリモードになっておられる……?)

「でも正直、どうしたら良いかわかんなかったけど、でもさっきのアレ見て気付いたの」

「さっきのって、ミニーちゃんの所の人たちとか？ ……って、何に気付いたの？」

「勢いで『スッキリする』ような関係になったら、お互いメリットしかないじゃない？ うん。結婚とかそういうのは考えてないけど、そういう欲求って魂魄でもしつかりあるし。」

うん、やっぱりバンビちゃんってば天っ才！

(典型的な依存症彼女みたいなこと言い出したぞ頭バンビエツタちゃん!!) というか至る結論がそれでいいのか頭バンビエツタちゃん!!) まあ原作でもスッキリすることには余念がなかったバンビちゃんなので残念でもなく当然の帰結ではあるのかもしれないが(そして死ぬ)。

ただブルー視点では、本当に何の脈絡もなくその話が出てきたため、脳と感情が状況に追いついていなかった。元々求めてはいなかったとはいえセンチメンタルさやロマンチックさの欠片もないその急展開である。面食らったのも無理はない。

そんな彼を軽く押し、ベッドに倒す。

「ただ、上手く出来るとは思っちゃ駄目だよ？ あたしだって経験ないんだし」

「あ、うん………って、えっと、その、えっ？」

「意味は解ってるでしょ？ そういう目で見るなって言った時、毎回あなたのがすくみ上ってたのは見てたし」

「いや、そんな十二歳くらいまで一緒にお風呂に入ってた話をされて

もさ、えつと……」

なお肝心のブルーは、色々と恐怖で震えがっていた。ガクブルというやつである。なまじ中の人にこういう経験が有った無かつたという問題ですらなく、相手がバンビエツタであるからこそその恐怖だ。それこそ今では殊勝な態度だが、何切つ掛けに機嫌が切り替わり凄惨な状況へと早変わりするかわかったものではない。それこそロマンチックさの代わりにスプラッタな光景がセットでお届けされるくらいに、彼女に対する信用がなく、また彼女に対する信頼があった。

「大丈夫よ。今日は全部こつちにするから。………受け止めてあげるから。だからあなたも、あたしの駄目なところ全部受け止めてくれないと、駄目だよ？」

「あつ、………」

ただそんな彼の理性も、上着を脱ぎ捨てたバンビエツタが彼の頭を「挟んだ」時点で、ゆるく、ゆるく、そして素早く溶かされ――

翌日、何故かリルトットがスタミナの付きそうなガツツリした肉とニンニクソースのハンバーガーを持ってきて「食え！」と投げつけたブルーと、それに何かを察したミニーニヤが彼をバンビよろしく自分の家へと連れ込むようなことが、あつたとか無かつたとか。

#012・番外編：WALKING WITH WARRING

「――石田雨竜、この世に生き残った最後の滅却師だ。」

私はこの者を――我が後継者に指名する」

変形した十字架、もはやアスタリスクのような形状の黒模様を白装束にあしらった滅却師、聖章騎士たちは、彼等の王であるユーハバツハの言葉にそれぞれ表情を変えた。

尸魂界侵攻後、帰還してからほぼ直後。とはいえそう間を開けるつもりはないと考えているがゆえ、最終決戦目前であると騎士団はそう認識していた。

それに先立ち滅却師を集めたユーハバツハからの訓示。それに身構えていた面々であったが故に。聖兵級ならいざ知らず、聖章騎士たちは否が応でもその意向によって左右される。

だからこそ突如、ユーハバツハが招いたその見たことのない顔を、違和感をもって見ていた。彼が、自らと同じ壇上にて紹介をし、同時に指名すると言う一連のそれ。

……まあその中で、特に興味のなさそうな面々もないわけではない。例えばリルトットならそもそも無表情のまま半眼、BG9は「ブオン」と形容できる音を立ててこちらもありアクションらしいリアクションをとらず石田を見つめたまま。

なおブルーこと蒼都に至っては、戦慄したような酷い表情のバンビエツタの方を横目で伺って、若干頬が引きつっていた。

「どうしてえ？」

「陛下の後継者……？ ちょっと、ブルーどういことよブルー」

「いや、普通に知らないからねバンビちゃん……」

そんな一部緊張感のない小声のやりとりはともかく。

「オイちよつと待てよ陛下！ そんなこと言つて、それじゃユーゴーは……、ツ！ ユーゴーお前……」

「……………」

食つて掛かろうとしたバズビーを抑える騎士団長、ハツシユヴァルト。

状況的にハツシユヴァルトを睨みつけるバズビーと、そんなバズビーにばつが悪いのか顔を逸らしているハツシユヴァルト。ブルー視点では若干だが何かが違う様な、そんな光景をユーハバツハは当然のように無視した。

その後、やはり異論をさしはさむことを出来ないような言い回しを取り閉幕。

談話室に集合した一部滅却師たちは、それぞれの感想や困惑をぶつけていた。

「全つ然わつかんねえ！ 何がどうなつてんのか全つ然わかんねえぞ！ あの眼鏡何なんだよ、誰か説明してくれよオ！」

「ま、まあまあ、バズお兄さん……（しゃべり方完全に一護みたいな感じになつて……）」

激昂して壁を殴るバズビーにどうどうとするブルーだったが、彼等の「裏の」事情についてはメタ的な意味で知っているため、あまり強く何か言うことはできない。せいぜい「壁殴ると手、痛めちゃうから」と気遣うくらいだ。

なおそれで「まあ、そうか」と一気に冷静になるあたり、バズビーもバズビーで彼に向ける微妙な感情の機微が伺える。

「説明か！ 誰がする、誰ができる？ ベレニケすら喉を潰され引きちぎられ殺された今、我ら騎士団で誰が陛下に真実を問いただせるか！」

『そもそも陛下は ザ・クエスチョン “Q—異議—” に限らずそういった概念攻撃が通用するとは考えがたいと、結論が出ている。故に答えられるのは陛下一人であるが、それで何を納得するのかと言う話だろうな。返答には期待できない』

「頭ヘンなニケ……、喉を引きちぎられて……………ツ」

マスク・ド・マスクユリンとすっかり姿形が細身になり声が渋くなつたB G 9。

その際にベレニケの名前が出たのに、一瞬ぴくりと眉が動いたバンビエツタは、無表情にブルーの背中を見た。

それを特に気にするでもなく、リルトットが情報整理も兼ねて口を開いた。

「説明もクソも、後継者って話自体が初耳だろーが。納得するしない以前にいきなり話出て来たんだから、俺たち全員トボけんのも普通だろトサカ野郎オ」

「リルお姉ちゃん、もうちよつと呼び方……」

「お前、この最っ高にクールな髪型の何に文句があんだよー！」

「別に無えよ興味も無え。『誰に』アピールしてえのかとかもな」

「陛下も、もう長くないってことかしら………?」

「ミニーちゃん?」

そんなことを言いながらバズビーの傍にいるブルーの腕を、不思議そうに微笑みながら引くミニーニヤ。身長はミニーニヤがブルーよりも20センチ近くは高いため、やや肩のあたりに胸が触れるような位置関係。もつとも彼女は気にせず蒼都の腕を抱きしめ、まるで「ブルーはこっちの陣営ですうからね?」と主張するような謎の圧がある笑顔だった。

なおミニーニヤがある程度引つ張った後は、ジジが「こっちこっち!」とニコニコ笑いながら自分の隣、キャンデイスの後ろ側へと誘導する。そしてそれを見て目を大きく見開いて口をゆがめたバンビエツタに、密かに趣味の悪い笑みを浮かべていたりした。絵面としては、椅子に座ってるキャンデイスをブルーとジジの二人で囲っているような、ちよつとした逆ハーレムめいた光景になっている。

なお、流石にそんな異様な人間関係については誰も触れたくないため、表面上は円滑に議題が進んでいる。

「キャンデイちゃん、いつもみたいにあの後継者クン摘まんでみたらあ? ブルーと違ってフリーだよフリー、今なら女王サマになれちやうかも!」

「人のことを売女みたいに言うんじゃないよッ！　そういうの狙うとか意味わからないっ」

「ええ〜？　ビッチじゃないみたいに言うじゃ〜ん」

「当たり前じゃんっての！　大体そういうのは、まず相手のプロフィールを教えてもらって、自己紹介しあって、お互い一緒に食事して話し合って、ちゃんと距離を詰めて仲良くなって、それで改めて――」

『確かに売女ビッチの誹りは不資格だと判断できる。正しく仲良くなっていくるな』

「そうよ？　キャンディは売女じゃないのよ、ただ恋多き乙女ってだけよ」

「バンビ、お前……………」

「乙女って年齢トシじゃねーけどな」

「リルちゃん、それ私たちみんなに言えると思うの」

「ま！　恋が多いってことはそれだけ尻軽なことにならないってことよね！」

「…………ちよつと感動したあたしが馬鹿だった！　バンビのバーカー、バーカー！」

「何ですって!?!　ちよつとキャンディ、バンビちゃんに向かって馬鹿とは何！　ジジも何そんなお腹かかえて顔下に向けてるわけ！　ブルーまで顔背けてるし」

―――（※大爆笑するジジ）

「はっはっは！　本音で言い合えるその関係もまたチームアップとしては好ましいと、スーパードヒーローがお墨付きを与えよう！」

「ひよつとして目エ節穴か、コイツ？」

（これ　は　ひ　ど　い）

原作よりもひどく緊張感が崩壊していた。カオスぶりに拍車がかかっているが、決して自分だけのせいだとは思いたくないとブルーは遠い目をして現実逃避をした。

なおジェラルド直々に現在の騎士団が、主に子育てセラピー的な何かによって少しだけチョコラテ的に緩和しているということを遠回

しに言われているが、ブルー本人はその意味を解釈できていなかった。

ちなみに「お前等平和で良いなあ……」とぼやくバズビーだが、これを平和と言ってよいかは評価が分かれる所であろう。ベレニケがいれば間違いなく「ええ……？」とドン引き必至である。なまじ彼女たちが加入してから百年には満たないだろうが、色々と慣れてしまった弊害だ。

そして、おそらくその普通の感覚が残っているだろうBGGは、うつすらと持っていた甲冑の内側のモノアイめいた発光を落して首を左右に振った。

「……………こんな場所で一体何をやっている。内容次第では防音くらいはしておくべきだろう」

「あ、ハツシユヴァルトさん」

「む？ ……………、嗚呼…………」

そして扉を開けて入ってきたハツシユヴァルトが普段通り冷徹な表情のまま室内を見渡すが、バズビーの何とも言えない目を見て、次にバンビーズがどんちゃん騒いでいる方を見て、こちらもバズビー同様にどこか疲れたような目つきになった。やったね！ バンビーズ周りのお陰で、バズとユーゴーに「今の」関係性でも友情と連帯感のような何か芽生えたかもしれないよ！

「何やってるかって言ったら、こっちの台詞だぜ？ ユー、ユー、ユー。」

俺はよオ……、陛下の後継者はつきりお前だっと思ってたんだがなあ。だから俺みたいなのは納得『したことにして』ここに居るんだがなあ」

「バズ…………」

「他の騎士団^{リッター}だっつて、その方が文句も無エだろ。なのにお前はどんなんだよ」

「……………寝耳に水だった」

「お、おう……………」

お互い、気まずい沈黙。ついでにその空気が場に伝播して、同様に沈黙。

陛下ちよつとボケてないよね大丈夫？　みたいなことをハツシュヴァルトがいなければバンビあたりが口走つていそうだ。実際、その理知を「ゆつくりと」取り戻したのはここ100年前後の出来事にあたるため、雰囲気は一緒だが割と言動にボケがあつたという認識が一部滅却師にはある。

とはいえ推測はつくがな、と前置きをし、沈黙を破つたのはハツシュヴァルト。

「だが、陛下の御意志が全てだ。我々ごときが口を差し挟む余地はない」

「余地はないってんなら、文句あるんだろお前。ちゃんとやってくれば良いじゃねえか、立ち位置的に許されんだろ？　……いやまあ、言つても無駄か」

「無駄だろうな。陛下がその気になったら」

「形無しじゃねえか、次期皇帝陛下さまよオ」

「そもそも意見が通つた試しの方が少ないさ、バズ」

「ナンか本当、ここ十数年仲良くて気味悪い」

しれつとリルトットがバズビーとハツシュヴァルトの会話に毒のある愚痴をぼそつと呟くが、それはさておき。二人の視線は「バタフライエフェクトじゃないよねこれも……」と内心冷や汗を流しているブルーを一瞥した。

なお一切ケンカ沙汰に発展しないため特に手を出すこともないアスキンは、バズビーたち二人の疲れたやり取りに見え隠れする感情の機微に「オシヤレじゃないの」と少しニコニコ。対して状況を遠方から見守っていたペペは「これもまたラツヴ……、気遣い思いやりのラツヴ……」とゲツゲツゲと笑っていた。

なおバンビーズも、リルトットとミニーニヤも二人の会話には集中して聞いている。気色悪いとは言ったがリルトットのあの二人の「ここ十数年」以前を知っているからこそ、ケンカに発展しない理由がわからず薄気味悪く観察。ミニーニヤは純粋に「仲良いなんて、あんまり知らなかったわあ」と興味津々といった形である。

そして話し合いに途中で飽きたバンビエツタが、いつの間にやら別

な扉を開けて退室。

原作知識的に嫌な予感を覚えたブルーが「ちよつと様子見て来る」と言い、それには何故かキャンデイスが「死ぬなよ」とだけボソッと返していた、

果たしてブルーが見たものは。

「アンタ。そう、ストレス『とか』色々タマってるから、部屋に来て。今すぐ」

「はい!?　じ、自分がでありますか……………!?　えつでもその…………」

原作でバンビエツタから声をかけられていたイケメン滅却師、細マッチョ系の彼、キャンデイスの聖兵が一人であった。騎士団に所属してからはいまだ二十年足らずと日が浅いが、しかし彼は（少なくとも外見は）極上の美少女からの誘いに、明らかに滝汗を流して躊躇していた。

躊躇と言うより断る前提で、しかしどう言葉を選んだら良いか迷いに迷っている顔である。顔は赤らめておらず青ざめて、一步勇み足になるどころか一步及び腰な姿が内心の全てを物語っているだろう。

何よ文句あるの?　と不機嫌そうに見るバンビエツタに、その視界（射程圏とも言う）に捉えられ得る他のキャンデイスの部下たち一同、揃いも揃って明らかに動揺していた。

そんな中、いまだキャンデイス傘下に入ってから日の浅い、唇にピアスをつけた、どこかチャラチャラした滅却師が「だったらオレ、立候補して良いツスカ?」と、下心ある顔で手を上げようとし、そして一斉に周囲から止められた。

「止めるお前、命は大事にしろツ!」「霊圧差じゃなくて本能で察つするんだ!」「せめて『兄貴』くらいの頑丈さを身につけて…………」「いや、兄貴って正式加入してからはよく血しぶき上げてるんじゃない…………」「シツ!　我々にとつてマスターは鋼のボディ、鋼鉄の男なんだツ!」「えつ、何、そんなに拙いやつなんスカね……………?」

「キャンディ、あなた達にどんな教育してるのよ」

腕を組んでぶりぶり怒る様は大層可愛らしいが、霊子が彼女の周囲で微妙に振動しているような気がしたブルーは間髪入れず間に割つ

て入る。……何故そんなものを察知できるかと言えば、こう、惨殺され続けた経験則で？ 事前モーシヨンのようなものを本能的に理解する能力をバンビエッタ限定で得たとみるのが妥当だろう。もちろん彼女以外には大して役に立たない類のものである。

「ブルー？ 抜けて来たのかな」

「いやバンビちゃん、普通にローシユブリア君たち皆死んじやうから自重してね？ ね？」

それはともかく、ブルーの登場に新入り以外の一同は「マスター・ブルー！」と声を上げて直立、からの敬礼姿勢である。特に誰に言われるまでもなかったが、しかし軍隊じみて動いた彼らに、ブルーは「お、お疲れ」と困惑気味だった。

「駄目だよバンビちゃん、そうやってイライラしたらすぐ人を使って発散しようとするの」

「えっでも……………、別にエツチなことかしないわよ？」

「より酷いよバンビちゃん……。良い思いもなく一発で斬り殺そうってことでしょ？」

「うん」

つまり、特に誘惑することもなく即殺宣言であった。

ナチュラルに日常会話のテンションで肯定する彼女。流石にこれを聞いた新入りも「あれ、ひよつとして地雷どころか核弾頭…………？」とそのバンビエッタ・バスターバインの頭バンビエッタぶりに気付く。「でも毎度、あなた相手だと流石にバンビちゃんの良心も痛むんだよ。出撃ちよつと前の訓練の時なんて一日中好き勝手したら、あなたつてばミニーの所で寝てたじゃない」

「そのレベルでやったら普通の魂魄は影も形も残らないからね…………？ 僕以外にもシャズさんとか、ジジさんとか、他にも色々いるし。受けてくれるかは、要相談だとは思うけど」

「あっちは嫌、顔が。あとジジってば女の子よ？ 流石に女の子相手にはやらないよ」

「えっ…………（ひよつとしてまだジジさんの性別、気付いていない…………？）」

何やら衝撃を受けるブルーと、やっぱり素直な子供みたいなきよんとした顔で会話するバンビエツタ。そしてその「やる」に当てはめる字が「殺る」であるとなると理解できた段階で、新入り滅却師もまた率先して庇いに入ってくれたブルーに向けて、敬意がこもり始めていた。「ま、いいわ。そういうことなら、あなたでスツキリしてあげるから。ついてきなさい」

「ハイハイ……」

「他は誰も来ちゃ駄目よ！ ……………あ、あと、一応『そっちも』するから」

「えっ？ あー、うん。大丈夫」

事情はわからないまでも、そんな会話の末に立ち去った二人に。新入りは先達たちを見て思わず一言。

「……………マスターは、偉大だな」

『それは本当にそう』

一同、声をそろえた迫真の首肯であった。

※ ※ ※

「あーあーあー！ もうまたこんなに汚して……………、って汚してつてレベルじゃねえぞ?! ブルーどこいった、原形欠片も残って無えじゃんかッ!!?」

「うっさい。ブルーの身体だったらここに……………」

「ちよつとバンビちゃん見せないでよ!? ブルーって小さい頃からかなりご立派なんだから！ 僕、照れちゃうもん！」

「きゃー！ きゃー！ きゃー！」

「落ち着けミニー、いつものことだろ。というかイチモツだけ残して他原形も無いとか本当、お前どうかしてんぞクソビッチ……」

「ま、キャンディちゃんと違って相手は一人だから純情かもしれないけどね〜」

「ジジお前、ケンカ売ってるの!? 買うぞ！ こっち見ろ、他探してもあたしが怒ってるのお前だけだしッ！」

きよろきよろとあたりを見回してさも自分がキャンデイスに怒られていない風を装うジジと、それに怒るキャンデイス。別に仏教徒ブッディリストと言う訳でもないが思わず両手を合わせてブルーだった仏さんに手を合わせドン引きするリルトットと、顔面蒼白のまま急いで周囲に散らばった「欠片」を集めて自分の手前に置いていくミニーニヤ。

部屋中が真っ赤とかさういったレベルですらないレベルで真っ赤を超えた真っ赤な有様のバンビーズの集合部屋にて事件は起こった。犯人は残念でもなく当然バンビエツタである。その本人は上半身裸なまま上着を着用するよりも先に、スカートの中に指を入れて「ん……♡」と何かを感じ入りながら、案外長く太いナニかを取り出してミニーニヤの手前に投げ捨てた。

肉片がある程度集まったからか、数秒置いて「銀色の繭」のごとき何かが一瞬で形成され、それが伸びヒトガタを形作ると、あつという間にブルーの姿に。全裸のその様を見てまたきやーきやー叫んで顔を絡めて手で顔を覆い隠すジジ（なお指の隙間からガン見）と、何故か生唾を呑み込むキャンデイス。

ミニーニヤは目が死んでるブルーに自分の上着をかけ、「大丈夫、もう怖くないですよ〜？」とタンクトップ越しに彼の顔を「挟んで」撫でていた。

それを見て「ミニーも早くなったわね、お掃除」と他人事みたいなことを言うバンビエツタ。そう言う所だぞ。

「終わって、話してる時だったの、ミニーちゃん……」

「はい……、はい……」

「落ち着いてくれて、もう大丈夫かなって思ったら、一瞬でバンビちゃん目の目が真っ黒に染まって……」

「はい……、……、今晚は私と寝ますか？」

「うん……」

体軀はもはやそんなレベルではないが、まるで幼児が母親に縋りつくようにミニーニヤの胸元に顔を埋めて肩を震わせるブルー。ガチ泣きだった。ガチ泣きであった。流石にミニーニヤも、冷静になった、つまりスッキリしたらしいバンビエツタに文句をつけた。

「もう！ バンビちゃん、せめて身体は残さないと駄目〜っ！ ブルーもトラウマになっちゃってるしい〜！」

「それはごめん、つい……」

「つい、でやるレベルじゃないじゃんかッ」

「仮にバンビちゃんをゾンビ化する機会があっても、血は絶対大量に与えないようにしよう」と

「お前の性癖はどーでも良いけど………、というか何でミニーとバンビが殺し合わないでどうにかなってんだコレ……」

困惑するリルトットの言葉通り、ブルーとかなりベタベタしているにもかかわらず彼女は彼女でミニーニヤに殺意や敵意を向けることはないようだった。

適当に上着を羽織るバンビエツタ。下着はどうやら「ついさっきの重大事件」があつた際、一緒に燃え散つたらしい。立ち上がり部屋の壁に自分の霊子を浸透させ、専用の引き出しを開けて可愛らしさの欠片もないシンプルな下着を取り出した。

「ま、ちよつと落ち着いたからバンビちゃんはもう大丈夫よ。頭良い話とかもできちゃうもの、うん。悩みはつきないけどね、リル」

「お前らの関係がどれだけ拗れて爛れても、俺は責任持てないから何も言わねーけど……」

「というよりバンビ、悩みって?」

「例えばこの帝国——もっと言うと滅却師の未来について、かしら」

もしあたし達が負けた場合何が起こるかとか、回避するにはどうしたら良いとか。

そのことについてどうやら真剣に考えているらしいバンビエツタに、ブルーを除いた一同はそろって目を見開いた。本当に、具体的な将来について悩んでいることであり、かつ自分たちにも関係する悩みであったことが、能天気そうなバンビエツタから放たれた事が意外すぎたせいだろう。

もつともブルーの方はと言えば、ミニーニヤの柔らかさ匂いで正気のある程度取り戻しながら、バンビエツタの発言を聞いた感想としては。

(要は陛下がボケボケなんじゃないかっていう恐怖と、ベレニケさんっていう身近な人が死んじやったことで「死にたくない」っていう恐怖が煽られちゃったってことだよね……。さっきもずっと「怖いよ！」「ずっと居て、傍に居て！」「何でもするから一人にしないで！」とか、泣き叫びながらだったしね……。終わったら「蒸発」させられたけど。

ちよつと今日はキャパオーバーだよね……。おもち、やわらか……)

直前まであったことを思い返し、そしてまた軽い狂気に触れたせいで白目を剥きかけていた。

#013. 地獄式荒波の魚釣り

「よオ、二股ヤロー」

「……………、ッ」

「うそうそ、冗談だよジョーダン。そんな死にそうな顔すんなって。俺が悪かったよ。」

「しかしミニーのやつもいきなり攻めに転じるたア思ってたが、たけどなく」

「いつそ顔色を青から土色にまでしたブルーのその様子に、からかい半分だったリルトットも苦笑い。背後でキャンデイスが「色々予想外すぎじゃんかっ」と引きつった顔をしていた。」

滅却師が「見えざる帝国」銀架城、いつものように一室にて、バンビーズのうち二人とブルーがいた。彼を揶揄してるのは、リルトットとキャンデイスの二人である。リルトットは長いスティック状の菓子をバリバリ食べており、キャンデイスは恋愛指南本……、特に修羅場に関する本を読んでいるようだった。

なお、その状況でブルーこと蒼都本人は表情が引きつっている。涙目を手の甲で拭ってから「僕だけのせいじゃないはずだし……」と誰にでもなく言い訳をしていた。

「ジジさんは『何か面倒くさい感じだし逃げよっ』とか言ってる居なくなっちゃうし、ミニーちゃん見たバンビお姉ちゃん凄く顔してたし……、ミニーちゃんもなんか今回は普通に受けて立ってるし……」

「そりゃ、見た目幼児の頃からなーんだかんだ初恋っぽかったからなあ、ミニーも。いくらバンビの奴と近かったからって言ったって、いきなり喰われたんじゃ黙ってねーだろ」

「あたし的にはバンビ、結構本気だったって方が意外なんだけど。ミニーはこれでもかっ！　ってくらいわかり易かったし、揶揄いがいがあつたし」

そう、一昨日に自分の中の何かを爆発させたバンビエッタによる、執着心と愛着と一人になる恐怖をこじらせた結果が故の肉体関係に発展。その翌日早々に何かを察したミニーニヤに、当日あっさりともちらも肉体関係に発展。その間にブルー本人は普段通り流されるままであり、どちらに對してどういった感情がどうというのがいま見えてこないというのが、バンビーズ残り三人の見解であった。「まあバンビお姉ちゃん、凄い怖がりっただけだから……、怖がりだから恐怖心を全部爆殺したいっただけだから」

「歴史に残る大犯罪者か何か……？」

「頭バンビエッタで良いだろ、頭バンビで。んで、ミニーのやつ何がどうなっただんだ？」

「リルお姉ちゃん……、えっと、マジの告白されちゃった」

「ミニーめっちゃ頑張ってるじゃんかっ！」

「おーおー、で結局付き合うのかー？　バンビ捨てるのかー？」

「正直、僕の意志がそこにあんまり介在してない気がする」

まとめるならば、ブルー本人はバンビエッタとずっと一緒にいるという約束をまだ小さい頃にしたことがある。それはそうとしてバンビエッタ本人から性的に好きと言う様な類の話はあがっておらず、それは手を出された際も変わっていない。

大してミニーニヤの方は、肉体関係に及ぶ前に初手告白を受けたせいで動揺し逃げる隙を失ってしまったのも原因だった。実際問題、バンビエッタのように頭バンビエッタの刑に処されることもなく、なんのかんのへ口へ口にされていけないのがその証拠だ。

そしてそんな案外元気なブルーと、彼の腕に抱き着きながら幸せそうな表情のミニーニヤをバンビエッタが見たのが今朝である。速攻で彼をミニーニヤから引き離し、口論、両側から抱き着いて綱引き、双方からの色仕掛け、などなど目まぐるしく展開した果て、現在二人は修練場で全力勝負中であった。

「バンビお姉ちゃんは好きだけど、そういう恋愛的な感じじゃないし……。」

ミニーちゃんは逆に『そう』見られてるとは思ってたから、ま

だ結論が出せないし……」

「本気で二股野郎じゃんかつ！ 早いところ結論だしなって、アンタまで頭バンビエツタになっちゃう前にッ！」

「俺らの所においてロクな男に育つわけねーだろオが、尻軽ビツチ。

ま、擁護してやんならコイツつてまだ、俺たちん中じや一番子供だからなー。環境が悪くて精神が全然育つて無エんだろ。魂魄の霊格的な成長率はともかく、ここ来てから30年ちよつとくらいか？ まー、見た目ばつか育つたつて中身が見合つてないつてことだろ。

それ言つたら、バンビとかジジも70以上はいつてるのにあの落ち着きのなさだし」

（周り周ってキャンデイお姉ちゃんとリルお姉ちゃんに飛び火しそうなんです、いいのかなその言い回しつて……。二人の方が圧倒的に年上だよ、バンビちゃんたちより）

ちなみにこれでも、リルトットら含めこの「ヴァンデンライヒ見えざる帝国」における星十字騎士団の中では若手も若手、ひよつこもひよつこの方である。トントン拍子で聖章騎士に上り詰めたB G 9なんて赤ちゃんみたいな扱いを最初されていたくらい、現世とこの場所での魂の経年というのは、色々と事情が異なっていた。余談だがB G 9はその人格の安定っぷり（というよりロボっぷり）のお陰で、ちゃんと舐められず大人扱いされているが、それはさておき。

さて、そんな話をしていると、「あー、嫌だなあ」と、珍しく甲高い濁声を慣らす誰かがカーテンを開けて部屋に入ってくる。ジジとジゼル・ジュエルだ。頭部の触覚がごときアホ毛が特徴的な相手である。

そしてジジは、珍しいことに「ちゃんとした」星十字騎士団らしい制服を着用していた。普段のように自前の服というわけでもなく、聖兵が着用しているタイプのものだ。ちなみにズボンタイプである。

珍しいものを見たとき、口をすぼめて「カワイイじゃんっ」とか言っているキャンデイはともかく、リルトットは半眼で、ブルーは微笑んで出迎えた。何を嫌がっているのかと言えば、呼び出しを受けたとのこと。

「騎士団長の所の、あの目がなんか怖い感じの女の人さん？ このあと謁見の間の方に来てってさ。ボク、とくに何もやらかしてないのにイ」

「おう逃げてばっかりだから最近はやオ、サボり魔常習犯」

「ハツシュヴァルトさんから呼び出してこと……？ 陛下もいるのかな」

「知らなくい♪ でも一人で来いとは言われてないからさあ？ ね

！ ブルーも一緒に行こうよ♡」

「あ、うん。いいよ、ジジさん」

「さっすがー！ 話がわかる弟をもってボクたちは幸せだあ♡」

きやびきやびした動きでブルーの手を取って胸元に運ぶジジと、それに特に何か思う訳でもなく微笑み返すブルー。あまりにもあつさりと話が決着しており、キャンデイスから「何でこんなに好感度高いのさジジって!？」と驚かれたりしていた。

ちなみに実際問題、キャンデイスとジジならジジの方が好感度が高かったりするが、そもそもキャンデイスも「ガキは趣味じゃないし」というままこの年齢まで来ているので、そもそもの接点が少ないだけだったりする。

それはともかく、特に何かある訳でもなく天井の高い廊下を歩く二人。急いで来いとも言われてもいないからこそであるが、ジジはジジで蒼都とは仲が良かった。

「リルお姉ちゃん、やっぱり一番人が出来てる気がする」

「リルもね、興味ないことは全然どうでもいいって感じだけど、結構義理堅いよね。ボクもバンビちゃんに引き連れられてバンビーズに入ったけど、すぐに同情して受け入れてくれたし。流石にボクも当時、ブルーほど酷い感じじゃなかったけど、リルちゃんに庇われてから扱いは大分良くなったかな。

ボクって可愛いからね♪」

ウインクしてくるジジに苦笑いを浮かべるブルーであるが、当然のごとくジジが「彼女」ではなく「彼」であることは知っている。原作知識様というだけではなく、幼少期に風呂で洗われた際に、そのこ

とは本人から話されていた。(なお水着着用済)

「もともとボクがちゃんと『男の子だった』頃にイ、バンビちゃんに目を付けられちゃってね。まああの時と今じゃ全然印象変わってるから、たぶん覚えてなかったと思うけどさ。色々、生身じゃ『男の子でいられなく』されちゃったんだよねー」

「……生前の話？」

「死んでないってば。バンビちゃんは、だけど。」

まあボクが『女の子になった』後、可愛い可愛いってこっちでも目を付けられて、騎士団で連れまわされたりしながら、ミニーちゃんが入る前はサンドバッグだったしねー」

「バンビちゃん『ジジは女の子だからそういうことしない』って言うだけど……」

「覚えてる訳ないよ、だってバンビちゃんだし？」

ただ、それはそうと、そんなバンビちゃんにもまともな春が来るとは……。てつきり適当な男で処女散らして、関係した相手全員ぶっ殺すような、リルちゃんが大っ嫌いなシステムが構築されると思ってたけど」

大体、バンビエツタが原作で見捨てられた原因と思われる理由である。そしてそんな精度の高い予想が立つほどに、バンビエツタの普段の振る舞いは頭バンビエツタだった。

「でもブルーもねえ。いきなりだったよねー。ま、全然気にしてないけど？ 全然気にしてないけど？ 全然気にしてないけどねー？」

凄いい気にしていそうである。もつとも蒼都も負い目を感じる訳でもなく、ただ苦笑いを浮かべるばかり。

「そういうのなら早く言っただけ良かったな。まあ、だからといってブルー嫌いになったりしないけど。ホント、ボクたちに囲まれて育ったにしてはすごい素直に育っちゃって、イケメンだし♡」

「でも、それはそうとジジさんってバンビお姉ちゃん好きって訳じゃないよね」

「うん、バンビちゃんなんて大っ嫌い！ 百回くらいぶっ殺しても足蹴にできる自信があるよー！ 死んでくれるまで好きになれる気が

しないもーんっ♪」

(すっごい満面の笑みで……!)

「でもバンビちゃんの顔と身体は大好き♡ いっそ一生暗い顔してお人形さんみたいに黙っていてくれたらいいのになーって、しょっちゅう思ってる」

(そのお人形さんってラブド……、いやゾンビエツタちゃんになるべくしてなってるよね、原作ってやっぱり)

残念でもなく当然な感想であった。

伊達に「死んでるトコ大好き」とまで言われていない頭バンビエツタである。

とはいえ、バンビエツタのまだ可愛げがあるような臆病すぎる一面を見ているブルーとしては、素直にゾンビエツタちゃん化を容認したくない気持ちもある。たとえそこに、ジジが今の「女性としての」ジジではない誰かだった頃の、おそらく相当にむごいことをされただろう「男性としての」彼の復讐が、そこに幾ばくか或るのだとしても。

「というわけで、バンビちゃんが死んだらもれなく僕の『ザ・ゾンビZー死者』でお人形さんにしちゃうから、ブルーも頑張りなよ？」

アレでまあ『前よりは』少しマシにはなったし、バンビちゃんも。両極端になっただけでも言えるけど」

「そこはまあ、うん。………それに、まあ、僕もジジさんとケンカみたいになるの、したくないし。そう言う所は好きじゃないけど、それでもジジさん好きだから、できればずっと仲良しでいたいから」

「おう？ おー、おー、おー、ちよつとキュンと来ちゃった。そっかー、ミニーもコレでやられたか……。こーゆーイケメンは無罪かなあ、まあ顔は前髪長くてよくわかんないけど」

「？」

そうこう話している内に、件の部屋へとたどり着いた。普段なら陛下ことユーハバツハがその奥の椅子に鎮座しているところだが、今は姿が見えない。ブルーこと蒼都の中の人は「嗚呼、今『眠ってる』ってことか」と色々何かを察しているが、それは話の大部分に関わらない。

リルいわく「騎士団長の腰巾着」である例の側近の女性は、彼等を部屋に入れると戸を閉める。と、がちやりと外から門で施錠されたような音が鳴った。

「えっ？ ブルー、何か嫌な感じがするけど。この間みたゾンビ映画みたいにさあ」

「嫌な予感って言ってもアレじゃないかな。ここ（見えざる帝国）だと割と平常運転じゃない？」

「そんなのバンビちゃんだからー！ ブルーってキルゲさんとかロバートお爺ちゃんに情操教育してもらってたけど、それでもバンビちゃんの影響強すぎない？ ミニーも男の趣味が悪いのかなあ」

「自覚はあるって、告白の時に言われた」

「言われちゃってたかあ……」

精神年齢の低めなブルーと、マイペースを崩さないジジの二人が絡んだことよって、閉じ込められた室内にて膨れ上がる霊圧など完全に無視した、緊張感のない空間がそこにあつた。形のない恐怖などで胸は焦がれないのだ、お陰で勇氣すらないのである。サツバツ！

ただそんな状況の二人に関係なく、事態は展開する――

―具体的には、二人の上半身が急に振じれ初め、同時に後方に折れ曲がり、否、「折りたたまれ」始めたことだ

「ちよつとー！ー！ー！ ブルーー！ー！ー！ 何これ何これー！ー！ー！

痛いんだけど、泣いちゃうよボクー！ー！ー！」

「僕だつて知らないよジジさーん!」

（でもこの概念攻撃っぽいけどそうじゃない攻撃って、「左手」の人……、あつ、息が……）

ことここにおいても全く緊張感がない二人に、どこからか「コノフタリ……、ダイジョウブカ……？」とくぐもった声が聞こえてくるが、それにリアクションを取れるほどの余裕が二人にはない。

なんならねじれがさらにひどくなり、ついには首すら180度回り

始めていた。そろそろ呼吸器やら何やら色々大変なことになっていくブルーと、それでもいまいち余裕のあるジジである。「あつこれボクが頑張らないと駄目なやつかなー？ ブルーも死なないにしたって、復活までラグありそうだし」と、そういう言いながら遂には「ねじ切れ」「落ちた」首だけで、一言ぼそりと呟いた。

「――ゲヘノエル神の眠り」

立ち上る紫色の光の柱と、そこから伸びる更なる光の十字。数秒後に晴れたその場に立っていたのは、骨の様な、しかしどこか頭部のアホ毛も思わせるような、シンプルな光の羽根を背負ったジゼル・ジユエル本人であった。

「疲れるからあんまり使いたくないんだけどなー。まあこの状態なら多少『干渉できるし』、ブルーちよつと待つててね〜！」

言いながら唇を噛んだジジは、そこからにじんだ血を唇にまとわせ、先ほどのジジ同様に首がねじ切れそうなブルーへと口づけるようにして飲ませた。

バンビエツタやミニーニヤがいれば発狂ものの光景であるが、特に本人は重要視していない。

そのまま体内に送り込んだ血を介し、ジジはブルーの全身に浸食していた「何か」を、その接続を「本体から切り」、死なせ、そして「操作した」。

霊的にも酷くグロテスクな音を立てながら全身が裂ける様になり倒れるブルー。もつとも今回はまだ「損傷が軽い」せいかな、銀の繭まですり潰さずともすぐさま復活する。もつとも意識がまだ戻っていないのでもいいことに、倒れたブルーを膝枕してそのほつぺたをツンツンするようないいことか、どこか恋人めいた行動をして遊び始めるジジ。やはりとすべきか、バンビエツタやミニーニヤには見せられない光景である。

と、丁度そんなタイミングで扉が開かれた。向こうには例の側近の女と、騎士団長たるハツシユヴァルト。そして背後にプカプカ浮かぶ「フードで覆われた」「二頭身のような」何者か。フードの下はどんな顔をしているかわからないが、とても人間らしいシルエットをしている。

るとは思えないものであるが、そんな相手三人を見たジジは「ええ………」とドン引きしているようだった。現在進行形で何をやってるんだお前とリルトットがいればドン引きされるような行為をしている本人によるドン引きである、ダブルスタンダードの器が違った。

「今のつて、そっちのフードの人の能力だよねー、ですか、騎士団長」グラントマスター

「あまりお前達と話すようなこともないだろうがな。一応、挨拶を」

「ウン。……ペルニダ・パルンカジャス。チョットダケ……、タメサセテ、モラツタ」

「試させて?」

「これから同僚になるかもしれないからと、実力を見ておきたいという話があったからな。ブルーは……、巻き込むと言っただろうがペルニダ」

「オオ………、ユーハバツハ、ミタイナ、フウカクダ」

ギロリと睨むハツシュヴァルトに軽い応対をするペルニダはともかく。同僚? と首を傾げるジジに、ハツシュヴァルトは説明を続けた。

「神赦親衛隊シュツツシユタツフエル、陛下の親衛隊の新たな一人、その候補にお前の名前も連なっているのだ。ジゼル・ジュエル」

「ええー……!?!? 何でつ、です!!?」

「セイカクニハ、アスキン・ナツクルヴァール……、ソシテ……、キミサ」

いまいち選出理由がわかっていないジジだったが、ブルーに意識があれば多少なりともそこに何か類似性ののようなものを見出したことだろう。

ユーハバツハ直属の聖章騎士は、現時点で三人。ペルニダ・パルンカジャス、ジェラルド・ヴァルキリー、リジェ・バロ。ここにアスキンかジジが加わるとなると、それぞれの得物こそが、その変遷こそに何か存在する共通項——素手のみから始まり、剣、重火器、そして加わるのが、致死の毒か死の生物兵器。そのいずれもが、人が扱う武器の、戦争の形態の変遷を負っていると。

とはいえ、そのことに気付くわけもなく。またハツシユヴァルトも「強制はしない」と断りを入れる。

「あくまでも候補だが、最終選定がお前達二人になっている。とはいえ本人の希望も聞いておくべきだと、私が陛下に打診をした。親衛隊であるならば、本人が望まない形でいるのはそもそもが危険因子となるだろうからな」

「うわあ、危険因子とか言っちゃっていいのお……、です？」

でもまー、そういうことならボクは断りたいんですけどー」

「ソノチカラハ……、ジツサイニ、キョウリヨク」

「別に〜？ 陛下の力になりたくないって感じじゃないんですけどーどー、なんだかんだ『今の生活』が楽しいんで。それに……」

膝枕をして眠ってるブルーの、やや麗されたような顔を見て。その頬をなでてから、舌なめずりを一つ。

「……………ブルーのことも放って置きたくないので♡」

「ソ、ソウカ……………」

「……………」

ペルニダはともかくハツシユヴァルトが壮絶な今にも死にそうな顔をしているのに気づかず、ジジは楽しそうにブルーの頬をまたつきだし。

「……………ハッ!? 何か今、ブルーが凄い頭ヘンなことに巻き込まれてる気がした!」

「何ですう〜〜〜〜、それえ!!」

訓練場で聖文字だけを使って殴り合っている二人の女子のうち、頭がおかしい方が何か直感で感じ取っていたりした。

#014. 独裁と癩癩と嵐の前

「お邪魔するわあ。ブルー、今暇ですう？」

「——よっ、ほっ。……あれ、ミニーちゃん」

ヴェルトリツヒ

聖章騎士として正式に騎士団入りしたブルーこと蒼都。その際に供された私室は未だ私物がない。以前の生活においても服以外の私物らしい私物は、任務に必要なもの以外は持っていないのだが、おかげで未だに部屋の印象は真っ新に真っ白のまま。そこでブルーは上着を脱ぎ、拳法の型とも素振りともつかない動きをしていた。腕には靈子兵装たる狼の顎が両腕に上下で形成され、その先端からは三つの鉄爪のようなものが伸びている。

そんな彼を見てミニーニヤ・マカロンが一番最初にしたのは、まず何よりも彼の部屋の戸を閉めて鍵をかけることだった。

「ミニーちゃん？」

「ええ、その、別にへんなことはないけれどお、今のブルーをバンビちゃんに見せたら凄いことになっちゃいそうだから、入って来れないようにい、ね？」

………せめて上は何か着ないかしら、私もちよつとドキドキしてきちゃうの」

「タンクトップ着てるよね」

「そう言う問題じゃないけれどお〜(困)」

ミニーニヤはそう言いながら少し拗ねたように唇をとがらせ、しかし顔はどこか赤くなりながらちらちらとブルーの方を見つつ、両手の指先をツンツンと突き合わせていたりした。高身長 of 彼女がそんなあざとい程の乙女チックな仕草をしても他の滅却師なら妙な威圧感を感じるものだが、生憎とブルーはそうでもない。

お互い幼少期の幼児期から騎士団で育ったような関係なのだ。ミニーニヤの方が年上で自分よりはるかに早く大人の姿になったから

とはいえ、ブルーにとっての、当時の小さな女の子だった印象が消える訳ではない。

(それに何と言うか、原作よりも少しキャラが違う気がするし……。これもバタフライエフェクト的な何かかな。まあよく面倒事はスケープゴートされるけど……。バンビちゃんに比べれば可愛いものだし)

原作より軽減されているとはいえ彼女もそれなりにアレな部分はあるが、相対的にバンビエツタに比べればはるかにマシという結論が出る時点で、今日もブルーは平常運転だった。

なお色々言いながら、ミニーニヤは持って来たバケツト(真っ白)の中から都合よく持っていた真っ白なフカフカタオルで、ブルーの顔や体を拭く。時折ちよつと目を大きくしたり、唾を飲んでいたりしているのを見なかったことにして、ブルーは彼女に何の用事かと問い直した。「要件が特にあるわけじゃないですけどお……。一応独り暮らしだし、どんな感じになってるかと思ひましてえ〜」

「どんな感じも何もないと言うか。でも、えつと、てつきりバンビちゃんに『あなたの部屋なんてないわよ!』って言われて没収されると思ってたから、色々用意してなかったのはあった」

「それは確かに、私もびっくりですねえ〜? (謎)」

ブルーとミニーニヤの言う通り、バンビエツタは蒼都の幼少期に「あなたのものはあたしのものよ!」と言ってブルーの私物を取り上げて、少し遊んでは興味を無くして爆破を繰り返していたこともあったりするくらいには、彼の扱いが雑である(あまりに酷すぎたためキャンデイスがそれは止めに入った)。その時の経験もあってか私物をあまり持つことのないブルーであったが、その時の経験もふまえて色々予想していた流れである。

しかし実際は何が起こったかと言えば、特に何か言うでもなく「ちゃんと掃除はしなさいよー!」くらいしか言わず彼の私室については、話が終わってしまった。バンビエツタの今までのあれこれを鑑みて、あまりにもまともな発言である。これにはリルトットを除いたバンビーズの面々一同目を見開いて二度見し、ブルー本人も一瞬何を

言われたのか意味を理解できず硬直したりもした。

そして、そんなバンビエツタとブルーを賭けた死闘を繰り広げていたミニーだったが、結果がどうなったかをブルーは（なんとなく怖くて）未だに聞けていない。一つ確かなのは、ほぼ一日おきに二人が交互に自分にべったり「仲良く」することくらいだ。

「それで、ブルーは何をしてたんですう？」

（あつ可愛い……）

ブルーの隣に寄って人差し指を立てて頬に当てて頭を傾げ、少しだけ唇をつんとしたきよとんとした表情と言えば良いか。意図的にやっている天然なのかはともかく、ひたすらにあざとさを盛りに盛った仕草であったが、そんな彼女の動きに少し癒されつつブルーは爪を「体内に」仕舞った。

「この間、ジジさんと一緒にハツシユヴァルトさんと話す機会があつてさ。その時、ジジさんが帰った後に完フォルシユテンディッヒ聖体の話とか聞いてた」

「完聖体のお話？」

「うん。何かヒントになればつてことできさ。」

ミニーちゃんは最初から使えたみたいだから聞くのもアレかなって思つて聞かなかつたし、バンビちゃんは何か怖いつていうか、嫌がりそう」

「前に聞いた時にすごい顔されたことありますう」

「あつ、やっぱりそうなんだ……。それで、リルお姉ちゃんとキャンディお姉ちゃんたちは面倒がつて話してくれないし、ジジさんは多分地雷だから」

「あつ、それは知らなかつたですなえ」

バンビエツタとジジは何かしら過去に地雷が潜んでいそうな話題になりそうで、残る三名も聞くのが難しい。となれば他の誰かに聞くのが適当という話になるのだろうか、そこであえてハツシユヴァルトに聞きに行くあたりが、ブルーのブルーたる所以である。……具体的に言うとなら「何であたし以外からそんなこと教えてもらおうとしているの！」とキレたバンビエツタが何かやらかそうとしたときに、それが出来ない相手へと情報収集しに行ったというのが正しいといふべきか。

なまじ話したくないことだからこそ、それを重要イベントととらえて自分の絶対性が損なわれることに恐怖を感じそうだなー、という見立てである。

「それでえ、能力の練習してたのかしら」

「練習と言うよりは、『切り分け』がどこなのかなって」

「はあ……？」

上手くは説明できそうにないんだけど、と言って話を濁した彼の脳裏には、先日ハツシユヴァルトから見せられた、ある意味特大の秘密が回想されていた。

『——身代わりの盾』
フロイントシールド

そう言いながら、ハツシユヴァルトは帯剣した剣から取り外した「B」と弓を模して描かれた、古いバッジなのかコインなのかというものを掲げて、その手に「盾を顕現した」。滅却師の霊子兵装らしい意匠が施されたそれを見て、素直に驚くブルーへ、ハツシユヴァルトは判り辛いが少しだけ目を細めた。微笑ましく思っているのだろう、と一応そう判断したブルー。

『これは私の能力に直接紐づいた武器だが、決して私の聖文字シユリフトから派生したそれではない』

『えっ？ えっと、滅却師の礼装ではある、んですけどね』

『半分ハフはそうだ。そしてもう半分は異なる——これは完現術フルプリンクという技術をベースとした武器だからな』

いわゆる原作知識を持っているブルーからすればそれは既知の情報であり、強いて言えば「ポテト（※ハツシユヴァルトのファン俗称）のそれって、そっち由来だったのがこの世界だと確定か……」というレベルの話でしかなかったが。しかし、あえてその話をブルー本人に直々にするという、その事実一つをもって大層驚いた。

なお、続けて「皆には内緒だぞ？」とウイंकをしてしーつとジェスチャーしたお茶目っぷりもさらに衝撃を受ける原因だったりするが、ハツシユ本人にその自分の行動がどうとられるかと言う自覚はなかった。

『詳しく語るのは避けよう。「余計なことを知りすぎていると」、陛下

からまた期待されかねない。その割に陛下はお前のことを、雑に扱われる。……………もつと状況改善を願い出ても受け入れないくせにな』
『えつと、それ言っちゃっていいんですか？ ハツシユヴァルトさん……………』

『この程度の愚痴は陛下もお許しになられる。お前がたまにする陛下の物真似も、以前、遠くから見て笑っておられた』

『ええ……………』

羞恥とちよつとした寒気に襲われるブルー。あのユーハバツハがそういうので笑うのとか一体何を考えているのかと言う正体不明の恐怖に襲われていた、バンビエツタの下で鍛えた「生命の危機」に対する耐性でもって、表情が引きつる程度にリアクションはとどまった。

そしてハツシユヴァルトは続ける。ブルーの能力も、その「ジ・イモータル I―不滅―」に限らず、もう一つ異なる能力が入り混じっていると。『以前の「シ―鋼鉄―」ツァントウ」でさえ、お前の能力には不可解な点があった。それを鑑みるに蒼都、その身にも何かしら完現術なり、それに類するものが眠っていると考えるべきだろう』

『……………？ つあん……………？ あっ僕の本名か』
『……………』

何も言わずにポンポンと、自分よりやや小さいくらいの身長 of 彼の頭を軽く撫でてから、哀れむような目をやめてハツシユヴァルトは説明を続けた。

その最後の部分だけを、ブルーはミニーニヤに伝える。

「聖文字の能力と、異なる能力、その二つが僕に存在して、現在は同時に使用してしまっている。だからその境目を見つけて、切り分けることで、また新しく見えてくるものもあるだろう、って感じだったかな」
「確かにブルーは、鋼鉄時代も何故か『死ななかつた』ですねぇ。よくよく考えてみると、鋼鉄になるだけじゃバンビちゃんの「ジ・エクスプロード E―爆裂―」の『靈子浸透による爆弾化』までは防げないし、その割には五体原形残っていたしい」

「そうだね。…………昔はそれでよく、ミニーちゃんに盾にされたっけ」

「そ、それは！ 私だってまだ『Pーカ』^{ザ・パワー}を使いこなせていませんでしたしいく！（泣）」

「昔って言うと、あの時にプレゼントした枕ってまだ使ってくれてるんだったね。それは、ちよつと嬉しかった。ありがとう」

「ひう……、ふ、不意打ちはちよつと反則ですう」

「んー、そんなに格好良いこと言ってる訳でも、そこまでイケメンって訳でもないと思うんだけどなあ……」

実際問題、原作と比べて目つきという特徴が無くなってしまっているので、モブのそこそこ顔立ちが整っているキャラ程度の印象しか残らなかったりする。

前髪をいじるそんなブルーの隣に「距離を詰めて」座り、ミニーニヤは「そう言う問題じゃないと私思うの」と、これまた人差し指を唇近くの顎にあてて、頭を少し傾げる仕草。可愛い。そしてあざとい。

「刷り込みかもしれないけどお、安心感みたいなものがあるの」
「安心感？」

「この人なら受け入れてくれるだろうしい、何かあつても一緒に頑張ってくれるんだらうなく、みたいな感じかしら。それに、『護ってくれる』んでしよう？」

「それはまあ、うん………、うん………、空襲とか超絶即死レベルでもなければ………」

「バンビちゃんやジジみみたいなサド超えたことは言わないもの、私。

でも、見栄を張らないけど頑張ってくれそうなどころはくく、大好きっ」

遠い目をし始めたブルーにくすくす微笑み、ミニーニヤはバゲットから何か取り出した。サンドイッチである。ボイル野菜にベーコンとハム、トマトなBLT風の、それなりに厚みがある豪華さだ。具材の内容が豪華というよりも、しつかりと作り込んでいるという意味での豪華さは、どこか家庭料理らしさを思わせる。

「昼食には少し早いけどお、食べましよう」

「えっ？ あ、うん。……うわ、普通に手作りだ」

「キャンディちゃんに教わったの。上手に出来てると思うわ？ 特

にソース」

「手作りソース……！ あ、でもそういうえばキャンディお姉ちゃん、一番そういうの上手だったっけ……。リルお姉ちゃんもそつなく熟すけど、レシピ見ながら」

伊達に何人もの相手と色恋を重ねていない、キャンデイスの意外と女子力の高い一幕はさておき。あーん♡ したり、あーんし返したりと、バンビエツタが居れば目からハイライトを失い齒ぎしり不可避の光景を繰り広げながら、二人は談笑しつつ昼食。『見えざる帝国』においても数少ないレベルでの、あまりにも平和な風景であった。

「——ふんむ。吾輩こと『スーパーアスター』に頼るとは、中々人を見る目があるぞブルー・ビジネスシティ！ ハッハッハ！」

「いや、僕とミニーちゃんが廊下で話してたらなんかぬつと生えてきて無理やり修練場まで連れてこられたんだけど!? ミニーちゃんも何か言って……。あつ居ない、またスケープゴートにされた……。」

「何、照れることはない！ ジェイムズ、鍛錬のゴングを鳴らせ！」「ハアイ、ミスター！」

そして、カーン！ というジェイムズが鳴らしたゴングの音と共に、ブルーの上半身と下半身はサヨナラバイバイした。昼食後、誰かに相談できないものかと二人して話しながら移動していたところ、唐突に出現した『S—英雄—』マスク・ド・マスキュリンと遭遇したのが運の尽き。あれよあれよという間に修練場に連れて来られて、いつものまにか彼が相談に乗る（という体で殴り合いをする）流れに。

ちなみに蒼都の場合、以前の鋼鉄化の場合はマスキュリンの一撃で沈むことはなく、というよりそもそも全身金属になるので粉碎すらされずに耐久していたのだが、聖文字覚醒後は金属化がオートではなく再生特化の能力となっているため、今の一撃で腹部が粉碎され何処かへと下半身も飛び去ってしまった。どさりと落ちるブルーの上半身だが、この状態でも案外ブルーは余裕そうである。血を吐くこともなく、だらーっと五体を投げ出し、遠い目をして乾いた笑いが漏れてい

た。

「これでもバンビちゃんよりマシだからなあ……、追撃して頭潰してこないし」

強く生きろ。

そんな形で相談する間もなくブルーを一撃で倒してしまったマスキュリンは「そういえば『何を』相談したかったかと言うのを全く聞いていなかったな……、^{スーパースター}『Sー英雄』」一生の不覚！」などと宣い、途中でブルーを身代わりにしてしれつと逃げ出していたミニーニヤの追跡に走り、この場から消え去った。カートウーンアニメのようなデフォルメされた超人っぷりに「これが理想のスーパースターでいいのかなあジェイムズ君……」などとぼそつと呟く蒼都。

そんな彼の下半身を、小さな背丈で引きずってくるジェイムズ。服装は聖兵のものであるが、いかんせん体格にそのデザインが合っていないため、服に着られているように見える。とはいえ年齢は決して幼児でもなく、小さいオッサンと呼称される程度には年齢不詳なスキンヘッドの男がジェイムズであった。

「うんしょ、うんしょ……、ふい！ これで大丈夫？ ブルー」

「あー、ありがとう」

「いいってことですよ！ ブルーはボクのお友達ですもの！ ウ○ヴァリン！」

「確かに能力的にはちよつと似てると言われて違和感はなかったけどね。ジェイムズから見せられたアメコミでちよつと教わったし。

……でも、マ○ベルよりD○の方が好きなんだよね？」

「いえいえ！ キャラクターはスーパ○マンの方がシャザ○より好きですが、ストーリーはデ○ドプールの方がシンプルで超人的でザッツオールライトですよ！」

「拗らせてるなあ……」

そんなアメコミ談義はさておき。ジェイムズによつて胴体にくっつけるようおかれた下半身は程なく接続され、もう特に傷ついた状態ですらなく元通りである。陥没したはずの腹部はまだ若干「銀色が抜けない」が、それとて数分もあれば元に戻るだろう。

ほえ、と幼児の様な声を上げながらそんなブルーの再生能力を観察するジェイムズ。

「これはボクの『S—英雄』^{スーパースター}には適用できないタイプの能力ですね……。モ○ビウスの感じですよ」

「治り方だけでいうと、それこそ俺チャン的なアレな気もするけど。それこそ本家ウ○ヴァリン程の回復力には見えないし」

「いえいえ、ブルーのことですからきっと大丈夫ですよ！ あんな『死の女神』みたいなのに可愛がられていているんですから！」

「その慰めは何一つ慰めになってないよジェイムズ……。つて、『ボクの『S—英雄』』？」

「アババツ!? な、何でもないですよ！」

警戒心が緩んでいたせい何か致命的なことを口走ってしまったジェイムズである。慌てて誤魔化そうとするが、ことこれに関してはブルー個人のみにおいて問題はなかった。

原作知識からして、彼はマスキュリンとジェイムズ両者の関係を正しく理解している——すなわち、真に『S—英雄』^{スーパースター}の聖文字を持っているのが、ジェイムズの方であるということ。

ジェイムズが思い描いた理想のヒーロー、それを作り出すことこそ『S—英雄』^{スーパースター}の能力。故にマスキュリンは、ジェイムズが居る場においてほぼ無敵の超人たりえる。実際問題、バンビエツタの『E—爆撃』^{ジ・エクストロード}の雨霰すら正面から受けて、本当に身体へ傷一つなく立ち上がるのは彼くらいなものだ(ジェラルドですら多少は焦げる)。もれなくバンビからは自分を殺しうる相手⇨抹殺対象の一人的な扱いを受けたり受けなかつたりだが、暖簾に腕押しなのはブルーの内心だけの秘密である。

そして、そんなマスキュリンに首根っこを掴まれて、ミニーニヤがスカートを押さえながら「ひーとーさーらーいーいいいッ！」と涙声を上げていた。「ふんっ！」と投げ捨てられた彼女は、ブルーたちとは反対方向の壁に軽く激突。ぶつかって痛いくらいの威力に調整されているあたり、その妙な器用さは流石に『S—英雄』^{スーパースター}というべきだろうか。

「何で私をまた連れて来たんですう〜！　せつかくブルーが庇ってくれたから逃げたのにいッ！」

（ミニーちゃんつてば過去の改ざんなんてしようとしちゃって……。実際言ってくれば庇わない訳でもないけど、どうしてあの子はあの子で何も言わず僕を生贄に捧げて逃げ出すんだらう）

「その肝心のブルーも既に話せない状態となつては、いささか『スーパースター』
『Sー英雄』』としては片手落ちである。相談をしに来たというのなら、さあ話すと良い！　ただし答えるのは拳になるがな！

幼気なブルーをあのような目に遭わせて平然と逃げ去るその性根、この吾輩が叩き直してくれようッ！」

「言つてること滅茶苦茶じゃないですう〜!?　もうっ、――

――『神の独裁』！』

実際ブルーを一撃でボロ雑巾にしたマスキュリンの発言の意味不明さにキレ返すミニーニヤ。実力差を埋めるためにか完璧体まで使用している。そんな彼女たちを見ながら「ジエイムズ君的にあの発言つていいのかな、あんまりヒーローっぽくないけど……」と思いなから横目で彼を見るが。ジエイムズはむしろブルーの方を見て、「相談事ならむしろボクの方が乗りますよ、ヘエイ！」と両手を叩いて楽しそうにしていた。

まあ、実際問題妥当な人選ではあるだろうが、それにしたつて、それにしたつてである。

ブルーとジエイムズが話し合っているのすら聞こえない程に、現在のミニーニヤとマスキュリンは拳の応酬をしていた。

「ほう……、この吾輩の正義の拳を受けてなお立ち向かえるか、あの悪魔の様な女が率いる悪徳の巣窟といえど、善なる心は残っているというんことか！」

「バンビちゃんだけが頭一つ抜けてヤバいだけつて私、思うの……つて、全員クズつて言ってますねえ！　しかも私のブルーの前で！」

許しませえん――『一〇倍掌握』！』

「ぬうん!?!」

ミニーニヤの背部に展開された光の羽根から、ハート型の光が彼女

の目の前に集まる。その数は彼女の宣言通りに十。それらをまとめ
て右手で握りつぶすと、一瞬その右腕が膨れ上がり、目にも止まらな
いスピードで振りかぶりマスキュリンを殴り飛ばした。

地面に叩きつけられ、そのまま陥没。白目を剥いてびくびくと震え
るマスキュリンだったが、その「マスキュリンの口から」、手のひらサ
イズのジェイムズが新たに「湧いて来て」、「がんばえミスター！ 負
けるなミスター！」と応援を始める。情景がちよつと悪夢めいてい
た。

ええ？ と表情が引きつったミニーニヤだったが、そんな小さい
ジェイムズを「フーン！」と叫んで「噛みつぶし」、完全復活したマスキ
ュリン相手に、更に引いた視線を送る。

「今のジェイムズさん……う？ ええ……？ あつちでブルーとお話し
てますけど、ええ？ ちよつと今の何………？」

「スーパー英雄」にはギャラリーが必要である。護るべき罪なき対象
であればなおのこと！ 故にこの吾輩 ザ・スーパー英雄」は、必要に応じ
てジェイムズを複製することが出来るのである！」

「正義のヒーローの定義を辞書で調べなおすべきって思うの
………、ギャラリーを自分の回復アイテムとか道具って思ってま
せえん？」

「……………」

「あれえ？ ひよつとして凶星——」

「——輝け、我が ハンニ神の威光^{ボツッ}！」

「誤魔化し方、雑じゃありませんか？！？」

言いながら光の柱を立てず、しかし一気に完聖体のような姿となる
マスキュリン。原作における第二形態を経由せず、第一形態たる普段
の白装束の上から光の装飾を身にまとった姿は、レスラー然とした服
をしていないことも相まってなるほど、確かによりアメコミのヒー
ローっぽさが際立っている。

「さあ受けるが良い！ 我が必殺の——スター・ロケット・ファル
コン・キイックツ！」

「流星に直撃したら大変なことになっちゃいそうですしい……、

『サーティ・カウント
二〇〇倍掌握』

両手を広げてハートを三十集め、それを掌握するミニーニャ。そんな彼女目掛けて、空中に飛び上がり完全にライオーキックなポーズを決めて強襲するマスキュリン。

果たして軍配は……………、マスキュリンに上がった。

「きゃあッー！」

「……………むっ？ 我が必殺の空中回転飛び蹴りを喰らって『全身が砕けない』とは、思った以上にやると見える」

超高速キックを正面から、「腕も脚も」ムキムキに膨れ上がらせて受け止めたミニーニャだったが、その威力は殺しきれなかった。受け止めはしたがその彼女が立っていた地面にはひびが入り、しかしそれでも勢いに負けて後方へと弾き飛ばされたミニーニャ。

今の一撃で解除されたのか、背中の羽根も姿を消している。そのまま後方へ目にもとまらぬスピードで投げ飛ばされ――。

「――つとー！ い、い、威力凄いな流石に」

「……………?! ぶ、ブルーー！」

そして、そんな彼女を蒼都が受け止めた。彼女から見える状態は、お姫様抱っこである。お姫様抱っこでミニーニャを抱えるブルーに、何か小さなころの胸に秘めていたサムシングがきゅんと来ているような風に何といえない雰囲気頬を赤らめているが、一方のブルーはそれどころではなかった。

現在の彼は、その下半身が「銀色に変化」しているのみならず。その足を含めた周囲一帯、ジェイムズが立っている地面を含めた周囲まで含めて、まるで氷漬けになったかのように銀色に染め、なんなら彼の足元自体も「地面に溶接されたように」なっていた。

そんなブルーを見て、「ほう……………」と何故か満足げのマスキュリンと、こちらもまた満足げなジェイムズ。

「よくは判らないが、悩みは解決できたということだな！ 流石」
ザ・スーパースター
S―英雄―！ 流石吾輩！」

「あ、あはは……………。実質的には間違っただけさそうなのが何とも言えないなあ」

「ブルー？」

「あ、何でもないよ、ミニーちゃん。

……それはそうと、ジエイムズ。相談に乗ってくれてありがとうね。お陰で色々『判った』」

「ハアイー！ お役に立てて良かったです！ じゃあまた、参考になるコミツクの準備でもしてますね！」

フツハツハツハ！ と大笑いしながらジエイムズを肩に乗せて、飛廉脚……にしてはスピードが意味不明なレベルの移動速度で姿を消したマスクユリン。そんな彼らを「嵐のような人たちだ……」と何とも言えない目で見送るブルーを見て、ミニーニヤは人差し指で自分の唇をなぞってから。

「せつかくだし、このままバンビちゃんたちのところまで運んでくれないかあ、ブルー？」

「えっ？ 別にいいけど、何それ……、バンビちゃんに見せつけるつもりなの？ 結局あの後、二人の対決結果がどうなったかとか色々知らないから、命知らずな発言にしか聞こえないんだけど」

「バンビちゃんも手を抜いてくれてたみたいだけどお、一応は引き分けに終わったもの。暴力だと決着がつかないから、後日話し合いしましょうね〜ってことでえ、それまでは日替わりでブルーとくつついていいってことで」

「そういう話、全然聞いてないんだけどなあ……」

「まあバンビちゃんですしい？ 私もメリツトが大きいしい、特にには反対しないというか、意外とそういう約束は律義に守るのよねえバンビちゃん。」

あと、そういう風に私のリクエストも許してくれるくらい、ちよつと変わったってことかしら」

バンビちゃんも成長してるのかしらねえ、とか何とか言いながら、首に手を回して抱き着く形で、すつとブルーの頬に口づけたりして微笑むミニーニヤ。

そんな彼女の胸が自分の胸板にくつついて柔らかいなあとか、そんなことを考えているが故にブルーはしばらくそのまま彼女の好きに

させていた。

なおそんな状態で帰った結果、当然いつもの全員たむろしている一室にてバンビがブチ切れたのは当然な余談である。一時的な共有は許しても目の前でイチヤつかれるのは耐えられないからね仕方ないね。

#015. 番外編：ここまでの一部ダイス結果公開

【人物】

・ // ジ・オールマイティ A | 全知全能 | “ユーハバツハ・ベルツ”

おそらく既出の人物ではダイスを振られていない方な我らが陛下。ブルーとの初遭遇時の展開決めダイスにより「恐怖なき世界」における「それでもなお生きる意味」とは何か、的な問いへの答えを彼から教えられ、以来、騎士団内部の空気を意図的にギスギスさせていた方針がやや軟化？ というより「生きたいという意味を探せる」レベルに少し転換。とはいえいつもの陛下なので、多分何ら感慨もなく聖別も実行する。サイコパスかな？（違）

ブルーへの興味度は43（1d100ロールベース）に対して、物真似への好感度は81（1d100）。意外と笑い上戸なのかもしれない。

ファミリィネームはさつきダイスを振って、初期設定の物を採用することに決定。本編でもそのうち出す。

・ // ザ・バランス B | 世界調和 | “ユーグラム・ハツシュヴァルト
完現術：身代わりの盾”

ブルーへの扱いにより胃を痛めた結果、バズビーとなんかまた仲良くなりつつあるポテト。

陛下が多少軟化？ した影響か、意外と感情をあらわにするようになってる。

・ // ザ・コンパイルソリイ C | 強制執行 | “ペルニダ・パルンカジャス”

登場はまだ一回だけど、ジェラルドから聞いているのでブルーへの興味はそこそこ（未ダイスロール）。主に「静止の銀」に対して正しく違和感を抱いている。

・ // ザ・デステイリング D | 致死量 | “アスキン・ナツクルヴァール”

From：英吉利 仮聖文字：ファールマコ “φ | 薬毒 | “

皆御存じ我がオシヤレさん。キルゲやロバート老以外では一番古い「まともな」顔見知り。どれくらいまともかというと、ブルーがバンビエツタのことを本気で嫌っていたらすぐさま引き離すくらいにはまとも。観察眼91(1d100)により、死ぬのはともかく結構ちやつかり色々堪能してたことは見抜いている。

・ // ジ・エクスプロード E―爆裂―”バンビエツタ・バスターバイン

From: 独逸 DOB: A. D. 1921 DOD: i 完聖体:
ヤルダハトケウ 神の癩癩(少女の発作) ※ダイスでどの年代に帝国入りしたかを決定し、それを基準に生年など計算

本作メインヒロイン? にして事実上ラスボスみたいな我が頭バンビエツタちゃんさん。警戒心が強くおビビり遊ばれる本性を隠すためなら世界くらい滅ぼす狂人メンタル。そんなわけで仲間相手でも一緒に風呂に入ったり寝床への侵入は余程のことがなければ許さない(ダイス)。

1、2話ダイスにて初手ブルーに対し「恋愛感情」「弟分」「パシリ」「おもちゃ」の四択(1d4)のうち一発で「おもちゃ」を叩きだした上で、好感度が上がりサンドバッグに昇格(?)させたりする。この段階でダイスが大概アレなのはご愛敬。蒼都の綽名のイニシャルがBBなのは、潜在的に「あたしのもの」というアピールがあるような無いような。ブルーに依存していった経緯はおおむね本編通りなので割愛。

好感度が恋愛射程圏の90(1d100)に入ったのは6話で、それまでは大体60台(1d100)をさまよっていた。

番外編でのダイス結果だと、ブルーが傍にいてくれると安心して病んで依存しているけれど、ビビりな本性のどこかで「あんまり意見を無視し続けると消えちゃう」とか「ブルーが居なくなったらもう誰も庇ってくれらるような奇特な相手は出てこない」くらいには思ってる。

・ // ザ・ファイアー F―恐怖―”エス・ノト

From: 亜米利加 DOB: A. D. 1977 DOD: i

未登場。ダイスロール結果、一番最後に聖章騎士になりそうな気配。

・ // G | 食いしんぼう | // リルトット・ランパード

From: 蘇格蘭 DoB: A. D. 1836 DoD: A. D. 1

847 完聖体: 神の乾き (神の乾き) ※アニメ版: 神の飢え

バンビーズ良心といえはこのお方。子育てセラピー的な何かに巻き込まれてもあまりキャラが変わっていない疑惑がある。ブルーとの好感度ダイス判定は2、3話の時点でお互い90越え(1d100)と圧倒的だが、恋愛方面へのダイスは50(1d100)を超えず舵を切らなかつたので、ガラの悪いお姉ちゃん扱いのまま。

ベレニケにメタを張れる、というダイス結果をもとに、完聖体が「概念捕食」的な能力を得たことになった。イメージとしては「真理の扉」的なアレで、出てくるのが手じゃなくって光り輝くプライドの顎みたいになっているイメージ。

・ // H | 灼熱 | // バザード・ブラック

ブルーへの扱いに涙を流した結果、バンビエッタへの好感度が一桁台になった。

ユーゴーとは「今更なあ……」くらいに思っているものの、番外編その3(12話)時点ではそこそこ仲良しに戻っているっぽい。

本編ではチョコラテ度が若干上昇して、チャンイチ化が進んでいる疑惑が筆者的にある。

・ // I | 不滅 | // 蒼都 (ブルー・ビジネスシティ)

From: 中国 DoB: A. D. 1970 DoD: A. D. 1

976 仮聖文字: // Σ | 鋼鉄 | // 完現術: 銀の蒸着 (次話か次々話にて登場予定)

最近自分の本名がわからなくなりつつある主人公。転生者だが中の人が事なかれ主義だったこと、身体がもともと幼児スタートだったこと、バンビちゃんに目を付けられたことで様々な感情が茶毘に付す結果に。それはそうと見た目によらずスケベなので(ダイス)、不可抗力で堪能できるものは全力で堪能するタイプ。

本来の歴史の流れでは、出身国であったとある事件に巻き込まれた際に家族ともども逃げ、荒んで成長した後に帝国に迎え入れられる……となるはずだったところを、そのとある事件で家族もろとも

惨い殺され方をし、ギリギリ焼け死にかけだつたところを帝国に回収される(ダイス)。当時の記憶は陛下をして「あまりに凄惨」だった故に、無意識の自己防衛で忘却している。

情報データは当然読み込むタイプなので、例の台詞周りはだいたい変わりそう。

ちなみに作中で「ツアントウ」と「ツアントウ」が混同しているが、これは意図的。幼児期は舌足らずゆえ「とう」と発音できなかったのを聞いた周囲が、BG9加入まで正しい発音を知らなかったのが原因。

実はナナナや日番谷隊長が、能力の相性的には悪かったりする。

・ // ザ・ジェイル J | 監獄 | “キルゲ・オピ”

おなじみ滅却師としての基礎的なOSRの極み。正統派滅却師筆頭。本作ではロボト老ともどもブルーの教育係を引き受けるが、陛下がそんなに真面目に指導しろとか教育しろとか考えていないので、積極的にバンビーズから離すことはしなかった。結果現在後悔(ダイス)。

そのうちリジェと一緒に「おくは〜!」とか言い出すかもしれない。

これには陛下も思わずにつこり。

・ // ザ・キラーマンション K | 殺戮機械 | “BG9
ベージェン

From: 蘇聯邦 DoB: A. D. 1944 DoD: | 仮聖

文字: “イボテス I | 騎士 | “

ロボ: ……だが本作では肉の有る人間だったことになった(ダイスロール)。もとは色々あつてアメリカに流れ着いた映画オタクで、ダ○ス・ベ○ダーの恰好をして真昼間から町を練り歩くような変人。1980年台に帝国へとスカウトさて、趣味で騎士甲冑風の服を身にまとうようになり、現在も概ね当時の印象から変わっていない。なお名称は自称(ダイス)

もともと従軍経験があつたりと人間がそこそこ出来ていたが(77 (1d100)、覚醒した聖文字の影響で人間性が薄れつつある(21 (1d100))。仮聖文字時代の能力は「身体が欠損しても意志が折れない限り別な物体で代用可能」というもの。

・〃^ザラヴ―〃ペペ・ワキャブラーダ

子育てセラピー的な何かに巻き込まれても「良い駒が手に入ったヨ、ゲツゲツゲ」くらいにしか思っていない。もっとも能力が通用しないことから「ひよつとして愛情とか欠片も理解でない育ち方してるんじゃない？ 可哀想……」みたいに素で引いている（ダイス）のは、お前どんな面の皮の厚さしてるんだと筆者も困惑。

・〃^ザミラクル―〃ジェラルド・ヴァルキリー

もともと騎士団ではあまり人と絡まない（親衛隊は親衛隊で固まっている傾向がある（ダイス））ものの、その中でも比較的周囲に声掛けを行ったり激励をしたりしていた。なのでバンビからブルーの特訓に付き合ってくれと言われたら快く引き受けたが、その内実を聞き出して普通に怒り殴り飛ばした。

・〃^ザスーパ―〃ロバート・アキュトロン

ダイス結果、結構とんでもない聖文字に決定しちゃったお爺ちゃん。幼児期はブルーの情操教育を行っていたが、人生とは素晴らしいの精神のもと、ネガティブに流されないように育てただけは一応成功したのかもしれない。

・〃^ジオーバ―キル―〃ドリスコール・ベルチ

DoB：A. D. 1963 DoD：― 完聖体：神の体裁（最後の戦い）

初登場時からダイスの結果、バンビエツタに散々馬鹿にされる扱いな男。騎士団が訓練用に確保してきた野良虚とかで殺害数を上げて能力を上昇させたりしているが、いかんせん頭バンビエツタには勝てない……ながらも実は「女性として」好き（95（1d100））。なお好みじゃないし性格も嫌いということで、バンビエツタからの扱いはお察し。

完聖体は遊○王でいう「ラストバトル！」的な能力なので、とてもではないが使えたものではない。彼は頭バンビエツタではないのである。

・〃^ザパワー―〃ミニーニャ・マカロン

From：加奈陀 DoB：A. D. 1964 DoD：― 仮聖

文字：〃E―権力―〃 完聖体：〃神の独裁〃（単刀直入）※アニメ版：神の力

最近幼馴染ヒロイン面からの彼女面をするようになったミニちゃん。4歳で騎士団入り（！）して以降はバンビエツタに気に入られてバンビーズ入り（ダイス）し、ブルーが来るまではジジより頻度が低めのサンドバッグだった。逃げ癖は大体この頃に染みつく（主にジジが対象）。マイペースで責任回避に走りがちに育ちそうなところに、中途半端にブルーが挟み込まれた結果、頼る先がブルー個人に集中する形になり、同時にそんな頼って（生贄にして）も嫌な顔せず一緒に遊んでくれたりする彼に、強い好意を抱くようになっていく。

バンビエツタと違って愛情は純粋なので普通にイチヤイチャしたりするが、根っこが変わる訳でもないので逃げる時は判断が早い。仮聖文字時代は「霊的バフを周囲に付与できる」ようなもので、本作完聖体はこの延長上にあるような能力だったり（ダイス）。

・〃Q―異議―〃ベレニケ・ガブリエリ
From：仏蘭西 DoB：A・D・1916 DoD：― 完聖体：〃神の問答〃（異端審問）

バンビとほぼ同時期に騎士団入りして、当時から「頭ヘンなニケ」と呼ばれるくらいには独特な髪型をしていた（ダイス）。原作でキャラが全然出てこなかった関係もあってか、本作ではダイス結果「歌のお兄さん」的なフレンドリーさに。

能力的な天敵は、霊圧差を除けばリルトット完聖体のような概念攻撃系。

・〃R―咆哮―〃ジェローム・ギズバット
やあ良い子の皆、元気だったかな？ ジェロームだ！ BLEAC H千年血戦篇が始まるぞ！ では、行ってみよう！

ダイス結果、キャラ付けが何故かビーストのイボ〇コになってしまったムチャゴリラ。流石にこのキャラ付けになるとは思ってたなかったたので、次登場した時どうしようか筆者に戦々恐々とされている。

・〃S―英雄―〃マスク・ド・マスキュリン&ジェイムズ・マスキュ

リン・ハドソン

完聖体(?) : “ハンニボツヘ神の威光” (至福の教え)

つい先日アニメでサヨナラバイバイされたレスラーコンビ。マスキュリンについては次回か次々回で能力詳細のダイス結果を出すので保留。ジェイムズについては、ブルーがウルヴァリ○っぽいことで好感度が勝手に上がっており、ベレニケも交え一緒にアメコミ映画を見たりアメコミを読んだりノベライズを読んだり考察しあったりTRPGしたりするくらいには仲良し。ジェイムズのフアミリーネームの由来はX-MENから。

・ “ザ・サンダーボルトT-雷霆” キャンデイス・キャットニップ

From:伊太利(馬爾太) DoB:A. D. 1881 DOD:i

完聖体 : “サガタニート神の雷鳴” (槍の嵐) ※アニメ版 : “バルバリエル神の雷霆”

バンビーズ一女子力が高く(ダイス)、意外と真面目に恋愛している(ダイス) ことになったキャンデイ。バンビーズで何故か一番ダイス的に好感度の増減も含めて絡みがなく、好感度もそれを反映している(キャンデイ↓ブルー:29 (1d100)、ブルー↓キャンデイス:63 (1d100))。数値をもとに色々ダイスを振った結果、本作では「ガキに興味はない」という扱いに。ブルーはブルーでおそらくおっぱい大きいから好感度が高かったと思われる。

なお聖文字授与後は徐々に好感度が上がってきているので(45 (1d100))、バンビエッタとミニーニャはちよつと警戒し始めた方が良いかもしれない。

・ “ジアンダーベリーU-無防備” ナナナ・ナジャークープ

本編未登場だが、事前のダイスでは仲が良いことになっている(好感度判定は未ロール)。能力的にはブルーにとって天敵の一人。

・ “ザ・ピシヨナリーV-夢想家” グレミイ・トウミュー

名前だけは何度か出ている、リルトットが時々持ってくるお菓子の出どころ。基本リルトットとは小説版のノリのままということになっているが、ブルーに対しては一度虫けらみたいに摘まみ殺すつもりらしい(ダイス)。

・ “ヴァニシング・ポイントV-消尽点” グエナエル・リー

未登場だが、性格が悪いとシャズ・ドミノから名指しされている。

・ // σ^{ステイ} | 聖痕^{グマ} | “ シャズ・ドミノ

小文字のΣが原作表記にならなかつたり、本名をジャズと間違えられていたり筆者的にはちよつと申し訳ない。現在はグレミイの部下として雑用やら何やらをしながら顔売っている途中。

バンビエツタの爆撃地獄に晒されたことも有るが、すぐに飽きられた。やはり顔が好みではないらしい(ダイス)。

・ // W^ザ | 紆余曲折^ド | “ ニヤンゾル・ワイゾル

未登場。本当に何一つダイスが振られていないので、アニメに出て来て描写が盛られるまでにダイスで出番が出てこないことを筆者は祈ってる。

・ // X^ジ | 万物貫通^{クサクンス} | “ リジェ・バロ

ブルーと本編で絡む描写はほぼ無いが、ロバート老の教育の際にちよつと顔を出して、一緒に陛下への忠誠心を教えようと画策したりしていた(ダイス)。結果はお察しである。

・ // Y^ジ | 貴方自身^{ユアセルフ} | “ ロイド・ロイド(×2)

未登場だが、あと数話以内で確実に出す予定があるので、今回は割愛。

・ // Z^ザ | 死者^{ゾンビ} | “ ジゼル・ジュエル(ジゼル・ジュダ・ジュエル)

From: 独逸(猶太系) DOB: A. D. 1922 DOD: A. D. 1934 完聖体: “ 神の眠り^{ゲヘノエル}” (神の地獄) ※アニメ版: 神の死^{アザルピオラ}

本作では(心は)ガチの女の子。とはいえ元男の子で、生前、見ず知らずのバンビエツタにR18Gも真つ青なことをされた結果人格が一度崩壊、乖離し、男性としての目線と女性としての目線双方からダブルスタンダードを極める人格になる(ダイス)。百合ではないが、性的趣向は男の子なので女子相手にちゃんと興奮出来るというひねくれ具合。ゾンビエツタちゃん化は、彼女の「男性としての自分の復讐」「尊厳の回復」が含まれている(もつとも男性としてはもう戻れない)。

子育てセラピー的なサムシングに巻き込まれ、生前から比べたらバンビエツタが多少マシになったことに地味に驚愕している一人。ブ

ルーのことは弟分として見ている面と男として見ている面があり、彼の性癖をどうすれば破壊（○）できるか最近ちよつと悩んでいる。

・ $\text{A} \rightarrow \text{アンチサーシス}$ 石田雨竜

ご存じ一護の友達、後先考えず友達が友達を助けるために危険地帯へ出るなら文句言いながらも当たり前のように一緒にについて来てくれる馬鹿。

番外編だとまだ顔合わせしか出てきていないが、騎士団内を陛下指名でブルーに案内されて、びつくりしたりドン引きしたり胸を痛めたリする予定。

【補足のダイス結果】

・ バンビーズの結成時期：1940年代ごろ

・ 時間隔けつこうメチャクチャじゃない？：ダイス結果的な問題ですので平に！ 平にご容赦を……！（修正かけ始めると收拾がつかなくなる）

・ 死因：ブルー ↓ 出血多量および全身火傷による呼吸不全
リルトット ↓ 飢餓状態による栄養失調や免疫不全を始めた衰弱死
ジジ ↓ ショック死（詳細自重）

・ 生存と死亡の扱い：本作では帝国所属滅却師は「器子」と「霊子」の境界が曖昧になる的な設定で作ってますので、死亡しても魂魄で帝国へ所属できる扱いとしています。また、帝国所属以降の身体成長は、霊子側に寄るので実年齢と噛み合わない感じになります。

・ 仮聖文字の扱い：プレ能力の意味で文字を刻んでいる場合と、とりあえずそれっぽいや字を当てている場合がある（判別は可能）。

・ 騎士団内でのバンビエッタの好感度：原作より低いかヤベエ女扱いされている。私室でイケメン殺していたのが所かまわずブルーを爆撃してるからね仕方ないね（ダイス）

・ 完聖体：一応全員分、名称と能力概要だけは用意してるけど、未取得も何人かいる。陛下にはそれでも「何を取得するか」は視えている（ダイス）

・ハーレム……？……ブルーがバンビから周囲を庇うことはあれど、自分からバンビーズにアプローチしたりする姿もなく（仮にしても幼児期の延長線上）、またよく死ぬ（死ぬ）ため、人によって感想が異なる。

・リルトットはブルーのこと性的に見ないの？……今の所その気はない感じみたいです（ダイス）。追加でリルトットの好感度ダイスを振るとしたら聖別後。

・完聖体の扱いについて……どうするか細か後日ダイス振ります。それはそうと、どっちにしても戦闘描写はそっちに合わせて盛るかも……？

#016. 癩癩嵐と夢大嵐（前）

「頭最っ高に良いバンビちゃんは考えたの、どう勝負したらミニーと優劣を競えるかって！ だったらあたし達じゃなくて、ブルーにジャッジさせたら良いじゃない！ そしたら平等よね平等、やっぱりバンビちゃんってば天っ才！ 大・天っ才！ 国民性と言うか人種が出るのかしらね〜！」

「鼻屑無しだと秒速で負けるぞサイコビッチ」

「サイコビッチ!? 優性人種たるバンビエツタちゃんに何てこと言うのりルってば!?!」

「人種云々関係なくバンビだから問題なんだからオが、バンビだから」

リルトットの罵倒にすわ「心外な!」と言わんばかりに目を大きく見開いて抗議するバンビエツタだが、この場にて誰一人としてフォロに回らない時点でお察しである。

例によってバンビーズがたむろしている集合部屋にて、バンビエツタが両腕を組んで得意げにのたまった。毒を吐いたリルトットはともかく、ジジは「バンビちゃんは今日も相変わらずだなく」と適当に笑っている。キャンデイスは「今日は何?」と寝不足なのか面倒そうであり、ミニーニヤはミニーニヤで「でも私もお洗濯とかちよつと苦手だし……、破つちやうから」とかブツブツ独り言をつぶやいている。肝心のブルーはといえば、シンプルに困っているようだった。

（僕にジャッジしてもらうって言ったってさあ……、いやそもそも何をジャッジしてもらうって話なんだけど、内容によってはこっちもバンビちゃんを庇えないっていうか）

こちらもフォロはなかった。

現実是非情である。まあ普段から頭バンビエツタちゃんだからね仕方ないね。

それはそうと眼前で揺れるバンビエツタの胸に視線が釘付けだった

たりするあたりは、ブルーも大概ブルーである。どうしてこう育つちまったかな、と彼を見て肩をすくめるリルトットは、当然のようにバンビエッタの文句をほぼ100%聞き流していた。

「はーっ、はーっ、……………まだ文句は言い足りないけど、まあ良いわ。せつかく呼んでおいて、無駄に待たせるのも可哀想だもの」
「っ!? いや、まあそりやそうなんだろうオけど……………」

そして「ゲストを呼んでるわー!」と言った手前か、その相手へ最低限の気遣いらしきものを発言したバンビエッタを思わず二度見したリルトットであった。

「紹介するわ!」

頭ヘンなニケと、右の方のハゲロイドよ!」

「その呼び方止めてバンビちゃん!? ボク笑いすぎて腹筋おかしくなっちゃう!」

なお紹介文があまりにもあんまりなので「ああいつものバンビで安心した」と投げやりな顔になるまでワンセットである。

彼女に言われた通りに連れてこられたのは、相変わらず髪型がトンがっているベレニケ（寝起きなのか遊○王のような寝癖になっている）と、もう一人。「削がれたように」薄い耳の箇所プロテクターを装着している、額に「第三の目」のようなものがある青年。こちらも寝起きなのか目をくしくし擦っているが、挙措がそれこそかつてのブルーよりも幼児めいて見える。「ジ・ユアセルフ」ロイド・ロイド、その「R」のロイド・ロイドである。

彼らの登場、真っ先にベレニケの髪型を見て爆笑するキャンデイスと「せめて顔くらい洗ってから連行しろよクソビッチ」と悪態をつくりルトット。ひとしきり笑い終えてから、続くロイド・ロイドを見て「陛下のお気に入りじゃん、元気してるー?」とニコニコ手を振るジジと、自分の世界から帰ってきていないミニーニヤ。

「おはようございます、ベレニケさんとRロイドさん」

「お、おはよう……………、ちよつと待ってくれ、髪型だけ霊子を収束して調整するから」

「……………」

寝ぼけた目をしながら両手に霊子を集めて髪を撫でつけ、疑似的なワックスのようにして調整するベレニケと、かくん、かくん、と首だけが前後に揺れて首肯しているのか寝ぼけているのか判断がつかないロイド・ロイド。なんなら額の第三の目すら半眼で眠たそうだ。

非番だろコイツ等と口にするのを止め、リルトットはバンビエツタに足を組み直して確認する。

「で、何だよコイツら呼んで来た理由って。ベレニケの方はまだ判らなくもねエけど」

「随分偉そうにふんぞり返ってるけど、寛大なバンビちゃんはそれも許してあげるわ！ あたしは寛大だから許してあげるわ！」

（全然許せてなさそうだけど、リルお姉ちゃんが気にせず毒吐けるっただけ少しはマシになったのかなあ、バンビちゃん……………）

「ブルー、あなたヘンなこと考えてないその顔!？」

「い、いや!? ぜ、全然考えてない、考えてない。バンビお姉ちゃん、今日もキレーだなーって」

「そう? ………………うん、まあ良いわ。」

頭ヘンなニケはともかく、ハゲロイドはアレよ！ アレ！ コイツにブルーをコピーさせるの!？」

「コピー?」

「どうしてわざわざー?」

ちよつと赤くなったのを誤魔化す様にテンションを上げたバンビエツタにキャンデイスとジジからツツコミが入る。もつともリルトットは「あー、なるほど」と納得したようだった。

「ブルーって、何かこう、一部の聖文字シユリフトの効きが悪いみたいじゃない? キャンデイとかジジとかも、完聖体にならないと上手く効果が通用しなかったり。逆にミニーとかはあんまり関係なさそうだけど」

「あーそれねー」

「ふえ? 今、私の名前呼んだあ?」

上の空だったミニーニヤにバンビエツタが適当に話の流れを言うと、続けて今回ロイド・ロイドを呼び出した（連行した）理由について語る。

「で、傾向から言うと多分、頭ヘンなのが使う能力もあんまり通用しないと思うんだ。ニケの能力でブルーの思考誘導とかしようとしても、上手く行かないんじゃないかなって、バンビちゃん思う」

「だからその頭ヘンという呼び方をいい加減直してもらいたいのだが……?」

「で、思った訳! だったらブルー本人じゃなくって、ブルーをコピーさえ出来れば、そっちに頭ヘンなニケの『異議がある!』も使えるでしよって!」

説明は大分雑だったが、おおむねこれには納得がいった面々である。

Rのロイド・ロイド、その聖文字「Y—^{ジ・ユア}貴方自身—」の能力は「相手の姿形と精神／記憶を真似する」、つまりはコピー能力である。

その効果がブルー本人に直接作用するものではないため、おそらくは有効だろうと言うバンビエッタの（意外と冴えた）判断だった。

（記憶のコピーとかもあるみたいだけど、大丈夫かな……、一応聞いてみるかな?）

なおそんな蒼都の確認には「変身中の記憶は変身中だけ持続する」と本人が返答したので、このあたりのリスクについては「転生者的に」軽く見積もっているというのはある。

「まア理屈はわからなくもねーけどなア……、お前大丈夫かよ、陛下の所で修業してもらってんだろ? 非番つぱいけど抜け出してきて。絶対バンビとか騎士団長に話通したりしてねエだろ」

「許可は別にいらねえとも。それに……、ブルー個人には興味がある。あの陛下が騎士団長を『わざわざ』先送りにしたと、騎士団長が言っていた」

「はア?」「何それ何それ?」「どういうことお?」「先送り……」「ブルー、あなた知ってる?」「騎士団入りした当時の事は記憶がある……」

ロイド・ロイドの発言により若干混乱を来したが、ともかく。ベレニケは「手早く終わらせて早い所二度寝をしたいんだ……」と疲れた様子のまま欠伸を噛み殺しているのもあって、早々にロイド・ロ

イドによる蒼都のコピーが始まった。

そして始まって早々、ロイド・ロイドは後悔した。

「クリソツ！ クリソツじゃんかつ！」

「おー、本当にブルーみてエだな」

「見分けつかないわね」

「ええー？ でもバンビちゃーん、ブルーの方がヤバ、いよく？」

「それ見た目からじゃわからないってえ私、思うの」

「僕よりちよつと前髪が短いかな。……………？ あれ、えつと、ロイド

さん？」

「——————ベレニケさん、お手洗いに連れて行つてくれない？」

早々に、ロイド・ロイドが変身したブルーは顔色を悪くし、主にバンビエツタを見た瞬間に口元と鳩尾を抑えてうずくまった。

これにはベレニケも眠気が消し飛び「だ、大丈夫か!? 傷は浅い、心の傷はきつと浅いぞ！」と叫び肩を貸して早々に一時退散。廊下でダボダボと「大量の液体が零れる音」を鳴らし、アスキンの声が「致命傷じゃねえの!？」と悲鳴を上げたりしていた。急展開にフリーズしているバンビエツタと、何かを察したらしい他のバンビーズが彼女から一歩距離を取り。

「えつ？ どういうこと？ ブルー、何か知ってる？」

「と、特には…………、んむ？」

「ほら、食つとけブルー」「あんまり今まで話してこなかったけどさ、何か困ったことあつたら相談のるからさ、ブルー?」「バンビちゃんはバンビちゃんだよね、大丈夫だよブルー」「後で膝枕しましょうかあ、ブルー?」

「ちよつと、何いきなりブルー困つて後宮の主に使える女みたいなことやってるわけ?! リルも何でそんな、滅多にしないようなことしてるの!」

バンビーズの残りの面々が、各々に各々らしい方法でブルーをねぎらっている時点で、察しがついていないことが確定している頭バンビエツタである。当然のようにブルー本人は、ロイド・ロイドが吐いた

理由について心当たりがあった。

(僕がなんだかんだバンビちゃんとか付き合えてるっていうのは、「転生者」だっていう前提があるからだから、それをしてゲロ出ちゃうくらいトラウマになってたってことは……、前世の分の記憶コピーは出来てないってことで大丈夫かな?)

密かに安心しながら、ブルーはリルトットの差し出した棒スナック菓子をかじりつつ、何だか見たこともないくらいに哀れんだ目のキャンデイスに頭を撫でられていた。

閑話休題。

「とりあえず吐き気止めを飲ませて、アイマスクをすることで決着したよ……。アスキーン・ナツクルヴァールの面倒見の良さに救われたね、こっちのブルーも」

「う、うん……………」※ロイド・ロイドの蒼都

「ちよつと、何をバンビちゃんを見るだけで視神経から浸食してくる新手のホラーのモンスターみたいな扱いしてるわけ!? 異議ありよ、異議あり!」

辛うじて落ち着きを辛うじて取り戻したロイド・ロイドに文句をつけるバンビエツタと、そんな彼女に白けた目を向ける後方のバンビーズはおいておいて。

とりあえず当初の目的通りに、ベレニケの「ザ・クエスチョンQ―異議―」を用いてコピーの方のブルーの「嘘」と「気遣い」を縛る。これで彼が語る話については、おおむね本当の部分がでてくると見て良いだろう。

なお「前世」について説明できないブルーだけは「多分変な形で出力されるんだろうなあ……」と思っっているが、当然そんなことは共有されない。

「えつと、大丈夫? ロイドさん」

「だ、大丈夫、だよ…………? うん、ブルー、大丈夫」

(僕の顔と声と姿形で何だか凄い怯えてるな……………)

そしてまたいつもの事と軽く見て、バンビエツタを止めなかったことを反省した。

「じゃあ、最初に聞くけど……………、あなた誰が一番好きなのよ。あた

し達含めて」

「いや、いきなり爆弾放り込んでるじゃんか!」「私より直球勝負う……」

キャンデイスの思わずのツッコミに、本物のブルーは遠い目で苦笑い。一方のロイド・ロイドのブルーの方は、こちらもまた似たような遠目を（アイマスク越しに）して、引きつりながら返答した。

「誰がって、いうより、今の状況？ 皆といるって、僕、割と、嫌いじゃない、よ？ へ、へへ、寂しく、ない、もの」

『……………』

そして一発目からかなり重い返答が返ってきた。ついでに言うところ「誰が好き」という質問に建前を取っ払って回答させてこの返答である。バンビエツタはこの世の終わりを目の当たりにしたような顔をしてブルーを見て、そして彼の苦笑いに我を取り戻して、頭を振って気を取り直した。

「ん、んんん！ じゃあ、手始めにキャンデイのことはどう思ってるの？」

「え、ええっ?」

と、なぜかバンビエツタの隣で少し上ずったキャンデイスであったが、もつとも返答を聞いて困惑することになる。

「お、おっぱい大きいなって、思ってる」

「……………えっ、それだけ?」

「いや、バンビの方が動揺してるじゃん。……いやそっか、ちゃんと『そういう目で』見てたんだからのこと……、な、何か変な気分」

「まあ、ねー? ミニーちゃん」

「あながち否定は出来ないかしらあ……」

「……………そういやバンビもミニーニヤも、乳でけエか」

変な空気になっているバンビーズと、そんな彼女たちを尻目に膝をついて頭を抱える本物ブルーへ、こちらも「どうした一体!? 大丈夫かい!」と気遣うベレニケ。どうやらコピーされた分だろう記憶から彼女たちに対するそれぞれの印象へ、当たりがついたらしい。それ故に返答内容が酷いことになる。察しがついたが故の苦悩ではあるが、

当然それは誰にも通じない。せいぜい性癖暴露をされて恥じらつて
る程度にしか受け取られなかった。

「じゃ、じゃあ……あたしは？」

なおブルー本人の返答予想もまた、全員に平等に降り注ぐことにな
るわけである。

「ば、バンビちゃんは、か、可愛いと思う、よ？ おっばい、大きくて」
「えっ」

「あはは、バンビちゃん残念♪」

「キャンデイがアレだったんだから、まーそんなモンだろ」

「ブルーそれしかないのお？」

「アレだけ鬨り殺されて出てくるのがその感想とか
……………」（※可哀想なものを見るような目）

意外と今回は復帰の早かったバンビエツタが「納得がいかない
！」と、うがー！ と叫ぶ。

「そんなに言うならジジ、ジジについてはどう思ってるのよ！」

「あつ、バンビちゃんそれルールで禁止ー！」

「意外と凄い苦労してる人だと思うから、結構気遣ってもらってるっ
ていうか。だから僕もそのあたりは気遣うよね。あと、地味に家事炊
事洗濯も最低限できるし」

途端、流暢になるコピーブルー。突然の饒舌を前に「い、いやあ
……………」と、バンビたちも見たことがないほどに照れ始めるジ
ジである。バンビエツタとミニーニヤの表情が死んだのは言うに及
ばず、キャンデイスもまた「えっこの好感度の差は何……？」と困惑
気味だ。

「何でそんな饒舌になってるの……………。じゃ、じゃありルよりル！
なんか下手するとあたしたちより仲良いしー！」

「リルお姉ちゃん……………、可愛くて頼りになって、おっばい小さい」
「あなたのはんだんきじゅん、おっばいしかないわけ！」

バンビエツタ・バスターバイン、魂の絶叫である。もともと色目を
使ってこないことを前提にサンドバッグにしていた彼女からすれば、
その返答は色々と予想外だったらしい。もつともそれでも爆撃しな

いだけ多少はマシになったと見るべきか、後々のブルーが大変なことになると考えるべきか、ギリギリ「幼児らしい」感想と言う範疇にとどまっていると鑑みるべきか。

「バンビちゃん、動揺しすぎて赤ちゃんみたいな発音になってるの可愛いーい♡」

「これ、あんまり手をかけなかったあたし達のせいじゃないよね……？」

「色目使われるよりはマシだけど、言い方ちよつとイラツと来んなア」
「リルお姉ちゃんはライバルにならなそうでホツとしたの」

「呼び方昔に戻ってんよ、ミニーニヤ。どこもかしこも酷エもんだ」

呆れたように言うリルトットは、絶賛ベレニケに励まされている本物のブルーに白けた目を向け、そして少し腕を組んで何かを考え込むようなポーズに。

何やら色々ショックを受けていたバンビエツタは、ソワソワしているミニーニヤを見て「何か気づいたら最後になっちゃったけど……」
と言いながら深呼吸し、気を取り直した。

「じゃあもう最後になっちゃったけど、ミニーはどのようなのよ？」

「身長大きくなった」

「……………へ？ それだけ？ おっぱいすら言わないの？」

「どうして私がオチみたいになってるのバンビエツタちゃん！」

ミニーニヤ・マカロン、魂の絶叫である。なんならおっぱいについてすら言及がなかった。方々それぞれがそれぞれに納得がいかないと言う顔をしている中、どういうこと！ とベレニケに向けて剣を付きつけるバンビエツタ。ついでにその瞬間に本物ブルーの首が飛んだのを見て「ひえ!」とドン引きしながら尻もちをついた。びしゃびしゃとブルー本人の血が勢い良くまき散らされる。

「どういうことなのか説明しなさいよ頭へんなニケ！」

「お、落ち着き給え、そして落ち着いて自分の行動を振り返り給え、一体僕に何の罪があると言うのだ!？」

「納得いかないから死刑」

「私刑の間違いじゃなーいー?」

「どつちにしても酷いと思いますぅ」

「いや、色々言ってるけどこんな理由でバンビも本気で殺すつもりないだろ？　ないって言ってくれよ？」

「それは、まあ、あたり前じゃない？　陛下の私兵みたいなあたし達なんだから、理由もなくそこそこ長いのをぶっ殺したら、逆にあたしが殺されちゃうし。もうそこは、昔のバンビエツタちゃんみたいな軽率さじゃないし……。」

「って、あなた達あたしのこと何だと思ってるのよ」

「（（（そこに転がってるブルーの死体を見て自分の胸に手を当ててみる））））」

言葉にはしなかったが、一同一様に同じようなことを考えていた。

なお該当する当人も、首から出た血が「銀色に変化し」そのまま遠方にある頭を引き寄せて接着、既に接合部が銀色な事以外は元に戻っている有様だった。

そしてコピーの方のブルーも、ロイドロイドの地が出ているのか「やはり命は大事にしないと……」と椅子に座りながら、ガタガタ足が震えていた。

「う、うーん……、ちよつと呼吸器がまだうまく接合できてないっぽいな…………」

「おお、しばらく喋んなくて良いぞ。

で、あー、アレだろこれ多分。やっぱりブルー本人じゃないから、っていうのが一番ネックなんじゃねーの？　ロイド・ロイドにコピーさせたところで」

「どういふこと？」

震えるベレニケを庇う訳ではないが、それより上半身を起こしてせき込むブルーの背を撫でてやりながら、リルトットはバンビエツタに半眼を向ける。

「コピーって言っても、あくまでベースは『なりきり』なんだろ？　陛下があつちのを傍に置いてるって言うのは、それだけ自分のことを常に見せて、考えを真似させようってことなんじゃねエか。

だから、あんまり面識がないブルーの真似したところで、上手くは

いかないんじやねーかって話」

リルトットの推論にはある程度納得がいったのか、とりあえず微妙な空気は少し解消されたものの。

「それで、そうなると結局ブルーって誰が一番好きなのか——」
「上手く本題ボカしてまとまろうとしてんだから、余計な事思い出させちや駄目じゃんっ！」

キャンデイスが空気を読まないジジにツッコミを入れたあたりで、自分のアイデアが上手く行かなかったことに飽きたのか「じゃあ、またミニーと相談して考えるわ」とこのイベントはお開きになった。

※ ※ ※

お開きにはなったが、リルトットはブルーの手を引いて、どこかへと連れ立っていた。

「リルお姉ちゃん？」

「ま、俺があんまり面倒見てやる話でも無エんだろうけどな……。普通にやったらゲロ吐いてバンビのことまともに見れなくなるまで放置しちまってたみたいだし、ちよつとくらいは真面目に考えてやんよ」

(そんなに気にしなくても良いんだけどなあ、結構オイシイ思いもしてると思うし……。それはそうとリルちゃんのお手々やわらかいな、女の子って感じだ)

面倒こそ見てもらっているが、あくまで一線を引いていたリルトット。その彼女から積極的にどこかへと連れていかれるというのは初めてなこともあり、ブルーこと蒼都は緊張していた。緊張していたが、それはそうとレアなイベントを楽しむ(?)的発想が湧くあたりは、中の人は相変わらず中の人である。

さて、彼女に連れられて行った先は、普段なら鹵獲された虚が監禁されている銀架城の地下一角。そこに青白いオーラ、明らかに尋常ならざる結界に覆われた檻。その奥に、リルトットが目的としている彼はいた。

「よオ来てやったぞ、クス野郎オ」

「——君にクス呼ばわりされるのは、妙な気分だね。リルトット」
白いジャケツトのような制服をローブ付きでまとい、ポケツトに手を入れたまま、カールがキュートな金髪をした少年が、檻の手前に立つリルトットとブルーを見た。

「うい、とリルトットが少年を親指で指さす。

「こいつ、グレミイ・トウミュウ。あんま面識ないだろ、紹介しとく」
「あ、どうも。えつと僕は——」

「——蒼都ツァントウ、というよりはブルー・ビジネスシティの方が最近は正しいかい？ 噂はそのリルトットに聞いているよ。嗚呼、握手することも『この檻じゃ』出来ないが、ま、よろしくね」

片手を上げて微笑むグレミイ。さわやかなその一笑に「うげ」と顔をしかめるリルトット。明らかに嫌がっているように見えるが、お互いに纏う空気は気易い。

ブルーから見れば、彼女たちの関係については小説版の一節より、意外と悪態をつき合ってお互い話し相手として認識できる程度には仲が良い認識（つまりバンビーズを除いた上でのリルトットのオトモダチという認識）である。

何故そんな彼を紹介したのだろうかと聞けば「こいつ便利屋みてエなもんだからな」と肩をすくめるリルトット。

「陛下ほどじゃないけどチート野郎だし、何か知ってるんじゃないかって思ってたな。お前の能力とかについても」

「僕的能力？」

「多分だけど、ロイド・ロイドのやつのコピー。あの時はああ言ったけど、本当はロイド・ロイドが『真似しきれない』のが出てくるのって、フツ―はわからないレベルなんだよ。ちよつとしたしぐさの違いとか、物言いがズレたりとか、そんなくらい。

それが出来なかったことは、お前の聖文字、じゃない能力みたいなのだっけか？ そっちが影響してるって考えるのが筋だろ」

「う、うん……」

「まーつまり、今まで制御出来てなかったからこうなっちゃってたけ

ど、もしちやんと扱えればバンビの頭バンビな行動とかも、多少は前より楽に耐えられるんじゃないかねエかって話だ」

なるほど、と頷くブルーと「ま、仮説だけだな」と肩をすくめるリルトット。そんな彼女たちを見て「いつまで手を繋いでいるんだ？

仲良しかい」とニコニコ微笑みながらツツコミを入れるグレミイ。

ふと見れば、リルトットははまだブルーの手を引いた状態のままだった。言われて「ああ」とバツが悪そうに言いながら手を離すリルトットである。異性としての意識はそこになく、どちらかという幼児を相手にしていたような、そんな微妙な生暖かさのある声音だった。

「どーにも俺の15%も生きて無エからなコイツ。ガキ扱いしちまうな」

「見たところ罪悪感みたいなものもありそうだけれど、君にそんな殊勝な心があるとは驚きだクスズ女」

「おうわざわざ指摘するところに底意地の悪さが染み出てんぜクスズ野郎」

(やつぱり仲良さそうだな、なんかニヤニヤニコニコしあってるし)

「それで、僕を頼れないかと来たわけか。うん、なるほど……………」
そしてグレミイとブルーの目が合った次の瞬間――。

ブルーは、宇宙空間に投げ出されていた。

「ぴよっ？」

あまりの超展開に思わず変な声が出たが、そんな彼が状況を観察するよりも先に、彼の四方八方から「隕石が」「彼目掛けて」集まって来て、それこそ惑星に落下する勢いのそれらに押しつぶされ、ブルーはまた死んだ。

前にいると感じられた。

「あ、えつと、ここは……？」

「嗚呼、リルトットのことなら心配しなくても大丈夫。ここは僕と君の二人しかない。そういう場所だって『想像した』から。ここでの時間経過も、『戻れば一瞬』だと『想像した』から、気にしなくても大丈夫だよ、ブルー・ビジネスシティ」

ニコニコと、表面上だけはとても柔らかく微笑むグレミイ。差し出された手をとるブルーだったが、引き上げて立ち上がらせた彼本人が、どこか納得のいかない表情に変わった。

『ビスケット』は駄目、か。……………『骨抜き』も無理。この調子だと難しそうだけど、やっぱり物理攻撃は通用するってところかな？」

「グレミイさん？」

「嗚呼ごめん。色々『試して』みたかっただけなんだ。他意はないよ。それでは改めて」

そしてブルーの胸を軽く突き飛ばし、次の瞬間には「目の前に太陽」。何か声を上げるよりも先に、ブルーの背中をグレミイが、まるでライダー○キックするかのごとく飛び蹴りを決めて、そしてその一発でブルーは恒星表面の熱冠風^{コロナ}に呑み込まれた。

それにもかかわらず、全身が消し飛ぶほどの熱量におかされても声すら上げられず消えゆくはずであるはずのブルーは、その意識だけはずっと残っていた。

『それでは改めて、自己紹介を。』

僕は^{ブイ}V。^{ザ・ヴィジョンナリー}V―^{シミュテルンリッター}夢想家―^{シミュテルンリッター}グレミイ・トウミュー。

星十字騎士団最強の滅却師にして――陛下直々にご指名の危険人物さ？』

全身を焼かれ、思考を焼かれ、感情を焼かれ、記憶を焼かれ、とにかくありとあらゆる自身を構成する要素を焼却されながら、しかしブルーに対してグレミイはその状況を変えることはない。

そして思考が形成できないブルーに、そのほんのわずかな揺らめきすら知覚したグレミイは、届くはずのない長距離からブルーの意識へと「ささやく」。

『今「どうしてこんなことを？」って思ったでしょ。そしてこう想像したんじゃないかな？「もしかしてリルトットとずっと手を繋いでいたことに嫉妬したんじゃないか」って。流石にそれは違うよ。彼女も僕も否定する。でも、お互い否定するけど、外から見たら友人であることは想像できるだろうけどね』

ブルーはやはり、返答すらできない。現状、霊子の「梓」のようなものが辛うじて彼のシルエットを残すばかりであり、その原型は欠片も残っていないからだ。

『どうして全身を焼かれつくしながらも、いまだ死なず意識だけはずっと残っているか。そしてこの場にリルトットがいないのか。――

――君の想像通りだよ。ここは白昼夢。僕がそう想像した。

ここでの出来事はほんの一瞬。僕が君と直に対面できないから、触れ合うためにちよつとだけズルしたんだ』

やはり返答はない。そんな太陽の内へ向けて、グレミイは微笑みながら続ける。

『僕は空想を現実に来れる滅却師。僕と出会った瞬間から、君も僕の幻想の住人だ』

そつと手を差し出し、指を構え。

『そうだね。少し訓練をつけてあげるよ、ブルー・ビジネスシティ。頭の中だけ、じゃ物足りない。手取り足取り、あのリルトットの悩みを解決してあげよっか』

一体何を解決すると言うのだろうかこの男は。

グレミイがばちん、と指を弾くと同時に、ブルーの周囲に存在していた太陽は姿を消した。

はつとして顔を上げて、頭上に現れたグレミイを見る。と、彼は次の瞬間には功夫がごとき拳法の構えで殴りかかり、ビシッバシッと音が鳴るように風を切りながら拳や脚を武器としてくる。一撃一撃がそれこそ普通の人間や魂魄なら致命傷の一発。とっさに両腕にハイリッヒ・ボーゲン神聖弓たる狼の顎がごとき籠手を形成。その先端から腕の内側より「銀の鉤爪」を生成し、受け流す。

一撃ごとに重さを増す拳。当然のようにその拳は籠手にも鉤爪に

も負けず、なんなら「籠手すら変形させる硬度」と靈子の圧縮率で、ブルーのことをボコボコにしていた。

「な、な、な……!?!」

(いや原作の印象的にここまで話が通じない相手じゃないと思ったんだけど、一体どうしてこんな……?)

「ほら、また『どうしてこんなことをするんだろう』って思ったでしょ!?!」

「大丈夫。心とかは読めないんだ。他人っていうのが本当は上手く『想像できないから』。皆、あんまり関わってこないし。

今のはだから、ちよつとした想像だよ」

ニコニコ笑いながら、それでいて動きだけは暴力的を超えた勢いで殴りかかってくるグレミイ。いい加減躲し受け流すのが難しくなってきたブルーの腹部に、今までの速度を超えてもはや「光の速度」がごとき拳が刺さる。

「ツハ!?!」

速度は力。そのままグレミイはなんらダメージを受けた様子もなく、振り抜かれた拳によりブルーは加速を超えて加速。秒が経過するよりも先に「巨大な惑星に叩きつけられ」、そのままマントルを超過し、さらには惑星の反対側を飛びぬけて、宇宙空間に投げ出された。

ドロドロと溶けながらも「銀色に光り」人体を形成して再生していく彼を見て、やはりグレミイは楽しそうに拍手をする。

「凄い凄い! 惑星の核とかさっきの恒星よりは酷くないだろうけど、十分に拷問みたいだっていうのに、いまだ心が折れないって言うのは本当に凄いよ! まるで『完全な精神』だ! 一部のほころびも許されない、安定した魂の在り方」

「それは、あの、よく判らないんだけど……、どうしてグレミイさん、僕相手にこんな……?」

「そう、それだよ! 未だに態度も声も変わらないし、ちよつとビクビクしてるだけで『本質的に』『僕を見ている目が』何も変わらない! 蔑みも怒りもない! 勇気はちよつとあるかもしれない!

そのフラットさはリルトットにも似ているかな? まあ神経が凶

「太いだけだろうけれど、あの女は」

（やつぱりルちゃんの話してる時は少し楽しそうだな、この人……）

おそらく本人にも自覚がないだろうが、ちよつとだけ声音が高くテンションが上がっていることが伺える。もつとも今口に出すと機嫌を損ねるかもしれないので、空気を読んで抱いた感想を胸にしまおうブルーだった。

「その親し気な雰囲気に応じて、僕も君とは親しくあろうと思うよ。だから疑問に答えようか。『どうしてこんな酷いことをするのか』、だね？ いわゆるヘイトコントロールというやつだよ」

「ヘイトコントロール？」

「アンガーマネジメントって言葉を宛ててもいいのかな？ ああ。あの女から君の話を聞いて、それなりに苦勞しているようだと思っただけだね。そこでちよつと想像したんだ。僕が君と同じ立場だったら、同じ能力をもっていたら、何を考えるかってね。」

——君、実は結構オイシイって思っているんじゃないかい？」

ぎくり、と。少しだけブルーが震える。

「今や知識としてしか覚えていないけれど、小さい子供は女性の胸部へ特に興味が強いからね。バンビエッタ・バスターバインやミニニヤ・マカロン、キャンデイス・キャットニップあたりの話を聞いていると、もしかしてそういうことかと思っただんだ。」

その反応は……、多分凶星かな？」

「えーつと……」

「別に悪いとは思わないよ？ 僕には関係ないし。自分からは手を出していないし、基本的には目で追ってるくらいだそうじゃないか。」

他人事として聞いても、君が普段から受けている仕打ちと『死亡回数』を数えれば、それくらいの役得で正気を保てるんだとすれば、あえて口出しする必要もない」

じゃあ何で、と。ブルーが続けるよりも先に、グレミイはカツ！と目を見開いて、壮絶に笑いながら、つぶやいた。

「でもそれはそうとしてちよつとイラつと来たから、一回くらいは『完

「全に再生もできないくらい」死んでおこうね？」

「本気で殺しにきてませんか!？」

完全に私怨だった。本人としては自覚はないかもしれないが、リルトットの近くにそんなちやっかりした男（子供？）がいるのが、可哀想とは言えイライラはしているらしい。

「大丈夫。ここは『夢』だから、現実の肉体は無事だよ。僕の想像が正しければ、ここで例え『本当に死んでも』、君は大丈夫なはずだ」

（その予想が外れたらどうなるんですかね……？）

「今『その予想が外れたらどうなるのか』って思ったでしょ」

「その予想が外れたらどうなるの……、ハッ!？」

「わざわざ復唱しちゃうんだ……。そう言う所は、本当に子どもみたいだ」

ブルーを揶揄うように笑いながら、グレミイは視たこともない程に満面の笑みで。

「その時は大人しく死のうね♪」

あっこれ駄目かもしれないと。珍しく本気で死の覚悟をしたブルーだった。

……いや、珍しくもないかもしれない。比較的最近、聖文字を覚醒させる際にバンビエッタに大爆撃された時のことが、走馬灯のように脳裏を過ったブルーだった。

※ ※ ※

「流石に全身の細胞と言う細胞をベースにプラズマ化してエネルギーを取り出して粉碎するのはやりすぎだったかな……？ 太陽を凌駕する太陽みたいになっていたし。そのあたりのイメージが通用するってことは、やっぱり僕たちは器子と霊子の境界が曖昧な種族ってことなんだろうけれどもね」

一瞬のうちに影も形も、存在の痕跡すら消滅させたグレミイの発言

である。完全に他人事のような言い回しだった。そしてこの状況に置いて、「まさかバンビちゃんより上がいるとは……」と流星に引き始めているブルーの意識である。

………そもそも肉体もなくどこで何を思考しているのかという話であるが、さきほどまで彼がいた場所に「銀色の人型」が形成され、何事もなかったかのように復活するのはもはや罰ゲームの類と言えた。

「じゃあ次だ。……けれどもその前に。詳しくは知らないけれど、ジエームズ・マスキュリン・ハドソンから何か聖文字について聞いたんじゃないかい？ リルトットから、何か仲が良くて色々話しているみたいだって聞いたけれど」

「えっ？」

困惑するブルーに、彼はニコニコ微笑む。

「知っているんだよ、『S—英雄—』^{ザ・スーパースター}の能力の正体。僕と彼と、聖文字を与えられた時期が近いからね。彼の方が本体だってことくらいは、多少のよしみで」

だからわざわざ隠すまでもないよと微笑みながら、グレミイは手を振るう。それと同時に、彼の背後に「巨大なロケット」のような、あるいは「巨大なミサイル」のような、先端が妙に振じれたそれが出現する。

「射出台の戦車を含めて、^{ハイリツヒ・ボーゲン}神聖弓と^{ハイリツヒ・フアイル}神聖滅矢……、なんてね？

僕にはあまり意味がないんだけど、先端に詰め込まれた『ことごとく器子を破壊しつくし再起不能にする』爆弾みたいな、そんなものをイメージしてみた。『そういう本は』よく聞かせられたから、色々知ってるんだ」

「あ、あの……、アトミックボ————」

「————よりも強いイメージだ」

ニコニコ微笑みながらそんなことをブルーに言ってくる様に、思わず彼は一歩後退する。もつとも足場らしい足場はないので、飛廉脚の要領で形成した霊子の足場越しにということになるが。

「彼のアドバイスをもとに『新たな何か』に目覚めれば君の勝ち。ここ

で完全に精神の起源まで含めて『摩耗させ切ったら』僕の勝ち。シンブルで良い鍛錬だと思わないかな？」

「……………」

「そんな普段の子供みたいな目をキツネよりも鋭くしなくても良いよ。凄い顔してるから、ブルー」

すつと、いつの間にか握られていた手鏡を向けられて、そこに映る自分の表情を見てブルーはびっくりした。それこそ原作蒼都を思わせる独特な鋭い目つきになっている。もつとも瞳の大きさというか、そこに宿る光は普段通りなので、内心の苛立ちが思いつきり顔に出ていたということだろう。

ちなみに余談だが、その表情はバンビエツタが見ていないところで内心のイライラが限界に達した彼女が彼女へと向ける目でもあり、キャンデイスがちよつとドギマギしたりしている目でもあった。

「それじゃ、試合開始——」

そして何らモーションをすることもなく、全自動で彼の背後のミサイルは起動し、ブルー目掛けて飛んできた。

色々と、それこそ普段バンビエツタを相手にするとき以上に気疲れしたブルーであるが、それでも目の前の脅威に対して、グレミイによる思考誘導が働く。否、そうなるよう「想像されている」のかもしれないが、それはともかく。

彼の脳裏には、以前ミニーニヤとマスキュリンが殴りあっていた際の、彼からのアドバイスが回想されていた。

『ブルーは大丈夫だと思うので、教えます。友達だし、場外戦術として、ボクを殺しにかかってこないから』

そう前置きするあたり、場外で何かされたことがあるのだろうかとお勘繰ってしまったが、それは置いておいて。

『ボクの聖文字 “S—^{ザ・スーパー}英雄” は、ボクが思い描く理想の英雄を作り出す能力です』

『でも、それは本質じゃないんだそうです』

『陛下によれば、本来はボクがその聖文字の能力であの姿になるのが正しい、ということでした』

『そうでないというのは、ボクの中にあるイメージが、望んでいたものが、文字の在り方を変えたのだと』

望んでいたもの？ と。ブルーは彼に聞き返した。

『騎士団に入る前、キャ、ッ、プが星条旗を背負うよりも前に、ボクは守ってもらってここに来たんです。父親が、ボクを守ってくれたんです』
『その父とはもう離れ離れですけど、もう二度と会えないですけど……、それでも！ ボクにとってヒーローとは、父のことなんです』
『だから、ボクにとってヒーローっていうのは、「自分を守ってくれる」強い父のイメージなんだと思うんです』

だから、ジエイムズ本人がヒーローになるのではなく、ジエイムズを守るために現れるヒーローこそがマスク・ド・マスキュリンなのだ、と。その説明は、ブルーとしても腑に落ちるものがあった。

(とはいえ原作を考えると、多分ジエイムズ君が見てないところでは随分適当なんじゃないかな……。いや、「子供の前では頑張ってるヒーローやってる」っていう意味じゃ、本当にお父さんみたいなもの、なのかな?)

『騎士団長グラウンドマスターによると、聖文字シユリフトっていうのは「本人に深く刻まれているもの」が呼び起こされるんだそうです。だからブルーもきつと、そういうことなんじゃないですかね、ヘエイ！』

深く刻まれているものか、と。そう復唱して、そして脳裏に何か「赤い」映像が一瞬過ったことで、再び銀の爪だけでなく金属化(銀化?)能力も使えるようになったブルーだったが。

だからこそ、ここまである意味「バンビエツタ以上に」焼かれ続けたことで。それ以上の爆発が、炎が目の前に予兆として存在していることで、彼と彼の内の「何か」が重なり「開かれた」。

赤。

赤。

赤。

赤。

ひたすら赤。

赤。

赤。

赤。

赤。

赤。

赤。

赤。

赤。

熱い。

赤。

赤。

赤。

名状しがたい、もはや何も感じ取ることが出来ない。只ひたすら熱と、息苦しさと、「赤い」視界だけがそこにあつた。

『……………ほう？ 何故生きているのか。純血であれ「私が」そうしようと思ひ実行したにもかかわらず。到底、耐えられる訳も無いだろうに』

声が、聞き覚えのある声が、自分に問いかける。それに、果たして自分は何と答えたか？

何を思い、何を考え、何と応じたか。

『^死し、にたく——』

「——死にたく、ない！」

現実のブルーはそう叫び、腕から生やした爪をそのまま「横に薙ぎ払った」。

たったそれだけの動作で、爪から湧き出た「銀色の血」が、爪の延長上に刃を作り、まるでバターでも切るかのようにグレミイの「想像の矢」を掻き消す。

流星にそれには、グレミイも驚いた顔でブルーの姿を見ていた。

「刻まれたもの……？ そうだ、だって、僕は『死んでないと』おかし
いんだ。いや、そうじゃない——きつと『もう死んでる』んだ。こ

「こだから『死んでない事になった』だけで、本当なら」

「ふうん……。まあ、リルトットですら餓死した後にくつちに來たらしいしね。現世でどうなっただからこつちに來たというのは、また別なことかもしれないね。」

「それはそうと、どうやら新しい能力に目覚めたつてところかな？」

「震えながら、ブルーはそのまま爪に纏った銀の血を溢れさせ、どろどろと音を立てて再形成する。爪ごと変形させたそれは、腕から生えた長い剣のようでもある。」

「……………銀の、蒸着」

「それをブルーは振るい、グレミイの「白昼夢を引き裂いた」。

「それは、想像の埒外だった——」

「——それで、僕を頼れないかと來たわけか。うん、なるほど……………、よし解決した」

「は？ 何言っただお前……って、オイ、ブルー？ どうした、一体どうしたブルー!？」

「グレミイのことを蒼都に適當に紹介して悪態をついた、ほぼその後。特に何かあったわけでもなく、目の前でブルーが膝から崩れ落ち倒れた。見れば白目を剥いて気絶している。何があったのか、否、今の状況なら仕掛人は一人しかいない。」

「脈や呼吸は安定しているのを手で確認してから、グレミイを半眼でねめつけるリルトット。」

「何したんだコイツによオ。バンビのお気に入りなんだから下手なことすんじゃねエよ本気で……………」

「へえー……………」

「何だよその目」

「いや、てつきりバンビエツタのことは心底嫌っているものだと思っただけだ。意外と『そういう気を遣う』程度には、仲間意識が芽生えたんだと思っただけ」

「仲間意識イ？ 気持ち悪っ。バンビ相手に出来るモンじゃねえよ。」

「でもまあ、なんだかんだコイツが頑張っつて、俺がバンビを嫌わない」

ように誘導してるみたいだし。だから少しくらいは気にかけてやつても、腹が空くわけでもないし？ 良いだろ」

「……………気づいていたんだ」

「お前、俺何だと思ってるんだよ」

「食い意地の張った食いしん坊」

「ただの食いしん坊だったらオメーの所になんて来ねーよ妄想野郎オ」

そんなことを話しながら、しれっとブルーの頭を膝に乗せて、前髪をどかしてから目を閉じてやるリルトット。それに少しだけ、グレミイは表情を無くした。

「……………君も『そういう趣味』なのかな？ わざわざそんな棒切れのようなところに乗せて」

「ああ？ ……いや馬鹿だろ、ガキ相手にそんな気は起きねーよ。そもそも生前『そんな贅沢出来る環境にすら』いなかったし。前に話したろ？」

「そういう年齢でもなかったらろ君。」

まあ、それはそうとして意外と甘やかすんだと思ってね」

「甘やかしちゃいねーよ。……………さっきも言ったけど、あんまアレな扱いしてバンビに返すと後が面倒臭い」

そういうことしておくよ、と表情に笑顔を浮かべるグレミイに、「だからガキっつーか、俺の体感的に2歳くらいが相手だぞ」と呆れるリルトットであった。

なおリルトット側の内心は、近所のオバさんから幼児を預かってあやしている以上の感覚はない。バンビエツタも納得の安全安心枠である。

#018. 背信の剣

「リルお姉ちゃん、いる……………？　って、えっ!？」

「いやお前ら、何してるのさ!？」　意味わかんないじゃんかっ!」

普段の集合場所に現れたブルーこと蒼都とキャンディスだったが、その場にいたリルトットとジジがしていたことを前に混乱した。

端的に言えば、二人とも完聖体を発動し、なおかつリルトットの羽根から出現した罅が、ジジの背中の骨の牙を「遊ぶように」噛んでいた。「あっ♡」と微妙な声を愉しみながら上げるジジに「気持ち悪いから止めろ」と半眼なリルトットなので、何かしら遊んでいるわけでも折檻しているわけでもなさそうだが、状況が本当に意味不明である。

そんな彼女たちに「ああ」と完聖体を解除しながら、リルトットは腕を組んで言った。

「ちよつと『削りたい』らしいから、調子を見てたんだよ。どこ喰ってどこ喰わないべきかのな」

「？」

「リルく、それだとブルーもキャンディちゃんもわかんないよ。」

「じゃあボクから説明するね、えっへん!」

こちららも完聖体たる背部の「骨の翼」を解除しながら、ニコニコとあざとい笑顔と愛想を振りまいて言葉を続けた。端的に言えば「完聖体を弱体化させたい」というものである。言葉に詰まるブルー。えっそんなこと出来るの!？　という疑問と、そもそも何故そんなことを?　という困惑とが同時に出ている。

そのリアクションは予想していたのか、ジジが「リルけっこう凄いやからねー」とニコニコ続けた。

「ほらボクー、親衛隊の候補リストに入っちゃったじゃん?　それ嫌なんだよねー。みんなと離れ離れになっちゃうじゃん!」

「ドンマイじゃんっ!」

「せいせいするわクソ野郎^{ビッチ}」

「二人ともボクに対して愛が足りないよ〜!? ブルー、ブルーは庇ってくれるよね、ね?」

「えっ? あ、うん」

(性癖とダブスタな所以外はまともな方だし。どっちもバンビちゃんよりはマシだし、クズくて性格悪くてもフツ、フツ、うん)

ブルー・ビジネスシティこと蒼都、完全に「普通」の定義が破壊された後のようである。

もつともこの場合彼のリアクションがパーフェクトコミュニケーションだったのか、「ありがとー! 大好き!」と楽し気に彼に抱き着いて、その場でぐるぐると何周かした。

「あーへいへい、あたし達が悪かったよ」

「ま、真面目な話するとな。俺の『神の乾き』^{ユベシユエル}は『概念捕食』効果があるだろ。それ使ってジジの『神の地獄』^{ゲヘノエル}から『ウイルス感染能力』だけ削除して欲しいって話だア。その下調べしてたんだよ」

「つまり親衛隊に任命されかかっている原因の方の能力を、少し弱体化できないかな〜って感じ? うん。リルってば、戦闘中は全然制御できないけどこういう時は器用だよ〜」

「リルお姉ちゃん、えっと、凄いや……?」

「おう感想なんか混乱してんよ。ま、実戦で使えなきや只の力カシなんだが……って、長エ。そろそろ離れとけクソ野郎^{ビッチ}」

「あう〜ん☆」

やや自嘲しながらリルトットは雑にジジの背を引っ張り、ブルーから引き離れた。借りて来た猫のようにおとなしく、普通に引っぱがされたジジである。

「上手くすれば完聖体の姿も変えられるし、もつと可愛くしたいな〜! 今のままだと聖^{スクラヴェライ}隷重ね掛けすると、悪魔の大将とかみたいになっっちゃうし」

「悪魔の?」

「あーアレね……、ミニーみたいにハートふりふりしまくンのもどうかと思うけど、可愛くはねーって感じじゃん?」

「首元に髑髏じやらじやらして尻尾とか角まで生えた上でパンデミックさせやがつからなア。前にアメリカの現世でゾンビ殺しに追い掛け回された時とか酷エもんだったぜ」

ゾンビ殺し？ と不思議そうにするブルーに、その話はしたくないー！ と両手を頭にやってブンブン嘆くように振り回すジジ。

「現世の人間のくせに尸魂界由来の斬術なんか使いまくる奴とか、あとサーカスみたいな狂人集団だぜ」

「リル、ボクしたくないんだけどーその話い！

全くう……、『指輪』なんてバンビちゃんが『死に際に植え付けた』だけたつていうのに。ホントやっかいだよ真面目にさく？

って、そんなことより、ブルーとキャンディちゃんはどうしたの？

あつ、ひよつとしてデート？ デート!?!」

「そう言う訳じゃないよ、ジジさん」

「まだ手は出してないじゃん」

「………まだ?」

リルトットとジジとブルー三人の反応から顔を逸らしてスルーしつつ、キャンディスはブルーの背中を少し叩いて話の続きを促した。

「大した話じゃないんだけど……、一応バンビちゃんからその、ね?」

「何で俺の方見ンだよガキ」

面倒くさそうな気配をかき取ったリルトット、早々にブルーへの罵倒混じりな苦笑いであった。

ちなみに物真似ことしなかったが、ブルーがバンビエツタと話し合った結果については次のようなものである。

『あなたのあの銀色の使った訓練したい? あたしじゃ駄目ってこと? ……あ、そうね。いい加減ミニーと決着つけないといけないから、今日もオハナシアイするところだし………、何よあのダンベルみたいな武器とか、ちよつと面白いじゃないのあの子。格闘技の本とか読み始めてるし最近。』

へ? 本当に話し合いかって? ま、まー、話し合いよ、話し合い。その目がうっさい。

で、そうねえ。だったら一番適任なのはキャンディかしら。ジジは

こう、物理！　って感じの攻撃じゃないから、ブルーの能力で弾けちやいそうだし。あなたの銀色のやつって多分、そういうものでしょ？　リルに関して「喰い千切ったのに生えて来てやがった」とか前に言ってたから、多分すぐ飽きちゃうと思う。うん。どうしても必要ならやるけど、あの子燃費が悪いから。ミニーに関しては、もう物理的にダメージしか入らないから、あんまり適任じゃないわよね。

そういうわけで、あたしみたいに直接攻撃系で、霊子の変換効率がすこぶる良くて、フォルシユテンディツビ完　聖　体があたしより「絶対に弱い」ってなると、キャンデイが適任と思うわ。多分、雑誌読んでる時に飲み物とか御菓子とか持って行って頼めばすんなりオツケーしてくれると思うわよ？　キャンデイってば、あの乱暴っぽさでけっこう女の子らしいってどうか、ガキっぽいところあるし。

……………あつ！　で、でも絶対にあなただけで二人きりで訓練とか駄目よ！　絶対！　やるんならリルに監督させること！　ジジは火に油注ぎそうだから、こういう時はリルを頼るの、良い？　ブルー、「これ以上」増えるのは許容できないよ？　ボン！　するよ？」

最後のフレイズと同時にブルーの上半身を「ボン」してるバンビエツタなので、説得力は十二分過ぎた。ちなみに「まあ二人とも裸だし、ブルーの私室だから掃除とかしないでもいいわよね」という軽い気持ちからの、事後愚痴ピロトック完全破壊の一発であったことは完全に余談である。

そしてそんな話を聞いた流れで「面倒臭え」と言いながらもペロペロキャンデイ数本を手にもって立ち上がる面倒見の良いリルトットと「おっもしろそー！」と楽し気に立ち上がるジジ。かくしてミニーニヤとバンビエツタの二人以外の全員が修練場に集まる形となった。「なんていうか、こうやって一緒に訓練とかすんの初めてじゃない？」「そうだね、キャンデイお姉ちゃん」

「……………っ」

「どうしたの？」

「な、なんでもない……………（あんまり意識してなかったけど、その成長し

たツラでお姉ちゃんって呼ばれるの妙にくすぐったいじゃんか」

少しそわそわしながらも、そんな自分の鼻をつまんで「ん〜！」と気合を入れるキャンデイス。独特な気合の入れ方である。思わず苦笑いするブルーだったが、そんな彼にすぐさま腰元から神聖弓を形成すると、チャージもほどほどに雷撃の矢を放つキャンデイス。

ザ・サンダーボルト

「T―雷霆―」キャンデイス・キャットニップ。能力はその名の通り、電気や雷を操作する能力だ。自らの霊子をベースに転換したりと

攻撃性に関しては応用の幅が広く扱いやすそうである。

「ガルヴァノサイクロン！」

「新技だな」

「おお、どつ派手え！」

そしてブルーがその矢を避けるより早く、次弾の雷撃の弓を間髪入れずに連射！ 矢自体はあらぬ方向に四方八方放たれるが、まるで「避雷針」か何かのごとく、初段の矢の方向へとつられるように、ブルーの周囲を覆い旋回し、そして着弾。

びりびりしながら「あばばばばば」とカートウンコミックのように痺れるブルー。「ブルーくそ雑魚みたいで可愛い♡」とあんなりな感想を言うジジに、隣で飽きれるリルトットはともかく。例によつて「銀色に輝き」、すぐさまその電撃状態は解除された。

「じゃあ今度は僕の番……」

「おう、来るかウ○ヴァリン！」

「いや確かにそれっぽいけど、その呼び方流行ってるの!？」

「恰好良いならいいじゃんよ！ こーゆーのはノリと勢いが良い方が勝つって昔っから決まってるんだ！」

思わずツツコミを入れながら接近するブルー。既に両腕からは鉤爪を作り出し、それを構えて斬るように動く。右手を振り下ろすと同時に左手の小手先からは球状の神聖滅矢を射出した。

もつとも、機敏な動きでそれを回避するキャンデイス。良く見ればブーツのかかと付近へと、聖隷で稲妻模様のブースターのようなものを作り出し、飛廉脚の移動速度を向上させているようだ。

「地力そんなに高くないから、意外とああいいう小手先の技術はしつか

り使うんだよなア」

「キャンディちゃんも努力家だよね。完聖体にも全然満足してないみたいだしさ〜?」

「いいじゃんか、結構楽しい! ガキの頃だったらあつという間にぶつ倒せそうだったけど、ちゃんと歯ごたえある男に育ったじゃない!」

「え? あ、うん。ありがとう?」

「何で疑問形?」

ちなみにその視線が割とぼるんばるん揺れるキャンディスの露出過多な上半身の一部分へと向けられていることに気づかないくらいに、キャンディス本人は戦闘訓練として真面目にやっているらしい。ブルーに関して決して不真面目と言う訳ではないのだが、いかんせん彼女の服装は色々とお色気が強かった。気が散ってちよつとやり取りが適当になっちゃうのも仕方ないね。

「それって、銀色のやつ。名前とか決まってるんの?」

「うん。えつと……、使う時にどうも血がメインで銀になってるみたいだから、血を吹き付けて銀になって強化されるー、みたいな感じで。ビートプレッシングオブシルバー心音流血の銀による蒸着とかにしようかなって——」

「長いじゃん!?! いや覚えられないって、もうちよつとシンプルにしなよ。あたしも一緒に考えるから。これでもそういうの得意なんだっぜ♪」

そしてキャンディス、リルトットとも別軸で普通のお姉ちゃん的な振る舞いを始めていた。ジジにしても「意外と女の子」だという判定があるので、このあたりは不自然な振る舞いではないのだが、そこまで強い駄目出しでもなく一緒に技のネーミングとかを考えてくれる付き合いの良さに、意外なものを見たとちよつとびっくりした顔のブルーである。

そんな風に色々と話しながら近接戦だったり遠距離戦だったりを繰り返していると、約二名が階段から下りて入場して来た。

「お、なんかまたやってるな」

「バンビエツタは……、居ないね! ヨシ!」

トサカのようなモヒカンを撫でつけてブルーたちを観察するバズビーと、びくびくしながら周囲を見回しているベレニケである。また妙なタイミングで来るなど思いながらも、リルトットは思わずといった形でツツコミを入れた。

「今頃地獄みたいな話し合いを別なところでしてるから気にすんな」

「そ、そうなのか？ ふう……………、寿命が縮まるよ」

「トラウマになってるじゃねエか、ベレニケお前…………」

「あれでも少しはマシになったんだがなア、頭バンビエッタのサイコビッチ」

「本当ねー！ ちょっとはマシになったよね、髪の毛一本の毛先くらいさー！… ねー！… ねー！… ねー！…」

—————ケツ

(闇が…………、心の闇が隠しきれないよジジさん!?)

最後のオノマトペのところだけ壮絶に死んだ目をして苦悶の表情を浮かべ吐き出すように言ったジジの姿を目撃したのは、幸い遠方からチラ見していたブルーだけであった。

さて、そんな訓練も段々飽きて来たのか「もうちよつと強いやついくぞー！」と気合を入れ直して、叫ぶキャンデイス。そんな彼女に合わせる、ブルーも自身の能力名を叫ぶ。

「サガタニトート神の雷鳴」

「シルバーレッシング銀の蒸着！」

完璧体の光の柱が伸びる。

対するブルーは、右手の鉤爪を變形させて剣に。それぞれ左右90度折れ曲がり、真ん中の爪は姿を消し、刃同士の間へ銀色の血が満ち満ちて一本の剣のような形に。以前、グレミイの造り出した「白昼夢」という「げんじつ夢」を切り裂いた、あの剣だ。

「えっ?」

「オイオイ」

「うっそ〜!」

「マジかよ」

さて。いかにも変身中というところである彼女に、ブルーは特に気

にせず接近し、未だ「防御膜」の役割も果たす光の柱が消えるよりも先に、思いつき「切り裂いた」。変身途中というところで、未だ霊子が羽根と聖隷の証たる五芒星の輪を形成しかかっている途中での思い切った一撃。まさか攻撃が貫通されるとは思っていなかったこともあり、キャンデイスも、同様から反応が遅れる。

そんな彼女へ向けて、ブルーは鉤爪を解除した左手で殴るようにその隙間に手を突き入れ――。

「っ、え、えいつ」

「ひゃんツ!?!」

直前までは完全に殴るモーションだったが、途中で急減速して指先を突き出し、わき腹を「ちよん」とつついた。

思わず変な声が出たキャンデイスであったが、羞恥で顔を赤くするよりも先に後退するブルーへ「ど、どんな顔したらいいか分からないじゃんか?!」と微妙なキレ方をする。

ついでに柱が砕けて露わになったキャンデイスの姿は、稲妻を模した羽根が背部に二つずつと、両肩に雷の球が形成されていた。

「な、何で殴るの止めたのさっ! 意味わかんないじゃんか」

「えーつと、ね? ……………ちよつとセクハラみたいになっちゃうから言いたくないんだけど」

「早く言えッ!」

「……………お肌綺麗だから、普通に汚すのがもつたいなくて」
「えっ――?」

急速展開。ちよつと照れたように言うブルーのその仕草に、謎の不意打ちを喰らったキャンデイスは思考停止。ジジはそんな彼女を見て舌なめずりをし、リルトットは「やっぱりハーレム野郎狙ってるか?」と呆れ気味。ベレニケは「戦闘中にああ言える度胸は、果たして培われて良かったものなのかどうなのか……」と悩まし気にため息をついた。

なおバズビーは「あの剣みたいなの、使えるな……」と酷く真剣な顔でブツブツつぶやいている。明らかに彼も彼で、何かしらの私怨が隠しきれないが、この場の面々は察するところがあるのか特に言

及せず気前よくスルーしていた。

「そ、そそそ！ そんなこと今更言われなれてるから、恥ずかしくなれないし！ 真面目にやれれば、ブルーもさ！ 戦場だったら死ぬじゃんかッ！」

「大丈夫、僕、不死身っぽいから」

「傲慢さがヤベエぞあのガキ」

「個人の不死性だったらボクよりブルーの方が高そうだしね〜実際」

「そもそも『死なない確証がある』ほど死んでいる現状の方に疑問を持つべきと異議を唱えたいが……？」

「そういう文句はバンビに言えよハゲ野郎オ」

「僕はまだハゲてはいないからね!! 染めてても現状は霊体がベースだから頭皮も痛まないしワックスのカスも出ないし！」

「ヒートアップするのがそこで良いのかベレニケ？」

「……………うん、『背信の剣』だな。滅却師の能力をぶった切る武器だから、背信者の剣」

意外と古風なネーミングをするバズビーであるが、実際この訓練の後にそのネーミングが採用されたりする。が、この時点では特に興味が無いのか、誰もツツコミを入れなかった。

どちらかと言えば、リルトットはもつと別な部分に気が回っている。

「そんなことより、バズビーお前ちよつとツラ貸せ」

「しやがめってことか？ 別にいいけど」

「なになに、ナイシヨ話〜？」

「お前はあんまりカンケー無いだろ、『ゾンビの力のタネ』が別なところにあるからよオ。」

どつちかつつと、対策みたいな話か？ 滅却師の能力、聖文字だけじゃなくってこれから無効化されるつてのも考えておいた方がいいかもなア。ブルーだけじゃない、死神や虚にそういう力持った連中がいても不思議じゃね〜」

「あ？ 何だつて。普通、ああいうのは無理だろ？ ユーゴーだつて、ブルーくらいなものだつて言ってたし。同族の能力に強いってい

うのは」

っていうかどう考えてもバンビエツタのせいだろあそこまで強く無効化するの、というバズビーの台詞に肩をすくめて、しかしリルトットは真面目な表情を崩さない。

「有り得ないって切って捨てて死んだらマヌケやんよ、トサカ野郎オ」

髪型への直接的な侮蔑にキレ気味の表情になったバズビーを「まあまあ」となだめた後、ジジはリルトットに詳細を聞く。

「要は学者とか研究者とか、そんなモンいたら拙いって話だ。下手すると『虚へ耐性が無い』こっちの生態とかも割り出されるだろ」

「研究者？ それって、浦原喜助？ 情報データにあつた」

「だけじゃねエ。虚の方にもそういう変わったのが居ないとも限らないし、何より一番恐ろしいのは死神の方だ。」

ここ百年内で帝国所属でもない滅却師がどれくらい狩り殺されたかって話だろ。片手じゃ済まないってんなら、明らかに研究材料とかにされて色々探られてるって見た方が良いつて話」

死神の方のヘッドは色々狂ってるタイプだろオ映画みたいに、と語るリルトットに、バズビーは半信半疑、ジジの目からはハイライトが消失していた。何かしらジジ本人のトラウマに抵触したのだろうか、喉元のあたりを両手で覆って「大丈夫、大丈夫だよ」と繰り返し呟いていた。

なお戦闘のみに限って言えばその後、キャンデイスが雷球から放つた大砲めいた雷撃も、あつさりとブルーの「背信の剣」に切り裂かれて無効化されたりして「もつと鍛えないと駄目かな……」と少し落ち込んだり。代打として入ったベレニケと弓合戦をして遊んだり、割と充実した一日だったらしい。

そしてそんな訓練明け、ミニーニヤと一緒に帰ってきたバンビエツタが、セーラームー○的なアニメのVHS（※まだDVDなど出ていない時代）を両手に持ってホクホクしながら、バンビーズ三人に宣言した。

「今から変身シーン作るよ、皆！ あたし達がいかに最っ高にキュートでポップでファンタジーなのかを、相対する敵に知らしめながらぶっ殺すって感じよ！ 色もみんな違うしね！」

「また意味わからないこと言ってるじゃんか……」

「ブルーの話してたんだよね？ 何でそんなオモシロ展開になってるのかなー」

「キュートでポップでファンタジー？ ファンキーでヴァイオレンスでクレイジーの間違いだろビッチ」

「ごめんなさい、私じやバンビちゃんは止められなかったの〜」

（そう言いながら僕を椅子に縛り付ける時ノリノリだったよねミニーちゃん……、やつぱり能力使ってなくてもパワフルだよね。腹筋とかうっすらだけど割れてるくらいだし）

そしてそんなことを言われながら、部屋の隅で「審査員」と書かれた椅子に縛り付けられているブルーは、遠い目をしながら身じろぎして脱出を試みていた。

なお拘束方法は能力などでなくロープでがんじがらめな物理だったりするので、ブルーの「銀の蒸着」効果範囲対象外。なお、わざわざ鉤爪を展開するほどのアレな展開ではないだろうとタカをくくっていたりするため、この後五人それぞれの変身ポーズじみた完璧体発動シーンを見て審査することになった。

審査結果については……、言わぬが花だろうか。一番似合っていたのは、花より団子ではあったのだが。

#019. 白い森で

バンビエツタ・バスターバインの朝はそんなに早くない。

少なくともブルー・ビジネスシティこと蒼都の部屋で寝ている時に限っては、彼女はどこか安心しながらゆっくりうとうと、朝に目を覚ます。

もっとも朝とはいえど「城の場所」が場所であるため、天に上るのは「外界の光をうつすら収束した」月のようなものばかりであるが。それでも夜間のそれよりはまだ辛うじて光が強いこともあり、朝日と言っても差支えはないだろう。

そして起き上った彼女は、ブルーの姿がないことに気づいて少し不満げである。とりあえず「霊子で」洗顔をした後、「いつものように」リルトットの私室から内緒でパクってきたミューズリー（※シリアルの一種）を手に取り、冷蔵庫のような装置からミルク瓶と皿を取り出すと、開いてぶっかけて実食する。なお恰好は全裸のままであり、特に周囲の目を気にした様子もないことからそのリラックス具合がうかがい知れた。

「ブルーこれあんまり好きじゃないんだよね……。柔らかいパンばかり食べてるし。リルの御菓子はけっこう食べさせられてる？ けど」

適当に朝食を終えて衣服を着用し、これまた「霊子」を収束させて寝癖を整える。指による五本櫛の際地味に静血装を発動し、しっかりと髪を梳いていた。

ある程度のところ満足したのか、メイクらしいメイクもなく部屋の外に出るバンビエツタ。合鍵でロックをした後、「今日こそミニーと決着つけないとね……」と暗い笑みを浮かべながら廊下を歩いていると。

「———お願いします、ペペおじさん！ なんでもしますからお願い

いしますよ!」

「そういうフリーズは好きな女の子相手にとっておきなさいヨ! ミー相手にそんなこと言って……、下手するとそれ聞いた誰かさんにミー爆発四散されちゃうヨネツ☆」

ブルーが土下座をして謎の椅子のような何かに座って普段通り浮いているペペ・ワキャブラーダ相手に土下座で頼み込んでいる姿が、バンビエッタの目に映った。一瞬で目のハイライトが消失するバンビエッタ。片や自分の「とにかく誰にも渡したくない」男の子が、どう見ても胡散臭くて大人な危ないビデオの敵のような姿をしている年齢不詳のジジイ相手に「なんでもするから」と頼み込んでいるのだ。思わず衝動的に爆散させようかと脳裏に一瞬過ったが、かろうじて事情を聞こうという発想が浮かんできたのは奇跡であろう。

「出来ればミーも代わってあげたいけれど、こればかりは上の意向だし………。それに聖文字とかもようやく使い慣れてきたんだよね? まだまだ安全じゃないってことでしょ、ゲツゲツゲ」

「うーん、そこを何とかありませんか……? あのお金ないですけどせめてお土産とか——」

「何よ、いじめられてるの? ブルー」

ゲゲ!? と、ケンカ腰で現れたバンビエッタに引きつった声を出すペペ。土下座している彼の背中に平然と座り椅子代わりにしながらハート型ポーチの中より、「珍しく」ハイリッヒ・ボーゲン神聖弓を形成。鏃が爆弾のような形状をした矢を形成して脅すように構える。

と、そんな下の方からブルーの手が伸びて、バンビエッタの腕をつかむ——既にその腕は「銀の蒸着」シルバークレッシングにより銀の右腕と化しており、それに掴まれた瞬間に収束していた霊子が「強制的に」散らされた。

「ツ!? ちょっと、何やってるのブル………、きやつー!」

そしてその体勢のままバンビエッタを横に倒す様にし、同時に自らの身体もぐるりと高速回転して、彼女を庇うように抱いてごろごろ廊下を転がっていった。「今のうちにー!」という彼の声に応じ、ペペは「恩に着るよ、マジでネ………」と未だ戦々恐々としながら、椅子の

足元に霊子の足場を形成して飛廉脚を使用し退散した。かなりの高速移動ぶりからその本気度が伺える。

しばらくごろごろ転がった後「いい加減長いつ！」とバンビエツタに言われて、彼女を抱きしめたまま回転を止める。状況的にはブルーが下となりバンビエツタを抱きしめているような絵面だ。

そんな状況に気づいたバンビエツタは、その気になればすぐキスできそうな距離にある「ふう」と一息ついた彼の表情に、身体が硬くなる。

「ち、ち、ち、ちかいわよお……………」

「えっ、そう？　一緒に寝てる時はいつもこれくらい——」

「不意打ちは駄目って言ってるの！　ここに、こんな弱々な女の子みたいな姿見られたら『殺されちゃう』じゃないっ!!?　バンビエツタちゃんは強々なイメージじゃないとダメなのッ！」

（それは普段の頭バンビちゃんな行動を前提として考えている発言なのか、それとも生前のトラウマか何かがあつての発言なのか……………。あつ、おビビり遊ばれてぎゅって抱き着いてくる力強くなっていいなあ、柔らかい……………）

相も変わらずちゃっかりしているブルーはさておき。「あんなの見えるのなんてあなたくらいなんだから……………」としおらしい声なバンビエツタの背中をポンポンしてしばらくあやした後、何事も無かったかのように二人そろって起き上った。

改めて事情を聞くバンビエツタに、ブルーは何と言うこともないように答える。

「現世の調査任務……………」

「うん。今度はペペさんとかなんだけど、調査先がまた日本みたいだから」

「日本けっこう多いわよね…………。アメリカとかロンドンとかには行かないのは知ってるけど」

「今回も情報集めがメインらしいんだけど、代わって欲しかったんだ」

何で？　と首をかしげるバンビエツタ。ブルーが一応中国出身なことくらい知っているので、もし現世に行くならそっちを希望するだ

「それはそうだけど、テレビとかコミックとか日本のが好きだし……、心は日本人なのかも？」

「ちよつと何言ってるかバンビちゃんわからない」「えっ?」

そんな話が事前にされたせいかな。バンビエツタは「なるほどね……」と何かを納得し、本日の予定を変更した。

「というわけで、今日は日本食? を作るよ!」

「また意味わかんねーこと言い出したなクソビツチ」「でもでも、皆で何かやるのって楽しくない?」「どうして日本のジャパニーズですか?」「あんまりオイル使わないから好きじゃないんだけどバンビ」

ブルーがバズビーやベレニケ、アスキンらに誘われバスケット(?)をしに行く姿を見送ってから、普段のバンビーズが占領している部屋にて、堂々と宣言したバンビエツタである。

案の定、唐突な思いつきそのもののような発言にうんざりしたりアクションのリルトットである。半眼でバンビエツタを見ながら「またかよ」と呆れた様子だ。

「この間も変身ポーズ作るとかモロ変身みたいなことさせやがって、俺は聖隷したところで『危険度変わらない』からやらないって言ったのに」

「でもリルお姉さん、そう言いながらブルーから一番可愛いって言うてもらっていませんでしたあ?」

「リルはちっちゃいからねー。魔法少女? っていうの? だと一番似合っただし」

「ブルーって別に『そう言う趣味』じゃないから、純粹に可愛さとかで選んだんじゃない?」

「でも納得いかないですよー (・A・)」

「アレはアレでいいんじゃない? というよりそんなに『翼』から『出ちゃう』んだったら、いつそ『翼の周りを』覆っちゃえばいいんじゃないの?」

びっくり、とバンビエッタのその一言で右側の眉が動くリルトット。まーそんなことより、とバンビエッタ本人は適当に言っただけだったが、彼女は少し思案し始める。とはいえそれもバンビエッタが続けた「ブルーが食べたかって言ってたの！」の一言を聞いて切り上げ、ため息をついて視線を向けた。

「日本の食事が食べたいってだけであのペペに土下座までして現世の調査任務代わりたいとか言っていたから、駄目よねミニー」

「はい（レ○プ目真顔）」

「ミニーちゃん余裕がないと声、凄いいよキャンディちゃん」
「怖……」

そんな訳で多数決をとった訳でもないが、5人中3人がやる方向で意見がまとまった結果、そういう運びとなった。なおジジは「苦手じゃないけどねー」とのほほんとした笑い、キャンディスは「バンビはともかくミニーをそのまま料理させたら、厨房が原形も残らないじゃんか……」とやれやれといった様子であった。

そんな流れで道中遭遇した約一名を引き連れて厨房に参上し、一部エリアをリルトットが交渉して貸切らせてもらう。

五人が五人とも聖隷を用いて霊子で造り出したエプロンを着用してから、バンビエッタは胸を張って一言。

「で、日本食って何を作ったらいのかしら」

((何でそれを最初に決めてないんだこの頭バンビエッタ))

『ほぼ思いつきの行動と断定。行動計画の見直しを期待する』

「……………というか何でコイツいんだよ、このロボ」

リルトットが指さした先、バンビエッタの背後でガシャガシャと鎧のこすれる音が煩いのは、大柄な体躯のBG9である。未だ全体のシルエットは細くなっておらずマッシュブキが残っており、組んでいる二の腕の太さがその身体の「出来上がり具合」を現していた。

「何か良く知らないけど、現世いた時って軍人？とかで色々渡り歩いたりもしてたって言ってたし、確か。料理とかそーゆーのも詳しいと思うって」

『否定はしない』

「そオいやお前とかブルーとかが帝国まで連れて来たんだつたな、そのロボ」

ともあれ全員で案を出し合う流れになったが、これは案外高速で決まった。

「日本って言ったらやつぱり、アレじゃん？ 寿司！」

TENIPURA

「天ぷらですう？」

「ラーメンでいいんじゃないかなー？ ボク、日本のヌードルが一番美味しかったって、ロバートさんに聞いたことあるよ？」

『インスタントならば高速で完成できると進言する』

「ンなもんある訳ねーだろ。というか手作りするとラーメンとか面倒だろオが。」

とりあえず日本食っていうなら、米炊いて味噌汁作って魚焼くとかで充分じゃねーの？」

「リル、あなた詳しいのね……？」

何で？ という顔をするバンビエツタに「どーでも良いから早くやんぞ」と適当に流し、そういう運びとなった。

いっせーの！ で「岩」「紙」「鋏」の3チームに分かれる編成を執り行い（要は「ぐーぱー」のアレである）、白米はバンビエツタ・リルトット・ジジのチーム、味噌汁はBG9一人、焼き魚はミニーニャとキャンデイスのチームとなった。

「じゃ、やるわよ！ うん」「がんばろーねー！」「おう」

『味噌スープは……、確か「石田宗弦」なる滅却師が残していた情報に載っていたはず。レシピは確か——』

「頑張りますよーう」「ミニーはまず『まな板を叩き斬らない』こととか『包丁を握り潰さないこと』とかから、な」「は、はいーっ……」

なお開始早々、リルトットのうろ覚えな記憶のため白米（※非日本米）を適当に洗い鍋に入れるバンビチーム、厨房班の滅却師たちからレシピ本を借り受けて「ふむふむ」と情報の入力を開始するBG9、「普通に焼くだけじゃ面白くないじゃん？」とお料理上手らしいことを言っつてミニーニャを不思議がらせるキャンデイスチームと、それぞれがそれぞれに個性が出ていた。

※ ※ ※

「アスキンさん、意外と上手だった……」

「こういうのは普段ダラーっつとしてても、たしなむ程度にそつなく熟すのがオシヤレなんだぜ？ ブルー。まあ、お前さんくらいの年齢でやると嫌味にとられることもあるかもしれないが、時にオシヤレは世界を救うんだ」

廊下を歩いて厨房へと向かうアスキン・ナツクルヴァールとブルー。既にアスキンは汗そのものを聖隷を使用して散らしていたが、ブルーはそうもいかない。そのため「水浴びする程でもないだろ、まだ」という彼の好意により、タオルを貸されて拭き終えた後だった。「お昼にはまだちよつと早いですよね？」

「いやいや、ブルーはまだ子供なんだから無理すんなよつ。運動したら腹、空くものだろう？ こつちに来てからの時間経過と身体の成長以上に色々『アレ』なんだから」

「？」
「おつと致命的だぜ…… 自分の晒されてるアレさをそんなに自覚出来ていないのか……？」

それこそリルトットが以前に言った「俺らの所にてまともな男に育つ訳ねエだろ」ということである。なんならバンビエツタと仲良く出来ている時点でその人格がどういう状態になっているのか、騎士団内でも良心側のアスキンをしても確認することからは目をそらしていたりするのだが、その辺の事情はブルーには理解されていなかった。

なお「最も正しく」洞察できていたのはグレミイくらいなので、騎士団の未来はどつちだ。

「でもお昼か……、うーんああ言った手前、カレーとか食べたいな」

「カレーならあるだろ？」

「カレーじゃなくってカレーライス？ って言ったらいいのかな。日

本のカレーはカレーっていう独自の食べ物ですよ。ラーメンが中国のラーメンと全然違うみたいだに」

「ローカライズって奴だなあ」

「日本のカレーはカリィであってカレーではないし、米国のちよつとアレなお店で適当に供給される泥水なんかじゃないんですよ断じてない」

「何で早口になったんだブルー……？　って、お？　何だ、何か『変な霊圧が』溜まってるぞ」

ブルーも流石にこの距離なら気づいた。いわゆる、古い大学の学食もしくは世界最大の家具販売店内にありそうなレストラン風の厨房にて、その座席の一角にいるバンビーズから放たれる、微妙に重苦しい霊圧の具合。周囲を圧すると言うより、どんよりしているような感じを受ける微妙な重苦しさである。

と、ブルーを見つけたバンビエツタは所在なさげに「こっち！」と手招きする。アスキンを見れば「行ってこい、そして何か上手い事やってあげろよ？」とさわやかスマイル。それに苦笑いしながら、ブルーは「バンビエツタとミニーニャに挟まれる座席」に座った。

「で、えーつと………？　えっ？　何、どうしたのバンビお姉ちゃん？」

「………サプライズじゃないけど、作ろうとはしたのよ？」

皆頑張ったのよ」

そんな言い訳のもとに、ブルーの前にBG9がトーカー映画の使用人口ボのようにロボットダンスめいた動きで配膳したものは。

銀の器に盛られた「おかゆ」、銀の皿に注がれた「味噌汁」、そして銀の皿にオシヤレに盛りつけられた「タラのムニエル」であった。

「えつと……、もしかして日本食を作ろうとしてくれたの？　………あ、そうなんだ。うん。えつと、ありがとう？」

困ったように言うブルーだったが、直後BG9からそれぞれの担当内訳が発表された。「空気読めよポンコツロボ野郎オ」と対面のリルトットの半眼に合わせ、壮絶な顔をするバンビエツタと爆笑しかけるジジであった。

さて、詳細に皿の内訳を語るなら。タラのムニエルは横にマッシュポテトが備え付けてあり、バジルを刻んだものがかつている。オリブとニンニクのソースの香りが大変美味しそうだ。美味しそうだが、これだけ日本食ではないことに不思議そうにするブルーだったが、「魚焼くならこつちの方が美味しそうじゃんか?」というキャンデイスの一言で「どういう流れ」でこうなったかを察した。

味噌汁については、コーンスープなどのように盛り付けられており、おそらく「ほぼ完ぺきなカット」をされたろう立方体の豆腐? が中央にクルトンのごとくおかれている。ワカメなどは存在していないが、このあたりは見栄えを重視したのだろうか。一見すると変な盛り付けではあるが、漂う匂いから想起される味付けはブルー的になじみ深いものである。

お粥については……………、お粥。以上。

「ちよつとブルー? なんであたし達の作ったのだけ見ている秒数が少ないの? 何なの、感想なんて出すまでもないって言いたいの?」「えっ!? い、いや、その、お、お粥だなーって」

「ま、テキトーにリゾット作るノリで雑にやったらこうもなるなア」「味しないよねー」

まさかの素粥であった。

とはいえせっかく好意で作ってもらったろうものに直接何か言うのも無粋である(爆殺される的意味も含めて)。ここは日本人たる中の人らしく両手を合わせて「いただきます」である。

「……………お粥だ」

「ま、まあね」「コメントなし」「バンビちゃんちよつとプルプルしてて可愛いー♡」

「こつちもまあムニエルというか…………? 美味しいけど、あれ? 何だろう香りがちよつと不思議」

「作る時にちよつと昆布? のブイヨンに漬けたからね。流石にムニエルそのままっていうのも味気ないし」「ブルー、マッシュポテトの感想が欲しいですうけど?」

「味噌汁は……………、!!? あつすごいこれ、凄い……………、普通! 普

通に味噌汁だ！」

『この場合は褒め言葉と解釈しよう』

ブルー個人の総評としては、1位B G 9、2位キャンデイスチーム、3位バンビエツタチームである。具体的には恐れ多いため言葉には出していないが（爆殺される的な意味で）、それでもブルーのリアクションの大ききで色々察しがついたらしい。

B G 9は「当然」という風に微笑んだ……、はずである。声だけがわずかにくぐもった金属の反響音を伴い聞こえてくる。

キャンデイスチームは「結局、私のマツシユポテトの感想が全然なさそうですね……」と落ち込むミニニヤに「とりあえずサンドイッチを安定して作れるようになるのが先？」と教育方針らしきものを悩むキャンデイス。

バンビエツタチームは「やっぱり戦犯って、お鍋焦がすくらい大火力だしてたバンビちゃんのせいだよなー」と揶揄うジジと我関せずブツブツ何かをつぶやいては考え事をしているリルトット。バンビエツタ本人は「そもそもお米を味付けしないで水でふやかすだけでもそもそ美味しいの？」と懐疑的な顔をしながら自分の作ったお粥をなめたりしている。

だが。そんな面々が一様に固まり、ブルーを見て、目を見開いた（※B G 9は良く判らない）。

いつも通り微笑んでいたブルーの目から、涙が流れたからだ。

「ぶ、ブルー、どうしたのさ？ 何か魚の小骨でも喉に刺さった？ 出来る限り取ったんだけど」

「……………へっ？ えっと、何、キャンデイお姉ちゃん？」

「ブルー大丈夫？ 何か凄い泣いちやってるけど」

「ジジさん？ ……………あ、本当だ」

「自覚ねーのかよ」

リルトットの指摘に「ちよっと待って」と指で拭おうとするが、それでも涙が止まらない。どんどん溢れて来る涙に、段々と苦しくなっ

て来て、嘔吐えずくような、全身が震えるような、久しく味わっていなかった体感がブルーの中の人たる転生者の精神を襲った。

この時、彼が考えていたことは——ひたすらに「現代日本」で自分の生活だった。

(嗚呼、嘘うそでしょ……？ こつちに来てから30年くらい経ってるはずのくせにさ、ええ……？ あー、ダメだこれ。

多分、完全に——ホームシック郷愁の念だ)

故郷の味。ベレニケが買って来たおにぎりやらカレーやらでテンションが上がったのは、まだ序の口だった。「本来なら仲が悪かった」人々が、自分のために料理を作ってくれたと言う事実すら、その感謝すら忘れてしまう程に。ブルーの、その転生者の人格の胸に去来したごくごく当たり前の生活。通学電車に乗って学校にいたり、友達と遊んだり、それこそバスケをしたりゲームをやったり、旅行に行ったり。それこそ「実の両親」や「少し粗暴な姉」のことも思い出し、何でも無いようなことだったそれらの「頭に残っていた記録」が、正しく「自分自身の記憶」として想起され、呼び戻され、感情の濁流に呑まれた。

いつまで経っても泣き止まず、さらに酷い症状に陥るブルー。おどおどするキャンデイスやジジを尻目に、戸惑いながらも「大丈夫ですよ？」と彼の背中を撫でながら声をかけ続けるミニーニヤ。

そして、バンビエツタは腕を組みながら、そんな二人を見ていた。

「……………お前は何か慰めたりしねーのかよ、クソビッチ」

「リル、バンビちゃんをそう言うの!?! 止めなさい。」

……………まあ、あたしがあんなことやっても逆効果でしょ」

「そオカよ……………、って、はっ?!?!」

コイツもしかして何か本当に色々と自分の頭バンビエツタな言動とかそういうのに自覚あったのか?!?! 的な驚愕に珍しく狼狽するリルトツト。

そんな彼女の反応など気にした様子もなく、真剣なまなざしで泣き続けるブルーの、その「何かが剥がれた表情」とミニーニヤとを見て。「……………』どっちが上か』ははつきりさせるけど、独占はしない方が

「いいかしら」

「あ？」

リルトットの疑問に答えず、何事もなかったかのように立ち上がり。バンビエツタは、雑に「よくわかんないけど甘えなさい！」とブルーの頭を正面から抱きしめた。

直後、ミニーニヤとの取り合いが発生したことにより、その時点で不思議とブルーの涙は収まり、またいつもの苦笑いが顔に浮かんだ。

#020. 番外編：THE FULLY RESSIS
TANT

「奪った卍解でその隊長を殺す、か。……あまりエレガントとは言えないが、その狙いとは？」

『卍解を無力化した死神など聖兵で十分だと考えられる。我々がスクラヴェライ聖隷を必要とする確率すら20パーセントと思われるが』

円卓。シュテルンリッター星十字騎士団の聖章騎士たる彼等滅却師の一団は、円形に囲われたテーブルに配置された26の椅子に座っている。それぞれの椅子の背もたれは、各々司るアルファベットに対応して特徴的な衣装が施されており、しかしそのうちのいくつかは既に誰も座っていない。

ハツシユヴァルトを含めた十七席にそれぞれのメンバーがおり、そのなかで最も奥の席に座るハツシユヴァルトの話全員が聞いていた。

曰く、彼等の心のよりどころとなっている希望ごと、死神を滅却師の王国で毆殺すると。

「卍解がなくなるとも我らを倒せるかもしれない。

あわよくば卍解を取り戻せるかもしれない。

……仮に取り戻せたところで『万に一つもない』可能性を信じるその希望こそが死神たちの心の拠り所なのだ」

「……………」

そして、この場において居心地が悪そうにしているブルーと蒼都であった。

「奴らの力、奴らの半身である斬魄刀もろとも、その希望と絆とを叩き折り。死神どもの身と心に真の敗北を刻み込む。

——それが陛下の御意志に他ならない」

(背景を知ってる身としてはいまいち乗り気にならないって言うか……。あんまり調子に乗ってもどうせ聖別されちゃうだろうしなあ、気を抜いてると)

酷くシビアな判定であった。原作におけるユーハバッハの「心の通わない」所業、もしくは「心が通っていたからこそその」所業を知っているが故の諦観であるかもしれない。

そして『F―恐怖―』エス・ノトに対し、半眼で毒を吐くりルトツト。

『……悪趣味ダケド愉シソウ、ダ』

「冗談は完聖体だけにしとけよ、ヘドロ野郎オ」

『へド……!?!』

(あつ、マスク越しだけどお目目まんまる……。意外とリアクション幼いなノトくん)

「ヘドロ野郎だかペド野郎だかはどーでもいいの！ ワンちゃんだつてそうじゃない奴だつて見つけ次第斬つて斬つて斬りまくつてやるだけっ」

会話をぶった切るようなバンビエツタのその一言に、しかし彼女に対するブルーのツツコミが入り、その後ドミノ倒しのように連続で続いた。

「バンビお姉ちゃん、ペド野郎は流石に天と地ほどの差が……」

「わーお、バンビちゃんつたら辛辣う♡」

「キレツキレじゃねエか……」

「変態にされちやつてるつて思うの……」

「バンビエツタお前、ブルーより年上なんだから、もうちよつと『新人』相手にも気を遣つた方がオシヤレだぜ?」

「言葉選びをしつかりするべきだところの『S―英雄―』もサジエスチョンして進ぜよう」

「もう少しまともに教エデュケーション養を詰め込んでおくべきだったか」

『気遣いの度合い0パーセント、大人げないと断定する』

「ちよつと!?! どうしてみんなバンビエツタちゃんを責める訳!?!」

あたしが一体何をしたつていうのよ!?! リルだつて酷い事言つてる

じゃないっ」

「酷いこと言ってるって自覚はあるのね、バンビエツタちゃん」

「モンスター扱いと変態扱いと、どっちがアレかな、ブルー？」

「どっちもどっちじゃないかな。あと、リルお姉ちゃんも……」

「クソビッチよりはマシだろ『事実しか』言ってるねエシ」

「いやバンビもリルも、そいつ一応『靈的には』ともかく中身一番ガキじゃないか……」

もうちよつと考えな、というキャンデイスの指摘に不満げなバンビエツタと、少し照れたのかいたたまれないのか目を伏せてため息をついたエス・ノトだった。

そしてこの空気のせいでも、ユーハバツハからの「見敵必殺」サーチアンドゴーストロイ的な言葉を伝えるタイミングを失ったハッシュヴアルトが、どこか寂し気な目でバズビーの方を見ていた。

※ ※ ※

「ほう！ さて……、『ここまで』予想通り、かな」

尸魂界の瀨霊廷、その「影」より内に創造されていた滅却師が、ヴァンデンライヒ見えざる帝国”。既に和風建築だったこのエリアの内側一体が洋風のそれに覆いつくされており、「鏡映しに」切り替わったような情景はとて直前までの光景のそれではない。

その周囲を見渡して、ブルーはほつと一息。周囲に比べて多少高い建造物ゆえ、少し遠い所の「靈子の爆発」やら何やらも観測できる。既に戦闘は開始されているが、それでも彼は少しだけ安心したようだった。

「……………流石にまだ『靈王宮』から来てないっぽいな、日番谷隊長。もうしばらくは気にしないで大丈夫かな」

「何してるんです、ブルー？」

「あ、可愛い……………って、そうじゃなくなつて、ミニーちゃんどうしたの？」

と、わざわざ中腰になつて、ミニーニヤが下からブルーの顔を覗き

込んで来た。身長差的に結構ギリギリの角度である（おおよそ20センチ前後ミニーニヤが大きい）。

ブルーの問いかけに「こつちの台詞なんですけどー」と人差し指で彼の額を鼻をツンツンすると、起き上ってにつこりと微笑んだ。

「暇そうにしてなさそうだったの、ブルー。どうしたのかしらあつて」「えーつと、ほら。ハツシユヴァルトさんが言つてたよね、『自分が奪った卍解の持ち主』を殺すようにつて。だからその隊長さんがいないかなーつて」

「鎖結と魄睡……、死神にとつては命みたいなところを壊したんですう？ よね。流石にそう簡単には戦線復帰できないーつて思うの」「とはいえ『零番隊』つてところの情報データが全然少ないから、完璧にはいかないかなつて。あんまり無茶しない程度に、安全マージンはとつとければとは思つてる。

………無茶しないつて言うと、ペーゲーBGさんも『復活してから』日は浅いの、結構無茶してるからね。何て言うか、本当もう完全に口ポットみたいになつちやつたし」

「実際『あの身体になつてから』時間は経つていなかったかしら………」

「————つてそこーツ！ あたしを抜いていちやいちゃしないの、ミニーもブルーも！」

「ぎゃふんっ!?!」

「ブル~~~~~(@O@)!?!」

しれつと爆発を背後に背負つて、その勢いで飛び蹴りをブルーの顔面に喰らわせたバンビエッタ・バスターバインである。その状態から秒速で逆肩車に移行。慌てるブルーの顔を自分の股間で押さえ両足でブルーの首を締めながら、ミニーニヤに「真面目にしないとダメよ！ ダメ！」と宣言。「どの口が言っているのかしら」と白けた目で見られているが、特に気にした様子もなく、顔が真っ赤になったブルーから降りて、更にボサボサになった髪を直した。

「鼻血出てるじゃないブルー、あなた。ダメよ、こんな所でシたくなっちゃっても、バンビエツタちゃんもお仕事中は弁えるんだから——」

「普通あの勢いでライダ○キック喰らったら鼻から血が出るくらいじゃおさまらないからね!? あー、ちよつと治すから待つて……」

顔を押しさえながら一瞬「銀色に光る」と、折れ曲がった鼻の角度が矯正された。もっとも今回血そのものは残っているらしく、ミニーニヤが彼より少し高い位置からハンカチでお世話する。それに「あは♡ ボクもボクも〜!」と駆け寄り、ブルーの髪型を手櫛で整え愉しそうなジジ。

そんな三人に「ふんっ!」と鼻を鳴らすと、マイペースにキヤラメルを複数口に放り込んでいるリルトットと「どつちかというとバンビの方がシたいんじゃない?」と微妙にドキドキしてそうな顔をしてるキャンデイスに「あなた達も真面目にやるのっ!」と気合十分といった具合だ。

「少なくとも陛下が勝てば、死神にも虚にも殺される恐怖なんてない滅却師だけの世界が出来上がるんだからっ! それだけは間違いないって言つてたじゃない。

遊ぶのはその後! それまではちゃんとやらないといけないんだからっ」

「やけに気合入ってるじゃん」

「ビビりだから仕方ねエだろ。ま、どうせ滅却師だけの世界なんてなっても滅却師同士で争い始めるんだろオがな」

「リルったら悲観主義者〜! ま、再生なら任せてね?」

「そもそもその前に、命の危険なんてブルーがいれば大体どうにかなと思うの……、病気以外」

「良い事言うじゃないミニー! だからとりあえず後先考えず——
——目に入った連中は全員ぶっ殺すわよ!」

私に続きなさい! と言うバンビエツタ。そのまま飛廉脚で建物を下り、高速移動高速移動でどんどん離れていく——「他のバンビーズが着いてきているかを確認しないまま」。

腕からは「背信の剣」が這い出ており、そこに沿うように氷の竜の罅が形成。あたかも本来の大紅蓮氷輪丸のそれを思わせる形となっていた。

「わお！ そつちの方がよっぽど完聖体っぽいよね〜」

「ま、ブルーの場合アレは『羽根とは呼べねエ』からな」

苦笑いしてから再度「行ってきます」とだけ言って、ブルーはそのまま飛廉脚を併用して飛翔した。

「——さあワンちゃん隊長さん！ 出てこないと皆、あたしの『E—爆撃—』ジ・エクスパロードでボロボロにしちゃうよ！ 出てきなさい！」

空中である程度のところ（爆撃の攻撃範囲ギリギリ）で滞空しつつ、ブルーはバンビエッタの様子を伺う。既にバンビーズおよびブルー付きの聖兵たちは、全体の軍団行動に併せて自由編成として分散させているため、爆撃の巻き添えにはしないだろうが、それにしている場合には、相変わらずの無差別攻撃である。

そして、その爆撃にさらされている死神たちを見ながら、ブルーはため息。聞こえない程度の声で、ぼそりと呟いた。

「……これでも『原作より一週間くらいは後』だと思っただけ、思ったより準備は終わってないってことなのかな。終わってたら他の隊長格がすぐ出てくるだろうし」

死神側の対処を待ったというよりも、石田雨竜を『見えざる帝国』に馴染ませる時間をとったために多少は時系列に遅れが出ているのだが、その程度ではすぐさまに対策は打たれていなかったらしい。

「それはそうとあんまり殺しちゃうと『後に響く』と思うから止めさせたいんだけど、理由がなあ………、あつ」

そしてぼうつとしているうちに、バンビエッタの射出した「爆弾が先端についたような」神聖滅矢がブルーにも流れ弾として放たれ。当たり前のように、それを「背信の剣」で切り裂いて無効化した。

やがてしばらく撃ち尽くすと、ぜいぜいと肩で息をして「疲れたー」と文句を言うバンビエッタ。

「全く！ こんなに頑張って目立つようにしてもワンちゃん隊長さん

も出てこないじゃないッ！ つまんないわ、こうなったらバンビーズ全員で——つて、あれ？ ブルーだけ？」

ようやく周囲の状況に気づいたらしい彼女。子供みたいに地団太を踏みそれぞれの名前を呼び出す、一応それでも追加で爆撃しないのは多少はしやぎすぎて疲れたせいだろうか。

「まったく皆、リーダーに恥かかせたらどうなるか……、この辺全部更地にしてあぶり出してやるんだからねッ！」

「いや、バンビちゃんたぶん皆動けてないって言うか」

「どうしてよブルー！」

「ロバートさんも昔に言ってたかな。迷子にならないためには後ろの人が着いてきているかを確認することって」

「……………ひよつとして、あたしの方が迷子？」

「かなあ」

その指摘は色々致命的に彼女の羞恥心を刺激したのか、顔を真っ赤にして「ばかばか、ブルーの馬鹿！ もうちよつとオブラートに包みなさいよっ！」とぽかぽか殴りかかってくる。本気のそれではなくじゃれあいに近い威力に、ブルーは内心で微笑ましいものを見る気持ちだった。

(殺傷力ゼロで可愛いなあバンビちゃん……………、普段からこうだといいのに)

前言撤回、普段から心は砂漠のようであった。

「つていうよりブルーあなたそれ、奪った卍解よね？ 前はドラゴンしか見なかったけど、へえ……………、そーなるんだ、へー」

「何？ バンビお姉ちゃん」

「うん、こう、何て言ったらいいのかしら……………、ストレートに恰好良いわね！ あと使いやすそう！ ワンちゃん隊長さんのデカブツと違って！」

「ま、あああつちにはあつちでメリットはあるから…………」

実際、卍解の使用は一度だけのバンビエッタである。どうやら「卍解が傷ついた分」「本体たる使い手も傷つく」という仕様が、彼女としては大層お気に召さなかったらしい。戦闘＝自分の命を守るため、と

いう考え方のバンビエッタからしてみれば、使用するだけでリスクが大きい武器など扱に能わずといったところだ。

と、そのままブルーの首に抱き着く形で、飛廉脚を使って器用に位置調整するバンビエッタ。

「抱っこ」

「……えっ?」

「だから、抱っこ。疲れたからっ! それにミニーたちの目もないし……」

「……………ひよつとして結構『怖い』?」

ブルーの言葉に音を出しては答えず、ただ顔を隠す様に彼の胸元に額をくっつけるバンビエッタ。どうやらはりきっていたように見えしたのは、空元気だったらしい。いつものような「外向けの」つよつよバンビエッタちゃんというやつだ。

やれやれ、とは思わない。ブルーは基本的に、ジジのような完全イエスマン（に見せかけた反逆者）ではなく、自分で引き受けられる部分はしっかり引き受けるタイプである。

なので何を考えているかと言えば、いつものようにちゃっかりしているくらいだ。

（卍解状態でお姫様抱っこしながら、バンビちゃんのおっぱいぎゅつてしてもらってるこの状況……………、せめて第二次侵攻前だったらなあ……………）

ゴメンね日番谷隊長、こんな邪心まみれのまま氷輪丸を使っちゃつて）

なんとなくだが、ブルーの右手で竜の罅が、少し呆れたように軋んだ気がした。

そのまま高度を下ろしていくと、どこか「妙な霊圧」。その主は編み笠を被り、たった今この場にたどり着いたという風だった。

『……………貴公たちは、こう、何と言うべきか……………』

「あつ 狛村隊長」

「ワンちゃん隊長さん…………? あつ! ちよ、ちよつと待っててツ!

今『つよつよバンビちゃん』に切り替えるから。ブルーちよつと「ぎゅーっ」って抱きしめて！　すぐー！」

「無茶ぶりだなあ……」

言われながらも彼女を下ろしつつ「ぎゅーっ」と抱きしめてあげるブルー（当然「色々」と「堪能」）。数秒してテンションを取り戻したのか、彼女は快活に笑いながら腕を組み、「編み笠姿の」狛村左陣の前に堂々と立った。

「お待たせワンちゃん隊長さん！　………って、何でバケツ被ってるの？　全然オシヤレじゃないわよっ！」

「そういう理由じゃないと僕、思うんだけどな………」

『………我が黒縄天譴明王を奪った貴公らには思う所も多いが。わざわざ構わなければ、「今すぐに」対峙する必要もなし。

この刃は今、元柳斎殿の無念を晴らすため！　故に、わしはユーハバツハの首を取る！』

「えっと、何？」

「戦わなければ見逃してくれる、って言ってるんだよ」

「それは——ちよつとナマイキじゃない？」

すつと、ナチュラルにバンビエツタの視線が鋭くなる。すぐさま自らが持つ星章メダリオンを構えるが、そこから「霊圧が抜けている」事実^{メダリオン}に気づき、ハツとする。

「そういうこと。ふうん………、だからちよつと『粹がってる』のね」「そういう言い方ダメだってバンビちゃん。散々ゲームやったんだから、そんな『かませ犬みたいな』言い回ししたら負けちやいそうじゃない？」

「あたしはそんなに雑魚雑魚じゃないのツ！　ちよつとブルー、現実とゲームとか漫画とかをごちゃごちゃにしたらダメなのよ？　わかってるの？」

（一番わかってないのはバンビちゃんなんだよなあ………）

『このような場でなければ、見逃したいところだが………』

苦悩する声に、ブルーは苦笑い。以前刃を交えた時に、彼個人としては一切死神側に含むところはなく、なんなら本当は戦いたくすらな

いというのを「適当に戦いながら」伝えている。それでも立場上争わないといけないというのも、相手も理解しているだろう。

だからこそ「原作同様」、ヒーローは遅れて来るもの的煽りをこの後に狛村へとしたバンビに続き、後方から平子真子が現れたことが多少は救済となる。

「ここは任せて先に行き」

「えっ？ あっちよつと——」

『すまぬ、平子隊長！』

「——ちよつと何よ！ 逃げられちゃうじゃない、このおかつぱ出っ歯！」

「おかつぱ出っ歯ア!?」

「あのワンちゃんは、あたしの獲物なのよ！ そう指示されてるんだから『指示通りにしないと』いけないのに——」

そして狛村が瞬歩で移動した瞬間、バンビエツタが文句を言いながら足元に霊子を集め始めた瞬間。

「卍解

さかしまよこしまはつぼうかさがり
逆様邪八宝塞」

「えっ?」

(あっ)

そのほぼ直後。なんらノータイムでブルーを爆撃するバンビエツタと、それに慣れたように「あー、いつも通りといえども通りかなー」と遠い目をしてしれつと復活するブルーに、どないなつとんねんお前等!?! と平子がドン引きしながらツツコミを入れたりするのだが。

その際のテンションのせいで、当たり前のように平子の卍解、味方同士の認識を誤認させて同士討ちさせる能力を「ブルーが完全に無効化している」ことに気づかなかった。

#021. 果たされ得る約束

いつも通り、僕の呼吸が聞こえる。

呼吸は安定してなくて、僕は僕にできる一生懸命で息をしてるけど、それでも苦しくって苦しくってどうにかなってしまいたいそうなんだ。

呼吸っていうのは苦しいものだ。こんな苦しいことをしないと生きられないなんて、生きるって言うのは何て不便なんだろう。

白い病室。無機質な部屋。高い天井。遠い景色。

こんな場所で、苦しくてもそれでも生きて居なきゃいけないなんて、僕は一体どうして生きているんだろう。

天国って、苦しくないところかな。

地獄っていうのは、今よりもっと苦しい所なのかな。

そうだとしたら、怖い……………、怖いなあ。

誰かに声をかけられることも、それに答えることも出来ないことも。

僕の命が何一つ僕の自由にできないことも。

生きることも。死ぬことも。

怖い、怖いな……………。

『——生き残りし者よ。我が聖アウスヴェーレン 別を超えた魂よ。肉の枷がその命を繋いだことが、結果として今のお前をここに繋ぎ留めているか』

誰かが僕に声をかけて、僕はそっちの方を見る。

その人は、見たこともない恰好をしていて、見たこともないくらい「真つ黒な人」で。

『お前に力を、生きる術を与えよう……………、未だ遠くに眠りし、我が

息子よ』

そう言つて僕に手を翳したその人の隣で。

僕より少し幼いくらいの青年が、何だか居心地が悪そうな顔をしていた。

※ ※ ※

「ちよつとリルー!? ブルーの完フォルシユテンデイツピ聖体アザルビオラつてば反則なんだけどお！ ボクの“神の死”の霊体操作すら弾くようになってるしっ！」

「オメーそもそも俺に“神の眠り”弱体化させといひ何言つてんだクソ野郎オ」

「自業自得だと思ふの……」

「むしろ元々ジジのに限らず、霊体操作は弾いてたと思うんだけどブルーの“ジイモータル不滅”。えっ？ というか今まで通じてたの？ ジジ、アンタのアレとか」

「ま！ これくらい出来て当然つてやつだよ！ バンビちゃんの目に狂いはなかつたの！」

半泣きで「青白い光に」包まれたブルーから放たれる銀色の「鞭のような何か」から、必死で逃げまどうジゼル・ジュエル。その悲鳴に適当な受け答えをするバンビーズであるが、そこにブルーの声は聞こえない。

普段ならば苦笑いの一つくらいは聞こえそうであるが、修練場はひたすらに斬撃打撃といった音ばかり。

やがてジジが完聖体の翼を維持できなくなったのを見て終了と判断したのか、ブルーもまたその青白い光を解く。

顔立ちは特に何か変わったわけではない。ただその目の下には隈が出来ており、目は据わつて陰鬱であった。こころなし瞳孔も小さくなっており、ハイライトがない。何かしら精神にダメージを負つたような、そんな雰囲気だ。

倒れて五体をバタバタしながら「こうさーん！」と全力で自己主張

していたジジだったが、完聖体を解除したブルーを見ると、ヘッドスプリングで起き上り駆け寄る。

「ブルー、ほんと大丈夫？ 訓練したいって言ってた時も無理してる感じだったけど」

「……………ま、まあ、うん、大丈夫」

頑張って苦笑いしようとしているようであるが、目に燈る感情は乾いたまま。据わったままの視線に「べー、重症だア」とリルトットへと視線を送るジジであった。

とはいえそれを受けたリルトットもリルトットで「珍しいことじゃねエが慣れるしかねーだろオが前髪野郎」とボソッと呟くが、彼本人には言葉をかけられないでいる。

こんな空気を無視するのは、バンビエツタくらいなものである。

愉し気に飛び上がって抱き着くと、そのまま彼の頭を背後から撫でる。身長的には既に追い越しているものの、こういった振る舞いは「それ以上の関係になっても」弟扱いめいたものが抜けていない。

「やったじゃないブルー！ これであなとも肅清リストからは抜けたわ！

あの『ロボのことは残念だった』かもしれないけど、逆に考えればすぐにメンバー補填とか出来ないみたいだし、あたし達みんな安泰ね！

「あつ馬鹿」「バンビちゃん!?」「おいおいおい……………（やつぱりちよつとドキツとする）」「少し共感性を磨いた方が良いと思うの」

えっどうして？ とバンビーズほぼ全員からの微妙なりアクションにたじろぐバンビエツタと、そんな彼女に気づかれないよう鋭く細めた目で睨みつけるブルーこと蒼都。キャンデイスが密かに顔を赤らめていたりするのはともかく、ため息をついて眉間のあたりを揉むブルーであった。

端的に言えば、ベージェンイン B G 9 が死んだ。騎士団に搬送されてきたものは遺体のみであり、破損した騎士めいた仮面の下からおそらく初めてその素顔が見えた。顎髭や髪は適当に切っていたと思われる風は無精。意外と痩せている顔立ちは、モンゴロイド系と東スラブ系が混じった

ようなもの。かけている眼鏡はひび割れており、そんな彼は「目を見開いたまま」「袈裟斬りにされたように」残った半身で死後硬直していた。

現世にてとある滅却師の一族の痕跡を負っている最中、虚に襲われたらしい。通常戦闘ではまず負けることはないだろうが、何かしら相手の能力かあるいは作戦か。死後その情報が尸魂界へと流れぬよう、騎士団長たるハッシュヴアルト自らがその遺体を回収しに行ったらしい。

『陛下の手で導かれた俺達「帝国の」滅却師は、特に原種（マダラ）の滅却師へと近づくってロバートの爺さんが言ってたなア、前髪野郎オは聞かなかったか？』

『原種？』

『あア。詳しくは話されなかったが、どーも「器子と霊子の境界」がいまいになるらしい。人間なら魂魄Ⅱ霊子と肉体Ⅱ器子に分離できつけど、こつちに居る滅却師は霊子でもあつて器子でもあるみてーな話？ だつたなア。

だから「死んでる」俺とかジジの野郎オも、現世いつたつてフツーに不都合なく活動できつからな』

リルトットが雑談交じりに以前話したそのセリフが、BG9の死体を、どこかに助けを求めていた男性のその表情と伸ばした手とのそれになが、強く彼の脳にこびりついた。こびり付いて離れず、そして数日たった今ですら影響が出ている。

例え一度肉体が死んでも、その後に帝国入りすれば特に問題はなかったろうメリットが。そのままメリットとなつて——すなわち現世だろうと霊界だろうと「死んだら終わり」というその事実が。ひたすらに、仲の良かった方だったBG9の死が、彼の頭から離れないでいた。

（こればかりはバンビちゃんやミニーちゃんでも、どうしようもないというか……。そもそもBG9死んじやったけど、原作的にどうなのこれ？ もしかして襲名制みたいになるの？ 確かにCVの感じがちよつと違つたけどさ……）

様々な面から喰らっているダメージのせいで、心ここにあらずと
いった状態。回復の見込みは甚だ遠い。

当然のようにバンビーズの面々は、こういったコミュニケーション
には「慣れていない」のもあって、普段のように雑に励ますのすらは
ばかられている有様だった。

そんな彼に、ハツシユヴァルトから呼び出しがかかる。

謁見の間についたブルーは、やはり「誰も座っていない」王座の横
に立つハツシユヴァルトから、新たな指令を受けた。

「蒼都、陛下より直々に現世への派遣任務だ。場所は——」

「——日本ですか!?!」

「——フツ、残念だが違うな」

「そんなあ……」

目の下の隈もとれてはいなかったが、何故かこの時ばかりはテン
ションが跳ね上がったブルーである。ただ結果的に気落ちすること
になったが、そんな彼を見てハツシユヴァルトは少しだけ微笑ましく
目を細める。B G 9の死体を見た直後の状態に比べれば、多少は持ち
直してきていると判断したらしい。

かくして数日後、帝国の出入り口たる四方を柱で囲まれた建物の手
前に、ブルーは来ていた。ニット帽に柄の付いたダボダボの長袖シャ
ツに短パンと今時? の若者風な恰好である。以前現世で祝い事を
した際にバンビエツタプロデュースで購入した代物だが、若干丈が短
くなっているものの着ることは出来たのでそのままの恰好だった。

そんな彼に、黒いスーツで身を包んだオールバックのハツシユヴァ
ルトが声をかけた。

「では、行こう。………少しファンキーだな」

「あっはい」

(ポテトの口からファンキーとかいう言葉が出た、だと……?)

「………って、そうじゃなくなって、ハツシユヴァルトさん!? えっ何
で?」

「今回は私も同行する。陛下から直々の指名だ」

「えっと、もしかしてそんなに凄いで何かがあったりするんです？ 今回の任務というか。詳細、全然教えてくれてませんでしたけど」
「行けば判る。機密性は少ないが、BG9の事があった上での任務だ。事は慎重に執り行う」

(あつてことはもしかして騎士団の団員補充系の任務?)

前髪で隠れているものの疲れのような目をしているブルーだが、ハツシユヴァルトの言葉におおよそ任務のあたりをつけた。

建物から登る光の柱——「表では」影の柱たるこの流れに包まれ、二人は現世へと転送される。この際さらに「帝国の影の力」で、所属滅却師についてはその霊子が現世と「見えざる帝国」との境界を曖昧にさせ、尸魂界からの感知を困難とするのだが。ブルーからすると体感的に、その「影の力」のかかり方が少し薄く感じた。

思わずハツシユヴァルトに確認するブルーだったが、彼は肩をすくめて返した

「以前、バズビーやバンビエツタ、キャンデイス・キャットニップやシャズ・ドミノらと現世に行つたことがあつたらう。同じ北米に向かう以上、その時とそう違いはないはずだが」

「でも、何だろう？ 多分『無効化してる』訳じゃないんだけど……。現世、3回くらい行つてますけど、アメリカ一回だけだからわからないつてもあります」

「……………だとするならば、おそらく原因はお前が成長したことだな」「僕が？」

「違いがわかるくらい感知能力が育つた、ということだ」

ポンポン、とやはり頭を軽く撫でると、ハツシユヴァルトは少しだけ微笑む。

「米国、もとより北米は1890年代以降『死者の指輪』リング・オブ・ライヴの影響が強い。東アジア圏 ヨーロッパ圏極東や泰西のように『尸魂界の管轄局』が存在しないのも、その一端だろう」

「リング・オブ……………、えっと、何？」

「死者の指輪、あるいは生者の環だ。」

お前達で言えばジゼル・シユエル、リルトット・ランパード、キャ

ンデイス・キヤットニップの順で詳しいだろう。—— 簡単な違

いで言えば、あちらの虚は『ゾンビ』と同義語だ」

「ぞ、ゾンビ……………って、ジジさんの？」

「おおむねその認識で合っている。…………ジゼル・ジュエルが、
デヘノエル 神の眠り”を聖 スクラヴェライ 隷した状態で発動した場合に、あれは似たようなこ
とが起こったな」

「ええ……………？」

根耳に水な発言を聞いて頬が引きつり目は怪訝なものを見るよう
な、変な顔をするブルーであった。以前の話から「アメリカは実は何
かヤバイ」と適当に覚えていたブルーだったが、その説明でさらに意
味不明になる。意味不明ながらも、しかし危険度が高いということだ
けは理解したブルーだった。

ハッシュヴァルトはハッシュヴァルトで疲れたように遠い目をす
る。

「現在は戸 ソウルソサエティ 魂界・西梢局が代行を送って管理しているらしいが、と
ても管理しきれるようなものではないからな。一部、専門の狩人や斬
術師が生き残っていると聞いてはいるが……………、ゆめゆめ注意する
ように。お前は大丈夫だろうが、念には念を入れる」

「了解です」

素直に応答したブルーに「よし」と目を閉じて頷くハッシュヴァル
ト。なんとなくオーケストラとかの指揮者みたいだ、みたいな感想を
抱いたブルーだが、全然関係ないのでその感想は口に出なかった。

たどり着いた場所はニューヨーク。ここから何かしらの道具を手
に取り（小型の羅針盤？）、方向を探りながら「こつちだ」とブルーを
誘導するハッシュヴァルト。

基本的に移動ばかりで、途中途中現世らしく食事をすることは有れ
ど目的地は判然としていない。

そして日が暮れ、深夜を超えて徹夜でたどり着いた先は、とある病
院だった。「ジェミニニ大学付属病院」と書かれたそこに「器子を曖昧に
しながら」進むハッシュヴァルト。見よう見まねで「なんとなく」ま
ねたブルーは、彼に続いて病院の壁を貫通して室内に入り。

「この病室は『死』に満ちている。ゆえにこの場所は『夜と言える』だろう」

「ハツシユヴァルトさん？」

「後は、直接聞くと良い。ブルー、ではあちらでまた会おう。」

後はお願ひします——陛下」

嗚呼。

その声と共に、立っていたハツシユヴァルトの全身が「黒い影に覆われた」。ぎよつとするブルーの前に、そのまま身長もやや変化し、現れ出たのはハツシユヴァルトが着用していたものと同様にスーツ姿の、これまた現世の装いだった彼同様にオールバック姿だったユーハバツハである。

「驚いたか、蒼都^{ツァントウ}」

「えっ？ それは、まあ、はい、うん。……こ、こんばんはです、陛下」

「ぬ？ フ、ハツハツハ。そうだな、今晚は、だ。」

……私と全ての滅却師とは『血と影で繋がっている』。とりわけハツシユヴァルトは、その中でも特別な一人だ」

「えっと、だから陛下が出て来ても大丈夫って感じの話なんです？」

「いえあの、いくら何でも陛下が現世に普通に出てきたら、尸魂界に捕捉されないかなって」

「嗚呼、その通りだ。だから『ハツシユヴァルトを経由して』現世に出たのだ。こうすることで、今私を構成する霊子は『ハツシユヴァルト』と共用している形になる。故にある程度の弱体化と引き換えに、私のことを外部から認識するのは困難となっている」

（そういえば原作でこんなシーンあったっけ、記憶がちよつと曖昧だけど。」

ん？ ということはつまり今なら「相打ち覚悟」すれば僕でも陛下を殺せる、と……）」

「どうした、蒼都」

「へ？ あー、いや、何でもありません。オールバック似合わないなーとか思っただけです」

「ハツハツハ！ 存外、容赦がないな。ふむ。眉毛がほぼなくなつて

しまったせいか……？」

一笑した後、眉間が寄っている額および目の上あたりを軽く撫でるユーハバツハ。済みません、と軽く謝るブルーに、再び一笑すると「気にすることもない」と続けた。

「ハツシユヴァルトでも、親衛隊でもこうは行かぬ。適度に懐き、適度に倦厭するくらいが丁度良い距離感だろう」

「丁度良い？」

「過激に傾倒するのも、過激に反発するのも、あるいは興味が全くないのも、どれも関係性としてはいずれ危険になるということだ。………生きるというのは、呆れかえる程に難しく、困難である」

故にこそ「死を祓う」価値がある——。

「さて、気付いているやもしれぬが。これから我々は、おそらく最後になるだろう聖章騎士を出迎えに行く」

「えっと……、Fの字？」

「嗚呼。そして、ある意味でお前とやや近い所に居る子供だ」

近い所？ という意味がわからず不思議がるブルーに、ユーハバツハ手を上げ、まるで「何かを掴むように」動かし、数秒そのまま動か

ず。
——次の瞬間、膨大な霊子がユーハバツハ目掛けて集まってきた。

いわゆる聖隷による霊子の収束などではない。ここではない何処か、ありとあらゆる場所から飛んできてくるような、そんな感覚を覚えるブルー。その「霊的な」衝撃に飛ばされそうになるのを、両手から鉤爪を出して床に突き刺し、必死でこらえる。

やがてしばらくして収まった状況。ユーハバツハは「やはり視えた通りか」と満足げに頷いた。

「へ、陛下？ 今のは………」

「——」
“アウスヴェーレン 聖別”。我がこの手と意志により、我が子らが持つ

力と命とを徴収し振り分ける、そういった儀だ。

今『この大陸から』『純血滅却師足り得ぬ者たち』に限定し、その力の大半を献上させた」

「ッ!？」

「えっ? っていうことは、これって——六年前が近い!? ちよつと待って、今、西暦でいうと何年だっけ!? 黒崎一護原作主人公って生まれてる!!? あーもう、現世日本の空座町の調査に一度も行かせてもらってないから全然わかんないやツ)

驚いたり衝撃を受けたりしているブルーであるが、ユーハバツハには当然通じない。

そもそもBLEACH原作における「聖別」は、ユーハバツハの説明した通りのものであるが、それにより黒崎一護の母を間接的に殺す原因となり、石田雨竜の母親などの直接の死因でもある。おそらく今の言いぶりから、一度に徴収できる範囲というのは限られているのだろう。こういったことを実行するようになったということは、つまり「そうする必要が出て来た」ということであろう。

未だ認識が浅かったが、「原作」の足音が聞こえてくる——武者震いではないが、謎の震えにブルーは自分自身へ困惑した。

「さて……………、この場ならば二人きりだ。今の力を見せた上で、お前には一つ教えておこう」

ユーハバツハは額にやっていた手で髪を適当に流し、普段通りのものへ。ネクタイを解き、同時に「影」を纏い、全身が黒く見慣れた服装。ただ着用している元が異なるため、いわゆる「斬月のおっさん」を加齢させたような姿になったというべきか。

そんなユーハバツハは、ブルーを見てニヤリと笑う。

「——私は何が有ろうと、お前からは「聖別」を使い、その力を徴収はすまい」

「えっ?」

今までのその動きからして、どういう意図があるのか不明慮だったブルーだが。彼のその言葉には、流石に意表を突かれた。BLEACH原作からしてユーハバツハは「必要があるなら」一切の躊躇なく、どんなに親しい相手でもどんなに大事な相手でもその命と力を奪うく

らいはやってのける。だからこそ、わざわざ自分に限定してそう言う理由がわからなかったブルーであるが。

(……そんなこと言つて黒崎一護に殺されそうになったらやったりするんじゃないかな、この人は)

口で言つたことはともかく、いまいち信用が無かつた。

基本的にユーハバツハはその性質上「絶対に嘘が着けない」が、この場合の真実とは彼が真実と認識していることに限られるため、状況次第である程度のファジーさが存在している。なので状況一つでまた何か変わる可能性は否定できないのだ。

ブルーの感想を知らずに、ユーハバツハはその理由を続ける。

「私に徴収された力は、そのまま滅却師の基本能力たる『霊子の絶対隷属』を基礎としたエネルギーへと変換され、我が身にその魂や経験ごとと還る。とはいえ、それで『元の持ち主が持つていた』記憶や経験そのものを、この私が扱えるようになるかとはまた別であるが」

「……？ えつと、仮に騎士団全員から力を徴収しても、全員の力を使用無敵モードみたいになれるわけじゃないつてことですか？」

「もしそれが可能ならば、真つ先にペペ・ワキャブラーダの命と力を徴収しておるわッ！」

「ええ……………？」

(いや、確かに陛下の霊圧であの能力を使えるなら向かう所敵なしというか、零番隊以外はほぼ全員味方みたいに出来るんだろうけれど、なんで名指しで、しかもそんなテンション上げて断言されたんだこの陛下……………?)

困惑するブルーだが、その理由に思い至らないあたり流石に騎士団での生活が長くなつたと言うべきか。すぐさま原作における「斬月のおっさん」を思い出せば、その正解にはいずれたどり着けるだろうが。

ただ全くのゼロとは言えない、と。ユーハバツハはブルーの目を見る——その奥の「何かを」捉えようとするかのように、強く見る。

「徴収の際に、間違いなくその魂の一部は私の魂に刻まれ、その『元来持っていた』文字もまた私の身へと還元される。知識も、経験も、私

の力であるならば、そこに溶け込み、私が私足りうる形のものとして補填される」

故に——。歩きながら「とある病室を目指しつつ」、ユーハバツハは続ける。

「取り込んだ魂の性質は、私に必ず影響を与える。元の私自身に反したものなら大きく目立ちほしくないだろう。」

だがお前は違う」

「……………」

「お前の滅却師完 聖 体———神の完全」は、I——不滅———」

共々、その使用者たる存在の『完全性を保証する』。幾度傷を受け、幾度その身体を別なものに変えられど、保証されている完全性に従いお前の存在は必ず蒼都と定義されていた形へと回歸する。

つまり私がお前の力を取り込めば、その性質に従い、私がこうして蘇るまでに『切り捨てた』叡智———他者への深い愛や優しさの根幹すら、取り戻すだろう」

あつ、と。わずかに声に出そうになつたが、ブルーはそれを押さええた。

そうなのだ。少なくとも初代護廷十三隊と戦った当時のユーハバツハは、その大本は「斬月のおっさん」と揶揄されるあの姿のそれと同様なのだ。ユーハバツハの語つた理屈は良く判らなかつたが、最後の部分を理由とするならそれだけは納得が出来る。

護廷十三隊により蹂躪された最初の滅却師の国「光の帝国」。現在の「見えざる帝国」の原形たるその国と騎士団とを、尸魂界の戦争で失つたことが。

「優しさで戦争には勝てぬ。理解で戦争には勝てぬ。敵たる死神たちからそう教わつた———故にこそ『完全なる我が人格』という贅沢は、余暇たる戦後の楽しみにとつておくべきであろう」

その時に仲間の多くを殺され、それでもなお自らすら勝てなかつたというその事実こそが、ユーハバツハが現在の人格へと至る大きなトリガーであつただから。

ただ、そんなことを聞かされ安心できるブルーではない。それが示

すことは、つまり。

「……………バンビちゃんたちや、他の人からは徴収するのに躊躇いはないってことですよね」

「無論、積極的にはしないが」

つまり今の言葉は、ブルーに関してすら「徴収するなら最後」だという宣言にしかならない。結局のところ、彼自身は安心させる目的で話したのかもしれないが、明確にブルーにとってリスクが大きくなつたということになる。

故にこそ、足を止めたその時。彼はユーハバツハに一つだけ願い出て。

「……………良いだろう。受理した」

その願いを確約させた上で、「S・N」とだけ書かれたネームプレート
の病室の扉を開いた。

#022. 恐怖と癩癩と地獄と地雷

「——で、こつちに行く食堂があつて、あつちに行く親衛隊の皆がいるところに繋がってるから。多分文句言われたりはしないと思うけど、話しかけるのはちよつとだけ勇気がいるね」

「勇気……？」

「うん。アスキんさんは、最近呼ばれてるからもうほぼ確定で親衛隊に選ばれそうだけど、他のジェラルドさんとかペルニダさんとかリジェさんとかは、三人同士で仲良くしてる感じだから。無視はされな
いと思うけど、霊圧的にも雰囲気的にも、僕はちよつと怖い」

「そう、なんだ。……………怖ッ」

思わず震える「真新しい」聖兵の上着を着用した青年に、ブルー・ビジネスシティこと蒼都は苦笑いした。両者とも同じくらいの身長で、わずかに震えている青年の方が高い。

廊下を歩きながら、ブルーは彼に色々「ヴァンデンライヒとこの「見えざる帝国」「シルバーンが銀架城周辺、立地やら施設やらについて教えている最中だった。

もつとも、ほとんどの感想が「怖……」と返されるものだから、上手い事説明できている自信はないのだが。

（外の世界の存在として一番最初に出会ったのが陛下だったもんだから、そりゃ怖いよね……。実際、ほぼ死にかけていたみたいだし、能登君）

「あれ……？ ブルーじゃん、何してんのー？」

「ブルーじゃない。どしたの？」

「あ、ジジさんにバンビちゃん」

「怖い……」

ちよつとどういふことよ人の顔見ていきなり怖いとか!? と、当然のようにブチ切れるバンビエツタ。いきなり腰の剣を抜き構えたりしないあたり、多少は社会性じみた何か成長したというべきか何と

いすべきか。ジジはそんな彼女を一瞥した後、ブルーの背中に隠れた彼を「んんんんん？」と楽し気に覗き込む。否、楽し気というよりもやや喜悅に歪んでいるので、どちらかといえば「ニヤニヤ」というより「ニチャニチャ」という粘性が垣間見えるが、それはさておき。

真ん中分けの黒髪に毛先がやや広がった青年。不安げに見つめる目には光が燈っておらず、どこか陰鬱気である。

そんな彼にこれまたジジも「光の燈っていない」暗い笑みを浮かべて視線を合わせようとすると、怖がっているのかすぐそっぽを向かれてしまう。すぐさま反対側に行き、そっぽを向かれとそれをひとしきり繰り返し、S性を満足させたのかニコニコ笑顔にジジは戻った。

「全く、別に食べちゃったりしないよ」新入りクンさあ。ボクウ、これでも騎士団の中でも多少は話のわかるほうだってリルからお墨付きもらってるもーん！」

「……………怖い」

「ええええええええ？ 全く、ブルーも何とか言っただけだよー」

「あ、あはは……………」

（いや、確かそのですね、「まともな話せつけど、それはそーとして頭の中で自分のことしか考えちゃいねーから会話が微妙に成り立ってねエんだよあのクソ野郎」^{ピッチ}とかリルちゃんから言われてたような……………）

基本的に性格は（相対的に）悪くはないが、それでもダブルスターダードだったり色々ブルー的にも擁護できない部分が多いジゼル・ジュエルである。もはや遊び出しているのか「ダブルピース☆」とピースした両手をかまえてウインクしたりあざとさアピールに余念がないが、何一つ件の新入りには届いていない。無常！

「二応新入り？ でいいのかな。うん。新人のサダ・^{貞・能}ノト君。ハツシユヴァルトさん曰く全体の顔見せは後日するらしいから、それまで案内したり訓練したりしていくれって」

「怖い……………」

「えつと、ノト君からよろしくって」

「えつ」

「ちよつとブルー？ えーつと、今聞き間違いじゃなければ『怖い』しか言わなかつただけだよ」

ちよつとだけ上機嫌にニコニコ微笑みながら新人の彼、サダ・ノトを紹介するブルーである。その一言に困惑するバンビエツタと「あれあれ〜？」と苦笑いしながら聞き返すジジであつたが。

「怖い」

「ずつと病院暮らしだったから、あんまり長文喋れないんだって」

「怖い……………」

「え？ あー、うん。こつちに来るときに話してたバンビお姉ちゃんとジジさんだよ」

「怖い……………」

「うん、そうだね！ で、ミニーちゃんとかキャンデイお姉ちゃんとかも紹介したいけどいいいなあ……………」

「怖い…………、怖い？」

「リルお姉ちゃんは——」

「ちよつと待つて、ちよつと待つて、だから何でそんなブルーは甘々な の?! もうちよつとしやべらせないと、ブルーが専属通訳みたいになつちやうよ？」

「いや、多分まだ慣れてないってだけだと思つうから………………。これはこれで仕方ないかなつて」

「怖い…………」

「照れるなあ……………」

「ちよつと待つてちよつと待つてポケ倒さないで！ 懐ちよつと深すぎない!？」

ボク基本はボケとツツコミならボケ側なんだから、あんまり慣れないことさせないで!？」

リル〜！ いないのリル〜！ ロバートお爺さんの呼び出しとか無視してボクの代わりにツツコミしてよリル〜！」

何故それでコミュニケーションが出来るのかと言う会話の応酬に謎の絶叫するジジと、特に興味なさそうにサダ・ノトを一瞥するバンビエツタ。ぼそりと呟かれた「もろそうね」の一言に震え上がったサ

トを見て「で、どうなのよ」と凄む。ブルーが「まあまあ」と落ち着けるが、それでも少しは慣れたのか、ごほごほせき込みながら声を搾り出す。

「……じゃ、じゃあ……、怖い話、します」

「……面白くないよ」

「いーじゃんいーじゃん♪」

「ノト君的には面白い話なのかもしれないし」

と、バンビエッタを揶揄うモードに入ってるジジはともかく間に入って一応は壁ないしオブライト的な役割を買って出るブルーのお陰で、サダ・ノトも深呼吸を繰り返しながらだが、なんとか話を続けた。

これは僕の病室で呼吸器を付け替えてくれていた看護婦さんたちがしてた世間話と、僕に愚痴を言ったのをまとめた話。

看護婦さんは旦那さんと娘さんが家に居て、二人を養うために働いていたらしい。だから娘さんを迎えに行く時、旦那さんと代わりばんに車で移動してる。

亜米利加だとスクールの行き来は物騒だから、そこそこ仕事とお金が安定している人はそうやって送り迎えをするらしい。そんなに珍しいことじゃない。

そんなある日、看護婦の娘さんは「友達も家に来ていい？」と言った。

看護婦さんは大丈夫だと、友達が遊びに来るのなんて珍しいなんて、そんなくらいに思ってたって言った。最近色々あって元気がなかったから。

ただ娘さんはニコニコ笑って「いいよ」と、そう言ったららしい。

そしたら、ひとりで扉が開いて、閉まった。

いきなり目の前で起こったことがよく理解できなかった看護婦さんは、風の仕業か娘さんの友達が外で何かしたかと思ったとか。だから

ら娘さんに「悪戯するんじゃないやありません」って怒ったらしい。

娘さんはしゅんとしたけど、特に何も言い返さなかったから反省したと思つて、車を走らせたとか。

普段は後部座席で帰りは寝てる娘さんは、その日は何故かよく看護婦さんに話しかけたらしい。

看護婦さんは運転が苦手で、だから運転中はあんまりお喋りできないのだけど、それでもその日の娘さんは看護婦さんにいっぱいしゃべりかけてたとか。

そして娘を自宅に預けてまた仕事に行つて、僕の呼吸器とか点滴とつけていった帰り。自宅について、看護婦さんは驚いたらしい。旦那さんはもう眠ってるっていうのに、娘さんが絵本を片手にずっと朗読してたとか。いつまで起きてるのって、お母さんらしく看護婦さんはそうやって言つただけけど。

その日、いつもと違い娘さんは一人で自分のベッドで眠つたとか。基本的に怖がりな娘さんは「宇宙人が来たらどうしよう」って言つて看護婦さんのベッドに入り込んで一緒に寝たりすることも多かったそうだけれど。少しは大人になつたかしらつて、忙しかった看護婦さんはそのことを大して重要視していなかった。

その夜、何故か寝苦しかったらしい看護婦さん。異変が起きたのはその翌日。

朝に目を覚まして、特に不思議でも何でも無くて、そのままいつも通りに僕の点滴を付け替えようとしたりした。うん、いつも通りだったと思う。だからそのまま、看護婦さんは娘さんの迎えにいろいろとした。

だけど、行けなかった。

何故かわからないけど、病院の敷地から出ることが出来ない。

病院を抜けてしばらく歩くと、気が付くと病院の出入り口に帰つてきてしまっている。ノイローゼにしては妙だなんて思った看護婦さん。ちよつと何かを予感したのか、流石に不可思議に思ったのか、とりあえず旦那さんの職場に電話をかけようとするんだ。

だけど、電話機の調子が悪いみたいで、こつちのスピーカーの音は

あんまり向こうには聞こえない。

自宅への電話は当然繋がらなくて、やっぱり不可思議に思った看護婦さん。

もう夕方で迎えにいかないといけないのに、と。そんな風に思ったら、どこかから声が聞こえたらしい。

娘さんの声。泣き声で、お母さんとお父さんを呼んでる声。

当然、看護婦さんは娘さんの声を探しに行く。どこにいるの？

と、名前を呼んで、大声で呼んでたのが煩かったなあ。

声は、霊安室から聞こえてきてたらしい。

どうということって、看護婦さんは困惑して、何故か鎖でがんじがらめにされていた扉を開けたんだ。

そうすると看護婦さんの娘さんが、まるでかくれんぼしてたみたいに看護婦さんの顔を見て、ぱあって笑って駆け寄って抱き着いて。

どうしてこんな所にいるのって娘さんを叱るように言う看護婦さん。

娘さんは言ったらしいんだ。お友達が、暗いって泣いてるんだって。

ぞわつとした看護婦さんは、すぐに娘さんを連れて部屋を出ようとしたんだけど、次の瞬間には扉が閉まって。がちやがちやと、外から鎖で巻かれる音が鳴って、明らかに嵌められたって思った看護婦さん。別に恨まれるようなこともなかったらしいけど、それはそうとして何がおこるかかわからないって。

銃ですぐ殺さないあたりの意味もわからないから、しばらくしたら解放されるだろうって思ってた。

……開けて………。

………開けて………。

娘さんじゃない女の子の声が、看護婦さんに聞こえたらしい。

どん！ どん！ っ、扉とか箱を殴るような音が聞こえる。

開けて、開けて、って。女の子の声がまた聞こえる。

——— どん！ どん！ どん！

開けて、開けて、お母さん。

——— どん！ どん！ どん！

娘さんが、看護婦さんを見上げてまた言ったんだ。お友達が、暗いって。狭いって息苦しいって。

——— どんどん！ どんどん！

音は大きく、早くなつていく。看護婦さんの心音も、どんどん早くなつていく。

——— どんどんどんどんどんどんどんどん———

！

ばきつ。

箱の釘が抜けるような、そんな音が聞こえて。

看護婦さんは腰を抜かして、それでも娘さんを抱きしめたまま。

霊安室の冷凍されたボックスが、ぎちぎちつて音を立てて空いて。でも、何かが立ち上がったたりすることはなかったんだって。

そこで、がしゅん！ つて音を立てて扉の向こうの鎖が落ちたのがわかったって。

ほっとしたように娘さんを背負つてから、扉を開けようとした時、右肩に痛みを感じて。

恐る恐る、自分の右側にある娘さんの顔を見て———。

交通事故にでもあったみたいなの、頭が半壊して脳みそとか目が垂れた女の子の死体が、看護婦さんの肉に「齧りついていた」。

「その後、右腕に鎧みたいなもの付けた銀髪の男が『鎖が切れてるからもう助からない』みたいなことを言つて、チェーンソーで少女の首を跳ね飛ばしたり、結局娘さんも旦那さんも無事だったらいいんだけど、

その男のことも他も何一つわからないって言ってた。

「……………あれ？ 受けが良くない？ 怖ッ」

「意外とけっこう、それっぽい話だったね」

特に声に抑揚をつけていたわけではないサダ・ノトの語りだったが、それを聞いたブルーの脳裏にはなんとなくイメージ映像が出た。直近、ハッシュヴァルトと現世にいった際に聞かされた話もあつて、おおよその背景の真相には察しがついている。

おそらく、途中からその娘というのは、少女のゾンビの魂魄と入れ替わっていたのだろう。

アメリカにおいては虚に該当する存在はゾンビである的なことをハッシュヴァルトが言っていたし、言うなれば看護婦は誘い込まれたのだ。ゾンビが食事をするために。果たしてどこからどこまでがゾンビによる誘導その結果の「白昼夢」のようなものだったかは定かではないが。

そして銀髪の男とやらが、東やらで言う「死神」に該当する何かなのだろう。

そこまで事情を分解してしまえば怖いも何もあつたことではないのだが。いわゆる魂魄的な事情を知らないサダ・ノトにとっては、それなりに退屈しのぎになった怖い話ということだろうか。

そして、ここに効果覲面だった相手が約二名——。

否、それはおそらく「怖い話」だけのせいではあるまい。

「……………ノト君、ひよつとして聖文字シュリフト使ってた？」

「怖い……………、バレた、怖ッ」

サダ・ノトの聖文字は「F」。ザ・ファイアー「F—恐怖—」がユーハバツハより血を与えられて早々に覚醒した、彼の聖文字である。よほどその魂に深く「恐怖」と言う言葉が刻まれていたのか、そのままストレートで完聖体まで体得。BG9の最短記録を優に抜き去ったストレート騎士団任命と相成ったのは、そんな事情からだ。

もともと滅却師としての基礎が弱いため、キルゲやロバート、およびブルーを交えての基礎訓練なども今後行われることになるのだが。

それはそうと、怖い話をより怖い話とするためにか、サダ・ノトは

ビエツタを抱きしめて「よしよし」と言いながらあやすブルー。その間もジジが狂ったように笑い続けブルーの首を絞めているところだが、そこは首を銀シルバーレッシングの蒸着で金属化して、気道が狭まるのを防いでいる。

震えながらもまだ自分を抱きしめているのがブルーだと認識できないバンビエツタだが、珍しいことに爆撃などを行うことも、剣を抜くこともなくただただ怖がっていた。

否、あるいはこれが彼女の「本来の」地の部分なのかもしれないが

「……………怒らない？」

「えっ？ あー、二人ともこうしちゃったことについて？ 一応は事故みたいなものだし、どこかで能力も鍛えないといけないだろうし……………」

（それに僕だと「完全に」無効化しちゃってるっぽいから、絶対訓練相手としちゃ不適格だからね、聖文字に関しては……………）

あつ、バンビちゃんちよつと正気に戻ってきたのかな？ 抱きしめ返してくれて、柔らかい……………）

ニコニコ微笑みながらサダ・ノトにそんなことを言うブルーに、状況のあまりにアレな結果になったそれに「聖文字、怖い……………」とぼそつと呟くサダ・ノトであった。

なおこの後、ふらつと立ち寄ったアスキンからドン引きさせられたり、「親睦深めるって意味なら映画でも見てオシヤレ学ぶと良い」とアドバイスを受け、ジエイムズやベレニケと一緒に四人で映画を見たりして、バ〇トマン（1989）に何かインスピレーションを受けたりするサダ・ノトだが、それはまた別な話。

#023. 見つめる「目」

「遠慮はいらねエからな！ 行くぜ、バーナーフィンガー・4」フォー

「アロガンツシユヴェールト
背信の剣」……」

「……つて、一撃かよオ!? がッ!?!」

人差し指から小指まで四本を立てたバズビー、その手先から放たれる「熱線の剣」。それを右腕から出現させた銀の剣を用いて「バターのように」切り裂いたブルーは、そのまま「銀色になった」左手で彼の腹部を殴り飛ばす。完現術「銀の蒸着」シルバープレッシングで直接腕をコーティングしたことにより、バズビーの無意識に発動していた静血装フルート・ヴェーネを無効化して通常の打撃を与える。

つまり「空中の」その場に軽くうづくまるバズビー。

そんな彼の首筋に剣をつきつけ「二本」とブルーは声をかけた。

「なっ納得いかねエぞ……!?! だまし討ちっつか、もっところ色々あんだろオ!!? というか拳が堅すぎるって、メイスでぶん殴られたみてエな痛さだったぜ!!?」

「ごめんバズお兄さん。流石に『三対一』だと普通に全力で戦えるバズさん残すとうしろしようもないっていうか……。」

「じゃあ、あとは二人だね」

「オイオイ、バズビーの奴はともかく、ありや聞いちゃいねエぞ……!?!」

「基礎もしっかり鍛えていたということだな。私たちも鍛えねばならないなあナジャークープ!」

「うるせエ! そのゴリラ顔で理知的なこと言われてもゴリラにしか見えねえからな!」

訓練、おまけに完聖体縛りとはいえバズビーを高速で倒したブルーに、サングラス越しに冷汗をかく肌の浅黒い男。髪型はアフロで歯はオセロのように着色されている男は、ナナナ・ナジャークープ。「U」

の文字の聖章騎士である。

対する隣に立つ巨漢は、その厳つい容姿に反して酷く態度が理知的だが、ナジャークープが言っていたとおりにイメージとしてはゴリラにしか見えない。ジェローム・ギズバット、「R」の文字の聖章騎士である。

4人はともに空中に霊子を固めて足場としており、横やりの入る余地はない。

そのまま剣を鉤爪に変化させ、また左側からも爪を生やし、ブルーはジェロームたちへ急接近。

「お、おとおお!」

「こちらで受け持とう——ブルート・アルテリエ動血装! うおおおおッ!」

(あつちよつとゴリラっぽくなった)

にらみつけすぎて白目をむいているような状態となり、さらに上半身の筋肉が活性化したのかパンプアップ。絶叫し牙を剥きながら腕を振りかぶる姿はまさに荒れ狂うゴリラ! リルトットが見れば「ゴリラ野郎」の誹りを免れない程にゴリラな有様である。

そのまま人語を話さず獣のように襲い掛かる彼の拳を、ブルーは鉤爪で受け流し時に斬りつける。もっともタイミングを合わせ静血装へと切り替えも行っており、見た目の野蛮さからはかけはなれたクレバーな切り替え方をしていた。

「聖文字は使わないんですか?」

「確かに身体が大きくなるのは通常は魅力的だが、お前相手では只の的だろう。だったら純粹に技術のみで戦う方が、性に合う!」

「やつぱり理性的だ……!」

そして、しばらくそんなブルーたちの格闘戦を見ていたナジャークープは、「読めたぜ」とニヤリと笑う。

片手に複数の矢摺籐やずりとうがあるような霊子の弓を形成すると、ジェロームとブルーが同時に動血装を発動したのを見計らい、4連射!

とっさに何かを察したブルーが、ジェロームと競り合いするのを放棄して、一目散にナナナの方へと接近する。矢自体も交わしたり鉤爪で払ったりしながら襲い掛かる体勢に入るが——。

「正面を警戒しすぎだぜガキが、チキンっぷりは直さないとなあ！」
「ツ!? 銀筒——」

ブルーの斬り払った神聖滅矢に仕込まれていた銀の小筒。それらがくるくると回転し霊子を放ち、やがてブルー全体を覆い囲む大きな「U」の文字に。

「ジ・アンダーベリU—無防備」……、モーフイング・パターン！」

もつともその「U」に沿って発動した聖文字の力は、収束してブルーの全身を覆うよりも前に30センチ前後の位置で急停止。流石にその状態にはナジャークープ自身も「何だア!？」と驚いた様子だった。「ぶ、ブルーには初めて使ったが……、霊圧の孔、あな『空中にある』ぞ!? どうなってんだツ!!?」

「えっ!?!」

「まあ良い、ほらよツ!」

急接近してくるジェロームとナジャークープの矢。どちらの対処を優先するかという点で、ブルーはジェロームを優先した。滅却師に関する能力、もしくは概念系能力ならばおおむね無効化できる自らの能力を信頼してのことだった。

空中で、まるで「壁にでも刺さったように」停止した矢と、そこを起点に自らの全身に走った霊子の網が自らの全身を拘束したのを見て、おそらく初めてというレベルで驚愕した。目を見開いて「ほえ?」と女の子めいた声を出すブルーに、ナジャークープ本人も驚いた様子だ。

「ブルー本人に効くわきや無いはずなのに……、バグったつーことか!?!」

「……っ、う、動かない——」

「——これにて、一本ツ!」

そしてジェロームの拳一発がブルーの頬をえぐるように殴り飛ばす! そのまま全身の動きを拘束されたまま、ブルーは地面まで叩きつけられた。

なお、鳩尾を押さえたバズビーすら「マジかよ」とびっくりした表情だ。

なお下方で拘束されたままのブルーは「当たり前のように」元に戻った状態で、しかし動き自体は拘束されたまま身動きできないでいる。

「……能力が無効化される直前で止まったっつーことか？ いや、意味わかんねエ」

「こつちだつて知らねエつての。一体何がどうなつてんだ……？」

「状態だけ見れば『ブルー本人』ではなく『その周囲の空間』を拘束しているように見えるな。……なるほど。対象が本人をとらない場合に限つては、このように攻撃効果を受けてしまうこともあるということか。

ナジャークープ、解除してやつてくれ」

「あ？ いや、別にいいけど……良いのか？ 前々から思ってたけど、ここまで同族特攻能力持った奴残しといて陛下は何考えてんだか……。今の内なら頑張れば殺せるんじゃないやねえか？」

「いや、そりやお前よお……」

「言われてみると確かに、もし『本当に』裏切られたら弱点になるな。あるいはそれでも騎士団長なら抑え込めるといふことか」

「やっぱ殺そうぜ？ 傷口付近にもこつちで能力かけてやれば——」

ナジャークープの不用意な発言と同時に、三人は背筋に猛烈な寒気を覚えた。霊圧、刺すような冷たさと押しつぶすような暴風がごとき圧と共に「スクラウエイ聖隷」とぼそりと呟かれた少女の声。

恐る恐る背後を振り返った三人の前に、両腕両脚に霊子の赤く光る甲冑を装着し、背中に鋭角化した左右の翼と、二砲のキャノン砲を備えたバンビエッタ・バスターバインの姿がある。頭上の環わの光のせい
か逆光となつており、表情は微妙に見えないが霊子の色が映り込んで赤く輝いている目には、光が入り込んでいながらもかわらずハイライ
トが見えない。

キャノンは基部を彼女の背中から腰に固定しており、マニユピレーターが角度を調節して前方を向いてバズビーたちを狙っている。なお当然のようにブルーもその射程圏におり、動きを拘束されている関

係上その顔は引きつっていた。

「早く解放しなさいよ。次、あたしの番なんだよ」

「……わ、わかったって、そうカリカリすんなよ。冗談じゃねえか」

冷汗を流しながらブツブツと文句を言いながらブルーに対する拘束を解除するナジャークープ。そのまま一目散に飛び去る彼と、それに声をかけながら追うジェローム。バズビーは「殺されるわけにやいかねエからな……」と呟きながら、リルトットたちがいる方へと向かい。

バンビエツタ本人は上半身を起こしたブルーに、すつと大砲2門を向け。

「あんな覗き魔に負けてないでよっ！ ジジにボロクソに馬鹿にされて頭にくるんだからッ！」

(あ……………)

そのまま絶叫して痲癩を起したようジタバタすると同時に、大砲から数重数百の霊子爆弾が射出され、そのままブルーを飲み込み「光と なった」。

ブルー!? と後方から絶叫が聞こえた気がするが、バンビエツタは気にしない。

※ ※ ※

「怖い……………。ドウシテアノ人ハ、アンナイカレ女ト付キ合ッテルンダロウ」

「付き合ってますんよ……………、ブルーの彼女は私なんだもの(＃

＼＼＼)」

「怖い……………」

「ガキに圧かけんじゃねーよデカ女」

こちらもまた不用意な発言をした誰かに対して、ミニーニヤがアルカイツクな笑顔で拳を握る。既に二の腕に青筋とパンプアップした

膨張が見えており、その誰かは腕を盾にするように構えながら数歩後退した。

リルトットのツツコミに拳は下げるが、表情と視線は変えずにじつと彼を見る。見られ続ける彼は冷汗をかき、少しだけ「ここ数年」新調したマスクを引つ張つて、深呼吸をした。

「なんかバンビのやつ、いきなり飛んでったけど………、何かあった？」

「んふふ〜、ボク知らなーい♪」（※本当は聞こえてた）

「あれでクソ女もすげービビりらしいからな。何か嫌なモンでも感じたんדרろ」

「———おー！ とりあえずこんなのだが、問題ないか『エス・ノト』」

さり気なく正当を引き当てるリルトットはともかく、遠方からこちらまで飛廉脚で飛んできたバズビーが彼に声をかけると、その彼、現在はエス・ノトを名乗る彼は「参考ニナラナカタ」と返した。

「ブルー、コツチノ^{ザ・ファイアー}F—恐怖—」全然通ジナイカラ、参考ニナル戦イヲ見タカタケド、結局能力便リノ戦闘ダツタ」

「ま、そりゃーな？ 噂によりや親衛隊のリジエの攻撃も無効化してたらしいし」

「あの超高速まばたき野郎のか？」

「マバタキ……？」

「いや判ンねーよ、その呼び方だと……」

バズビーの感想はともかく、リルトットの蔑称まがいの呼び方に首を「直角90度」傾げるエス・ノト。その服装は以前の聖兵のものではない。身体に密着するような白装束にマントを纏い、口元は白いマスクで覆われている。全体的に「死化粧」のようなものを連想する恰好をしたエス・ノトをちらつと見たキャンデイスは、なんとなくブルーの恰好と見比べて「何でこうなったし」と微妙な表情だ。

「問題でもありません、キャンデイス先輩？」

「いや、問題っつーか……。態度はまだちよつとオドオドしてるけど、何かこう、大分……」

「不気味になった?」

「そうそう——つてジジ!? ちょっと気を遣った表現考えてたのに台無しじゃんかッ!」

「ええー、だって実際そう思ってたわけだしー」

両手の人差し指を向けて嫌な風に嗤いながら視線を逸らすジジに「あたしは多少まともなんだよッ!」と切れるキャンデイス。なおミニニヤは既にブルーやバンビエッタの方に視線が固定されており、リルトットがエス・ノトを見上げて「ボロクソ言われてンぞ」と声をかけていた。

「問題ハナイ、デス」

「オメー、俺にはなんか敬語だよな」

「ブルー、凄イオ世話二ナツタツテ言ツテタシ。 実際話ガ通ジル方……………デス」

「あー、まあブルーはなあ……………。 しなくても良い苦労だけなら一番してンだろオシ」

主にバンビエッタ・バスターバイン相手にであることは、三者特に口にせずとも共通見解であった。とはいえ現状でも「まだ」マシになった方でもあるし、八つ当たり先がブルーに集中していることもあって被害は騎士団規模で考えれば軽微も軽微である。そのせいもあってか、教育係を担当した一人であるキルゲ・オピーすら「処置なし……、無理な時はちゃんと言わないといけませんよ」と声をかけるに留まる有様である。

ブルー本人に言わせればオイシイ思いもしているとのことだが、それはそうとして今日も絶好調で彼を爆殺している頭バンビエッタであった。

なお当然のようにブルーから教えられた性格の悪さは、ジジ大なり小なりバンビ<ミニ>キャンデイス<リルトット>だったりするが、そこは空気を読んで言わないエス・ノトである。

「……………そういやその恰好、どうしたんだ? 前から聞こうと思つてたけど」

「コレハ…………、恐怖」

「は？」

「何言ってるんだガキ」

バズビーやリルトツトのリアクションに、エス・ノトは目を閉じて心臓の当たりに手をやりながら言う。

「自ラガ恐怖ノ象徴トナルコトデ、相手ニ対シテモ恐怖ソノモノトナルコトガデキル。ソウ、見タヒーロー映画カラ教ワツタカラ、ソレヲ実行シテルダケダヨ。自分ガ恐怖ニナレバ、モウ何モ怖クナイ、ハズ」
「いや、バ〇トマンかよッ」

「アメコミ好きだなアお前等……………。漫画なら俺はまだ日本のやつの方が色々楽しいけど。料理漫画とかで外の食べ物イメージしたり」
意外とエンタメ事情が（多少は）現世基準で充実している。『見えざる帝国』はおいておいて。

バンビエツタとブルーとの戦闘は、バンビの聖隷した状態での完璧体の攻撃を、徹底してブルーが捌く形となっていた。

わざわざブルー本人に直撃コースにしない砲撃をし、そこにブルーが「勝手に」行つて背信の剣で切り裂き爆裂効果を無効化したりしている。これを確信犯で行っているあたり、バンビエツタも意地が悪い。

「ほらほらどうしたの！ まだまだバンビちゃんの本気はここからだよ——二段ジャンプキック！」

「その名前ダサイから後でキャンディお姉ちゃんとかと一緒に考えようね!？」

（OSR値があんまり低いと後々敗北条件に繋がっちゃうそうだし…………、白）

中々にアレな内心なブルーは、自分へ向けライダーキ〇クめいた飛び蹴りをかましてくるバンビエツタのそのヒラヒラしているミニスカートから覗く脚やら中身やらに釘付けであるが、それはそうと飛廉脚の先端に形成した球状の爆弾めいたその神聖滅矢を前に表情が引きつる。剣をやめ鉤爪に戻し、両手の爪で彼女の脚が狙う自分の胸部を庇う。

激突、と同時に「爪が爆弾化」してその場で爆裂爆破！ もつとも

爆破された後に「1秒もかからず」元に戻った爪であるが、彼女のキックの威力に打撃時に更なる一発が加わったことで、バンビエッタの脚はブルーの胸部を射抜いた。

とっさのことで銀化は間に合っていないこともあってか、跳ね飛ばされるブルー。胸には彼女のブーツの足跡がくつきり残っており、遠方からジジがそれを見てニヤニヤと涎をすすっている。一体何が彼の琴線かのじよに引つ掛かったかは定かではないが、ぼそりとエス・ノトが「怖い」と呟いていた。

地面で某犬○家がごとく「首から上が」地面に埋まった状態で胴体が真つ逆さまに立っているような状態のブルー。そんな彼を見下ろしながら、上空からバンビエッタが腕を組んで降りてくる。見ればキャノンの角度調整がされており、背部に回ってジェットパックのような役割で高度を微調整していた。

「全く、ハゲハゲもどきたちじゃないんだから……。あたし、別に完璧体ならないでって言って無いじゃない。なんでブルーやらないのかな」

しばらく直立していたせいか、首が限界に来たらしい。ごきつと音を立てて有り得ざる角度で首が曲がり、身体が背中から地面につく。もつとも数秒で「地面に埋まった」頭が光と共に抜け出し、胴体の延長上に再構成される辺りは普段通りのご愛敬。

遠方から「ハゲたアどういう見だこのキレツキレのモヒカン見てよオ！」とブチ切れてるらしいバズビーに苦笑いを送るブルー。そのまま頭を振ってから立ち上がり、バンビエッタのスカートのギリギリのあたりをじーっと見た。

「な、何よ、何か言いなさ——、ツ!? え、エツチ！ 今時パンチヲ狙いとかガキンチョでもやらないでしょーがッ!？」

「アロガンツシユヴェールト背信の剣」——」

「しよーもないことの防御にそれ使ってるんじゃないよッ！」

（いや、だって無効化しないと修練場が「原形も残さず消し飛ばし」……。それに完璧体はなあ……）

実際問題、バンビエッタの能力は「自らが霊子に触れた物体を爆弾化する」というものがメインである。この特性を拡大解釈して「爆弾

属性を付与する霊子」と「特に何ら変哲もない霊子」とを分けることで、これらを空中で混合させ「霊子の爆弾」としても扱ったりしているが。それはそうと完聖体時に扱える霊子の量を考えれば、ブルーが率先して無効化しておかないと「全員怒られる」から、という配慮がそこにはあつたりした。

なお伝わっているのはリルトットやジジくらいなものとする。

「……でもまあ、あんまり練習できてないし、やってみようか。『怖くになったら』言ってるね、止めるから」

「う、うん」

とりあえず腹をくくったブルーはバンビエツタに断りを入れる。それに対して妙に素直にうなずいた彼女に微笑み、彼は体勢を変え、両手の爪を出したまま、胸の前で両腕を交差。エジプト王墓のミイラあたりがしていそうなポーズを思わせるそれをして、バンビエツタを見上げながら呟き。

「スクラヴェライ聖隷——ん!？」

霊子を集め始めたのと同時に、「世界が歪んだ」。

いや、より正確には「何かが視ている」ような感覚を覚えたブルー。

それと同時に、その場にいた滅却師8人全員に、青く輝く「光の柱」が降り注ぎ、全員の姿を覆った。

「怖い……」

「えつちよつと嫌だ、何かボクの中に『入ってくる』んですけど!? キモいんですけどー、何か『ボクじゃない霊力』が入って来てるー!？」

「百年ぶりくらいじゃんか……」

「キャンデイス先輩、知ってるんですう?」

「こりやアレだな……、まあ悪いもんじゃねーだろクソビッチ共」

「お前等揃いも揃ってこのモヒカン馬鹿にしゃがって……」

自分の身体を抱きしめて目を見開き震えるジジと、似たようなポーズで震えるエス・ノト。特に恐怖はないらしいミニーニヤは自分の掌

を開いて閉じてを繰り返し「何か」の具合を確かめている。そしてとくに何ら感慨もないキャンデイス、リルトットに加え、どこか苦い顔のバズビーである。

……まあ髪型に対する暴言への苛立ちも大きいだろうが、それよりも虚空を見上げ、この光の「大本になっただろう」誰かへと、鋭い視線を向ける。

「……………アウスヴェーレン聖別 陛下がやる、滅却師の命と力の振り分けだ。

この間『日本で』集めて来た分で現世からはほぼ全部徴収したってユーゴーの野郎が言ってたし、その時の分まで含めてを振り分けてんだろ」

バズビーの言葉の通り、その光によって自らの能力が強化されるのを感じるミニーニヤたち。ジジも怯えていた様子だったが「キモい」という感想は変わらないまでも、段々と震えがおさまり「キモい♪」と楽しそうである。いまだにずっと怯えているエス・ノトとは大違いだが、彼はぼそつと「気軽に与えられるってことは……」と「逆の真実」にも気付いているため、仕方ない所はあった。

当然その光はブルーたちにも影響しており、発動しかかった完聖体の一部、形成途中だった「目から噴き出だすような」霊子の一部が右側からだけ異様な状態になり、「痛い痛い痛い!?!」とびっくりしているブルーと。

「ダメ、見ないで……………、もう『真空』は嫌あああああツ!!
こんなに息苦しいのなんて止めて! 胸も頭も破裂しちゃうから……、あたしはお父様やお母様とは違うのおツ! 無実なのツ! 良
い子なのに、皆よりも誰よりも良い子にしたのに——ツ!」
(なんか凄い取り乱してる!?! って、それはそうとバンビちゃんもな
んとなく「視られてる」のは判るんだ)

他の面々は気付いているか気付いていないか不明だが、ブルーには彼女が言う「見ないで」という意味が正確に伝わっていた。

それは例えるなら、天空から見下ろす一つの巨大な「目」。

その「知覚できない」目により、全ての滅却師たちが何かしら「見定められている」。値踏みされている、が正しいかもしれないが、そんな視線がどこかから、自らの全てを丸裸にされているような、そんな感覚。

どうやらその何かが、バンビエツタのトラウマに直撃したらしい。錯乱しながら爆撃しかける彼女の背後に回り込み、その腕を掴んで「銀の蒸着」で頭部の環やら背中の中翼やらを溶かしていくブルー。そのまま動揺する彼女を正面に向けて抱きしめ、何も言わずにそのままじつと光が晴れるのを待つ。

ブルーが抜けた光の柱は徐々に移動し、バンビエツタと彼とをさらに包み込むよう太く交わった。

「ブルー……、あたし嫌なのお……、死にたくないの、死にたくないの。『ギリギリ』死ななかつただけだから、もうあんな想いはしたくないの……」

「バンビちゃん……」

それ以上言葉を続けず、彼の胸に顔を埋めて泣き続けるバンビエツタ。

そんな彼女を辛そうに見た後、ブルーは光の先を見上げ「本来なら」「知覚できないはずの」「巨大な目」に向けて、一言。

「……………約束は守ってくださいよ、陛下」

にやり、と。その一言を聞いた目が、少しだけ笑ったような。

そんな気配を感じて、ブルーは少しだけ頭を下げて、再度頼み込んだ。

【おまけ】

・もし「F―恐怖」
トラウマ刺激を本作バンビーズ他メンバーが受けたら……

ミニーニャ……

「私には何もかもが足りなかったの……………、わがままを通せる体力

も腕力も権力も資本力も何もかもが……」

(その場で膝を抱えていじけだす)

キャンデイス：

「戦争とかもう止めなつてさア！ 領土問題とかもう面倒極まりない
じゃんかあああああッ」

(絶叫しながら頭を抱えつつ走り去る (逃げる？))

リルトット：

「まア…………… 『餓死』 くらい今更怖くも無エからな……………」

(普段よりもお菓子を多めに食べるのみで錯乱なし)

#024・番外編：PRISON FROM SNO
WPELLETS

「同士討ちとかそういうレベルちゃうやろ!? 完全にそのイケメンぶつ殺したやろその姉ちゃん、何考えとんねん!? 思わず卍解除してもうたわ、アホかいッ!!?」

「ブルー殺しちゃったのはアンタのせいでしょ!」

「殺したのに気づいても顔色一つ変えへんのは完全にヤバイ奴やろッ!」

「何ですってーッ!?!」

「ば、バンビちゃんも平子隊長も、どうどう……………」

「お前が一番怒れッ!」 「あなたが一番怒りなさいよッ!」

(そんなところで息ぴったりされましても…………)

困惑するブルーに怒鳴る二人。金髪のおかっぱ風ヘアスタイルな平子真子と、ご存知バンビエッタ・バスターバイン兩名である。直前の戦闘中、平子の能力で「敵味方」を混乱させられた直後に、そのせいもあってブルーを爆殺したバンビエッタが顔色一つ変えずにそのまま周囲を爆撃しようとしたのに、思わずツツコミを入れた平子であった。

なおブルーに関しては、特筆するまでもなくいつも通りという認識しかなかったりする。

「ぜー、はー、何やねんお前等……………、なんか調子狂うわ」

「せいぜい狂ってればいいじゃない。…………ブルー大丈夫? 『イチモツ』壊れたりしてない?」

「だ、大丈夫、大丈夫……………、ついてるから触らないでね!? 一応敵前だよ!!?」

「それはいいからぎゅーってしてッ! じゃないと今すぐ爆撃したく

なつちやうからッ！」

「ええ……っ？」

(一体何がバンビちゃんの恐怖の引き金を引いたんだろう)

「敵に言うのも変やけど……、お前苦労してんなあ」

どこからか取り出したハンカチで目元を覆い、涙でも拭っついていそうな平子である。彼の脳裏に一体どんな映像やら何やらが思い浮かんでいるのかは定かではないが、それはさておき。

周囲を確認して「アカンわ、相性最悪やんけ」と毒づく平子の一言に、思わずブルーは苦笑い。なんならバンビエツタをより強く抱きしめて、耳の当たりに自分のマントがかかるようにすることで音を上手く遮ってる始末。なおその様子は氷輪丸の翼に阻まれて平子側からは見えないので、バンビエツタはバンビエツタで割と自由に甘えていた。

さて。事態が膠着すると判断したブルーは、バンビエツタに囁き彼女をこの場から逃がす。最低限のアドバイスはしたせいで、狛村とは別方向へと飛翔するバンビエツタ。

そんな彼女を追おうとする平子の前に、氷の翼を展開したままのブルーが立つ。

「何や、あんな大事にしとった彼女だけ先、行かして。ひゅーひゅーって言つとここか？」

「それ言うと後で別な所から怒られちゃいそう何で、パスでお願いします『平子隊長』」

まあバンビちゃんと平子隊長の相性は悪くないと思えますけど………、『仮面の軍勢』ヴァイザード相手に大事な相手を置き去りにはしませんよ」

「チッ、んなことまで調査済みかい」

嫌そうな顔をする平子だが、どこか敵意は薄れている。戦意に変な形で水をかけられたせいだろうか、しかし警戒自体は解いていない。否、厳密に言えば警戒を「解けない」。目の前に立つブルーの姿を目にしてから、どうしても目を離すのに躊躇いが生じていた。

敵として相對した時、どうしてもかその存在を見失う事への不安、恐

怖、言い知れない無防備さのような薄ら寒さ。そしてもう一つ。

「……………何で喜助のあの黒いの、あっちにも送られとん筈なのに、卍解を維持したままいられるんや」

そう、その一点が何よりも不気味である。基本的に既存の滅却師は、あのバンビエッタですら卍解を使用できない。もしくは使用すれば自ずと個人の霊体へとダメージが入る状態であり、そしてそれは^{メダリオン}星章を構成する滅却師の霊子にも影響を与えている。つまり本来ならば、浦原喜助と涅マユリとが共同で配った「侵影薬」の効果が出て、卍解は元の持ち主の元へと戻っているべきなのだ。

それが出来ていないということ自体がおかしいのである。

それには答えず、苦笑いしながら斬りかかるブルー。とっさに「解号なしで」解放した逆撫で受ける。「背信の剣」と激突、飛び散る火花と「銀色の液体」。妙な鉄臭さを感じた平子は、本能的に嫌な予感を感じ咄嗟に後退。と同時に、ブルーは指先を向けて呟く。

「^{ブルー・アルテリエ・アンハーベン}鎧 鱗 動 血 装 ——」

「おわつとツ?! ばば、卍解 ——」

飛び散った血はその場で霊子兵装としての小型の弓を形成。そのまま妙に長い神聖滅矢を形成して光線のように放つ。

瞬間的に卍解した平子は、足場に形成された花卉のような台座に座り込み、幾本の矢を逆撫で受け流す。そのまま花卉が閉じて防御態勢をつくろうとしているが、それよりも先に放たれる血しぶきから生成される矢のなんと多い事よ！ ほぼ外から見れば、彼の卍解目掛けて光線が大量に放たれているような有様だ。

うめき声を上げながら数か所、人体の方に攻撃を受ける平子。ようやく花卉が閉じ切ったものの、その逆様邪八宝塞の内側で腕の傷を押しさえて冷汗を流す。

(まずいわ…………、からめ手を通じひん割に純粹に強い。手数とか反則やろノーモーションのくせに)

がんっ！ がんっ！ と外から殴られる平子の卍解。思わずその「トラックでも激突したかのような」音に飛び上がりそうになるが、抑えつつもホラーの怪物めいたその所業を前に、深くため息をついて。

「……………しやあないわ。後で喜助にドやされるにしても、ここで死んだら話にならんわ——」

チャンフアリンゲ
「面 取——ツ」

一方のブルー視点で見れば、金色の花の蕾と化した平子に対して、銀一色に染まった左腕を振りかぶって殴りつけているのみ。とはいえ全身に動血装が走っており、その力は並の滅却師はおろか死神のそれでもあるまい。わずかにきしみ、少しだけ金粉のようなものが散る。

「……………うーん、結構綺麗な卍解だからあんまり本気でぶっ壊したくないんだけどなあ……………」

そしてこの状況においても、ブルーは飄々と感想を零す。決定的にここが戦場であると言う緊張感とは無縁の振る舞いだが、それに対して相手はつつこまず。

『——おおきになあ。せやけど、悪いなお兄さん。殺すで』
「ツ！」

かたかたと音を立ててわずかにブルーから見た背面の花弁が開いたと同時に、自らの背後に平子の「異常に膨れ上がった」霊圧を察知したブルー。

見ればそこには、どこか長い髪を連想するような独特の仮面をつけた平子真子の姿——まとう霊圧は虚のものが入り混じっており、斬魄刀の刀身はそれこそ赤黒く光っている。

それをとっさに右腕の背アロガンツ・シユザエールト信の剣を構えて受けるブルーだった。刀身と刀身が激突した瞬間に、ニイと平子は仮面越しに笑い。

『月牙天衝——なんつってな』

接触した刀身から「卍解した霊圧で」虚閃セロを放ち、ブルーのその剣を「叩き折った」。その余波はそのままブルーの身体を袈裟斬りに「真つ二つ」にし、そのまま霊圧の波動とエネルギーの奔流は彼を飲み込み、肉片を弾き飛ばした。

ブルーの影が見当たらなくなったのを確認してから斬魄刀を鞘に納め、仮面を「握り砕く」平子。ぜいぜいと肩で息をしながら、鞘に

収納されると同時に解放の解除された斬魄刀を、杖代わりにして付く。

「アレでようやく攻撃が通るんかい……………、はア、せやけど『虚の霊圧』あれだけひき肉にしたら、流石に再生能力持ちの滅却師でも——」

と、彼の言葉が止まる。何や、と目の前に現れた「銀に光る人型」のシルエットに、瞠目。

そのシルエットへ目掛けて、先ほどの虚閃で散らされた肉片、骨片、血液に至るまでもが「同様に」「光の奔流となって」人型へ結集。ほぼ無形の状態だったそこから、背中に氷の竜の翼を背負った元の状態で回復した。

そんなブルーは閉じて居た目を開けて、両手をぐーぱーして動作を確かめている。目の前で「霊的な力を伴わない」ような、それこそ「何も感じなかった」その再生を前に、言葉が出ない平子。

「……………ごめんなさい。僕、そういうのは苦手じゃないんです」

「何……………、やて?」

「僕の聖文字はI。『I—不滅—』。能力は『存在の完全証明』。僕とこの滅却師の生命を害するあらゆる要因に行き当たった際、その事象を『外側から』検閲して再度別な形で上書きして保存、最も事象衝突が発生しない場所や状態に再定義、再構成して出力する」

「……………は?」

「あー、ややこしいですよ。要するに『絶対死なない』ってことです。説明がやけに回りくどいブルーだが、大体の原因はアスキン・ナツクルヴァールに能力を教えてもらった際の、彼の回りくどい物言いが原因である。悪い例を真似てしまった訳だが、実際「厳密には」かなりヤヤコシイ能力なので、リルトットすら匙を投げたという経緯があった。

傷を負っている状態から「卍解に」「虚化」の二重がけ。瞬間的に上がった膨大な虚の霊圧、それ自体を制御するのもギリギリという有様からのこの現在。表面上はともかく肉体内部は満身創痍である。

そんな彼に向けて、ブルーは「背信の剣」の基部に生成された、狼

の罅のような神聖弓を構え。その先端に球状のエネルギーのような神聖滅矢を収束させ――。

「ッ！」

「――破道の三十八『天雷砲』」

直前で腕の方向を変え、自らの背後へと振り返り射出。

そのまま自ら目掛けて撃たれた光の大砲と神聖弓とが激突。

衝撃で巻き起こった砂埃を「背信の剣」で振り払うと、そこに現れたのは。

「……………」

(まさか本当に帰ってくるとは)

「よオ、また会ったな優男」

青白い外套を纏った日番谷冬獅郎――何故か額に「眼窩が六つあるような」仮面をつけた彼がいた。

「返してもらうぜ、氷輪丸を」

「――」

別に虚の仮面と言う訳ではあるまい。霊圧の質も平子のように変化していない。そしてそんな彼のビジュアルを見たブルーの感想は。

(劇場版第二作……？ 馬鹿な、当時と千年血戦篇との設定は原作者師匠監修といえど微妙に変わっているはずでは!?)

相変わらず緊張感に欠けていた。

なおブルーの言う通り、色こそ違いが外套は劇場版で日番谷が着用していたもの、仮面は草冠宗次郎が着用していたものを少し変形させたようなものだったりする。

※ ※ ※

「霜天に坐せ、氷輪丸！」

「シールドガス遮霊霧！」

合流した松本乱菊に満身創痕の平子真子を逃がさせ、日番谷冬獅郎

はブルー・ビジネスシティへと斬りかかる。もつとも本来なら氷結すべき彼の「背信の剣」は、空中に霧散された「銀色の霧」のせいか、上手くまとまらない。

とはいえ。

「……！ 相変わらず意地が悪いことを」

「いやその………、流石に『それだけ上がった』霊圧でこられるとこつちも対処の仕様がさ、うん！」

実際問題、ブルーが空中に張り巡らした「自らの血液の霧」すら、冬獅郎から放たれる霊圧によって散らされ始めている。剣圧もそれこそ以前のものとは比べ物にならず、こころなし右腕の大紅蓮氷輪丸の顔がちよつと誇らしげだ。

すぐさま左手を銀で覆い殴りつけようとするが「それは前に見たぜ」と、これもまた白打でストレートに対処する。ブルーの動血装により強化された拳すら、その身体から放出する霊圧の差でもって蹂躪する。

正しく「霊王宮で鍛え上げられた」死神としての、最もスタンダードな強さだ。

そのまま拳を押し返されバランスを崩したブルーめがけて、氷輪丸を振り下ろす。それを卍解の翼で受け、弾き飛ばすように空中へと払い——。

「手ごたえが、あれ？ ……つ、まさか氷人形!？」

「——よく見破ったな」

上空、剣を受けた姿勢で固まった冬獅郎の姿を見て驚愕するブルーの背後、半笑いで声をかけて来る「本物の」日番谷冬獅郎が氷輪丸を振り上げ。

「破道の七十八『斬華輪』」

「ッ！」

先ほどの平子のような虚閃セロではないが、その一撃はむしろブルーの内側へと溶けている氷輪丸の霊圧へと直撃した。

瞬間、彼の胸を突き破って現れる巨大な氷の竜——背中セロの翼からそのまま一緒に彼の胴体をえぐるように、無理やりその身体から

「這い出た」氷輪丸。その頭上に乗った冬獅郎は、ブルーの倒れた下半身に目もくれず空中で斬魄刀を構え直し。

「卍解——大紅蓮氷輪丸！」

空中で飛び上がり、氷輪丸が冬獅郎へとまとわりつくような形を経て姿を変化させる。色は輝く深い青を称えた水。氷の竜と正しく一体化したその姿。右手の罅が少し唸り声のようなものを上げると、冬獅郎は少しだけ顔をしかめた。

「遅えって俺のせいじゃないだろ。……何？ 結構面白かった？」

「いや別に興味は無エけど」

苦笑いしながら右手の斬魄刀を肩に担ぎ、下方を見る冬獅郎。以前、松本乱菊いわく「怪物」を自称していたらしいあの男。そこから放たれる潜在的な「嫌な感覚」は未だ晴れず。故に警戒を解かず、彼はいつでも斬魄刀を走らせられるように構えていたが。

「——あー、やっぱり戻っちゃったか。割と『天使らしくて』お気に入りだったんだけどな」

「……ッ」

先ほどの意趣返しではないだろうが、さも当たり前のように「自らの背後に」現れたブルー。だが、冬獅郎はその瞬間に「猛烈な寒気を感じた」。

一瞬、わずか一瞬だがそこにほとぼしった霊圧——おそろく以前の自分なら、あの藍染惣右介を前にした時のように何も感じなかったろうと言う確信を抱く、それこそ「はるか高みから」何かしら手を加えられたと言われた方がまだ理解が出来るほどの、膨大な霊圧。

「どんな霊威してやがる、お前」

そう、つまり。バンビエツタたちを始めとして大半の滅却師がその能力を「霊的なそれではない」と感じていた論拠になっていた「霊圧の有無」だが。実際のところ、ブルーが再生する度に霊圧は走っていたのだ——彼我の差があまりに開きすぎたため、それを霊圧と認

識できないほどの差が生じていたのだ。

それこそ藍染を思わせる圧倒的な霊圧だが、現在は感じずとぼけた顔をした優男が、空中でため息をついてじーっと自分を見つめている姿だけがそこにある。霊圧自体も青年のそれを逸脱せず。

嗚呼つまり、それだけの膨大な霊力は彼が能力を発動した際にのみ働いているということか。

しかしその霊的な存在階位の高さは、下手をすれば零番隊のそれを上回りかねない。その妙な矛盾した存在の在り方こそが、おそらく本能的に目の前の相手への警戒を解けない理由なのだろう。

「なるほど。確かにこれはバケモノだ——再生することだけで言えばな」

「日番谷隊長？」

「その妙にやる気が無エのも、お前が自分自身の存在の絶対性に自信があるからってことだ。だがなア、お前の能力の発動条件は『果たしてどこまで』『作用するんだ？』」

「おつとツ！」

瞬間、目の前に左手を構えるブルーだったが、同時にその左腕が「凍てつく」。それを払えば、凍傷で一気にボロボロとなった腕に銀色の光が伸びて覆い改めて腕の形を形成する。その腕を振りかぶって殴りかかるブルーに、冬獅郎は瞬歩で半歩ずれ、刀の峰を彼の左肩に当てる。

同時に凍り付く衣服と、その延長に形成される「左腕の表面のわずかな隙間」の氷——ブルーの人体を直接凍らせず、表面を覆うように凍結させた。

早っ！ と声を荒げたブルーは、そのまま左腕ごと右手の剣で肩を切除。出血を霊子収束で抑えながら飛廉脚で距離を取り、銀の腕の形で再生するのを待つ。

それを見逃す彼ではなく、氷輪丸で斬りかかる。
「やっぱりな。」

今の俺の霊圧なら、お前のあの銀の攻撃はある程度蹴散らせる。

そしてお前は——人体に直接作用しえない攻撃を、無効化する

「ことはできない」

「……………、いや、やっぱり早いって察するの。流石天才児……」

「褒めても何も出ねエぞ。それに———これでも200年以上は生きてるからなあ」

「リルお姉ちゃんと同じくらい!?!」

謎の驚愕をする彼に一瞬半眼で笑うと、そのまま彼の「体表面で」斬撃を寸止めする冬獅郎。それと同時に瞬時に形成される氷から逃れるため、ブルーは防戦一方となっていた。

「そつちは攻めねえのか」

「あー、もう！ 察されちゃったからこつちから攻撃したら、接触箇所を起点に氷張ってくるよね!? それくらい出来るって情報で知ってるからツ！」

「急にガキっぽくなったな」

「元々あんまり余裕がないものでツ！」

（むしろ「死ぬ」んだったら復活の目途があるけど、中途半端に拘束だけされると復活できないのはナナナさんに思い知らされちゃってるからなあ）

的確に弱点を把握して攻撃してくる日番谷冬獅郎に、ブルーは悲鳴に近いトーンで声を上げていた。

実際問題、冬獅郎の読みは当たっている———ブルーの「ジ・イモータルI—不滅—」で証明や定義される⇨復活するための条件というのは、つまるところ「ブルー本人が」「直接害される」ということに限られていた。

例えば毒、例えば殺傷、例えば感電、例えば損壊、例えば爆裂、例えば精神汚染。いずれの加害においても、それらはブルーの身体へと異常が発生する。精神攻撃すら、大きく区分すれば「脳」への加害だ。故に定義された蒼都ブルーという滅却師の「完全な状態」から逸脱したそれらは、外部から「現在の状態」を「元の状態」へと再定義されてブルー本人に上書きされ復活する。

故に、例えばナナナ・ナジャークープが能力を使用したときのように。ブルー本人ではなくブルー周辺の空間を拘束、固定するといった

ことをされると、彼は逃げる事が出来ない。

故にこの場合、氷輪丸の氷が彼の身体を凍らせず、絶妙な距離と温度で動きのみを封じる牢となるのならば――。

そしてそれだけの微細な操作も、日番谷冬獅郎には不可能ではない。

「こりや本格的に厳しいかな………、ここで使うと思いつきり負けちやいそうなんだけど、しかたないか。

フルート・ヴェーネ・アンハーベン
外殻 静血装」

「ツ―」

そして空中で、自らを覆う球状に銀の血を展開。そこに血装を走らせ冬獅郎の侵入を阻むと、彼は手元の武装を解除し、腕を交差させ。

スクラヴェライ
「聖隷――」

鐘の音と共に、周囲へと散った自らの血や、氷輪丸が作り出した氷を分解してその霊子を収集。立ち上る青の光の柱の前に、冬獅郎は冷汗をかく。

やがて柱が砕けた後。現れたブルーは――青白いプロテクターを肩、腕、脚部に装着し。首にはなびくような青白いマフラー。そして目元からは、まるで獣の耳のように、あるいはほとぼしる血のように、青い霊子が棚引いて放出されている。

翼らしい翼はない。あるいは目から流れるそれが彼の翼か。

頭上に環わもない。その代わりに、環は彼の腰のベルト、スペードのマークを覆うようにバックルのごとく鎮座していた。

「――『メタハエル神の完全』」

ギン、と。目から迸る霊子に、二つの眼窩が開く。剥きだされたそれは、まるでコミックのヒーローがごとき白目であり、妙に目立っていた。

#025. おかえりなさい

「限定解除、だど!? 何だそれは——くっ、グリムジョー！」

「砕け散れ——ッ！」

夜のとある街。霊なるものを目視できる人間にとっては、まだまだ序盤ではあるが大いなる戦いの、その先触れ。

とある仮面を砕きし虚に斬りかかるのは、全身に氷の竜をまとった少年。護廷十三隊十番隊現隊長、日番谷冬獅郎。

先ほどまで封じられていた霊圧を解放したその能力は、実に元の5倍。

現世への影響を加味することすらないその一撃一閃は、間違いなくその破面シャウロン・クローファンを仕留め、粉々に砕いた。

砕いた、はずであった。

『影からの確認だが身体と同調率、実に94%。これ以上の相手はもはや存在しないだろうと確信する』

「相手、虚だけれど大丈夫? B、G」

『問題はない。もとより我が力は、現在の形に至る以前からそういった仕様で構築されているものである。』

——拡散せよ、フィルトエル神の傀儡——

かくして日番谷冬獅郎が凍結した虚は、その全身が氷の内から砕けて無くなる寸前に「闇色に染まり」、間一髪のところでのこの空座町から存在を消したのだった。

※ ※ ※

「ふふ。……………ふふっ」

らしくないほどに喜色を露わにして、スキップをする青年。挙動は幼児のようだが、当然のように見た目の年齢にはそぐっていない。ただ、意外な事にその顔立ちの穏やかさを基準として考えれば、違和感はないのかもしれない。

少なくともバンビエッタ・バスターバインやミニニャ・マカロンを相手にした場合は。

滅却師の「見えざる帝国」において、明かり一つ浮かばぬ空の下でスキップをしながら、ブルー・ビジネスシティこと蒼都はとても楽しそうに空中を「滑っていた」。足元に構築した霊子でスキップをしながらであるが、さながらその動きは動歩道ムービング・ウォークの上でツーステップのスキップを踏んでいるようでもある。手には紙袋が二つであり、周囲の景観に溶け込んでいない「現世の」お土産という風なそれであった。そんなブルーの隣に、特にスキップを踏まず覗き込みながら飛行する、桃色の髪の女性が一人。

「ご機嫌ですね〜、ブルー？」

「ミニニちゃん！ 今日可愛いね！」

「きゃあ!? だだ、大胆なの……………」

長身の彼女はミニニャ・マカロンであるが、満面の笑みで自分を可愛いと言いながら、普段なら「自分からは」絶対にしないだろうハグまでかましてくるブルーを相手に、さながら小さな女の子のように顔を赤くして空中で固まってしまう。

そのままお人形さんのごとく、漫符ならば頭から煙でも上げそうな様子のまま、ブルーに手を引かれ移動するミニニャ。一見すると青春の1ページのようであるが、二人そろって魂魄年齢はともかく実年齢はそれなりに良い年だったりするのはご愛敬。

それはそうとして、自分の「恋人」であるはずの彼の見たこともないようなテンションの高さに、ミニニャは大きく困惑し、そして照れていた。

「ほん、当に、テンションが高いと思うの……………。何か良いことでもあったんですう？」

「うん！」

「無垢な笑顔……………ツ、こ、コホン。」

出来れば理由を教えてもらえると嬉しいの。現世でナジャーキューと任務だったのは知っていますけどお」

「へ？ あ、うん。いいよ、別にサプライズとかでもないし」

（後多分、テンションが勝手に上がってるのは僕だけだろうしね）

少しだけ冷静になったブルーだが、それでも表情はいつもの6割増しでニコニコとしており、その見慣れない表情をミニーニヤは直視できなかつた。ブルーから手を放すと「あうくくくく／ω＼」と自分の顔を両手で覆い、しかし指の間からチラリと見てはまた「あうくく……………」と照れに照れていた。

「何、現世でもちよつと古めのラブコメみてエなことしてんだよ、ガキ共」

「あつ、リルお姉ちゃん」

「リルちゃんですくく？」

下の方から声をかけられたブルーとミニーニヤは、そちらの方を振り向く。相も変わらず身体的な成長が見込まれないリルトット・ランパードが、建物の瓦礫めいた塀と塀の間から、二人を呆れたように見上げていた。

なお、ミニーニヤから呼ばれた「リルちゃん」という呼び名に半眼となり「オメーにちゃん付けだけで呼ばれる筋合いは無エぞ羊女」と吐き捨てた。何かカチンとくるものでもあったのだろうか。

（まあ、アレでリルちゃんって僕やミニーちゃんよりはるかに年上だから、何かそういうのは嫌なのかな。……………むしろ子供っぽくて可愛い気がするけど）

「前髪野郎オ、オメー今なんか失礼なこと考えたろ。殺す」

「ちよ!? 待って待って、お土産買って来たからちよつと勘弁してよリルお姉ちゃんッ！」

「お土産ですか？」

うん、と言いながら、ブルーは菓子折りの小箱を一つ取り出して、下まで降りてリルトットに手渡す。「気が利くじゃねエか」と言うとり

ルトットは少し「浮かんで」ブルーの頭をひと撫ですると、そのまま後方の銀架城シルバーンまで一足先に飛び去って行った。

「……………ブルー、何か顔が赤いけれども。どうかしました？」

「へ？ あ、いや、うん、何でもないよ」

(リルお姉ちゃんに頭撫でられたのとか、何か久々すぎてくすぐったいや)

付き合いが長くなってきたからこそその照れはともかく。

「よう、かん？」

「うん。餡ソイ・ジャム子のゼリーみたいな感じのやつ」

「それも日本のなんですかうねく。……………やっぱりブルー、変な所で日本鼻貞？」

「否定はあんまりしないかな」

じゃあ戻ろうか、と話しながら、ブルーたちもリルトットに遅れて銀架城へと飛行して向かった。

道中、ミニーニヤから「どういう任務だったんです？」と聞かれるも、ブルーは微妙にはぐらかす。というより、上手く説明できないといったところか。

「虚ヴェコムンド圈ドに行つて影に潜入して情報収集……………、瀨靈廷は『何代か前の十一番隊長』さんのせいで、あんまり調べちゃいけないってなつてた話だつてのは、知つてるよね」

「一応、情報ダーテンはそう書いてありますねく」

「でも、あつちもあつちで情報収集つて言うのも、『新しい王様』になつた人が色々アレすぎて、僕とかナナナさんくらいじゃないと上手く行かなそうつて話で」

「それがどうして現世に行つた話になるんですう？」

「若干説明が難しいかなあ——つと、面チャンファリング取！」

ミニーニヤとお喋りをしていた途中、ブルーはミニーニヤを抱きかかえ急停止しながら、高速で右腕から鉤爪を生やすと、その先端から「銀の血」を放出し、瞬間的に大きなドームを形成。

次の瞬間には、そのドームの周囲で轟音と爆撃音のようなものが鳴り響き、密かにミニーニヤはブルーの腕の中で震えていた。

「うん。というより、情報収集よりそっちの方が本題だったみたいでさ。僕、知らされてなかったんだけど」

「バンビエツタちゃん、すっかり情報読み込んでる……!?!」

ミニーニヤとバンビエツタに挟まれる形で（特に物理的には挟まれていない）、ブルーは二人に顔を行ったり来たりと向けながら話をする。既に城の廊下であり、人の気配はない。

そもそもナナナ・ナジャークープがメインで引き受けていた任務は、かつて「B.G.9」を自称した一人の滅却師、その死体からハツシユヴアルトが作り出した、とあるアイテムを持つていくことだったらしい。

「普通の霊子は十分溜まったから、敵対種族の霊子を溜めることで、その『生存本能を呼び覚ます』、っていうことらしい」

「どういうことよ」

「ナナナさんもよくわかってなかったし、あんまり深く突っ込むとアレかなって」

「使えないわねえあの白黒出っ歯」

「それ、リルトット先輩が使ってた罵倒だと思うの」

「いいじゃない分かり易いし。それで？ 何でわざわざ現世にまで行くことに——」

『——その続きは、私の口から説明しよう。相も変わらずブルーを爆殺しているようだな、バンビエツタ・バスターバイン』

は？ と。背後からかけられた声に、バンビエツタは一瞬思考が止まる。

何処か聞き覚えのある物言いと、その霊圧の感覚。まさか、と冷汗をかきながら振り返るバンビエツタとミニーニヤ。

そこに居たのは瘦身の男。身長はミニーニヤに迫らんとする程に高く、白い死覇装を纏い、頭の後ろには黒く短い三つ編み。そして顔面には、「どこかで覚えのある」騎士の頭部鎧をデフォルメしたような、あるいは髄で構成し直したようなもの。

その仮面めいたものの奥から、鈍い光が三人を見つめていた。

「う、そ………!? ロボ、あなた生きてたの……？」

『その質問には、否と答える。以前「B G 9」を名乗っていた個体としての私は、完膚なきまでに死んでいる』

かつて虚に殺されたはずの滅却師、B G 9は感情もなく、淡々と言葉が続けた。

「B Gもお帰り！」と笑顔でサムズアップするブルー。そんな青年に、サムズアップを返そうとして、しかし「手首から先がない」自らの手を見て数秒固まり、二回首肯して返答とした。

嘘でしょ、と。有り得ないものを見たような光景を前に、バンビエツタは自分の身体を抱きしめて震える。

一方のミニーニヤはブルーの笑顔の理由に合点がいったらしく、それなら納得ですかねえとこちらも微笑んだ。

「このロボの人、頼りになるお兄さんみたいなものでしたしね、ブルー。」

……それはそうと、見た目とか全然違うのに声は一緒なんです？」

『たまたまだ。声紋の一致率は驚異の89%だが、特に狙ったという訳ではない』

「その話し方、本当にロボの人ですわ〜〜〜」

「———そんなの、有り得ないじゃないッ！ あたし見たのよそのロボ野郎の死体ッ！ ちゃんと、落ち込んだブルーと一緒にツ！」

「バンビちゃん？」

ガタガタと震えながら、バンビエツタは震えた手で霊子兵装の剣を握り、B G 9へと突き付ける。わずかに涙目になっているそんな彼女に、やはりというべきかB G 9は振る舞いを変えない。

『繰り返すが、かつてB G 9を名乗っていた滅却師は死んでいる』

「じゃあ、あなたは何なのよッ!? 幽霊の世界で幽霊が出るとか馬鹿みたいなこと言うんじゃないでしょうねエ！」

『その理屈を言えばこの城の滅却師は「霊子」と「器子」との境界が曖

昧故に、生者も死者も同時に存在していると記憶しているが。

『そのブルーとて、「器子」換算で言えば生存率は——』

「うわあああああつー！」

バンビちゃん!? と、ブルーが止めに入るよりも先に、その剣はBG9の胴体を風いで、上半身と下半身を真つ二つに分離させた。

これにはミニーニヤも一瞬絶句。追撃で爆破させようとするバンビエツタを、ブルーは背後から羽交い絞めにして「面チャンファリング取！」と銀のドームで覆う。……ご丁寧にお土産の袋は外に放置しているあたり、この後の展開に予想がついているのだろう。慣れたものである。

ドーム越しに息絶え絶えなブルーの声と、連続した爆撃が聞こえており、ミニーニヤは少しだけ「逃げちゃいましょうか」と呟いた。

「……………いや逃げンなよ、どう見ても犯人バンビだろオが同罪にされるぞオメー」

「りり、リルお姉さんツ!？」

「お、動揺しすぎだぜ。呼び方、だいぶ昔に戻ってんよ」

そして背後からぬつとあらわれたリルトット。ブルーのお土産だろウ羊羹をガジガジと「口を変形させながら」齧りつつ、半眼で銀のドームとミニーニヤ、胴体からぶった切られたBG9らしきものを見る。

「……………現行犯だなああのサイコビッチ。いや、つかロボ野郎オの霊圧するぞコレ? 何がどうなつてんだ」

「私も事情は知らないっていうか。…………あつ! 今ならまだジジさんが居れば治せるんじや——」

『——それには及ばない。全体の破損度50パーセント、このレベルならまだ『フィルトエル神の傀儡』の適用範囲内にある』

はア!? と声を荒げて一歩後退するリルトットと、死体のようになっている上半身の方から「電子音めいた声」聞こえたことで、ミニーニヤも思わず腰を抜かした。

次の瞬間、「血の出ていなかった」上半身の断面からウネウネと、虚の髄を思わせる触手めいた何かが這い出る。それら複数の触手は倒れたままの下半身へと延び、断面へと入り込み、ぐちゅぐちゅと「肉

を裂くような」音を立てながら上半身の方へと引きずり、そして接合した。

何事もなかったかのように立ち上がるB G 9。その、いつそエス・ノトが得意そうなホラーめいた光景に、リルトットは「エイリアン野郎にでも改名すつか？」などと世迷言を呟く。彼女も彼女で混乱しているのだろうか、さておき。

その光景を「解除されなかった」ドームの内側から目撃したバンビエツタは、むしろ冷静さを取り戻した顔でB G 9のを見ていた。「……………そういうこと。だったらむしろ納得したわ、安心安心。」

それ、あなたの完聖体ってことよね」

『肯定する。我が、^{ファイルトエル}神の傀儡』は、我が仮聖文字『^{イポテス}I—騎士—』の性質をより極端としたもの。

——この身は既に滅^{クインシー・フオルシユネンデイツヒ}却師完聖体「そのもの」。我が能力核となる聖櫃^{アーケ}が無事であるならば、我が意志は何度でも、いかなる物をも「乗っ取ることで」、この世界へと再臨する』

つまり、こういうことである。

聖櫃……、かつて死亡したB G 9の聖文字『^{ザ・キラーマシン}K—殺戮機械—』の本体たる核の立方体の物体。それにハツシユヴァルトをはじめとした一部の聖章騎士が数年間、霊力を注ぎ込んだことで彼の「意志」が復活し。生存本能を虚たちの霊圧溢れる場所でより刺激されたことで完全に覚醒へと至り。

覚醒早々に「我が肉体の適合率が高い個体を捕捉。追跡を依頼する」と言われれば、ブルーがそれに応じない訳はない。現世へと向かう数体の破面たちの後を「影」伝いで追ったブルーとB G 9（の本体）。その結果、現世にてとある破面を自らの肉体として決定し、それを「奪い取る形で」復活したのが、今のB G 9ということだ。

（滅却師としての霊的な弱点は、すでに肉体がないことで無理やりクリア。虚だろうと何だろうと強制的に寄生できるっていう形みただけど、絵面は完全にアレなんだよなあ……………、シャウロンエ……………。まあ復活してくれたことの方が何倍も嬉しいんだけどさ）

「というわけで、B G お帰りなさい！ ってことなんだけど……………、もう

殺さないよね、バンビちゃん」

「あなた、あたしを何だと思ってるの？ 虫とかみたくないものならいくらでもぶち殺すけど、陛下の力だっというのならやらないわよ。下手したら粛清されちゃうじゃない」

(やっぱり怖がるポイントが変なんだよなあこの子……………)

「もつと気にするところが一杯あると思うの……………」

相も変わらずなやり取りをするブルーたちを見て、そして呆れた様子の子のリップットを一瞥すると。新生したBG9は自らの身体を見て「今後を踏まえればバンビエツタ・バスターバインの攻撃に巻き込まれて破損する確率、百パーセント。改造が必須と考える」と、ぼそりと呟いた。

【おまけ】

「そーいやオメーの技、名前なんて付けてたか？ チャンフアリングとか」

「キャンデイお姉ちゃんから『溶接系のネーミングとか使ったら恰好良いんじゃないか』って。せっかく蒸着ってつけたんだし」

「キャンデイがなあ……………、なんか色々理由着けてベタベタする回数増やしてやがるし、やっぱり狙われてんのか？ オメー」

「流石にそれは…………、ないよね？」

「オレに聞くなよ前髪野郎」

「いや、そこはまあ、一番お姉ちゃんだし、人生経験積んでそうだし」
「おだてたって安っぽい味したキャンデイくらいしか出さねエからな。…………年だって『死んでから』重ねた方が長いとかいう次元じゃねエし。無駄な年月だよ大体なあ。」

ま、それはそうと俺は別に『オトされ無い』から、気楽なモンだけどな」

「僕もそういうつもりは無いというか…………。まあ、可愛いですけど」
「何で敬語になってんだよガキが、はっ」

(いや、性格的にはリルちゃんが一番安心できるけど、リルちゃんはグレミイさんのだと思うし。……カップリングなのかコンビなのかは、突っ込むのは野暮だと思うけど)

なおこの後、本当に合成着色料^①ごっつてりの蛍光ブルーな色をしたペロペロキャンデー^②をもらったとか何とか。

#026. 役者は果たして誰なのか

それは、エス・ノトのこんな不用意な発言から始まった。

「ソウイェバ……、影カラ出テノ調査トカハシナイデス？ 潜入トカ」

潜入？ と、たまたま食堂でばったり会ったブルーとジジのコンビと一緒に昼食中。エス・ノトはふとした疑問としてそんなことを言った。

曰く、情報収集の任務といっても危険度に応じて騎士団の中でも下位から上位に割り振られるのなら、ブルーたちはそういったことに向いたことがないのかという、そういった疑問らしい。

つい先月か、B G 9復活にまつわるあれこれでテンションが上がったブルーという珍しい光景があったりしたものの、その際にブルーはナナナ・ナジャークープと共に調査に出向いていたのだが、それとて影に隠れての任務である。実際に霊圧を押さえるなり何なりして、現世での長期調査といったようなことを、ブルーたちは経験したことがなかった。

「大体バンビちゃんのせいじゃないかなー？」

「ジジさん？」

「ソレハ、ドウイウコト？ ……ッ?! 怖イッ」

自分の手前の皿に盛られているサラダのトマトに、フォークを逆手に握ったまま「ガンッ！」と叩きつける様に突き刺しながら話をするジジ。その際に刺さった勢いで飛び散った液体とそれに向けるジジのほの暗い目を前に、エス・ノトは軽い悲鳴を上げた。

なお、特に気にした様子もないブルーは平常運転と言えば平常運転である。

「んー、はむはむ。トマト、トマト。」

えーっと、ほらもともとバンビちゃんってさ？ リルとかキャン

デイちゃんが二人でコンビしていたところに、後から割って入ったみたいなんだけどき？ その時、どうも無理やり聖文字使って二人ともボツコボコにして、バンビちゃん拒否できないように力見せつけてから入ったらしいし。今も昔もそーゆーところあんまり変わってないよねー！」

「その話、僕、初耳なんですけど……」

「リルもブルーにはお姉ちゃんぶってるしー、恥ずかしいんじゃないの？」

ま、それでー、その話って当然だけどキルゲのおっさんとかロバートお爺ちゃんには伝わるし、グランドマスター騎士団長だってそういうのは知ってると思うんだよね。僕の性別も普通ことに知ってるみたいだし」

「ツマリ……、怖イ？」

「間違っではないかなあ……、あはは……」

（ここ十数年で当たり散らす対象は大体僕に固定されるようになったけど、それ以前は当然、原作のバンビちゃんな訳で……、やはり頭バンビエツタは頭バンビエツタか）

つまるところ、情緒不安定のチーム編成不適合者である。なんなら実力が高いばかりに色々問題にはされていなかったが、平然と仲間を背中から撃つことに躊躇いのない精神性と、他者からは判り辛い本人の地雷を引いた瞬間の一气呵成振りから、制御できないと判断されたのだろう。

結果としてバンビエツタを刺激しない方向に回ったのか、あるいはそういった些事にエネルギーをとられることを回避したのか、彼女が自らの周囲に置く面々の大体にそういう声がかからなくなった、というのがジジの推測だった。

「潜入任務とか、どう考えても長期任務になるじゃん？ 協調性皆無だと色々アレだよねーってことかなって！ ね！ ね！

——ケツ

「怖イ」

「ノト君大丈夫？ どうどう……」

突然荒んだ表情で心の闇が表出しかけているジジに怯えるエス・ノ

ト。思わずそれを宥めながら、ブルーもブルーで普段のバンビエツタの言動を思い描き一言。

「確かに演技とか苦手そうだし、あんまり我慢強くないからねバンビちゃん。朝三暮四とか凄い苦手かな。日本風に言うと、泣かぬなら、殺してしまえ、ホトトギス」

「何で鳥？」

「ソウイウ諺デスネ」

ちなみに「鳴かぬなら」なので、誤字である。

(それに、前に一回ポリネシア○しようとかバンビちゃんから言い出したけど、結局初日で計画破綻したし……………、誘惑と我慢に弱いと言うか、命がかかってない案件の引き金の軽さよ)

若干のシモネタ思考であるが、そんなことは表面上伝わらないので「ブルーをしてもそういう発想になるのかあ……………」と言う具合で、ジジは酷く納得していた。

そしてエス・ノトは「怖い」を連呼する。

「ノトくん？ 一体どうしたのさ」

「悪魔ノ話ヲスルト、悪魔ガヤツテクル」

「何でことわざ？」

(噂をすれば影が来る、と一緒だっけ意味。……………えっ?)

「——面白い話をしているじゃない、あなた達」

あつ、と表情が凍り付くブルーとジジ。エスノトは白目を向いて視線を逸らす。

ブルーの背後に現れたバンビエツタが、ハイライトを失った目でブルーの頭を抱きしめ、その首に手をかけた。

「食事は終わった？ なら行くわよブルー。ジジもいつもの所に来るのよ。あんまり急がなくていいけど」

「う、うん……………、わかったよバンビちゃん……………」

「え、えっと、あの、バンビちゃん？」

「いいのよ判ってるわ、どうせあたしが悪いんでしょ。でも気に入ら

ないからちよつと来なさいッ！」

「わわ!? あゝれゝゝゝ……」

「怖い……」

見た目にそぐわない幼さを感じる声音で、襟首をつかまれ引つ張られていくブルー。そのままバンビは彼を自室まで連れ込み、そこから十数分後、妙にすつきりツヤツヤした顔で出て来てから。

「というわけで、今から皆でバンビーズ一番の演技派滅却師クインシー決定戦やるわよッ！ あたしたちが美少女つてだけじゃないことを、騎士団の皆に知らしめてやるのよ！ 特にブルー！ ブルー！ ブルー！ 審査員は例によってブルーよ！」

「またこのパターンなのかよ、バンビ……」

「今回はブルー、縛らなくても良いの？ バンビエッタちゃん」

「なんとなくこーゆー展開になる気はしてたんだよね」

「知らしめるも何も、暴力的で頭ハッピートリガーのヤベエ女だつてほぼ全域に広がっちゃまつてるだろオがサイコビッチ」

サイコビッチは止めなさいッ!? と絶叫してリルトットに指さすバンビエッタ。勢いで言つたせいで、今のリルトットの言い回しがバンビエッタ一人を示した悪口であることまで気が回っていない。

そんな彼女の様子を、特に拘束はされていないものの微妙に疲れた様子で、若干内股になりながら蒼都ブルーは引きつった笑みを浮かべていた。そもそも全員適正なのでは？ という発想が出てこないあたり、やはり毒されているブルー・ビジネスシティこと蒼都である。「とにかく、あの新入りにブルーもジジもこのあたし、バンビエッタちゃんが演技できないーみたいなこと教え込んだから、それは違うって二人に教えてあげたいの。」

あたしだつてやる時はやるのよつて所、見せてあげるわ！」「やる時はやるつたつたつて、殺ヤる時は殺ヤつてるし、致ヤることは致ヤつてんだろ」

「後ろ半分はミニーもかな〜?」

「ふえええ!？」

「また微妙にギリギリなこと言うじゃんか……。」

って言っても、演技とか何やるのさバンビ。まさかとは思うけど、全員で演劇するーとか言い出さないよな。あたし達、そんな時間さがに無いし……。陛下もあと数年で侵攻とか言ってるから、遊べるのは今のうちに遊んでるし、訓練するのは訓練してるし」

ようやく完聖体も強化出来そうな感じになって来たからさあ、と言うキャンデイスに、そんな時間かかることはしないわよ、と腕を組んで胸を張るバンビエツタ。

「バンビちゃんは頭良いの。頭良いってのは、情報の精査と決断が早い事だっであたし思うのよ。だからもう一目見て、誰も言い訳できないくらい優劣がつかく感じなので良いんじゃないかしら」

「その頭の良し悪しの言い回しについては、どうなんだろうね……。」
(研究職とかのタイプを完全否定している感じがするし)

「何よ、文句あるのかな? ブルー」

「文句と言うか何というか……。まあ、それは後でね。続けて続けて」

ニコニコしながら促すブルーに、一瞬大きく見開いて「そ、そう」と慌てたように視線をそらすバンビエツタ。

「というわけで、さっき作って来たんだけど……。ブルー、返して?」

はい、じゃ〜ん! くじー!

「シンプルだなオイ」

そしてバンビエツタが机の上に置いたのは、いかにも手作りらしい段ボールに穴の空いた箱。いわゆる抽選券でもおなじみなタイプのくじで、中には紙でお題が書かれているらしい。

覗き込んで、1枚2枚どころか数十枚はありそうな有様のそれに「結構多いな」とリルトットは肩をすくめ、手元の小袋からグミを一粒食べた。

「ちよっとお試しに引いても良いですか?」

「いいよ」

「では……………、えっと、『お姉様の保育士さんが仕事に疲れた弟分を甘やかす』？ えっと、何ですう、お題のシチュエーションというか、指定が濃い気が……………」

お試しと言うことで引くミニーニャは、他にも2枚ほど「年上の異性に慣れていないハイスクールの引つ込み思案の子」やら「場末のネット掲示板でさらし者にされることにちよつと快感を覚え始める女の子」やら、微妙にシチュエーションが濃い指定。

困惑している彼女に、バンビエツタが「それ、ブルーの書いたやつだから」と平然と宣った。

「演技力を試すお題でしょ？ だから一見して、すぐにイメージしづらい感じのを作らせたの」

「作らせたって、オメー……………」

「多分、十分くらいしか時間なかったんじゃない？」

「無茶ぶりだと思うの」

「う、うるさいわねっ！ 別にいいでしょ、じゃあ早く引きなさいよ！」

何だか周囲の視線が半眼になり、なんとなく居心地が悪くなったバンビエツタだったが。そんな彼女たちを尻目に、ブルーの方へとキャンデイスが近寄って、耳音でボソボソと確認した。

「……………これひよつとして、ブルー、あなたの趣味入ってる？ こ

の「毒舌でツンツンしてるけど根はやさしい彼女」とか」

「(えっと……………、バンビちゃんには内緒で)」

(流石に時間がなかったから、勢いで設定とか書いたやつは僕の性癖も入ってるよなあ……………。それはそうと、覗き込まれるとおっぱいの谷間が至近距離でこう、ありがとうございますっ)

あゝ、と何かに納得したようなキャンデイスは、ふとブルーの視線に気づいて「そういうのは一応バンビとかミニーにしときなよ」とツンツン額を小突いて苦笑いしてからバンビエツタの待ち受けるくじを引きに行った。

果たして、それぞれの引き当てたお題は……………。

・1番手：ミニーニヤ「年下の甲斐甲斐しい奥さん」

ロングスカートタイプの私服の上からエプロンを羽織ったミニーニヤが、さもブルーが今、自宅の扉を開けて帰宅した風の流れて微笑み、出迎える仕草をする。

「……あつ、お帰りなさい？ ブルー」

「え？ あ、僕が普通に旦那様設定でやるんだ……」

「いいじゃないですか。それでは、えーっと、ご飯にしますか？ お風呂にしますか？」

「………、ご飯って大丈夫？ 作れる？ ミニーちゃんってまだ、包丁壊しちゃうから持てないんじゃない？」

「何かいいました？」

「あつ可愛い……、ウイंकあざとい………」

「それではお風呂にいきますかね。はい、これお着換え、洗濯物………」

「……ビリビリだね」

「ここ、こんなはずでは………、私にお嫁さんは早いつていうんですかブルー!? えいつ」

「全力でハグするのは止めないかな、首ねじ切れちゃうから！」

（いつものミニーちゃんだよな、うん。あつ、でも首から上は柔らかくて天国だから、多少は……、多少は……、あつリルちゃんが絶叫しながら止めに入ってる。バンビちゃんは放置してるなー、そっかー………）

・2番手：バンビエツタ「照れ屋の下級生」

水兵服、日本のアニメーションにでもありそうな制服姿に、前髪を整えて垂らして視線を隠し、そのままブルーの背後に回り込んだバンビエツタ。不意打ちをするでもなく、そのまま抱き着き、何も言わず何もせず。ブルーも困惑して、これには言葉が出てこなかった。

「………」

「あの、バンビちゃん、どうしたの？ ずっと僕の背中に隠れて」

「怖い……、です」

「それノト君のキャラと被ってるから………………。あと、照れるっていうより怖がりの方のキャラな気が…………」

「うっさい、です。……………先輩は、私の肉壁になってればいい、です」「肉壁って何か物騒なフレーズが飛んできた気がするんだけど!?!」

「大体、先輩が悪いんです。あたしだけ、一番大事にしないから、あたしがこんな、振り回されてる、です。…………先輩は、ずっとあたしと一緒にいればいい、です」

(演技力自体は確かに思ったより高いけど、何かをはき違えてる気がするんだよなあ…………。あつでも、いつもよりストレートにぎゅーつてしてるせいか、顔が真っ赤みたいだから、それは可愛いかな? 爆殺してこない分には)

・3番手：キャンデイス「社歴十年くらいの先輩OL」

わざわざ詠えたのか黒いミニスカートなスーツ姿で、ブルーと肩を組んで気楽に笑うキャンデイスである。

「はい、カンパーイ!」

「えっ? あ、か、かんぱーい……………、どういう設定? キャンデイお姉ちゃん」

「こう、会社のプロジェクトが一つ終わった後の、二人っきりの飲み会?」

「わかった、うん。……………何か似合うね」

「何だどー? あたしが大雑把だと言いたいのかコイツめー」

「あう、あう、あう…………、ほっぺた指でぐりぐりしないでくださいよー、酔ってるんですか?」

「酔わなきゃ仕事なんてやってらんないじゃんかつ。エコノミックアニマルじゃないんだから、仕事っていうのは苦役ツ! 苦役が終われば余暇バカンス! このバカンスのためにあたし達は働いてるんだから。最近入ったばつかでまだまだこの会社、慣れてないだろうけど、あんまり気負いすぎないでさ、な? もっと気楽に構えてなよ。

大丈夫、仕事がなくなってもすぐには死なないしさ。…………万一のときはあたし起業するから、ウチの会社入ればいいじゃん?」

（うん、普段のキャンディちゃんっぽくありながら、ちゃんと設定は準備してあるな。……あんまり私情も出してる感じはないし、設定も練った上でやってるから、意外と受け答えも変じゃないし）

・4番手：ジゼル・ジュエル「カリスマ恋愛占い師」

特に着替える訳でもなく、普段通りのジジが、スクラザエライ聖隷で造り出した
髑髏水晶もどきを前に、いかにもな占い師風のポーズをとる。

「むむむ……、見えます！ 視えます！ あなたの運勢が」

「はい、えつと………、どんな感じですか？」

「ズバリ、ハーレムです」

「……えつ？」

（いきなり何を言ってるんだ、この男）ジジさん

「基本的に■■■がもげれば良いと思うけど、それはそれで勿体ないし、だからといって■■■されて■■■する分の量で■■■しない程度には■■■なのは正直に言えば羨ましくもあるけど、それはそうとして■■■——」（※自主規制）

「中止だ、中止ッ！ 教育に悪いだろオがコイツ！

オメー少しは真面目にやれこのクソ野郎！ビッチ 真面目にやらなくとも限度考えろッ！

「ええ〜！ リル、それだどつままないんだけど〜〜〜！」

・5番手：リルトット「アパートの心優しい大家さん」

「……………あー、いや、俺参加するとか言ってるねえんだけど」

「ダメよ、やりなさいよリル」

帽子をとって頭をかくリルトットに、バンビエッタは両腕を組んで言う。面倒くさそうに視線を逸らすリルトットの様子に、むしろ不思議そうなバンビエッタだ。

「何、負けるのが嫌とかそんなこと？ 結構前だけど、変身ポーズ決めた時とか一位だったじゃない。そこから陥落するの、嫌なの？」

「いや、別にそんな拘りはねーけど、オメーらよオ……」

ちらりとブルーの方を見て、「やりにくいと思ったら無えぜ」とどこかや

り辛そうなりルトツト。

そんな彼女の様子を見て、ブルーは何かを察したように頭を下げ、そしてジジも気付いた。ニヤニヤと嫌な笑顔を浮かべて、リルトツトに顔を近づける。

「あゝリルつてば、さては照れてるゝ?」

「なん、えつ、何……………?」

「――」

「いや爆撃準備すんの止めなつてバンビさあ!?! いや照れるくらい普通にあるじゃんかっ! (あたしだつてブルーの睨んだ顔とか凄いやケメンだからドキドキするし…………)」

「何か言つた? キャンディ」

「い、いや、何でもないけどさ」

混乱しているミニーニヤに、何故か即刻殺意をみなぎらせるバンビエツタ。それでもキャンディスの窘めで辛うじて実行を制止するくらいの冷静さを得たとみるべきか、何と言うべきか。

いや照れるくらいフツ―だろ、とリルトツトは帽子をかぶり直す。「別に全裸とかじゃなけりや、恰好には文句つけねーけどよ。審査員がブルーだから、ブルーから如何見えるかって前提で演技してンだろ?」

俺からすりや、コイツはガキの頃から見てる訳だし、何かこうしつくりこねーつていうか、わかるか? 別に『そういう』話じゃなくても、やり辛えだろーが」

「あゝ……………」

キャンディあたりは年代が近いからか、なんとなく察する物があったらしい。気恥ずかしいことに違いは無いのだが、そのしつくり来なような感覚は微妙な感情の機微と、関係性に依存する物だ。

とはいえそんな「自分の裁量から外れる」部分を、バンビエツタが考慮する訳もなく、結局は押し切られることになったリルトツト。以前に比べて、彼女もまたバンビエツタに対しては態度が軟化している証かもしれない。

とはいえ、それが良くなかった。

小さい背に合わせてニット生地 of 長袖ワンピース（ミニスカート）にミニニーヤが着用していたエプロンを借りる形で装備したリルトット。帽子を取った上で「大家つつーなら、髪あんまりアレだと邪魔か」と言いながらリボンで適当に後ろにまとめ、軽いポニーテール風に。

そんな恰好になった彼女は、数秒思案すると。

「——あら、こんにちは。ブルーさん。今日も学校ですか？」

『だ、誰?!』

ブルーすら含め、ほぼ全員が目を見開いて呆気にとられた。そこに居たのは、普段の毒舌を欠片も表に出さず、ほんのり微笑んで相手を気遣う一人の女性である。少女らしい容姿であるはずのリルトットから、少女らしからぬ包容力に加え、どこか年下の子供なら感じ得る、年上の女性らしい独特の色気すら漂っていた。

思わずジジすらごくりと唾を飲み込む時点で、その変貌ぶりの大きさがうかがえる。

（もはやキャラ崩壊の域では……? いや、アニメのCV的にはそんなに違和感がある演技でもないけど。

　　というか僕たちからアレなりアクションとられてるのに、毒一つ吐いてこないリルちゃん、凄く新鮮だ……）

「ブルーさん？」

「へ？ あ、えっと、はい。……えー、はい、学校、帰りです」

「あら、そうですね。最近寒くなってきましたから、色々気を付けてくださいいね？」

「は、はい……」

「そうだ。今日、ウチのペットの誕生日なんで、何かお祝いしようと思ってたんですよ。せっかくですから、ブルーさんもウチに来ませんか？」

「い、いいんですか？」

「はい！ 美味しいチキンを用意しておきますね。それとも

「……………、日本のカレーが良いですか？」

「カレー大好きですッ！」

「フフフ、私も好きですよ。では、準備が出来たら連絡入れるので、それまでお待ちくださいね——」

（普通に美人のお姉さんって感じが強すぎて、リアクションに、困る）

・ 結果発表：優勝、リルトット

「何ですよ!? あたし、頑張ったよね！」

「流石にあそこまでキャラ変されると、勝てる気がしないと思うの……………」

ミニーニヤの一言の通り、ブルーもそうだがバンビエッタ以外の感想もまた満場一致で、優勝はリルトットであった。

「メンバーの中で、全く自分の性格とか出さなかったって意味でも、優勝じゃんか」

演技をしている、というよりも自然な風で、特に設定を練ったわけでもなくすんなりと納得させられる。そのあたり一連の流れをふまえて演技力と言われてしまえば、実際問題リルトットの一人勝ち状態である。

「リルにあんな特技があるなんて、ボク知らなかったな〜」

「特技つつーか、ブルーの読んでる漫画見てだよ。大家っていつて、そういうのがあったって思ってたな」

「キャラクターの演技をしたってことか、なら納得かな〜」

……………つて、ブルー？ どうしたの、リルから顔逸らして」

「い、いや、その……………」

そして、リルトット本人から作戦の内訳を聞き出していたジジだったが、それよりも挙動不審気味なブルーの方が気になるらしい。リルトットの肩を持って「ほいほいっ」と彼の視線の先に向かえば、リルトットと目が合うたびに緊張したように視線を逸らすブルー。

リルトットもリルトットで、そのブルーの挙動に釣られて微妙に緊張したように、少しだけ頬が赤い。

「……………いやオメー、すっかり成長してんだからよ。俺相手に色気つい

たら犯罪だろーが前髪野郎オ」

「そ、そういう訳じゃないんだけどさ、あ、あはは……………」
(さっきの大家さんのイメージが脳裏にこびりついて、なんか直視できないうか……………)

お互い微妙な空気である。

あれあれ？ あれあれ？ と困惑しているジジであったが、すぐさま「ひよ!？」と声を荒げて、リルトットの肩をもったまま後退。

ジジさん？ と聞き返すブルーの左右に、ミニーニヤとバンビエツタが、それはそれは見たこともない程の満面の笑みを浮かべて立っていた。

「行くわよ、ミニー」

「ええ、バンビエツタちゃん」

「あれ？ えっと、二人とも一体どうして——あぐれく——」

そして彼女たちはブルーの腕をそれぞれ抱きしめる形でロックすると、そのまま集合部屋から外に出てブルーを何処かへと連行していく。……おそらく彼の私室か何かだろうが、それを見送りながらキャンデイスは「仲良しになったじゃん」と苦笑いを浮かべた。

「本日二回目かあく。ブルー頑張れっ」

「自分で企画して自分で自爆してりや話にならねエンだよなあ、あの小鹿女」

「まーそういう隙のあるところが良いんじゃない？ 『殺す理由も作り易くて』」

「オメーの私怨は理解しちやいるけど、程々にしとけよ。ブルーのアレがこっちに向くとか、悪夢でしかねエぞゴキブリ野郎」

「ゴキブリも野郎も止めてよねッ!? ほ、ボク、普通の女の子だしー。こんなに可愛いんだから女の子だもーん!」

慌てたように抗議するジジを軽く無視して、リルトットはブルーの去っていった入り口の方を見やり。「やっぱ無エな」とニヒルに微笑んでから、再びグミ粒を取り出して齧り始めた。

【おまけ】

「そういえばだけど、結局バンビちゃんとミニーって、ブルーのことどうするか決まったんだっけ。どっちかが独占するーってことでしばらく喧嘩してたし」

「知らねエけど共存してるっつーことは、何かしら落としどころが出来たっつーことじゃねエのか？」

「あれ？ 二人とも知らなかったっけ。」

バンビから聞いたんだけど、共存ってよりは……、囲うことにしたらしいじゃん」

「囲う？」

「色々やりあって、どっちもないとダメだって結論になったから、最終的にブルーが決めるまでノータッチにしようってことで、二人で順番とか当番とか決めてやってるって」

「えっブルーに選ばせるつもりなの？」

「選ベンのかあの前髪野郎。そのあたり、全然ガキのままなんじゃないのか」

「まあ、こういうのは野暮だし。あたしもあんまり人の事言えないから、ほら」

「ハッ」

「流石、尻軽キャンディちゃん。自分の部隊を自分の過去の男で構成するだけあるよね」

「かか、過去の男とか言うなって!?! たまに別れた相手ともまた付き合ったりしてるしッ」

「その付き合うのと別れるのの周期が早すぎんだよなあビッチ」

#027. 最期まで自覚すらなかった

「おっじゃましまーす。ブルー以外に先客二名……？ あれ、一人だ。というかりル？ 何でブルーの部屋に。どうしたの？ って、あれ？ んーブルーを膝枕………、ひざ……、えつちよつと待って、首だけ!! えつりル第一容疑者!!」

「違エし、あんま大声出すなゴキブリ野郎オ。騒ぐと小鹿女に見つかなだろオが」

「あ、あはは………」

(リルちゃん何か凄く甘い匂いがする……)

何の用事があったわけでも無く遊びに来たジジが目撃したのは、ブルーこと蒼都ツアントウの生首を膝の上に乗せて、それを抱きしめるように覆いかぶさつて半眼を向けるリルトットの姿であった。

ブルー本人は首が切断された状態だというのに断面を銀色に輝かせ、大したことはなさそうに苦笑いを向けて来る。

そんなブルーの頭頂部に顎を乗せて、どこかつまらなそうに前髪をくるくる巻いたりして戯れているリルトット。ブルーの頭の中は後頭部に柔らかさを感じなくて悲しいなど中々失礼な感想が飛び交っているが、知らぬが仏か、予想はしているか。

だからゴキブリは止めて!! と悲鳴に近い声を上げてから、再度事情を問うジジに、はぐらかすでもなく面倒そうなりルトットである。

「今キャンデイスビッチに色々もの持って来させてるから少し待て。つーかオメー何しに来たんだ？」

「ええ〜？ なんか、そろそろ戦争近いからって訓練場に人溢れて来たからエスケープ的なく？ バンビちゃんもミニーも珍しくやる気になってたし。あの場にいたら、それこそ見かけなかったブルー探して来いって言われそうだったから逃げてきちゃった☆」

「二人ともやる気になってるの？」

首だけとは言え不思議そうに聞くブルーに「そだよー」と答えつつ、ジジはしゃがみ込んでブルーの顔を覗き込み、訝し気に表情を歪める。

「ねえリルー。ブルーって普通すぐに再生すると思うんだけど……、どうしてまだ首チョンパされたままなわけ？」

「僕にもよくわからないんだよ、ジジさん」

「だアから外に運べねエんだろオが。普通に廊下歩いてて、首だけ転がったの目撃した俺の気も考えろよ？ 普通にぶつ殺されるんじやねエかってビクビクしたからな」

「その節はどうも……。うん、でもその……。ちよつと怯えるリルお姉ちゃんも可愛かったです」

「へえ〜？ ボクも見えたかつたなく、リルのカワイイところ」

「前髪野郎オはともかくオメーはアウトだクソ野郎が」ピッチ

少しキレながらも何故かブルーの口に袋キャンディを、ちゃんと包装を剥がしてから放り込んでるリルトットであるが、そのあたりの心の機微はさておき。

実際問題何が起こったかと言えば、ブルー的には「わからない」が正解である。

朝一番に廊下を普通に歩いて訓練場へ向かっていたのは覚えてい
るが、気が付けば首だけ残ったまま転がっていた。以上である。

首のみなので「銀の蒸着」の基点となる爪を扱うことも難しく、また何故か再生がかからない状態。この姿を見つかればバンビエツタやミニーニヤが一体何をしでかすか、考えるだけでも恐ろしい。

（犯人捜しとか言いながら城全域を爆撃とか暴力で粉碎とかし始めるんじゃないかな……。恐怖しかないんだけど、僕が大事にされてるってことでもあるから、ちよつとそれはそれで嬉しい気もする。

まあどうせ僕ごと粉碎するんだろうけど。怖い……）

エス・ノトのようなことを言いながら戦々恐々としていたブルーであったが、そんな彼を見つけたのが菓子袋を持たず靈子兵装で傘を形成して、杖のようにして歩いていたりルトット。

首だけ転がっている状態。必然見上げる形でリルトットの顔と、伸

びる彼女の細い脚の根本にあるミニスカートの中身を目撃しながら、頬が引きつるブルー。

『……………縞々』

『オメーその状態で随分良い根性してンじゃねエか変態野郎オ』

照れるでもなく一度蹴り飛ばすリルトットだが、秒速で再生するの
で面白くも無エと彼の頭を持ち上げ傘をさす。彼女も彼女で、バンビ
エツタに首だけなブルーを見られると色々問題になることはわかっ
ているので、あえて隠したのだ。

そのまま何でこんな状況になったか記憶にないという話をすれば、
とりあえず一度オメーの部屋に行つて作戦会議だ、という流れとな
り、現在に至る。

「それで、キャンディお姉ちゃんに御菓子とか持ってきてツて感じに
なつて」

「頭使うと腹減ンだよ」

「事情はわかつたけど、それはそうとしてどうしてリル、ブルーそんな
ベタベタしてんの？」

「切断面が斜めになつてつから、そのまま置くと真つすぐ立たねエで
転がるからな。流石にちつたー可哀想じゃねエか」

「あらまあ、リルつてば優しー」

「フツーだろフツー。この状態を見つけても、前髪野郎相手にいつも
通り爆撃しかねねエ奴もいるからなア」

「……………えっ？ さ、流石にそこまで気が狂つてはいないんじゃないか
と——」

「だよね！ バンビちゃんならブルーのことだつて関係ないもん！
ねっ！ ねー！」

「おーおー心の暗黒面出てンよ腐れ野郎オ」

「くくくく腐つてないもんっ?! 後、女の子だもん！」

匂わないよね？ 匂つてないよね？ と、慌てて唐突にくるくるそ
の場で回りはじめ自分の腕やら服の中やら、体臭を気にするジジ。何
かしらの自覚でもあるのか、妙に必死である。

「……………おし、バンビたちいないよな！ 食い物とか持つて来たよ

リル。

「って、うげっジジまでいるし……」

「何ーその反応。ボクを差別するの反対ー!」

「いや、こういうのって関係者が増えれば増える程、発覚のリスク上がるやつじゃんか。そういうセオリーってやつ。」

「……あ、ブルーも何か食べる? これ、柿〇種とか」

「ありがとう、でも今、クリームソーダ味の飴舐めてるから……って〇の種!?! うわ、ピーナッツ付きのアレだし!?!」

「ハ〇ピーターンもあんど」

そんな形で、しばしリルトットが「思考するのに使うエネルギー」とのことでおやつタイム。珍しく自分だけで独占せず、ブルー含め四人で分け合う流れだ。

好意を無駄にするのもアレだということに飴をかみ砕いたブルーに「あくん♡」と細長いライスチップを食べさせるジジや、ちゃんとストローを持ってきてコーラを飲ませてやるキャンデイスやはさっておき。

「それで、僕のところまで来た。別に僕は、レクター博士とかではないんだけどね」

「檻中でも大体城のことは全部把握済のくせに何言ってやがんだクソ野郎オ」

そしてリルトットは、ブルーの生首を「変形させた口で啜え」隠しながら、グレミイ・トウミューの檻まで来ていた。

キャンデイスとジジはグレミイの元へと行くと言えば「パス」「怖い怖い怖い!?!」と拒否。特にジジの拒否っぷりが尋常ではなかったが、そのことを追求するよりも先に「見つかると拙いからとつと行くぞ」と移動。上手い具合に上から覆いかぶさりつつも、ブルーの視界を確保させつつヨダレを垂らさないあたり、能力の扱い方を相当心得ているとみるべきか。

(まるでワニのお母さんが赤ちゃんを運ぶ時のアレみたい……)

もつともブルーの感想としては、色々失礼極まりないのだが。このあたりは平常運転として、表には出ないので問題にはならなかった。グレミィあたりは生首状態でリルトットに抱え直されているブルーを見て、少しだけピクリと瞼が動きはしたが、今回はそれ以上の攻撃を仕掛けてくることは無かった。

「色々考えてオメーに仕事させんのが最速だって判断だ。早くしろ」
「実際菓子を食らって何も考えてないのと同義だろうに。でも、ふうん……………。その状態っていうのは、中々僕としても色々大変そうで共感するところだけね、ブルー。」

それで？ 僕は何を想像すれば良いのかなクソ女」

「バンビとミニーに見つからねエように、コイツの胴体を探せって話だ。再生してねエっつーことは、肉体が消しとんじやいねエってことだろ。だったら身体は身体でどっかに隠されてるって思う」

「それだと結局、首が切断されている状態に変わりはないから死んでると思うのだけれど…………。そこのところ本人はどう思っているのかな？ ブルー・ビジネスシティ」

「へ？ あー、えつと…………」

ブルーは少しだけ思案すると、乾燥した唇を一度だけ舐めて。

「僕の『Iー不滅』^{ジ・イモータル}っていうのは、僕の身体の状態というか、情報と
言うかを上書きするみたいな能力みたいなんだけれど、本当だったら僕の状態を完全に上書きして復活しないと仕様のにおかしいんだよね。」

グレミィさんが言ったみたいに、本当なら『首だけの状態で生きられるはずはない』から死んでないとおかしい。でもこうしてずっと生きてるって、やっぱり何か変というか…………、バグってる？」

「バグ？」

「ゲームとかの話じゃねエからなオメー。」

…………って、オメーは檻ン中ずつというからゲームとかはやらねエのか」

要は想定外な不具合みてーなやつのことだ、とバグについてぎつくり説明するリルトットである。悪態はつくが、こういうところで気を

遣えるあたりが、騎士団内でも相当にひねくれているグレミイ相手でも交友関係を成立させている一因なのかもしれない。

リルトットの話を聞いて、少し目を閉じて押し黙るグレミイ。と、ニコリと微笑んで彼女を見返して「想像してごらん？」と問いかけた。「想像してごらん？ もし仮に犯人がいるのだとして………、その犯人がブルーを今の状態にしてしまった時、何を考えるか」

「何を考えるか？」

「バンビちゃん………？」

「まあ、それだろうな」

わざとにしろ、わざとでないにしろ。ブルーをこんな有様にした相手がいるのだとすると、今のバンビエツタなら事故を装う余裕もなく大爆殺を仕掛ける可能性は十分あるだろう。

なお肝心のブルーごと巻き込んだの大爆殺なのは玉に瑕である。

「ブルー暗殺計画みたいなものはナナナ・ナジャークープあたりがシャツに持ちかけたりすることはあるが、実行に移せてないというのを教えてあげるよ。」

まあ、そういうレベルの情報ならこっちで確保しているからね。ま
ず間違いなく計画犯ではない」

「じゃあ何だよ」

「わからないかな？ そんな僕ですら——陛下が今何をしようとしているのかすら知ることができる僕が、補足できていないという事実を」

「補足できてねエだ？ 何言ってるんだ妄想野郎」

（捕捉できてない。確認できない。………消失？ あつ）

グレミイの言ってる言葉を反芻し、何かに気づいたブルー。リルトットは心当たりがないようだが、容疑者たる相手の能力を思えば妥当であろう。グレミイ本人も「存在までは」忘れ切っていないが、補足できないと言うことは消失しているということに違いはあるまい。

そして目ざとくブルーが気づいたという事実気づいたグレミイは、にこりと微笑みながら「後は状況証拠をまとめようか」と笑いか

ける。

「ブルーも、想像してごらん？ この場合、一番安全な場所はどこか。何か問題があった場合、すぐさまそれを解消できる方法があるとすれば――」

「――現場のすぐ近く。つまり、ずっと僕の首の後を付いてきていたってことですよ、グエナエルさん」

グエナエル？ と。その名前をまるで聞き覚えが無いような顔をしてブルーの頭頂部を見たりルトットだが、次の瞬間にぞわりと嫌な霊圧を感じる。

「……………見つかってしまったか、このわしの完璧な ヴァニシングポイント V―消尽点―が。しかし逃げた理由はわかっているみたいだから、色々許してくれ？」

「元に戻るのならね。……………あー、思い出した」

目の前に現れた、妙にファンキーな髪型をした老人。視線は両目とも前に向き、ブルーやルトット、グレミイ三人を見つめて、少しバツが悪そうにしている。原作より微妙にまともな顔だ、とアレなことを考えるブルーはともかくとして、グレミイは肩をすくめ、ルトットは疲れたように相手を見た。

彼の名はグエナエル・リー。聖章騎士団、二人のVの文字のうち一人である。

そんな彼を見て、もうひとりのVたるグレミイは「意味の分からないことをして、消そうか？」などと物騒なことをつぶやきながら微笑み、グレナエルを震え上がらせている。

「わ、わし、未だに色々頑張つとるから勘弁……………！ 人の命の扱いが軽すぎるわいっ」

「悪いけれど、僕にとってこの人生っていうのは全て『想像の産物』でしかないからね。生きるのも、死ぬのも、すべては僕の認識の中だけさ。

つまり、僕の世界において神とは僕のことを指す」

「オメーが死んでも世界は勝手に周ってるから、そりゃオメーの世界だけの話だろオが実験体野郎」

震えあがっているグエナエルであるが、彼が背中に担いでいる「首の切断面が銀に光っている」ブルーの胴体が、全てを物語っていた。

グエナエルの能力たる「V^{ヴァニシングポイント}消尽点」、これは主に三つのフェーズで構成されている。光学情報で認識できなくなる「認知消失点」、物体としての干渉ができなくなる「物性消失点」、他人からその存在を忘却され認識すらできなくなる「存在消失点」。

本人は然程強いわけでも無いが故に、これらの極端な隠蔽能力でバランスがとられているといったところなのだろうが、今回の彼はこの「認知消失点」までのフェーズを使い、一時的に自らと、自らが持つブルーの肉体の認識を隠蔽した。

そしてそれが解除されたことで、ブルーも記憶が戻ってくる。どうやらこの「認知消失点」というのは、ベレニケの問答強要のようなそれではなく、非攻撃能力にカテゴライズされるらしい。

(いまいち何が違うのかわからないけど………、この第三フェーズの能力を試したいって言ったのが、バグった原因かな)

そう。ブルーとグエナエルは、訓練場で一度出会っている。

まだ人が全然いなかったタイミングの早朝、訓練場というべきか修練場というべきか、そこでたまたま遭遇したグエナエルは、ブルーに「能力の検証がしたいから付き合ってくれ」と頼んだのだ。

ブルーならば大体の傷は意味をなさないし問題はないだろうという軽い気持ちでの頼み事であり、ブルー本人もそれなりに能力を使いこなしているが故の傲慢さと油断から、これにOKを出す。

そして「存在消失点」を使用した状態でブルーの首を掻き斬った結果が、今の状態だった。

『こ、こんな………、わしは知らんぞ!? わし、悪くないもん!』
(もん、ってさあお爺ちゃん……。いや伊達にグレミイさん由来な人ではないってことなんだろうけど、それでも、もんってさあ……。でも原作だと、フェーズを上げると自分も物理的に干渉できないとか、そういう縛りはあったと思うんだけど。何か違うのかな?)

おそらくはブルー自身に、自身の状態を上書きしている何かからすら、グエナエルが認知されなかった影響なのだろうか。ともかくに

も能力が誤作動している現状、とりあえず部屋に持って帰ってきてくれというブルーの言葉に従い、胴体を背負って頭を抱えて、えっさらほっさら必死で小走りしていた老人だった。

それが、廊下の向かいからリルトットが来る気配を感じ「わし悪くないもんツ！」と存在消失をした結果、廊下に転がるブルーの首だけが残り続ける状態になったというのが、真相である。

一通り話を聞き終えたりルトットは、半眼でグレミイたちを見比べてため息をついた。

「……逃げる理由とかは理解できねーでもねエが、だつたら俺が来たってわかった時点で解除して話通せば済んだ話だろオが痴漢ジジイ」

「痴漢!?! い、いや、わしそういう欲は色々あつて無縁なんじやが……。」

それはそうとして、そのグレミイから色々、お前のことは言われているからの。いらん悪感情は買わぬが吉じやろうし」

「言われてるって何をだよ」

「……………これは、まあ野暮じやな」

「あ?」

「ん?」

(何で当事者のグレミイさんとリルちゃん両方ともが理解してない顔してるんですかね……)

年長者として完成しているせいか、グエナエルはリルトットとグレミイの両方を見てニヤニヤと笑い、対する両者は困惑しているまま。

「……とはいえ、わしが言うのもアレだが、大丈夫かあの二人?」

「二人とも色々、大変だから余裕ないんですよ」

ブルーはブルーで察しがついているものの、直接指摘をする愚を犯すことは無い。例え死なないとはいえど、馬に蹴られて死ぬ趣味はないのだ。

※ ※ ※

ちなみにブルーの身体についてだが。

「全く、ブルーはあたしがいないとやっぱりダメダメじゃない！」

———
“E—ジ・エクスパロード爆撃”で、粉々にして治してあげるわ！」

「あ———う」

(やっぱりこうなるんだよねえ……………)

結局ハツシユヴァルトどころかユーハバツハにすら相談すれど解決が見つからなかった結果、バンビエッタの「一度粉々に粉碎して再生させたら戻るんじゃない？」の案が採用され、今日もブルーは汚い花火となる運びであった。

ちなみにちゃんと戻ったのを確認し、ミニーニヤが一息ついたのは当然であるとして。

「い……、生き残っただけでも、ラッキーと言っておこう……………」

「キモっ!?! ゾンビ映画の下手なゾンビより凄いことになってるけど!!?’」

そのミニーニヤに思いつきりぶん殴られたせいで、グエナエルの頭蓋が損傷したり目の位置がおかしなことになったり口元が引つ張られたりして、ビジュアルが原作のそれになったことは余談である。

#028・番外編：THE BROKEN SNOW
STAR

一つの戦いが終わった。……瀟靈廷に壊滅的な被害を出しながら。主に物理的な戦闘結果として、この領域の一角が灰燼に帰するほどの熱量と縦横無尽さと自由自在さをもってして行われた最強同士の戦闘により、もはやこの場に残るものはない。

『言ったろ？ 指一本だつて使わずに君を殺してみせよう、とね。』

さっきの戦いも、力も、この体も、すべては僕の想像の産物。言葉どおり確かに僕は君に指一本だつて使っちゃいない。まあ、死んだのは僕なんだけどさ。

……ああ、そろそろ………、僕の想像力も、限界だ』

そのうちの片方、やせた青年は自らより打ち上げられた「死体たる本体」を見やり、肩をすくめ、陽炎のように消えていく自らの手を握り、対戦相手たるボロボロな男へと苦笑いを浮かべた。

『寂しくなるよ。この先の何も想像できない世界を想像するとさ。……嗚呼でもこんなタイピングで思い出すんだから、やつぱりブルーが言つてた通りもう少し自省すべきだつたかな』

「……あ？」

『君には関係ない話だよ、更木剣八。只済まなかつたね、散々期待させておいてあんまり食いだれなくて。』

———それじゃバイバイ、チビ女。どうやら僕は君の事、案外好きだつたらしい』

空を見上げて微笑む彼の表情、崩れる目元のそれがわずかに涙の輪郭のように見えなくもなく。そして聖章騎士団 ザ・ヴァイジヨナリー “V—夢想家—” グレミイ・トウミューは死んだ。

その残した言葉に微妙なやるせなさを感じたのか、どこか自分の何

かを重ねたのか。大男、更木剣八は刀を構えたまま無言のまま。

とはいえずぐさま足元に落ちていた、自らと共にあった少女の衣服を見て、慌てたように彼女を探させる程度には正気ではあったのだが。

「やれよビッチ」

「ビッチ言うなってき。——エレクトラスコール電削雨！」

「……………あ？」

突如として剣八へと降り注いだ電撃の雨に、色々と気が抜けていたせいか全身を焦がす剣八。不意打ちめいたその一撃に卑怯だと言う声が聞こえてくるなか、仕立人の片方たるリルトット・ランパードは瓦礫の上から無表情に見つめる。

ゆらめくマントに案外小柄ではない少女の体躯。帽子を少しだけ目深にかぶり、彼女は剣八を観察。もつとも次の瞬間には滑るような霊的歩法をもって剣八の横を通り過ぎ、その場に転がっていたグレイミイの本体たる死体の核を蹴り上げ、纏っていたマントで覆った。

「邪魔だァー」 「ぶっ殺すぞガキツ！」 「い、いや、何かヤバイ気配ムンムンだから少し慎重にした方が——」 「荒巻テメエびびってんならすっこんでろ！」

「ウチのエース一人テキトーにぶっ殺す更木剣八相手だ、このくらい当然だろオが唐変木共。」

……………ガータークランチ」

自らの口を変形させてその死神たちの大半を食い散らかすリルトット。「不味い」と文句を言いながらもじろりと残りの連中を見やる。

「ガキとかいってもテメエ等より年上だろオがなあ。……………小鹿女がこっち来る前に片づけンぞ。面倒くせエから全員かかってこい」

星十字騎士団 ザ・G—グ食いしんぼう—ンリルトット・ランパード

何だあのガキ!? と混乱する十一番隊。流石に目の前でホラー映画も真っ青なくらいあっけなく、人体が損壊し転がる仲間たちを前に

すれば、いかに戦闘のスペシャリストなどと揶揄される彼等とて躊躇はする。

そのうちの何人かが気づく、自らに迫るハート型の霊圧の結晶に。輝くハートの霊圧は、リルトットとは対照的に大きなシルエットの元へと集まり、その彼女は投げキッスでもするような動きで息を「ふうー」と吹きかけ。

トウエンテイカウント「二〇倍掌握・聖母の吐息」

その一息だけでも大嵐のような威力を發揮し、射程圏の全員は一直線に弾き飛ばされ、全員もれなく壁に激突しその上でめり込まされた。複雑骨折どころの騒ぎではなく、虫の息ですらない。純粋な「力の暴力」がそこに存在した。

そんな彼女を見やり、手でメガホンを作って声をかける長身の彼女。

「ムダですよ〜う、皆さん死ぬんですから、隊長さんの元になんて駆けつけられないですし〜」

星十字騎士団 ザ・パワー「Pーカー」ミニーニヤ・マカロン

「ぐわア!?!」な、何が起きてやがる……!」「お前等来るんじゃねエ!?!」「わ、わわ……」

「フフフ……、ボクが出たら何も言わずにすぐ斬っちゃうんだもん。可愛いポーズとかとる暇ないよね〜。そんなにボクの血を浴びたかったのかな?」

ぶいっ

そしてそんな彼女たちの猛攻とは別方向から、「肌が浅黒くなった」死神たちを従える少女は、両手でピースをしながらニヤリとドヤツとした雰囲気を出した。

星十字騎士団 ザ・ゾンビ「Zー死者」ジゼル・ジュエル

そうして徐々に徐々に勢力が削られていった結果、逃げきれずこの

場に残る一部の十一番隊が固まり全方位に刃を向けているのを、上空から彼女はニヤリと笑い。

「エレクトラスコール電削雨！」

バカ共一か所に集まったなら一網打尽だし、ナイスプレーじゃね!? あたし達!」

先ほどのように雷の雨を落し隊士たちを絶命させた彼女、露出度の高い服を着用した滅却師は、ニヤリと笑いながら他のメンバー三人を見回して、サムズアップを向けていた。

星十字騎士団 ザ・サンダーボルト「T―雷霆―」 キャンデイス・キャットニップ

そんな彼女に「あの馬鹿女いなりやこんなモンだろオが瞬間湯沸かし器」などと無意味に罵倒するリルトット。いきなり口悪!? と驚きながらも、彼女はリルトットの隣へと回りその顔を覗き込んだ。

「ンだよ」

「リル、機嫌悪い? 何かいつも以上に表情死んでるけど」

「……クズ野郎オが最後の最期に面倒クセーこと言い残しやがったせいで。別に大したこともねーし、深い意味も無エ。………問題は無エ」

「そうなら、まあ別に良いんだけど……。アンタ、あたし等ん中じや一番冷静って評判なんだから、そこは大事にな」

「キャンディちゃんはすーぐプツツンするからねー。頭バンビちゃんまであと一息! ブルーからもモテモテになれるかも?」

ブルーはともかくバンビ扱いだけは止めろオ!? と絶叫するキャンデイスに、顔を合わせる煽るジジである。

そんなジジの横に降りて来たミニーニヤは、一度伸びをするとフアイティングポーズを構える。

「ミニー、どうしたのさ」

「ブルーも言っていましたけど、そう簡単に死ぬとは思えないの。あの更木剣八」

「いくら特記戦力つつたつて、あたしの電撃まともに喰らって何も

ない訳が——」

「よお」

そしてキャンデイスの発言が終わるよりも前に「霊圧を感じさせない」走法で現れた更木剣八が、キャンデイスに斬りかかった。

はつとして一瞬動きが遅れた彼女は、とつさの判断で左腕に静血装を走らせる。

目論見は功を奏しなんとか切断まではいかなかったが、しかし切断されなかっただけで一撃は重症だった。

すでに骨と皮だけでつながっているような、それ程に斬撃の衝撃は強く。肉は胴体より離れかけ、激痛でキャンデイスは表情をゆがめた。

「——ア！ 何、テメエ……！」

「テンカウント ジュールフィスト 二〇倍掌握・兄弟の拳」

そのまま殴り飛ばすミニーニヤの拳を受け、しかし当然のように自らの斬魄刀で受け、もろとも傷一つつかないまま地面へと叩きつけられる。

起き上った更木剣八は、ぼんやりとしたように上空の四人を見上げた。

「全然芯に一発お見舞いできなかつたと思うの……」

「うげー、死にかけの動きじゃないにや〜くん、誰がトドメ刺すかって話でもないし〜」

「グレミイと闘り合ってなんでまだ余裕あるんだよつ、バケモノか！」

ジジ、再生！

「だアから特記戦力なんだろオが。俺たち騎士団の瀕霊廷侵入最大の障害の一つだった痣城剣八を正面から叩き潰した野郎だぞ、『本気になる前に』全員で叩く」

え〜〜と面倒がるジジはともかく。リルトットはグレミイだったモノをくるんだマントを、霊子兵装で編んだ傘に乗せて適当に投げる。あれがクツションの役割を果たすことで、最低限破損は回避できるという算段なのだろう。

そんな四人はそれぞれ腰のベルトに手をかけ、弓を形成しようと

し。

「あん？」

そして瀟靈廷に響いた音に、「上空から落下してくる誰かの霊圧」に、四人と剣八は上空を見上げた。

※ ※ ※

「……………何、だ？」

日番谷冬獅郎は袈裟斬りに三つの斬撃を受け、その場に倒れた。

それがあまりにも当然のようなそれであったため、彼は今の自分の状況に理解が追いついていない。

そんな彼の背後に立つ「妙な外装を纏った」滅却師の青年、ブルーと呼ばれていた彼は、光り輝く目元の白目じみた眼球で日番谷の姿を一瞥した。

「……………テメエ、何しやがった」

「……………やっぱり当然のように立ち上がってくるか。って、出血もう止まってるし。どういう絡繰りだろう」

「カラクリも何も見たまままだぜ優男。『血管同士を氷で繋いだ』だけだ」

「力業なくせにまた繊細なことを……………」

見た目の容姿はどこか獣じみた印象になったとはいえ、青年の挙措には何一つ変わりが無い。そんな相手だからこそ、つい軽口も出てくる。気安い関係と言う訳でもないのだが、どうにもこの青年の平和ボケした雰囲気は、苛立たせる以上に日番谷の戦意をそいできていた。

立ち上がる日番谷は、自分の傷痕をひと撫でする。以前の自らならば出来なかつただろう「分子同士の結合」そのものを狙い撃ちしたような凍結であるが、霊王宮での修行による「自らの斬魄刀」の在り方と、それを前提とした鍛え直しによる能力の扱い方の再学習により、日番谷の氷結系斬魄刀使いとしての実力は依然と雲泥の差となっていた。

例えるなら、ブルーを相手とした際の「その体表面にわずかに空間

を開けた状態での凍結」など。本体たる人体を凍らせない凍結など、流石にそこまでの繊細な扱い方は、以前の自分であるならば「想像は出来ても」実践するのはかなりの集中力が必要だったことだろう。

だからこそ、それで身動きを封じられるはずの青年が変貌した今の姿を前にした後の動きが、不可解を超えたものであった。

『僕の^{メタハエル}神の完全』は、完全証明される僕という定義に僕の行動結果まで含まれる』

『……意味がわからねえ』

青年が先に語った能力について。変貌したことに対する驕りというよりも「フェアじゃないから」みたいな感情がにじみ出ているせいで、これもまた日番谷は微妙な表情となったのだが。そう語った彼が軽く爪を構えた次の瞬間――。

『ちゃんと気張ってくれないと「一撃で終わる」かもしれないんで、それだけは先に断りますよ。

――^{コミットメント}約定』

そう、彼がそう言葉を発した瞬間に、日番谷は切り裂かれて倒れ伏していた。

超高速移動などではない、まるで漫画のページが丸々1ページ抜け落ちているような、次の瞬間ではなくそもそもが「0から100」としか思えない程に一変し、彼から発された尋常ならざる霊圧を感じ取った瞬間には、もう自分は倒れていた。

「何が起きた……」

（落ち着け。あの優男のことだ、もうヒントは出しきっているはず）

――^{コミットメント}約定』

思考を再開した瞬間に、再び先ほどの傷痕に沿うように新たな斬撃。

――^{コミットメント}約定』

そして碎かれる大紅蓮氷輪丸の翼。

――^{コミットメント}約定』

それに驚愕する暇もなく、いつの間にか「地面に叩きつけられた自分自身」――。

「……ッ、そういうことか」

最後の振り下ろされる爪については、目の前に氷の分厚い壁を形成することで難を逃れたが、目の前の滅却師が一体何をしていたのか、理解はできないまでも、事実ベースで説明することだけは出来るようになっていた。

再び氷輪丸の翼を身にまとい、地面を凍結。そのまま起き上りながら瞬歩を滑るようにスライドして後方へと退避し、自らの周囲と相手の周囲に何重もの氷の壁を張る。あたかも巨大な迷宮のような様相となった一帯の中で、日番谷は自らの背部、卍解の一部たる氷の花弁を見る。

残り、3枚。

「……タネも仕掛けもないとするなら、アイツの能力は……、テメエの行動から『過程を省略する』。言い方に合わせれば、行動結果が完全に達成された状態までを保証するってところか」

それは、ある意味で未来改変ともまた異なる力。

行動を始める前にそれが「終わっている」と確定することにより、因果関係が逆転し過程そのものを消し飛ばしたうえで結果そのものを現実世界へと上書きする能力。

ブルー個人の完全性を保証していたそれは、いまやブルーの行動結果を「行動を起こす前に」世界へと上書きする能力へと強化されていた。

やってられねえ、と愚痴る日番谷だが、攻略法が見えていないわけではない。

(遠方でバカスカ、俺の氷の壁を斬りつける音が聞こえる。もしその過程の省略が何でもかんでも好き勝手にできるっていうなら、氷を砕く音は一発のみ。あるいは氷を砕かず、すぐさま俺の近くに瞬間移動とかになるはずだ)

そういったことをせず地道に攻撃しているということは、その能力もまた強すぎるが故の制限があるのだろう。

(トドメをさすようなアイツの一撃。氷の壁を手前に作った時に、俺

に刺さらず壁を破壊していたつーことは……、効果の範囲は、おそらく奴の視界か霊的な索敵範囲に入るか否か)

おそらくは前者だろうとアタリをつけた日番谷だが、同時に苦笑いが浮かぶ。

それはつまり、こちらの攻撃範囲に入った瞬間、イコールで相手もこちらを瞬殺しうる可能性を示唆している。

故にこそ、彼の脳裏には、嫌味のように妖艶に笑う、自らの新たな師匠たる彼女の姿が思い描かれていた。

「ある意味じゃ『動く』ことの究極系みたいなものだな。『止まる』俺とは対極ってことか」

——あの性格の悪い和尚が、そちをあえて自分より先に妾の元へ差し向けたということは、そちがここで得るものは、天上の羽織物だけではないということ。

——氷とは何なのか。物体とは何なのか。あちらの洋では四大属性などと分けられてはいるが、妾もあれは嫌いではない。物体が内包する力をどういう形として成しているか、その説明にはとくもつてこいじや。

——これからそちが学ぶべきは、世界の細工のこまやかさ。伊達や酔狂で山本ノ字齋えいを超える才を秘めている訳でもあるまい。ならばその全て、この妾の手で縫い、直なす。

ゾクゾクと、嫌な寒気が走る日番谷。何やらトラウマがあるのか、両手で自分の身体を抱き目を見開いて震える。漫画的なデフォルメ描写が似合いそうな具合であるが、頭を振り我に返る日番谷であった。

立ち上がり、背後の氷輪丸の花弁を一瞥し。

「六方氷晶、積もる過程は時間がかかる。コイツが砕けるまでの時間というのも、そういうことだ。

だが生憎と、今の俺は『原理を理解している』——」

そして斬魄刀を天上へと向け、霊圧を放ち。吹きすさぶ霊圧は、その全てが一気に水へと変化し、その場からどんどん凍結していく。

あたかも日番谷を中心として覆い隠す様に、徐々に徐々に削れる氷

の迷宮を飲み込むように、嵐はドームのような形で凍結していき、その領域を急速に拡大していく。

「大天空千年氷牢——！」

その遠方で、ひたすらに直線的に壁を「動作せず」削っていた完聖体のブルーは、「うわあ……」と相変わらずな様子で引いていた。

「あーもう、これだから天才って苦手なんだよなあ……。確実にこっちに対策してくるし。

というか、アレってもしかしくなくても早まるんじゃないのかな？

……出来る限り大技で、早い所本体と戦わないと。

この際、こつちのスタミナとかは一旦度外視しないと無理だよなあ……。ちよつと『隕石だったもの』の霊子借ります、グレミイさん」

右手をかかげるブルー。と、その右腕の爪が「背信の剣」へと形状を変え、周囲から霊子が収束していく。その霊子は漏れなくすべてが銀の血液へとその存在のあり様を変え、徐々に、徐々に巨大な銀の金属球のようなものへと姿を変える。

その大きさが5秒、10秒と経過するごとに、径を倍々に増していき、もはや先ほどのグレミイが落とした隕石に迫ろうかと言う大ききのそれへと変貌。

「工場崩落……、コミットメント約定。砕けるッ！」

変貌したそれが、ブルーの発言と同時に「氷のドーム」と化したそれを砕き散らして——。

「——よお、待たせたな優男」

いつの間にか「凍り付いた」銀の金属球の上に立つ、長身のシルエツトの誰か。

身に纏っていたあのマントの下には氷のコート、あるいは氷のグローブやブーツのようなもの。身につけたそれらに着られることのない、その黒と白のシルエツト。

「……ゴメンね、ト君、助ける余裕なかっただけじゃなくて、僕もダメかもしれないよこれ。黒崎一護も降りてきちやつたみたいだし」
現れた青年の姿を見たブルーは「遅かったか……」と、表情が引きつっていた。